

禍終素学園の混沌な日常

有頂天皇帝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

禍終素学園。

そこには様々な作品のキャラたちがおり、毎日騒動には困らない日々を過ごしている。

その中でも群を抜いて混沌とし、バカ騒ぎによって問題を起こしているのが2ーZである。

その2ーZの生徒でこの作品の主人公である竜ヶ崎零人はクラスメイトたちと共に楽しい学園生活を過ごしていた。

笑いあり、涙(?)あり、シリアス(?)ありなど色々なことがある作品ですが、よ

ろしくお願い致します

なお、一部のキャラ崩壊やキャラの性格が違うこともあるので気を付けて下さい
(タイトルをCOC学園の日常DA☆ZE☆から変更しました)

※一部FGOキャラの真名解放されているのでFGOやってる人で真名バレいやな
人はお気をつけ下さい

※途中から台本形式辞めています。時間ができた時には過去に投稿した話もそうしま
す

目次

設定 参戦作品一覧	1
設定 2	24
購買の焼きそばパンは何故か異常に人 気である	34
戦いとはどんな手を使っても勝てばよ かろうなのだ	47
大抵の学校には七不思議がある	58
樽の正体を知るとテンション下がるよ ね	65
酒は飲んでも呑まれるな	75

プールは夏の最大イベントのひとつで ある	87
覗きは決して許されることではない	96
男はナースに夢を見る	103
ノーパンって以外とスースーするよね	114
女の下着には男達の夢がある	120
人は知らない間に変わるものである	132
オンラインゲームはみんなでやろう	139
ゲームには意外な出会いが待っている	

変態とロリコンは切っても切れない関	150	クリスマスはいい文明	281
係	156	正月は楽しいものである	290
オフ会でハメを外しすぎると後に後悔	166	GATE編 異世界の戦い 第一部	
する	185	GATE編第一話 そうだ、東京へい	305
かもしれない運転で行け		こう	
文字でしか伝わらないものがある	199	GATE編二話 東京観光しようじゃ	315
文字だけじゃ伝わらないものもある	217	ないか	
会わないとわからないこともある	243	GATE編三話 旅行の夜は就寝時間	336
会ってもわからないこともある		が過ぎても眠れない	
		GATE編四話 異世界からの侵略者	345
		(前編)	
		GATE編 異世界からの侵略者(後	

	編	—————	359	G A T E 編十一話	アルヌス基地での
	G A T E 編五話	束の間の休息		騒動(後編)	—————
370				G A T E 編十二話	新たなる日々が始
	G A T E 六話	異世界突入開始		まり	—————
380				日常編	—————
	G A T E 編七話	異世界での生活の始		大晦日は思い思いに過ごすべし	480
	まり	—————	391	雪遊びにはしゃぐのは大人も子供も関	
	G A T E 編八話	イタリカ攻防戦(前		係ない	—————
	編)	—————	410	バレンタインは甘ったるい	—————
	G A T E 編九話	イタリカ攻防戦(後		珍しい食材には気をつけろ	—————
	編)	—————	426	俺がアイツで、アイツが俺で、俺がコイ	527
	G A T E 編十話	アルヌス基地での騒		ツで、コイツが俺で	—————
	動(前編)	—————	437		539

俺がV字で、あいつが天パで、アイツが
クズで、コイツが主人公

海って行っても自由に泳げる気がしな
い

俺とアイツが右の玉で、あいつとコイ

坂田銀時、暁に死す!

ツが左の玉

593

俺とアイツはリーダー失格で俺とコイ

ツは何も出来ない

615

僕がメガネで僕がスマホで俺がグラサ

ンで僕がメガネ2号

641

魂と身体が入れ替わろうとバカはバカ

である

667

やっぱりみんな実家(自分の身体)が1

番なんだよね!!

689

一度取った皿は戻さない

706

設定 参戦作品一覧

オリキャラ設定

竜ヶ崎零斗

禍終素学園の二年乙組の生徒であり、禍終素学園第二生徒会会長補佐であるこの作品の主人公である。本人はツツコミキャラだと思ってるが回りのみんなからはボケキャラと認識している。

また多くの女性たちに好かれているものの、本人は重度の鈍感なので全く気づいていない。

容姿は黒髪の青い瞳の青年で武術と武器の扱いはかなりの使い手であり、南の森にて魔獣などを狩ったり手懐けて配下になっている。

中華料理などの辛いものは好きだがワサビやカラシは苦手

能力

創造《クリエイション》

無機物の物なら何でも創れることができる能力。

しかし帝具や神器などの特殊武器、MSやKMFなどの機動兵器は創れない。

???

零斗の体内に宿っているもの。その詳細は全く分かっていないが、創造の力もこれによる力の一端だということだけはわかっている

召喚

零斗が配下にしたものを魔石を使うことによつて呼び出すことが可能。また、配下にした魔獣などもまた群れの長などの場合さらにその配下を呼び出すことが可能。

所持武器

魔剣???

英霊『スカサハ』が零斗に渡した魔剣。その魔剣が何なのかはスカサハ自身も完全に理解しきつてはいないが何故か零斗が持つべきだと思い、託したのだった。

刀身は黒紫色で大きさは片手で持てるぐらいの大きさ。どのような力があるかは未知数である。

契約サーヴァント

ネロ・クラウディウス

玉藻の前

清姫

静謐のハサン

織田信長

沖田総司

メイヴ

スカサハ

アルトリア・ペンドラゴン（ランサー）

スカサハ・スカデイ

沖田総司オルタ

竜ヶ崎紫音

零斗の一つ下の妹で魔法の才能と魔力の量が常人を遥かに越えているため禍終素学園高等部1ーTに通っているのであった。

零斗とは血は繋がっていない義理の妹であり、零斗のことは普通に異性として好意を寄せており、妹という立場を利用してあの手この手でアプローチを仕掛けている。

魔法適正は学園のなかでも上位に入るほどの実力。

容姿は長い黒髪で紫色の瞳を持ち、Dカップの胸を持つスタイル抜群な美少女

吉井明久契約サーヴァント

刑部姫

巴御前

望月千代女

ジャンヌオルタ

加藤段蔵

今後予定契約サーヴァント

B
B

メルトリリス

パッションリッツ

杉崎鍵契約サーヴァント

アルトリア・ペンドラゴンオルタ（セイバー）

タマモキヤット

エリザベート・バートリー

ジャック・ザ・リツパー

今後予定契約サーヴァント

秦良玉

ハーレムメンバー

竜ヶ崎零斗ハーレム

紅葉知弦

博麗霊夢

東風谷早苗

姫島朱乃

ゼノヴィア・クアルタ

ロスヴァイセ

不動アキオ

シャルロット・デュノア

火野ライカ

佐々木志乃

アカメ

エスデス

川神百代

マルギツテ

竜ヶ崎紫音

ネロ・クラウディウス

玉藻の前

清姫

静謐のハサン

織田信長

沖田総司

メイヴ

スカサハ

アルトリア・ペンドラゴン（ランサー）

スカサハ・スカディ

沖田総司オルタ

吉井明久ハーレム

姫路瑞希

島田美波

木下優子

藤原妹紅

風見幽香

上白沢慧音

十六夜咲夜

紅美鈴

射命丸文

鈴仙・優曇華院・イナバ

塔城小猫

黒歌

レイヴェル・フェニックス

オーフィス

ネプテューヌ

ノワール

ネプギア

ユニ

刑部姫

巴御前

望月千代女

ジャンヌオルタ

加藤段蔵

B
B

メルトリリス

パッションリップ

杉崎鍵ハーレム

椎名深夏

椎名真冬

桜野くりむ

宇宙巡

ブラン

ベール

ロム

ラム

茨木華扇

アリス・マーガトロイド

霧雨魔理沙

アルトリア・ペンドラゴンオルタ（セイバー）

タマモキヤット

エリザベート・バートリー

ジャック・ザ・リツパー

秦良玉

坂田銀時

月詠

織斑千冬

魂魄妖夢

古明地こいし

古明地さとり

フランドール・スカーレット

雷

電

暁

響

アクア

ゆんゆん

ウイズ

野崎圭ハーレム

椎名 (Angel Beats!)

岩沢ますみ

更識楯無

ライ・クロツクスハーレム

紅月カレン

飛鷹葵

橘くらら

ノネット・エニアグラム

ルルーシユ・ランペルージハーレム

C・C・

シャーリー・フェネット

日向アキトハーレム

レイラ・マルカル

香坂アヤノ

二年乙組クラス表

担任

坂田銀時 (現国担当) 《銀魂》

副担任

浅見リリス（科学担当）《トリニティセブン》

生徒

《オリキヤラ》

竜ヶ崎零斗

《銀魂》

志村新八、神楽、たま、キヤサリン、柳生九兵衛、東城歩、

《バカとテストと召喚獣》

吉井明久、坂本雄二、木下秀吉、土屋康太、姫路瑞希、島田美波、

《生徒会の一存》

杉崎鍵、椎名深夏、宇宙巡、宇宙守、中目黒

《ハイスクールD×D》

兵藤一誠、アーシア・アルジェント、ゼノヴィア・クアルタ、木場裕斗、紫藤イリナ、

元浜、松田

《問題児たちが異世界から来るそうですよ？》

逆廻十六夜、久遠飛鳥、春日部耀

《トリニティセブン》

春日アラタ、セリナ・シャルロック、リーゼロッテ・シャルロック、風間レヴィ、神無月アリン、倉田ユイ、山奈ミラ

《とある魔術の禁書目録》

上条当麻、土御門元春、青髪ピアス

《東京レイヴンズ》

土御門春虎、土御門夏目、阿刀冬児、倉橋京子、百枝天馬

《東方》

博麗霊夢、霧雨魔理沙、アリス・マーガトロイド、魂魄妖夢、鈴仙・優曇華院・イナバ、蓬莱山輝夜、藤原妹紅、射命丸文、東風谷早苗、茨木華扇

二年X組

担任

桂小太郎（数学担当）《銀魂》

副担任

小島梅子（日本史担当）《真剣で私に恋しなさい》

《緋弾のアリア》

遠山キンジ、神崎・H・アリア、星枷白雪、峰理子、レキ、武藤 剛気

《ブラック・ブレット》

里見蓮太郎、天童木更

《リトルバスターズ》

棗鈴、直江理樹、井ノ上真人、宮沢謙吾、神北小毬、三枝葉瑠佳、西園美魚、能美クドリヤフカ

《学戦都市アスタリスク》

天霧 綾斗、ユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルト、沙々宮 紗夜、夜吹 英士郎

《落第騎士の英雄譚》

黒鉄 一輝、ステラ・ヴァーミリオン、黒鉄 珠雫、有栖院 凧、綾辻 絢瀬

《真剣で私に恋しなさい》

直江大和、川神一子、クリステイアーネ・フリードリヒ、椎名京、風間翔一、島津岳人、師岡卓也、源忠勝、

《最弱無敗の神装機竜》

ルクス・アーカディア、リーズシャルテ・アティスマータ、クルルシファー・エインフォルク、フィルフィ・アイングラム、切姫夜架、ティルファー・リルミット

《銀魂》

エリザベス（ペット）

一年T組

担任

坂本辰馬（地理担当）《銀魂》

副担任

織斑千冬（体育実技担当）《インフィニット・ストラトス》

《インフィニット・ストラトス》

織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラ

ウラ・ボーデヴィツヒ、更識簪

《緋弾のアリアAA》

間宮あかり、風魔陽菜、佐々木志乃、火野ライカ、島麒麟、

《学戦都市アスタリスク》

刀藤 綺凜

《最弱無敗の神装機竜》

アイリ・アーカディア、ノクト・リーフレット、

《キューティクル探偵因幡》

野崎圭、佐々木優太

《Angel Beats!》

音無結弦、仲村ゆり、立花かなで、日向秀樹、高松、野田、椎名、遊佐、藤巻、TK、松下護驊、大山、竹山、直井文人、岩沢まさみ、ユイ、ひさ子、入江みゆき、関根しおり

《ハイスクールD×D》

塔城小猫、レイヴェル・フェニックス、ギヤスパー

《オリキヤラ》

竜ヶ崎紫音

三年Y組

高杉晋介（現国担当）《銀魂》

副担任オリオトライ・真喜子（日本史担当）《境界線上のホライゾン》

《銀魂》

来島また子、河上万齐、武市変平太、岡田似蔵、土方十四郎、沖田総悟、近藤勲、山崎退、志村妙

《最弱無敗の神装機竜》

セリスティア・ラルグリス、シャリス・バルトシフト

《アカメが斬る》

アカメ、タツミ、ウエイブ、マイン、レオーネ、ラバツク、シエーレ、クロメ、チエ
ルシー、

《真剣で私に恋しなさい》

川神百代、松永燕、

《生徒会の一存》

紅葉知弦、桜野くりむ

《ハイスクールD×D》

リアス・グレモリー、姫島朱乃

《学戦都市アスタリスク》

クローディア・エンフィールド

《境界線上のホライゾン》

葵・トリー、ホライゾン・アリアダスト、本多・二代、点蔵・クロスユナイト、メア
リ、キヨナリ・ウルキアガ、マルゴット・ナイト、マルガ・ナルゼ、ネイト・ミトツダ
イラ、直政、シロジロ・ベルトーニ、ハイデイ・オーゲヴァザラー、トウーサン・ネシ
ンバラ、葵・喜美、浅間・智、ノリキ、ハツサン・フルブシ、向井・鈴、アデーレ・バ
ルフエット、ネンジ、伊藤・健児、御広敷・銀二、ペルソナ君、本多・正純

《東方》

風見幽香

《トリニティセブン》

不動アキオ

嵐獄島設定

とある魔術の禁書目録の学園都市と同じ規模の島。東と南に魔物や魔獣が潜んでいる森があり、北に貴重な燃料や鉱石が多く取れる鉱山都市があり、西に観光都市がある

攘夷戦争

十年前に起こった大規模な戦争。

資源豊かな嵐獄島を征服しようとしてやって来た天人やギャラルホルン、ザフト、ジオン軍、中国などに対し、嵐獄都市を守ろうと立ち上がったのが坂田銀時ら攘夷志士や当時から日本や嵐獄島と良好のアメリカ、連邦軍、オーブ、EU、悪魔、天使、墮天使の連合軍は血で血を洗う壮絶な戦いになった。

しかし、互いに多大な被害を出したことにより話し合いにテーブルを変え、和平を結ぶことになった。しかしそれでも両者は完全に相手を許すことは出来ない。これは表面上であることは明らかである。

また日本は戦時中、不利を感じた際に一部の上層部によって嵐獄都市を放棄する動き

があつたものの、穩健派はなんとか紫をはじめとした嵐獄都市の権力者や実力者たちに話し合いを持ち込み、交渉に成功したおかげで辛うじて交流を保っているが日本の実権の殆どは紫たちが握っていると云つても過言ではない

禍終素学園

小中高もあるマンモス学校。魔術・魔法科、劍豪科、普通科、農業科、機動科などいくつもの学科に分かれている。

世界設定

この作品では他の星や他の世界から移住してきた天人やドワーフや獣人といった亜人などといった様々な人種、魔法、魔術、錬金術などといった様々な技術。MSにKM F、幻晶騎士などといった近代兵器がある世界。

またこの世界では18才で成人、15才からはあらゆる免許をとれるようになる。

参戦作品一覧

銀魂

バカとテストと召喚獣

トリニティセブン

ハイスクールD×D

Angel Beats!

リトルバスターズ

ディーふらぐ

ワンピース

ガンダム（SEED、Destiny、鉄血など）

生徒会の一存

緋弾のアリア

緋弾のアリアA

東方PROJECT

キューティクル探偵因幡

おそ松さん

インフィニット・ストラトス

最弱無敗の神装機竜

コードギアス

東京レイヴンズ

学戦都市アスタリスク

とある魔術の禁書目録

真剣で私に恋しなさい！

この素晴らしい世界に祝福を

落第騎士の英雄譚

文豪ストレイドックス

境界線上のホライゾン

ブラック・ブレット

終わりのセラフ

S A O

暗殺教室

鬼灯の冷徹

はたらく魔王さま！

第35試験小隊

G A T E 自衛隊彼の地にてかく戦えり

オーバーロード

ドリフターズ

転生したらスライムだった件

F a t e (G r a n d O r d e r , s t a y n i g h t , A p o c r y p h a , Z

e r o , プリズマイリヤ)

異世界はスマートフォンとともに

デスマーチからはじまる異世界狂想曲

トリコ

僕のヒーローアカデミア

ナイツ&mp;マジック

異世界食堂

魔法使いの嫁

城下町のダンデライオン

北斗の拳DD

田中くんはいつもけだるげ

ナンバカ

血界戦線

超次元ゲームネプテューヌ

キララキル

ジョジョの奇妙な冒険1〜5部まで

マクロスF

フルメタル・パニック

甘城ブリリアントパーク

艦隊これくしょん

キリングバイツ

スパロボ再世、天獄、X（一部作品登場なし）

HUNTER × HUNTER

這いよれニヤル子さん

賢者の孫

マジンカイザーSKL

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている

鋼の錬金術師

アイドルマスター

ラブライブ

ラブライブサンシャイン

学園BASARA

ゾンビランドサガ

Gガンダム

ストライク・ザ・ブラッド

ルパン三世、名探偵コナン、DOUBLE DECKER！
ダグ&amp;amp;キリル
(長編参加予定)

かぐや様は告らせたい

可愛ければ変態でも好きになってくれますか

鬼滅の刃

ダンベル何キロ持てる

魔王様、リトライ

ナカノヒトゲノム【実況中】

ぼくたちは勉強ができない

僕のヒーローアカデミア

無彩限のファントム・ワールド

ご注文はうさぎですか

邪神ちゃんドロップキック

ぐらんぶる

設定2

藤丸兄妹所有サーヴァント

セイバー 蘭陵王、ラーマ、ジークフリート、プーサー、アルテラ、カエサル、ベディ
 ヴィエール、デオン、ガウエイン、ランスロット、ラクシユミー、アルトリアリリイ、モー
 ドレッド、ジル、フェルグス、宮本武蔵

ランサー 李書文、デイルムツド、フィン、槍オルタ、弁慶、レオニダス、アナチャ
 ん、ジャンタ、カルナ、エルキドウ、？、エレシユキガル、ヘクトール

アーチャー ロビン、エウリュアレ、アタランテ、アーラシユ、新茶、ダビデ、ニコ
 ラ・テスラ、アルジュナ、トリスタン、イシユタル、ケイローン、アシュヴァッターマ
 ン、ウイリアム・テル

ライダー 黒髭、ドレイク、レジライ、ブーディカ、牛若丸、マリー、マルタ、赤兎
 馬、アンメア、アストルフォ、オジマンディアス、アキレウス、龍馬

アサシン サンソン、酒吞童子、呪腕、百貌、ステンノ、？、軻、マタ・ハリ、ヒロイ
 ンX、クレオパトラ、山の翁、新シン、以蔵さん

キャスター アマデウス、ジル、アンデルセン、シエイクスピア、クーフリーン、シ

バの女王、ナーサリー、パラP、エジソン、エレナ、チャールズ、三蔵、ニトクリス、マールン、オケキヤス、アスクレピオス

バーサーカー 茨木童子、ランスロット、呂布、坂田金時、源頼光、スパルタクス、アステリオス、ヴラド三世、フラン、ヒロインXオルタ、ナイチンゲール、土方歳三、バニヤン、エルバサ

エクストラ サリエリ、始皇帝、キアラ、アビー、エドモン、アストラリア、ホームズ

【オリキャラ】

ブレイズ・バルバトス

魔界の72家ある貴族の一つであるバルバトス家の長男として生まれたが、家を継ぐ気がなかったので家出してはいろんな場所で喧嘩を仕掛けては殺したり半殺ししたりしたためにバルバトス家の恥としてその存在をなくそうと処分しようとしたが刺客は皆殺しにされその中には現魔王のサーゼクス・ルシファーと同等の実力がある先代バルバトス家当主もいたがブレイズは死にかけになったが魂ごと殺されてしまった。

魔界を出てから人間界を転々としながら実力者たちと戦っていたがある日零斗と出会いたまに会っては殺し合いをする程度の関係になっていた。

現在はウロボロスという組織に傭兵として雇われている

プロフェッサー

『ウロボロス』に所属する研究者たちの代表の老人。自分の研究のためならどれほどの犠牲が出ようとお構いなしで、自分の命すら実験に使うことに躊躇いが無いマッドサイエンティスト

クロノス

『ウロボロス』を纏める王のような存在。常に全身を金と黒で装飾された鎧を身に纏っているため、その正体を知るものは組織の中でも数えるほどしかおらずその能力すら不明である。

【ゾディアック】

嵐獄島に住んでいる住人の中でMSやKMFなどのロボットを用いて魔獣やインベーダーなどの地球外生命体、テロリストなどと戦う組織。ちなみに総司令官はルルーシュ・ランペルージことゼロである。

【禍終素学園クラス表】

二年K組

担任

平塚静（数学担当） 《やはり俺の青春ラブコメはまちがっている》

副担任

ロマニ・アーキマン (保健体育担当) 《Fate/Grand Order》

《やはり俺の青春ラブコメはまちがっている》

比企谷八幡 雪ノ下雪乃 由比ヶ浜結衣 川崎沙希 戸塚彩加 材木座義輝 葉山

隼人 三浦優美子 海老名姫菜 戸部翔

《ガンダムSEEDDESTINY》

シン・アスカ ルナマリア・ホーク レイ・ザ・バレル メイリン・ホーク

《文豪ストレイドッグス》

中島敦 泉鏡花

《アト・ア・ライブ》

五河士道 八神十香 鳶一折紙 時崎狂三 八舞耶俱矢 八舞夕弦 誘宵美九

《第35試験小隊》

草薙タケル 杉並斑鳩 鳳桜花 西園寺うさぎ 二階堂マリ

《Fate/Grand Order》

藤丸立香 藤丸立花 マシユ・キリエライト オルガマリー・アニムスファイア

《生徒会役員共》

津田タカトシ 萩村スズ 三葉ムツミ

《デュラララ!!》

竜ヶ峰帝人 紀田正臣 園原杏里

《僕は友達が少ない》

三日月夜空 柏崎星奈 羽瀬川小鷹

《ディーふらぐ》

風間堅次 柴崎芦花 烏山千歳 子王八 河原中 横縞 長山ひろし 高尾 船堀

《城下町のダンデライオン》

櫻田修 櫻田奏 佐藤花

《ソードアート・オンライン》

キリト アスナ シノン アリス ユージオ フィリア ストレア

《コードギアス》

ルルーシュ・ランペルージ C・C. シャーリー・フェネット リヴァル・カルデ

モンド ライ・クロックス 紅月カレン

一年V組

一瀬グレン (体育(剣術)担当) 《終わりのセラフ》

南宮那月 (英語担当) 《ストライク・ザ・ブラッド》

《終わりのセラフ》

百夜優一郎 百夜ミカエラ 柊シノア 早乙女与一 君月土方 三宮三葉

《ストライク・ザ・ブラッド》

暁古城 藍羽浅葱 煌坂紗矢華 矢瀬基樹 ラ・フォリア・リハヴァイン

《ディーふらぐ》

風間之江 水上桜

《この素晴らしい世界に祝福を！》

佐藤和真 アクア ダクネス

《へびーオブジェクト》

クウエンサー||バーボタージュ ハイヴィア||ウインチエル

《エウレカセブン》

レントン・サーストーン エウレカ

《機動新世紀ガンダムX》

ガロード・ラン ティファ・アディール パーラ・シス

《甘城ブリリアントパーク》

可児江西也 千斗いすず

《城下町のダンデライオン》

櫻田茜 鮎ヶ瀬 花蓮 福品

《生徒会役員共》

津田コトミ 時カオル

三年V組

担任

剣鉄也 (体育担当) 《グレートマジンガー》

副担任

早乙女ミチル (体育担当) (真ゲッターロボ 世界最後の日)

《ガンダムSEED》

キラ・ヤマト アスラン・ザラ ラクス・クライン カガリ・ユラ・アスハ

《真ゲッターロボ 世界最後の日》

號 凱 溪

《マクロスF》

早乙女アルト シェリル・ノーム ミハエル・ブラン クラン・クラン

《マジンガーZ》

兜甲児 弓さやか ボス ヌケ ムチヤ

《キングゲイナー》

ゲイナー・サンガ サラ シンシア

《フルメタル・パニック》

相良宗介 千鳥かなめ

《バディ・コンプレックス》

渡瀬青葉 隼鷹・ディオ・ウエインバーグ 弓原雛

《ディーふらぐ》

境多摩 神泉 松原東 長沼 九段下

《城下町のダンデライオン》

櫻田葵

《コードギアス》

ミレイ・アッシュフォード

【2年O組】

担任

武田信玄 (体育担当) 《学園BASARA》

副担任

紅本明里 (英語担当) 《実は私は》

《学園BASARA》

伊達政宗 真田幸村 長宗我部元親 柴田勝家 かすが 後藤又兵衛 毛利元就

大谷吉継 前田慶次 竹中半兵衛

《ガンダム鉄血のオルフェンズ》

オルガ・イツカ 三日月・オーガス 昭弘・アルトランド ノルバ・シノ ビスケツト・グリフォン ユージン・セブンスターク

《実は私は》

黒峰朝陽 白神葉子 相澤渚 紫々戸獅穂／紫々戸獅狼 明美みかん 桜田康介岡田奏 嶋田結太

《天元突破グレンラガン》

ギミー ダリー

《機動戦士ガンダム00》

刹那・F・セイエイ フェルト・グレイス テイエリア・アーデ アレルヤ・ハプティズム マリー・パーファシー ミレイナ・ヴァステイ 沙慈・クロスロード ルイス・ハレヴィ

《新機動戦記ガンダムW》

ヒイロ・ユイ デュオ・マックスウエル 張五飛 トロワ・バートン カトル・ラババ・ウイナー リリーナ・ピースクラフト

【3年X組】

担任

ジョセフ・ジョースター（世界史担当） 《ジョジョの奇妙な冒険》

副担任

ロイ・マスタング（錬金科担当） 《鋼の錬金術師》

横島ナルコ（英語担当） 《生徒会役員共》

【ジョジョの奇妙な冒険】

【生徒会役員共】

天草シノ 七条アリア 畑ランコ 五十嵐カエデ

《鋼の錬金術師》

アルフォンス・エルリック エドワード・エルリック ウィンリィ・ロックベル

《学園BASARA》

豊臣秀吉 猿飛佐助 風魔小太郎 片倉小十郎 前田利家 まつ 小早川秀秋 浅

井長政 お市 黒田官兵衛

《実は私は》

銀華恋

購買の焼きそばパンは何故か異常に人気である

ここは嵐獄島にある高校のひとつの禍終素学園の学生寮『混沌寮』の一室。

その部屋で竜ヶ崎零斗（りゅうがさきれいと）がルームメイトの吉井明久と他愛ない会話をしていた。

零斗「なあ聞いたか明久。今日購買で焼きそばパンが50円らしいぞ」

明久「安っ!?なら今日は購買にいかないかね」

零斗と明久は趣味に金をかけているのでこういった購買やスーパーなどのセールには目がないのである。

零斗「四時限目は慧音先生の授業だから抜けやすいかもな。それよりそろそろ行かないと遅刻するぞ」

明久「そうだね」

そう言つて零斗と明久はカバンを持つと部屋から出ていった。

◆◆◆ 禍終素学園

この学園は小学から高等部までであるマンモス校で、学園の中には様々な部活動が活動

を行うための部室棟や運動場がある他、畑や牧場までもがある。

その禍終素学園の正門に銀髪の男——坂田銀時が立っていた。

零斗「おはようございます糖尿先生」

明久「おはようございます糖分先生」

銀時「おいテメーら何人の名前変えてんだ。俺のことは坂田先生か銀さんと呼べ」

坂田銀時。大量の糖分を摂っているので医者に糖分を摂るのを押さえるように言われている。そして零斗と明久の担任でもある。

零斗と明久は銀時に挨拶を終わらせると自分達のクラスへと向かった。

？「零斗おはよ」

？「明久おはよー」

零斗と明久に声をかけてきた、独特な巫女服を着ているのが博麗霊夢。銀色の長髪に頭の上にリボンをつけているのが藤原妹紅。

霊夢は零斗の、妹紅は明久の幼なじみである。

零斗「おはよ霊夢、妹紅」

明久「おはよ二人とも。妹紅、今日は慧音さん一緒じゃないの？」

明久が二人に挨拶しながら妹紅に聞いてきた。

慧音先生は妹紅の保護者で、明久と妹紅は慧音から勉強を教えてもらうこともよくあ

る。

妹紅「ああ、慧音は今日用事があるから学校にこれないんだ」

明久「え？それじゃ四時限目の授業は……」

妹紅「西村先生が代わりに来るみたいだぞ」

今明かされた衝撃の真実!!今日の四時限目が慧音先生から西村先生こと鉄人に変わってしまった!?

ちなみに鉄人とは人間ではあり得ないような身体能力と運動神経から生徒たちにつけられたあだ名である。

零斗「これじゃ購買の焼きそばパンは諦めるしかないか……」

明久「だね……」

霊夢「何?今日の購買で何があるの?」

霊夢が気になったようなので今日購買で焼きそばパンが50円で販売することを教えてあげた。

その瞬間、霊夢は驚きのあまりカバンを落とした。

霊夢「な、何ですって焼きそばパンがたった50円で買えるなんて……」

そう言えば霊夢はあんまりお金がないんだっけ。

それでよく俺が料理を作ってあげることがある。

零斗「なあ霊夢、一緒に協力して焼きそばパンを買わないか？」

霊夢「その話乗ったわ!!」

零斗と霊夢はガシツと手を結んだ。

それを明久と妹紅は苦笑いしながらみていた。

◆ ◆ ◆

零斗「ではコレより作戦会議をおこなう」

ここは高等部二年Z組の教室。

その端の方で生徒たち集まっていた。

メンバーは朝に集まった零斗、明久、霊夢、妹紅の四人とクラスメイトの坂本雄二、土

屋康太ことムツリーニ、木下秀吉、杉崎鍵、春日アラタ、兵藤一誠、志村新八、椎名深

夏、風間レヴィ、神楽、霧雨魔理沙、の計15名である。

鍵「でもさ、鉄人の授業を抜けるなんて難しくないか？」

秀吉「そうじゃのう。現に今までまともに成功したことなど数少ないのだからのう

……」

アラタ「俺もリリスの着替えを見るために抜け出そうとしたけど失敗したしな

……」

一誠「俺も部長の着替えを見ようとして……」

雄二「お前らは何をやっているんだ？」

レヴィ「あの人って本当に人間ツスカね？」

康太「普通じゃない……」

神楽「絶対あいつ人間やめてるアル」

魔理紗「お前には言われたくないんだぜ」

みんな、鉄人の恐ろしさを知っているためか少し消極的になっていた。

新八「やつぱり諦めた方が——」

霊夢・零斗「このバカがつ!!」

新八がそう言いかけた瞬間、霊夢と零斗が新八の顔を殴った。

新八「痛っ!?!何するんですか!!」

零斗「うるさいんだよ駄眼鏡」

霊夢「こつちには生活がかかっているのよ」

零斗と霊夢の迫力に新八は何も言えず尻込みした。

新八「で、でもバレたら補習室に連れてかれるんですよ?」

雄二「心配すんな志村。俺に考えがある」

深夏「お?どんな作戦なんだ」

魔理紗「私たちにも教えろよ」

雄二に考えがあると聞いて深夏と魔理沙は聞き出そうとした。

他のみんなも気になってるのか雄二の方に視線を向ける。

雄二「作戦内容は言えない。だが、この手を使えば必ず鉄人は教室から去るはずだ」

雄二は自信満々にそう言った。

流石は元神童。こういうずる賢いことを考えるのが得意である。

雄二「そんなわけで、一誠。携帯のマナーモードをOFFにしろ」

一誠「え？なんでだよ？」

雄二「いいからやれ。必要なことなんだ」

一誠「よく分からねえけど、マナーモードを切ればいいんだな？」

雄二「そうだ」

一誠は雄二の言う通り携帯のマナーモードをOFFにした。

鉄人「お前たち。授業を始めるから席につけ」

鉄人が教室に入ってきたのでみんな大人しく自分の席に戻った。

◆ ◆ ◆

「~~~~で、あるからして、この公式は……………」

あと十分で四時限目が終わると言うのに雄二は一行に行動を起こしていなかった。

明久「ねえ、本当に大丈夫なのかな？（ヒソヒソ）」

零斗「ここは雄二を信じるしかないだろう（ヒソヒソ）」

霊夢「もし五分前になっても何も起きなかつたら私たちだけでもいきましよう（ヒソヒソ）」

妹紅「賛成だ（ヒソヒソ）」

ちようど近くの席にいる零斗たち四人がゴツソリ話していた。

よく見るとさつき話していた他のみんなも同じように話していた。

ピロリロリン♪

そんな中、電子音が聞こえてきた。音のした方を見るとそれは一誠の携帯のようだった。

鉄人「兵藤。出せ」

一誠「……はい」

一誠の席の前に鉄人が移動していて、携帯を没収していた。

一誠は大人しく携帯を渡そうとしたら、何か本のような物が一誠の机の下に落ちた。

鉄人「む？兵藤何か落とした——」

鉄人が一誠の落とした物を拾おうとしたが、途中で手を止めた。

なぜなら、一誠が机から落としたのは『女教師〇辱物語』というタイトルのエロ本だからだ。

そしてクラスの全員が一誠をゴミを見るような目で見た。

鉄人「兵藤。今から貴様は補習室で特別授業をしてやる。他のものは残り時間は自習にする」

一誠「嫌だああああ!!」

鉄人によつて一誠が補習室へと連行された。去らば一誠。君のことは忘れない。

俺たちは敬礼しながら鉄人に連れていかれる一誠を見るのであった。

雄二「いや、上手くいくもんだな」

零斗「雄二。お前がやったのか？」

雄二「ああ一誠にはこの前翔子に魔理沙とデートしたつて嘘を教えられたからな。お陰で俺は翔子に浮気したつて言われて監禁されたからな」

雄二だけは敵にまわしてはいけないと全員が心の中でそう思った。

明久「それじゃ、鉄人もいなくなつたことだし購買にいこうか」

霊夢「そうね。兵藤の犠牲を無駄にしないためにも」

康太「……………早くいこう」

鍵「お前ら少しは一誠の心配とかしろよ……………」

鍵が呆れたように言うがこの学園ではこういったことはよくあるので、誰も気にしない。

零斗「さあみんな！購買にいこう!!」

明久たち『オーーー!!』

零斗たちは購買へと向かった。

◆◆◆

一誠が鉄人に補習室に連行されている間に零斗たちは教室から出て、購買へと向かって走っていた。

深夏「しかしよく上手くいったよな。坂本の作戦」

レヴィ「そうツスよね。兵藤さんを生け贄にして残りの人たちが購買にいくなんて普通じゃ考えないツスよね」

秀吉「まあこやつらは平然と仲間を見捨てるからのう」

アラタ「この学園じゃ当たり前みたいになってるよな」

そんな他愛も無い会話をしながら走っていると1つの影が通りすぎた。

明久「何、今通りすぎたのは!？」

康太「速くて見えなかった………っ!!」

零斗「あの人は!!」

鍵「三年の点蔵先輩だな」

三年のパシリとして有名な点蔵・クロスユナイト。

いつも帽子を被っていて素顔を隠している忍者で金髪巨乳の彼女持ち。リア充めモゲロ。

アラタ「オイ！後ろから風紀委員たちがやって来たぞ!!」

零斗たちが後ろを見ると風紀委員長の近藤勲を筆頭に風紀委員の土方十四朗、沖田宗吾、山崎退、不動アキオ、山奈ミラが走っていた。

零斗「お前ら授業どうしたんだよ!!」

アラタ「風紀委員がサボっていいのかよ!!」

深夏「あたしらも人のこと言えないけどな」

鍵「深夏、それは言わないお約束だ」

そんなことを話しているうちに近藤たちは零斗たちのすぐ後ろまで来ていた。

アラタ「しかし風紀委員の鏡であるミラまでくるなんてな。そんなに焼きそばパンが食いたかったのか？」

ミラ「ち、違います!!私をあなたたちと同じにしないでください!!」

アキオ「私と大将と委員長は幻の惣菜パンを買いにいくんだ」

2ーZ全員『幻の惣菜パン?』

近藤「そうだ!この学園に伝わる学園伝説のひとつで、年に一度だけ販売されるそれを異性に渡せば恋仲になれるという言い伝えがあるのだ!!」

霊夢・妹紅・深夏 「「な、なんだ（です）って!?!」」

近藤の言葉に霊夢、妹紅、深夏は驚きの声をあげた。

康太「その噂なら知ってる……………。現に卒業生の中でそのパンを渡した男女20組のうち19組がこの学園で恋人になってそのまま結婚したらしい……………」

明久「へえ〜そうなんだ」

零斗「ま、俺たちには関係ないことだな」

明久と零斗は興味ないのか反応が薄かった。だが、2・1・Zの女子三人とミラとアキオは反応していた。

霊夢「（そのパンを手に入れて零斗に告白すれば……………////////////）」

妹紅「（あ、明久と恋仲に////////////）」

深夏「（鍵の恋人になってそのまま……………////////////）」

ミラ「（ア、アラタに渡してそのまま////////////）」

アキオ「（私はやっぱり零斗だな//////////////////////）」

近藤「というわけで俺はその幻の惣菜パンを手に入れてお妙さんと付き合うんだ!!」

神楽「お前なんかじゃ絶対無理アル」

土方「俺の照りマヨサンド~~~~!!」

沖田「誰もそんなの求めてませんよ」

???

「俺にも出番をよこせ!!」

戦いとはどんな手を使っても勝てばよかろうなのだ

前回までのあらすじ。

人が次第に朽ちゆくように国もいずれは滅びゆく——

千年栄えた帝都すらも今や腐敗し生き地獄

人の形の魍魎魍魎が我が物顔で跋扈する——

天が裁けぬその悪を闇の中で始末する——

我ら全員、殺し屋家業——。

新八「——って、これアカメが斬るじゃねえかああ!!」

零斗「仕方ないだろう。作者がアカ斬る好きなんだから」

新八「いや、だからって嘘のあらすじ言っちゃダメだろ!!」

神楽「いちいち細かいんだよ。だからお前はいつまでたっても眼鏡掛け機なんだよ」

新八「眼鏡掛け機って何？もはや人間扱いされてないの？」

雄二「志村の扱いは今はどうでもいいだろ。そんなことよりこれからどうするかを考

えるぞ」

ここはカオス学園高等部一階の渡り廊下。購買までは真っ直ぐいくだけでつく。

だが、今零斗たちの前には三人の教師が立っていた。

2―Z担任の坂田銀時

学園一のバカ教師桂小太郎

毛フェチの因幡洋

彼らの足元には点蔵や近藤など多くの生徒たちが倒れていた。

頭にタンコプを作っているものや制服がボロボロになって煙をあげているもの、体が痺れているもの等々色々あった。

土方「くそっ！まさか教師どもが待ち伏せしてるとは……」

銀時「てめえらバカどもの考えることはお見通しなんだよ」

洋「大人しく教室に帰るなら許してやるぜ？」

桂「さあ！どうするお前たち!!」

銀時たち三人は嫌らしい笑みを浮かべながらそういった。

もちろん。零斗たちには鉄人の補習を受けるなんて選択肢は全くない。

零斗「先生を倒すか」

アラタ「だな」

明久「しようがないよね」

土方「悪いな先生」

そう言うのと零斗たちは自分達の武器であるブレードトンファーや魔導書、木刀、日本刀など、それぞれ自分の武器を構えた。

銀時「どうやらやる気みたいだな」

桂「致し方あるまい」

洋「大人の力つてもものを教えてやろうか」

銀時は木刀を、桂は日本刀と爆弾、洋は髪を啜えて半狼化した。

生徒VS教師の戦いが始まろうとした。

零斗「あ、あんなところに結野アナと滝川クリスタルとけだまんじゅうが」

銀時・桂・洋「「何いいいい!?!」」

零斗の言葉につられて三人は零斗が見た方向に顔を向けてしまった。

零斗「嘘ですよ」

その隙に零斗はブレードトンファーで銀時の頭を殴りまくり、明久は木刀で桂の頭を叩き、霊夢が洋の腹を蹴り、三人は気絶して倒れた。

零斗「いこうか」

霊夢「そうね」

康太「購買まであと少し……」

明久「これで焼きそばパンが買えるね」

アラタ「案外楽勝だったな」

そんなことを話ながら、零斗、霊夢、明久、ムツリーニ、雄二、アラタたちは購買へと向かった。

『『イヤ、ちよつと待てええええええ!!』』

零斗たちの行動に驚いて呆然としていた新八たちがツツコミを入れた。

土方「イヤ、何お前ら何普通にこの場から去ろうとしてんだ!」

新八「なんであ的好い感じの雰囲気からそんなことができるんですか!」

山崎「アンタ等それでも人間か!」

零斗たちにいろいろなツツコミがくるが、零斗たちはそれに対し溜め息をついた。

零斗「やれやれ何を言ってるんだか」

明久「全くだよ。新八君たちはまるでわかっていないね」

康太「理解不能……」

零斗たちは肩を落としながら呆れたように言った。

雄二「いいか、志村……」

零斗・霊夢・明久・雄二・康太・アラタ『勝てばよかろうなのだ!!』

新八「アンタ等最低だな!!」

新八の渾身のツツコミが響いた。

零斗「とりあえず土方。これあげる」

土方「ん? っってお前これ——」

零斗が渡したものの↓桂から奪った爆弾

チュドーン!!

土方・新八・山崎「「ぎやああああああ!!」」

爆発の衝撃をくらった土方、新八、山崎が吹っ飛ばされた。

ちなみに近くにいたはずのミラたちは予想していたのか新八たちから離れていた。

零斗「——よし。これでライバルは三人減ったな」

雄二「流石は零斗だな」

明久「僕たちも見習わないとね」

鍵「お前ら本当最低だな!!」

鍵が何か言ってるけど零斗たちは気にしない。

雄二「おい、沖田先輩が消えてるぞ」

康太「いつのまに……」

アラタ「まさか先に購買に……」

沖田「俺はここでさあ」

沖田の声がした方を見ると万歳しながら体が半分廊下に埋まっていた。

沖田「床が老朽化していたのか抜けなくなっちゃいましたね。あのすいませんちよつと抜いてくれませんか？」

沖田の言葉を聞いた神楽は下種びた笑みを浮かべながら沖田に近づいた。

神楽「ぐははははははは!!情けないアルな!しょうがないから私が抜いてや——」

——ズボツ（床が突き抜けて神楽が埋まった音）

『……………』

あまりのことに零斗たちはなにも言えず、無言で神楽と沖田を置いて購買へと向かった。

購買についたときは誰もいなかったおかげで零斗たちは目的の焼きそばパンを買うことができた。

しかし、幻の惣菜パンは既に誰かに買われていたそうだ。

そのことに幻の惣菜パンを買いおうと考えていた女子たちはシヨックをうけて悲しそうな顔をしていた。

◆◆◆◆

零斗「いや〜大量に買えたな」

明久「そうだね。これでしばらく塩水だけの生活からぬけられるよ」

零斗たちはたちは教室に戻って買って買った戦利品を机の上に置いていた。その焼きそばパンは一つの山が出来ていた。

秀吉「しかし。幻の惣菜パンとはどのようなものだったのだろうか？」

鍵「俺たちが銀さんたちと戦っている間に誰かが買ったみたいだな」

康太「噂でもその惣菜パンがどんなものかまでは聞いたことがない……」

みんなが焼きそばパンを食いながら幻の惣菜パンについての話をしていた。

魔理沙をのぞく女子たちは何故か落ち込みながらパンを食べていた。

一誠「雄二。俺はお前のことを絶対に許さないからなっ!!」

雄二「お前の自業自得だ」

アラタ「案外早く釈放されたな」

授業を途中で抜け出したことで近藤や点蔵たちが補習室に連れていかれ、一誠は解放された。

???「零斗はいるかしら」

教室の扉が開くと、扉の前に零斗の幼馴染みである三年の生徒会書記の紅葉知弦が教室に入ってきた。

零斗「どうしたの知弦？爆弾を爆発させたのは桂さんだから俺は関係ないよ？」

深夏「凄え!!先生に罪を擦り付けてやがる!」

魔理沙「コイツいつか地獄に落ちるぜ……………」

知弦「大丈夫よ。その事できたわけじゃないから。ただ、これを渡しにきただけだから」

知弦がそう言つて零斗に渡したのはカツサンドだった。

零斗「これは?」

知弦「アカちゃんから聞いたんだけどね。何でも購買で一年に一回しか販売されない幻の惣菜パン『イベリコ豚カツサンド三大珍味のせ』よ」

明久「こ、これが!!」

鍵「幻の惣菜パン!!」

知弦の持つてきた幻の惣菜パンの存在に全員が驚き、椅子から勢いよく立ち上がった。

知弦「?皆何でそんなに驚いているのかしら?」

アラタ「あれ?紅葉先輩知らないんですか?」

レヴィ「そのパンを異性に渡せば恋人になれるつて言う都市伝説があるんすよ」

知弦「こ、恋人……………// // // // //」

恋人と聞いた瞬間。知弦の顔が林檎みたいに赤くなつた。

零斗「まあ、俺には縁のない話だよな」

秀吉「何故じゃ？」

零斗「だって俺モテないし」

『……………ハア』

零斗「ええ!!何でみんな溜め息つくの!？」

零斗は全員が溜め息ついたことに驚きを隠せなかった。解せぬ

雄二「零斗。この前川神先輩と出掛けたのは？」

零斗「昼飯を奢ったやつだよ」

明久「一年生の佐々木さんと火野さんとの二人とデパートに出掛けたのは？」

零斗「荷物持ちだね」

一誠「ゼノヴィアとロスヴァイセ先生と出掛けたのは？」

零斗「戦闘訓練だな」

アラタ「お前どんだけ女子と行動してんだよ!？」

鍵「これで気づかないとかどんだけ鈍感なんだよ……」

明久「全くだよ」

魔理沙「お前らも人のこと言えないけどな」

明久と鍵に対して魔理沙がそうツツコンだ。

知弦「……………零斗。次の日曜日出掛けましょう」

零斗「?別にいいけど」

霊夢「な、なら私もついてく!!」

アキオ「まああたしもその日は暇だからついていくぜ」

三人は互いに火花を散らしながら睨みあっていた。

零斗「今日も平和だな」

零斗はそう言いながら窓の外を見ていた。

——ちなみに幻の惣菜パンはその場にいるみんなで均等に分けました。

味の感想?メチャクチャ旨かった。それしか言えない。

あと、知弦たちとの出掛けはシヨッピングモールの買い物で、零斗は荷物持ちをしましたとき

大抵の学校には七不思議がある

ある日の昼休み、風紀委員の集団が怪談について話をしていた。

風紀委員「てさー……その女は言つたんだよ。何でこんなところにいるかつて。そしてたらその女が……」

ゴクリと誰かが生唾を飲む音が聞こえた。

風紀委員「その女」

土方「マヨネーズが足りないんですけどオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

風紀委員たち『『『ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?』』』

暗闇の中で突然大声を上げた土方に風紀委員たちが驚いた。

風紀委員「何やつてんすか土方さん!せつかくのオチが台無しじゃないツスカ!」

風紀委員の一人が後ろから現れた土方に文句を言った。

土方「知るか。そんなことよりマヨネーズが足りねえんだよ」

土方の手にはマヨネーズを並々と盛った焼きそばパンが。

風紀委員「それも焼きそばパンじゃねーよ!大盛りマヨネーズのおまけに、焼きそばパンじゃねーか!」

風紀委員「大変だ！近藤さんと火野さんが!!」

一人の風紀委員が白目を向いて気絶しているゴリラと一年の火野ライカを指差している。

風紀委員「マヨネーズで委員長と火野さんが気絶した!!最悪だあああああ
皆が叫んでいる間に土方は外へいった。!!!!!!」

土方「……………つたく、何が最悪だ。俺はマヨがなくて最悪だよ」

そう呟き土方は玄関前の大樹で焼きそばパンもといマヨネーズにかぶりついた。

◆◆◆◆◆

授業が終わり放課後。零斗は風紀委員の遠山キンジと不幸少年上条当麻とアラタの

四人は教室で談笑していた。

キンジ「最近、学園で七不思議の噂が流れているの知ってるか?」

アラタ「いや、俺は知らないぞ?」

零斗「俺も聞いたことない」

当麻「上条さんも知らないでせう」

キンジ曰く、その噂が広まったのはつい最近で、実際に目撃者も何人かいるらしい。

そして今この学園で噂されているというのが

・廊下に響く謎の音

・職員室の霊

・いにしえの黒魔術師

・謎の黒服集団の儀式

・暗黒の魔物たち

・理科室に浮かんでいる幽霊

等といったものだ。

零斗「なんか面白そうだな」

キンジ「笑い事じゃないんだよ。幸い、まだ被害者が出てないけど。いつか誰かが被害に遭うかもしれないから今風紀委員でも調査してんだよ」

そう言えば最近風紀委員をよく見かけるなあと三人は思った。

???「おい。面白そうなこと話してんじゃねえかよ。俺もまぜろ」

アラタ「よ、十六夜」

当麻「久しぶりだな」

話混ぜてきた男の名前は逆廻十六夜。2-1-Zの問題児の一人で、面白そうなことに進んで首を突っ込んでいく快樂主義者である。

十六夜「それで? いったいくんだ?」

零斗「善は急げ。って言うんだから今日の夜にいくつもり」

アラタ「ならクラスの奴らにも声かけようぜ」

その後、零斗たちはクラスのみんなにこの事を話した。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

その夜、零斗たちの呼び掛けに応じてくれたのは明久、雄二、ムツリーニ、秀吉、鍵、深夏、宇宙巡、宇宙守、当麻、レヴィ、神無月アリン、セリナ・シャルロツク、倉田ユイ、一誠、アーシア・アルジエント、ゼノヴィア・クアルタ、霊夢、魔理沙、妹紅、十六夜、春日部耀、久遠飛鳥以上の面々だった。

ちなみにキンジは風紀委員のため近藤たちのところについていた。

零斗「夜の学校ってなんかワクワクするね」

鍵「俺はよく生徒会の雑務で夜遅くまで残ってるからあんま新鮮味を感じないな」

妹紅「私もよく明久と姉さんの三人で夜の散歩でここにくるな」

霊夢「私はよく紫の手伝いで夜の学校にくるわね」

康太「夜の学校……………(ボタボタ)」

セリナ「土屋さん大丈夫ですか!？」

守「何を妄想してんだか…………」

明久「ムツリーニだから仕方ないよ」

アリン「旦那様、私とする?」

ユイ「お兄さんとするのは私だよ!!」

レヴィ「モテモテツスねアラタさん」

一誠「殺したいほど妬ましいっ!!」

アーシア「一誠さん……………」

ゼノヴィア「零斗。私たちも……………」

耀「十六夜……………」

飛鳥「ちよつとみんな落ち着きなさいよ!!」

深夏「大丈夫なのかこれ？」

魔理沙「駄目だろうな」

雄二「ま、なんとかなるだろう」

零斗たちは夜の学校に入りながらそんな会話をしている中

新八「あれ？零斗さんたちじゃないですか」

神楽「何してるアルか？」

銀時「おいおい。お前からこんな夜中に何しに来たんだ？」

向こう側から万屋の面々がやってきた。

巡「銀時先生たちこそどうしてここにいるんですか？」

銀時「俺はジャンプを取りに来たんだよ」

神楽「私は酔昆布アルよ」

新八「僕はお通ちゃんのリブCDです」

どうやら銀時たちは忘れ物を取りに来たようだ。

銀時「それで？お前らは何しに学校に来たんだ？」

別に隠す必要もないので、零斗たちは正直にここに来た理由を話した。

神楽「面白そうアルな。私たちもついていくアル」

新八「そうですね。丁度僕たちの忘れ物があるのも七不思議の場所ですしね」

どうやら神楽と新八は七不思議に興味ができたのか、乗り気であった。しかし

銀時「ふざけんじゃねえよ。何がナナホシテントウだ。あんなもんだの虫じゃねえ

かよ」

零斗「いや、七不思議ですよ」

何故か銀時だけは乗り気ではなかった。

銀時「下らねえ。俺は先いくぞ」

しかし銀時は何故かその場を動かないどころかその両手は新八と神楽の手を握っていた。

神楽「銀ちゃん何で手を握っているアルか？」

銀時「ば、バカ野郎!!これはお前らが寂しくならないようにと思っただな……………」

新八「でも銀さん。銀さんの足が面白いぐらいに震えてるんですけど」

銀時「こ、これは武者震いだ!!」

しかしそういう銀時の顔は青くなっていた。

零斗「そんなこと言って実は怖いんじゃないんですか？」

零斗がそういつた瞬間、銀時は顔が青くなり、足の震えも酷くなった。

銀時「バババババ、バカ野郎!!俺はジャンプの表紙に何度も出た男だぞ!そんなもん
に怖がるわけ——」

零斗「じゃ、俺たち先いつてるんで先生もまたあとで会いましょうね」

銀時「え？」

いつのまにか銀時の手は神楽と新八の手から離されており、零斗たちは移動している
ところだった。

銀時「待ってえー!!置いてかないで!先生も連れてってー!!」

こうして、零斗たちの七不思議搜索が始まるのであった。

噂の正体を知るとテンション下がるよね

結局銀時も一緒にいくことになり、零斗たちは最初に新八の忘れ物がある教室へと向かった。

零斗「今のところ変わったところなんてないな」

明久「ほんとだね」

ゼノヴィア「悪魔の気配も今のところ感じられないな」

雄二「ま、何もないことに越したことはないだろ」

鍵「そうだな。余計な仕事が増えなくて俺たち生徒会も楽になるからな」

そんな他愛もない会話をしながら廊下を歩いていた。最初は何もなかったが……

ガタツ、ガタガタと音が聞こえてきた。

新八「ぎ、銀さん今の……」

銀時「き、気のせいだ!!というわけで確認してこい宇宙弟!」

守「その呼び方やめろ! ってかなんで俺なんだよ!!」

霊夢「いちいちうるさいのよ。こういうときこそあんたの微妙な超能力の出番で

しよ」

守「微妙言うな!!」

巡「いいからとつと開けなさいよ」

秀吉「そうじゃぞ。お主が適任なんじゃから」

アラタ「いざつてときは助けてやるから気にすんな」

一誠「そうそう。だから心配すんなって」

結局アラタたちの説得によって守が開けることになった。

そして教室の前まで移動すると守が教室の扉に手をかけた。

守の後ろでは零斗たちがそれぞれ武器を構えていた。

守「それじゃ行くぞー」

零斗「2の、」

銀時「さああああああああああん!!」

勢いよく扉を開け教室の中を見るとそこにいたのは

近藤「お妙さーん、んふっ、んふっ」

風紀委員長である近藤がお妙の椅子に頬擦りしていたのだった。

零斗たちはその近藤の姿をゴミを見るような目で見ていた。

新八「何してんですか近藤さん……」

近藤「し、新八くん!?それにみんなも!!」

新八が声をかけたことで近藤は零斗たちの存在に気づき、慌てながら椅子から顔を離れた。

明久「七不思議解明ツアーをしてんですよ」

零斗「で？なんで椅子に頬擦りしてたんですか？」

近藤「じ、実は俺椅子職人を目指してるんだよ。それで材質チエックしてたんだよ」

深夏「ほっぺでか？」

近藤「そう！ほっぺが一番確認しやすいんだよ！！」

鍵「なるほどそうですか」

雄二「だが確認するなら頭の方がいいんじゃないか？」

近藤「え？頭って……」

雄二と鍵が近くにある椅子を持ち、そして

雄二・鍵「材質チエケラッ！！」

動揺している近藤の頭に降り下ろした。

ガツンという音のあと、ゴリラはぎゃんと悲鳴を漏らし、その場に倒れ伏した。

それに続いて零斗たちは近藤に容赦ないストンピング攻撃をした。

銀時「ふざけんじゃねーぞ！このクソゴリラがアアアアアア！！」

神楽「ホワチャアアアアアアアアア！！」

魔理紗「死ね、ボケエエエエ!!」

アラタ「懺悔の用意は出来てるか!!」

セレナ「なーにがラップ音ですかアアアアアアアア!!」

巡「死になさい!野生の野ゴリラに殴られて惨たらしく死になさい!!」

妹紅「この世に生まれたことを後悔させてやる!!」

耀「くたばれっ!」

近藤「ギヤアアアアアアアアアアアア!!」

こうして七不思議ひとつ目『廊下に響く音』が解明されたのであった。



銀時「次は職員室か・・・どうせまたしょーもねーオチだろう?」

今さっきの変態ゴリラ騒動のせいで怪談オーラゼロの銀八が言った。

他のメンバーもあんなものを目にしたので何かが吹っ切れているようだ。

鍵「・・・んで、案の定職員室から声が聞こえますね」

鍵の言う通り確かに職員室からは泣き声が聞こえていた。

その後、肝試し組は何にも恐れずに職員室へ向かった。

十六夜「開けるぞー」

十六夜はそう言いながら普通にドアを開けた。

で、目にしたのは……

服部「う……う……う……う……う……う……う……う……う……う……」

秀吉「……何やってんのじゃ、服部先生」

そこでは銀時の同僚で、日本史教師の服部全蔵が座薬を入れていたのだ。

キャスター椅子の上で膝立ちになり、おまけに下半身むき出しでケツをこちらに向け、手には座薬をつまんでいる。

銀八たちの存在に気付き、服部は振り向いた。

服部「あ、坂田先生。どうしたんだ？アンタもイボ痔かい？」

銀時「いやいや、なわけねーだろうが、何やってんだよこんな時間に」

服部「いや、実は座薬を入れようと思ってだな。もう痛くて痛くてタマンねーんだわ、イボ痔が」

腹が立つほどに呑気な声で、服部は言う。

明久「いや、そんなもん家で入れればいいでしょう!？」

服部「まあ、そりゃそーなんだけどよー実は俺、痔の事は家族に内緒にしてんだよね。だから座薬も職員室に置いてあんのよ」

銀時「それで？夜中に職員室で人知れず泣きながら座薬挿入ってか？」

妹紅「確かにな。コイツらも変態だし」

一誠「失礼な!!夜中にこっそり覗き穴探しなんてしてねえよ!!」

康太「……………隠しカメラの設置なんてしてない」

雄二「おいコイツら風紀委員につき出すぞ」

一誠・康太「去らば!」

明久「あ、逃げた」

雄二が危険人物として一誠と康太を風紀委員につき出そうとした。

しかしその前に一誠と康太は理科室へと逃げていった。

???『ギイヤーアアアアアアアアアア!!』

一誠たちが理科室に入ってしまったとき、突然男性の悲鳴が聞こえた。

アーシア「な、何ですか今の!?!」

飛鳥「わからないけど、とにかく私たちも中に入りましょう!!」

アリン「飛鳥の言う通りね」

新八「早くいきましよう!」

そして零斗たちが理科室に入ってから中を見るとそこには口から泡をはいて気絶してい

るムツツリー二と一誠がいた。

そして零斗たちが理科室の奥を見るとそこにはフヨフヨ浮いているものがいた。

ブルック「あれ？みなさんどうしたんですか？」

それは音楽教師である死んで骨だけブルックだった。

ブルックは自身の力で霊体となることが可能である。

雄二「いや、あんたこそなにしてんだよ」

ブルック「私は夜の見回りでいるんですよ。ほら夜の学校つて物騒でしょ？だからこ
うやつて霊体になつているんですよ」

アラタ「いや、今のあんたの方が物騒だよ！」

アラタの言う通り今のブルックは完全に幽霊といつてもおかしくないもので、いきなり現れたら他の生徒も今そこで気絶してるムツツリーニや一誠のようになるだろう。

神楽「大丈夫アルか銀ちゃん？」

ユイ「駄目だね完全に気絶してます」

深夏「白目むいてるな」

ブルックに驚いたのか銀時は白目をむいて気絶していた。

ブルック「ところで皆さんこそどうしてこんなところにいるんですか？もしかしてあなたたちも七不思議解明ツアーをしてるんですか？」

霊夢「そうだけど、なんでわかつたの？」

ブルック「ルフィさんたちや風紀委員の人たちもさつきここを通つてきたんですよ。」

その時皆さん七不思議について探してるって聞いたんですよ」

ブルックが零斗たちが七不思議解明ツアーをすること当てたことに疑問を感じて質問するとブルックは答えてくれた。

十六夜「そういや金次たち風紀委員もこの七不思議について調べるって言ってたな」

飛鳥「そうだったのね。だからあのゴリラ委員長もいたのね」

耀「いや飛鳥。あの人はただの変態目的で来ただけだよ」

雄二「ルフィたちもどうせ面白半分で来たんだろうな」

鍵「何も壊してなきやけどな……」

秀吉「確かにそこは心配するところじゃな……」

妹紅「あいつらならあり得るな」

明久「僕は風紀委員の方が心配だな」

レヴィ「確かにそうツスね。土方さんと沖田さんとかアリアさんと白雪さんとかが喧嘩してそうツスね」

そんな感じで十六夜たちはルフィや風紀委員たちのことを話してた。

新八「ところで先生は何か七不思議について知りませんか？」

アリン「私たち既に3つ見つけたわ」

セリナ「ラップ音と職員室のむせび声、そしてここのブルック先生の三つですね」

ブルック「そうなんですか。それじゃ七不思議はこれで全部終わったんですね」
当麻「?どういうことですか」

ブルックの言った言葉に疑問を感じた当麻が聞くとブルックは再も当然のように言った。

ブルック「さつき聞いた話ですが風紀委員の人たちが残りの四つの七不思議が解明されたそうですよ」

アーシア「そうなんですか」

ゼノヴィア「それじゃこれで七不思議は全て解明されたということだな」

どうやら既に別に行動していた土方たちが見つけていたようだ。

零斗「それじゃもう帰ろうか」

明久「そうだね。もう七不思議全部分かっちゃったみたいだし」

妹紅「つまらなかつたな」

そう言いながら雄二がムツリ二を、当麻が一誠を運び、零斗たちは理科室をでてそれぞれ帰宅するのであった。

酒は飲んでも呑まれるな

ここは嵐獄町のとある酒場。

そこでは銀時や桂たち禍終素学園の教師たちが酒を飲んでいた。

既に銀時を含め、ほとんどの教員がかなり酔っていた。

銀時「おらおら！酒が足んねえぞ！」

月詠「がはははは！もつと酒持ってこんかい！」

松平「ドンペリ持ってこい！」

幽々子「おつまみもつと持ってきて〜」

紫「楽しいわね〜」

鬼灯「大王。明日も仕事があるんですからお酒を飲むのもほどほどにしてくださいよ」

閻魔大王「大丈夫だよ鬼灯くん。ちゃんと考えてるから」

アザゼル「そうだぞ鬼灯。大人になった今じゃこんなはめをはずす機会なんてめったにねえんだからな」

辰馬「あはははは！まっこと楽しいのう！」

ジエレミア「オレンジは我が忠義の名である!!」

因幡「うるせえよ! 髪触らせろ!!」

大友「いや、全く関係あらへんやん」

荻「洋は昔からこういうやつだ」

東「四番東さん! 『限○バトル』歌います!!」

千冬「少しは静かにしろ!」

既に酔っぱらつてゐる人たちはハイテンションになつており、酒場大盛り上がりであつた。

西村「まったく教師ともあろうもがはめを外しすぎじゃないか」

慧音「まあまあいいじゃないですか」

藤堂「そうさね。たまには息抜きが必要なのさ」

白夜叉「うむ。人間休めるときには休むべきじゃ」

黒ウサギ「いや、ほとんどの人たちは年柄年中遊んでるじゃないですか」

木暮「確かにな」

黒ウサギと木暮はそう言うがそんなことは意味がないとわかっているので止めることはなくお酒を飲み始めた。

おそ松「あれ銀時じゃねえかよ」

カラ松「フツ、これぞまさに運命（デイスティニー）の出会い」

チヨロ松「いや、痛いからマジそれやめてカラ松兄さん」

一松「死ぬクソ松」

十四松「みんないるね！マツスルマツスル！」

トド松「ちよつとうるさいよ十四松兄さん」

銀時たちに声をかけてきたのは銀時と同じ代のCOC学園の卒業生である松野兄弟であつた。

ちなみに現在は六人とも無職で親のすねかじりである。

銀時「あ、くそ二ートども」

慧音「ろくに職に就いてなくせにこんなところに来るなよ」

西村「一人ぐらいまともなのはいいないのか……」

東「東さんですら教師をやつてるのにな」

おそ松「出会い頭に酷くねっ!？」

無職の六人に厳しい銀時たちであつた。

大友「ところでどないして今日ここに来たんや？」

チヨロ松「いや、アニメが終わつたからその記念としてね」

黒ウサギ「あれ？アニメって終わったのけっこう前じゃなかったですか？」

兄弟は深く考えずに銀時たちの近くに座った。この兄弟は以前もカラ松がチビ太に捕まつて人質になったときカラ松よりも梨を優先するのだから

松平「そーいや俺も知り合い呼んだんだっけか」

西村「そうですか。どんな方ですかその人は」

松平「おう。ちよつとシャイな奴だが根は良い奴だぞ」

桂「ほう松平殿がそれほどうとは。これは期待できそうだな」

カラ松「そうだな」

十四松「確かに！」

桂たちは松平が呼んだ人物が気になるのか少しテンションが上がっているが、それに対して銀時たちの様子は不安げなようだった。

銀時「おいおい。松平のおっさんの知り合いって嫌な予感しかしねえぞ」

因幡「奇遇だな俺も同じだ」

千冬「前にも似たようなことがあったからな」

彼らの予想は的中した。

新たに酒場に入ってきたのは銀時たちと同じCOC学園の教師であるさつちやんと猿飛あやめと服部そして彼らの後ろに立っているのは

茂茂「將軍家は代々酒を飲むときは日本酒である」

全員『(やつぱり將軍かよおおおおおおおおお!!)』
やつて来たのは將軍の徳川茂茂だった。

何故か松平は茂茂と親しく、松平はよく茂茂をキャバラなどに連れていくのだ。

松平「そんじや、俺あこのあとキャバいつてくるからあとよろしく」

銀時「おいしいいいい!!なに俺たちに責任押し付けようとしてんだ!」

松平「ちなみに將軍になにかあつたらお前ら全員打ち首だから」

慧音「ふざけるな!!何で私たちが面倒見なきやいけないんだ!」

服部「心配すんな。そう簡単に問題が起きるわけがないだろ?」

あやめ「そうよ。あなたたちは早く將軍様の世話をしなさいよ。私はこの後銀さんと

一緒に二人で飲みに行くんだから!!」

銀時「誰がテメーみてーなメス豚と一緒に酒を飲むか」

白夜叉「まあ、こうなつたら仕方ないのう。ここは將ちゃんを交えて楽しもうぞ」

西村「今さりげなく將ちゃん呼ばわりした気がしますが」

荻「そこはもう気にしないことにしましょう」

こうして將ちゃんこと將軍を交えての宴が再開された。

しかしこのときの彼らは知らなかった。まさかこの後にあんなことが起こると

は.....

◆◆◆◆◆
慧音「あはははは♪お酒おいしー♪」

黒ウサギ「もつと飲んじやいましてよー♪」

木暮「どうしてこうなった・・・」

將軍が来てから二時間がたつたころだった。

慧音や黒ウサギ等と言った桂やあやめなどのストップパーとなるはずだった人たちが日頃たまっていたストレスを解放するように酒を飲みまくり、ご覧のように酔ってしまった。

千冬「ホラホラ坂田先生。もつと飲みませう!!」

銀時「んぐっ!?んぐっ!」

千冬が銀時の口に無理矢理一升瓶を飲ませていた。銀時のそばには他にも数本の日本酒の空瓶が転がっており、それら全て千冬と銀時の横で酔い潰れて寝ている月詠が飲んだものである。

ちなみに藤堂第二学園長と白夜叉、西村、鬼灯、閻魔大王はまだ仕事があるとのこと
で先に帰宅していた。

おそ松・カラ松・十四松「ニイツヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!」

ね

ジエレミア「いや、どう考えてもそれが原因だろ!!」

辰馬「しかしどうするか?」

桂「放っておいても大丈夫だろ。それよりこのタコワサを見る。滝川クリステルそっくりだろ」

アザゼル「いや、そもそも滝川クリステルってなんだ!」

辰馬と桂の言葉で三人を無視することにしたが三人の争いはヒートアップしていた。

猿飛「あなたたちいい加減にしてくれないかしら?いくらあなたたちが相手に見向きされていないからって私と銀さんの仲を嫉妬するなんて」

慧音「はあ?何をいつてるんだ。お前はいつも罵倒されてるだけだろう。その点私は明久とは昔から親しいんだ。この間だって二人で買い物にいったんだからな」

黒ウサギ「甘いですね。私なんてこの前の日曜日に十六夜さんに膝枕してもらったんですよ。あなたたちとは格が違うのですよ」

三人は口元は笑っているが目は笑っていないかった。

そしてしばらくの間、ハハハッと笑っていたが

あやめ・慧音・黒ウサギ「「死ねえええええ!!」」

さっちゃんはクナイを、慧音は拳を、そして黒ウサギはヴァジュラを構えて互いに攻

撃を始めた。

銀時「おいしいおいしい!! 誰かこのバカども止めろオオオオオオオ!!」

おそ松「俺に任せろ!」

おそ松がそういうと三人が戦っているなかにカラ松と將軍を投げ入れた。

三人は戦いの邪魔をするものを排除しようとフルボッコし始めた。

おそ松「これでよし!」

チヨロ松「いや、なにしてんだよクソ松!!」

おそ松「ほらよく言うじゃん? 喧嘩を止めるときは誰かを間に入れろって」

木暮「いや標的が二人に変わったただけだろ! ってかなんで將軍様まで投げてんだよ!?

將軍様フルボッコじゃねえかよ!!」

木暮の言う通り、將軍とカラ松は三人の標的となりそれぞれクナイを刺したり頭突きたりヴァジュラの雷をあてた。

それによってカラ松はサングラスを粉々にされ髪もアフロになっており、將軍は頭にクナイが刺さり額にはたん瘤が出来ていて挙げ句には服が雷によって燃えちり禪一丁になって気絶していた。

大友「あかん……これ打ち首確定や……」

ジェレミア「何故こんなこと……」

將軍を氣絶させたことに大友たちは見の危険を感じていた。

一松「終わったなお前ら・・・」

十四松「あはははは！テンション上がってきたー！！テンションテンション！！」

チヨロ松「いや、何でテンションあがんだよ！」

おそ松「んじや俺ら帰るから後よろしく！」

カラ松「フツ、サヨナラは新たな出会い」

そう言っておそ松たち松野兄弟が帰ろうとしたがそれを見逃すわけがない銀時たちがおそ松たちの足を掴んだ。

銀時「ふざけんじやねーぞ！このクソニートどもが！！」

桂「悪の根元である貴様らだけは決して逃がさん！！」

因幡「テメエーラが打ち首になれや！！」

辰馬「陸奥に怒られるのは嫌じゃ！！」

ジエレミア「忠義の嵐いいいいいい！！」

東「箒ちゃんに怒られたくないいいいいいい！！」

大友「地獄に落ちるのはお前らやああああああ！！」

チヨロ松「ふざけんな！！僕たちはたまたまここに来ただけなんだ！！」

一松「やるならおそ松兄さんだけにしろっ！！」

十四松「こういうときこそ長男だよね！」

カラ松「確かに!!」

おそ松「マジ最悪だなお前ら!! やつぱり俺以外の兄弟はみんな敵だ!!」

銀時「敵はお前じゃああああああ!!」

その後、酒場では將軍を氣絶させたことの擦り付けあいを始め、さらに別の場所に跳ばされたトド松たちがだょくとデカパンを連れてきたせいで最終的に酒場は崩壊し、請求書が禍終素学園の学園長である紫たちたのもとに届き、銀時たちは給料三ヶ月二十%カット。そしておそ松たち無職のクソニートたちは用務員として雇われることになったのだ。

トリー「ホライゾン？何で俺は木に縄で縛られてプールに浮かされてるんだ？」

ホライゾン「jud. それはトリーさまがホライゾン以外の女の子に興奮して襲いかけられないようにするためです」

トリー「おいおいホライゾン！いくら俺でもそこまで節操なしじゃないぜ!!」

ホライゾン「この間女生徒に襲いかかったのはなんですか？」

トリー「それは仕方ないことだろ！そこにオパーイがあるのが悪いんだからな!!」

ホライゾン「jud. それではトリーさまはしばらくの間そこにおいてください」

既にプールにいた第二生徒会長トリーがその彼女であるホライゾンによつて簧巻きにされてプールに浮かばされているが零斗たちは気にしない。この学園ではよくあることだ。

殺せんせー「ヌルフフフ。いやくやつぱりプールはいいものですね。女生徒や女教師の水着とか見られて」

銀時「落ち着け殺せんせー。俺たちはガキ共が妙なことをしないためにここにいるんだ。俺はプリプリデカプリ娘を見るがな」

松平「おい、おじさんにもその双眼鏡寄越せよ。おじさんだつて若い娘の水着姿凝視したいんたから」

新八「あんたら本当に教師ですか？」

中等部の3ーEの担任の殺せんせーと、2ーZの担任銀時、そして体育教師の松平がそれぞれ双眼鏡を持って生徒たちの水着姿を見ようとしていた。

お巡りさんコイツらです。

長谷川「とりあえずみんなプールで足つらないようにちゃんと準備体操してから入れよ」

用務員兼プールの監視員の長谷川さんがそう注意した。

神楽・沖田・ルフィ・ウソップ・チョッパー・くりむ・日向・ユイ・圭・優太・因幡

「」「アイアイサーー！」「」

長谷川「人の話聞いてた!？」

しかし長谷川さんの話を無視し、一部の生徒たちは準備体操せずにプールに入ってしまった。

長谷川「おい！準備体操してねえのに、はいんじゃねえよ！ってか因幡さん!!教師が率先としてやってじゃねえよ!!そして野崎と日向！ツツコミ放棄してボケになるんじゃねえ！働けバカ野郎!!」

しかし長谷川さんの言葉もむなしく彼らの耳に届くわけがなく、更には彼らの後を続くように他の生徒たちもプールへと飛び込んでいった。

零斗「やつぱこうなるよな」

鍵「まあ久しぶりのプールだからな。みんなもテンションが上がってるんだろ」

雄二「そう言うお前らも既に入ってるけどな」

雄二の言う通り零斗たちもプールの中に入って水中バレーの準備をしていた。

零斗「こういうのは楽しんだもの勝ちだ。そう言う雄二だつて参加するだろ？」

雄二「当たり前だろ。どうせあの教師どものことだあのまま覗きを続けて授業なんてしないだろうからな」

とゆうことで零斗たちは水中バレーをするために他の生徒たちにも声をかけようしたが、三人は突然水中へと引きずり込まれた。

零斗・鍵・雄二「ガボツ!?グボツ!」

突然のことに驚いて、三人はそのままプールの中へと沈められた。

意識を失うとき、彼らは霧島翔子、ゼノヴィア、宇宙巡が足を掴んでる姿を見たそう
だ。

◆◆◆◆◆

明久「みんなわかった?水中鬼はあんな感じで危険だからやっちゃダメだよ」

明久はそう言いながら今ゼノヴィアたちによって沈められてる零斗たちを見ながら
3-Eの生徒たちに説明していた。

何故零斗たちがゼノヴィアたちによって沈められてるのかというと、

零斗たちから少し離れた明久に3-Eの赤羽業が水中鬼をしようとして誘ってきたので明久は霧島たちに『雄二たちを水中に引きずり込んで、溺れさせたあとで人工呼吸したら勝ち』と少しルールを変えて説明した。

結果、零斗たちは溺れてゼノヴィアたちが人工呼吸しようとしたが、鉄人に見つかって三人は説教されていた。

渚「とうか先輩たち大丈夫なのかな」

明久「大丈夫だよ。まあ霊夢たちにこのことがバレたらまずいと思うけどー」

霊夢「へえ？誰に何がバレたらまずいつて？」

後ろから聞こえた声に明久は冷や汗を流しながら後ろを振り向くとそこには額に青筋を浮かべている霊夢と茨木華扇がいた。

明久「去らば!!」

霊夢・華扇「逃がすかつ!!」

明久は直感でこれはまずいと思い全力で走り去った。それを霊夢たちは弾幕を張りながら追いかけていった。

業「なんか水中鬼よりあつちの方が面白そうだね渚くん」

渚「いや、ああなったのは業くんも関係あるんだから少しは気にしなよ?」

業「昔の偉人だって言ってたじゃん。『面白きことはよきことなり』って」

渚「ダメだこいつ早くなんとかしないと……」
業に対して潮田渚はそう言うが業のことだから無意味だと分かってそれ以上何も言わなかった。

茅野「渚、業くん。先輩たちが水中バレーしようだって」

渚「あ、うん今行くよ」

茅野カエデが渚たちに手を振って呼んできたのでそつちへと向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

銀時「よーしお前ら遊びはそこまでだ。そろそろ授業始めるぞ」

殺せんせー「この小説。学園ものなのに中々授業やりませんからね」

松平「そろそろ授業やらないと不味いからな」

新八「メタ発言するな!!」

渚たちが知弦やアラタたちと水中バレーをし、霊夢たちによってボロボロになった明久と溺れていた零斗たちが目覚めると鉄人によって叱られた銀時たちが真面目に授業を始めることになった。

銀時「つつても何やるかなんて決まってねーからな。誰かやりたいものネエか？」

サンジ「ハイハイ！俺は水中騎馬戦やりたいです！」

サンジがそう提案すると男子生徒の多くがそれに賛成していた。

松平「水中騎馬戦か・・・いいな読書にもサービシーンとしてポロリもあったほうがいいいな」

松平の言葉に女子たちが避難の声が上がったが松平はそれを無視した。

零斗たちは心のなかで不安になっていた。

そしていざ騎馬戦が始まるときそれぞれ二人一組でくんだ。

それで雄二は土御門春虎と鍵は深夏の妹の真冬と明久は塔城小猫と零斗はライカとペアになった。

春虎「すいません先輩俺が上になっちゃって」

雄二「気にするな。俺の方が力あるからな」

真冬「杉崎先輩。私ゲームしたいんですけどにまけましょう」

鍵「弱気だね真冬ちゃん!」

明久「何で僕たちは女子とペアになってるんだろ?」

零斗「さあな。人数が足りなかったんだろ」

塔城「気にしないでください先輩。私たちは問題ないので」

ライカ「ア、アタシも問題ないです」

春虎が申し訳なさそうに雄二に謝り、真冬は最初からやる気がないから負ける気でした。何故か明久と零斗の上に乗ってる小猫とライカは顔を赤くしていた。

幽香「妹紅。まず明久たちを潰すわよ」

妹紅「いいぞ。互いに協力しようじゃないか」

霊夢「いい？ 零斗を倒せなかったらただじゃないすまないわよ」

夏目「は、春虎くん助けて」

幽香と妹紅が殺気丸出しで明久たちを見ていて、霊夢が土御門夏目を脅し、夏目は涙目になっていた。

松平「それでは・・・始めえ!!」

松平の合図によって試合が始まった。

プールはすぐに戦場と化した。

土方と沖田が斬り合いをしたり、鍵が上でゲームをしてる真冬を落とさないようにしながら深夏と華扇から逃げたり、小猫が幽香と妹紅と戦ったり、零斗が霊夢たちから逃げたり、リリスとアリンが戦ったり、当麻が美琴のレールガンを防いだり、渚が上に乗っている茅野と一緒に敵を倒したり、近藤と東條が妙と久兵衛に襲いかかって撃退されたり、ペアになったゾロとサンジが互いに足を引っ張りあったり等々色々なことがあった。

最終的には一誠の赤龍帝の力で倍加したアラタの魔術によって全員の水着が弾けとんで裸になって、怒った女子たちに二人がボコられて授業は終わった。

しかし、このあとあんなことが起こるとは誰も知るよしはなかった。

覗きは決して許されることではない

授業が終わったあと、生徒たちはシャワーを浴びて更衣室で着替えていた。

零斗「今日のプールも散々だったな……」

カミト「ハハハ……同感だよ」

冬児「先輩たちも大変だったな」

渚「皆さんスゴかったですよ……」

零斗たちがそんな話をしている中、一誠とアラタが壁に耳を当てているのを一夏が見つけた。

一夏「先輩たち何してるんですか？」

アラタ「織斑かお前もこっちこいよ」

そう言いながらアラタは一夏を誘ってきたので一夏はアラタたちと同じように壁に耳を当てた。

刀奈『箒ちゃんって胸おおきいわよね〜』

箒『そ、そうですか？私には邪魔なものだと思っただけですけど』

深夏『確かにそうだよな。運動するときか邪魔になるし』

幽香『肩もこるし、男子たちからもいやらしい視線を浴びるんだからそこまでいいものじゃないわよ』

美波『巨乳はみんなそう言うのよ!!』

アデーレ『私たち貧乳の気持ちなんてわからないですよ!!』

茅野『巨乳は滅べ!!』

どうやら壁の向こう側は女子更衣室のようで胸のことで話していた。

そんな会話が聞こえた一夏と他の男子生徒（一部を除く）が顔を赤くしていた。

だが突然女子更衣室の方から悲鳴が聞こえてきた。

ナミ『のぞきよー!』

白雪『へんたーい!』

その声を聞いた男子たちは驚いた。

今時そんなことをするバカがいるとは思えなかったからだ。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

放課後。プールの授業に参加した生徒たちは体育館に集合していた。

銀時「ではこれより覗き犯を見つけようと思う。まあ犯人はわかっているか。という

ことで自首しろ兵藤と春日」

一誠・アラタ「そんな!?!俺たちは無実ですよ先生!!」

銀時「お前ら原作だと女子の服を脱がす変態キャラだろ？それにこの小説の一話でもお前ら女子の覗きするために授業サボったとか言ってたしな」

銀時がそう言うのと女子たちは一誠とアラタを親の敵のように睨んだ。

雄二「先生一誠たちは犯人じゃないぜ」

冬児「その二人は織斑と一緒に壁越しに女子たちの会話を聞いてたからな」

雄二と冬児が一誠とアラタの無実を証明したが一夏も一緒に軽蔑した目で見られた。

一夏「ちよつ、先輩俺を巻き込まないでくださいよ!？」

雄二「その方が面白いからな」

一夏「酷い!？」

銀時「まあアリバイがあるならお前ら二人は違うってことだな」

一誠とアラタは疑いが晴れてホツとした。

銀時「とりあえず誰かそのときのことを詳しく話してくれ」

知弦「私が話します」

知弦の話によると女子たちが着替えていると妹紅と霊夢が何か光るものが見えて何だろうと思つたらカメラだったらしく、その後誰の声だかは分からないが数人の男性の声が聞こえたらしい。

零斗「なるほど」

早苗「あの……」

銀時「どうした東風谷」

早苗「私、あの後廊下で誰かがやけに長いものを持って走って逃げていたのを見ました」

桂「なるほど。つまりそれが異常に改良されたカメラのレンズか」

耀「それは違う」

耀が不満げに手をあげた。

耀「それは私が買った購買の一日十個限定の『ギガトンフィッシュフランスサンド』だよ。早く着替えて買いにいったんだよ」

早苗「じゃあ私が見たのは……」

耀「多分私のフランスサンドだと思う」

土方「いや、そうとは限らねえぞ」

耀の言葉を否定するように犯人の手がかりを探していた土方たちが現れた。

新八「どういうことですか？」

山崎「皆さんこれ見てください」

風紀委員たちの中から山崎がみんなの前に出てあるものを見せた。

山崎「校舎裏で見つけた異様に改良されたカメラのレンズです」

圭「本当にあつたああああ!!」

山崎が持つてきたのは2、3メートルほどの長さをもったカメラのレンズだった。

飛鳥「どこでこんなもの売ってるのかしら?」

文「あやや!これ私の昨日無くしたと思つてた奴じゃないですか!?!無いと思つたら盗まれてたんですね!!」

明久「あ、文のなんだこれ」

雄二「俺はてつきりムツツリーニのだと思つてたんだがな」

康太「俺のはもつと大きい・・・」

秀吉「持つておるのは否定しないのじやな」

アリア「とにかくまずは指紋を調べるのが先ね。金次とつとやりなさいよ」

金次「ハイハイ」

アリアの命令に渋々と従つてカメラのレンズの指紋を確認するが

金次「・・・ダメですね。綺麗に指紋が拭き取られています」

沖田「それは残念でさあ。代わりに土方さんの指紋をつけときましようや」

土方「おい誰かこいつをポイラー室に叩き込んでこい」

そんなことを話していると別の風紀委員が入つてきた。

風紀委員「副委員長!校舎裏にデジタルカメラがありました!!」

土方「でかした!!」

土方が風紀委員が持ってきたカメラの中身を見るとそこには女子たちの着替えてる写真が撮られていたのだった。

零斗「これはビンゴだな。日付は今日だし間違いないだろう」

明久「うんそうだね(ポタポタ)」

鍵「許せないことだ!! (ポタポタ)」

銀時「全くだぜ(ポタポタ)」

魔理紗「お前ら鼻血出しながら何言ってるんだ」

女子たちの着替えてる写真を見た多くの男子が鼻血を出しているが女子たちはそれよりも盗撮犯に対しての怒りが勝っており、鬼のようなオーラを出していた。

銀時「おいおいお前ら怒り爆発するなよ。絶命秘奥義をだすのは犯人だけにしとけよ」

千冬「それで指紋は？」

金次「残念ですけど綺麗に拭き取られています」

零斗「とにかく今はこのカメラの中から犯人の手がかりになる写真を探そう」

明久「そうだね。ってこれは」

そして明久が見つけた写真には記念写真のように女子更衣室の前でピースしている

近藤、東條、サンジ、岡島、松田、元浜の姿があった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ダツ!! (近藤たちが逃げる音)

霊夢「Are you Ready?」

女子全員『『『『 Let's Party! 『『『』

ヤバイと感じて逃げ始めた近藤たちを霊夢の合図によつて女子全員が追い、男子たちは近藤たちの冥福を祈りながら見るのであった。

数時間後、ぼろ雑巾のようになった近藤たちがごみ捨て場にゴミのように捨てられていたのだった。

男はナースに夢を見る

零斗「うわっ何これ！」

プールの覗き事件から少したった休日、に混沌寮の前にお登勢が持つてきた発泡スチロールの箱を開けた零斗が驚いて声をあげた。

発泡スチロールの中には大量の毛ガニが入っていたのだった。

お登勢「学園の支援者のお偉いさんたちから来たんだけどね。冷蔵庫に入りきらなくて腐っちゃまったんだよ。あんたら捨ててきてくれないかい？」

銀時「出来ることなら食べる方を手伝いたかったぜ。あくあ、もったいねえな」

新八「本当ですよね」

先にお登勢に頼まれていた銀時が傷んだ毛ガニを新八と一緒にまじまじと見ていた。

お登勢「ちよいつとあんたたち。間違っても食べようだなんて考えるんじゃないよ。カニはあたると相当酷いらしいからね」

お登勢がそう忠告すると銀時たちは嫌そうな顔をした。

銀時「いい加減にしるよババア。いくら俺たちだからって腐ったものには手を出さねえよ」

新八「あんまり僕たちをなめないでくださいよ」

零斗「俺たちにだってプライドってもんがあるんですよ」

お登勢「ならいいけどね……」

こうして銀時たちはお登勢に頼まれて毛ガニを捨てにいった、ハズだった。

ピーポーピーポー

やはり、というかお登勢の悪い予感当たっていた。

何故か男子寮の所に救急車が出動し、救助隊が三人の男たちを運んでいった。

その三人は、紛れもなく零斗たちであった。三人は傷んだ毛ガニを捨てないで食べたようだった。

お登勢「だからやめとけって言ったのに……」

お登勢が学園に戻りながら運ばれていく銀時たちを呆れながら見ていたが、

明久・霊夢・鍵「二うごオオオオオオオ!!」

何故かお登勢の近くで明久・霊夢・鍵の三人が腹を押さえて倒れていた。

明久「力、カニに当たった!!」

鍵「きゅ、救急車呼んでくれえええ!!」

お登勢「あんたらいつの間にか食ったんだい?」

お登勢は呆れながらも救急車に電話してあげるのだった。

長谷川は勝手にバナナを食ってる零斗たちにツッコんだ。

零斗「果物が無償に食いたくなってる」

霊夢「最近パンの耳しか食べてないのよ」

零斗と霊夢がそう返したときだった。

魔理紗「なんだよ霊夢。親友の私に内緒で良いもん食ったのかよ」

長谷川の隣のベッドから聞き覚えのある声が聞こえたのでそつちを見ると魔理紗が座っていたのだった。

霊夢「ゲツ、魔理紗何でここに」

魔理紗「オイ、ゲツってなんだよ。私もここに入院してんだよ」

鍵「道端に生えてるキノコでも食って腹壊したか？」

魔理紗「なぜわかった!？」

新八「本当に食ったのかよ!？」

鍵「冗談だったんだけどな・・・」

まさか魔理紗が道端に生えてるキノコを食ったことに新八は驚いてツッコんだ。

魔理紗「なんか学園を散歩するときに赤と紫が混ざったような色をしたキノコを見つけてな。焼いてくつたら腹壊した」

銀時「バカだろ、お前絶対バカだろ。そんな明らかに危険なキノコ普通食わねえだ

ろ」

魔理紗「そこにキノコがあるなら私は食うのさ」

魔理紗がどや顔しながら言ったのでいらつときた霊夢と零斗は魔理紗に向かつて長谷川の見舞いの果物を投げた。

魔理紗も負けじと枕を投げつけてきた。

さらに外れた果物と枕が銀時たちに当たり、争いはさらに悪化した。

長谷川「ちよつとおおおおお!!ここ病室なんだから静かにしてよおおおお!!」

看護長「貴方たち静かにしなさい!!」

騒ぎすぎたために看護長がやって来て、怒られてしまった。

◆◆◆◆◆

看護長に怒られた零斗たちは大人しくベッドに横になっていた。

しかしベッドに静かに過ごすのは退屈で仕方ないことだ。

しばらくの間そうやって静かにしていると病室の扉が開き、神楽・華扇・妹紅・知弦・ゼノヴィアが入ってきた。

神楽「銀ちゃん。新八大丈夫アルか？」

銀時「おうオメーから見舞いに来てくれたのか。早く俺に甘味をくれ」

新八「あんた医者に甘味控えるように言われてンだろうが」

華扇「霊夢も鍵も腐った毛ガニを食べるなんてなに考えているんですか？」

鍵「いやく生徒会の仕事で疲れて腹が減ってたからつい……」

霊夢「カニなんて滅多に食えないんだからしょうがないじゃない」

神楽たちが見舞いに来てくれたお陰で病室が賑やかになった。

ゼノヴィア「零斗、私が看病してやるぞ」

零斗「すごく不安を感じるけど何をするつもりなんだ？」

やけに自信満々なゼノヴィアに少しの不安を感じるが一応聞くことにした。

ゼノヴィア「フッフッフ、これを見る！」

そう言つてゼノヴィアが制服を脱ぐとそこにはナース服を着たゼノヴィアがいた。

明久・鍵「「ナースキターーーー！！」／＼」

ナースに反応した明久と鍵が興奮すると華扇と妹紅がジトーツと二人を見た。

新八「銀さんやっぱりナースっていいですよね」

銀時「ナース服はな、七点の女が着ると十点満点になるんだよ」

神楽「マジでか。なら私が着れば……」

銀時・新八「「三点」」

神楽「それはどういう意味アルか？ゼロからのスタートか？」

霊夢「それよりなんであんなナースなんて着てきてるのよ？」

霊夢が少しイラつきながらゼノヴィアに聞くとゼノヴィアは腕を組ながら答えた。
ゼノヴィア「零斗の見舞いに行く前にリアス部長から男性の見舞いに行く時にはナース服を着るのが一番だと聞いたんだ」

明久「なにそれはじめて聞いた」

魔理紗「それを普通に着てくるなんてある意味スゴいぜ」

誇らしげにどや顔しているゼノヴィアに魔理紗は少しあきれていた。

明久「あれ？紅葉先輩はどこにいったかな？」

妹紅「え？さっきまで一緒にいたんだけど」

いつの間にか神楽たちと一緒に来てたはずの知弦がいなくなっていた。

するとまた病室の扉が開き、そっちを見るとそこには恥ずかしそうにナース服を着た知弦が顔を赤くして立っていた。

知弦「ど、どうかしら？似合ってる？」

零斗「に、似合ってると思います」

零斗は目の前にいるゼノヴィアと知弦のナース服姿を見て顔が赤くなっていた。

霊夢「……………」

華扇「止めなさい霊夢。無言で花瓶を投げようとするなんて」

霊夢が零斗に向かって花瓶を投げようとしているのを華扇が羽交い締めして止めた。

「さつきからやかましいぞお前たち。病院の中ぐらい静かにできんのか」

「騒ぎてーならよそでやれ」

そう言つて入つてきたのは桂と土方だった。

銀時「ヅラ、とうとう頭がおかしいって医者に言われて入院か？」

零斗「マヨ方はマヨネーズのとりすぎで医者に注意を言われたか？」

桂「ヅラじゃない桂だ。俺はエリザベスの見舞いにきたんだ」

土方「誰がマヨ方だ三枚に下ろすぞ。俺は近藤さんの見舞いだ。つてかさつきからここにいろだろうが」

確かに土方の言う通り、長谷川の向かいのベッドにエリザベスと近藤が見舞い用のバナナとリンゴを食つていた。

新八「いたんですか近藤さん。全然気が付きませんでした」

神楽「流星はストーカーアル。心配を消すなんてへそで茶を沸かすぐらい簡単なことアルな」

近藤「いや、さつきまで寝てて今起きたところだ」

鍵「あんなうるさい中よく寝れましたね」

近藤「ところでお前らは何でどうして入院してるんだ？」

銀時「ここにいろ全員腹壊して入院してるんだよ」

近藤「何っ!!まさかお前たちもこのお妙さんの卵焼きを食って腹をこわしたのか!」
そう言つて近藤はベッドの横にあつた黒焦げの塊へ「ダークマター」を銀時たちに見せてきた。

新八「いや全然違うんですけど!?!つか何であんたが姉上の料理持つてるんですか!!」
近藤「二日ぐらい前にお妙さんに話しかけたらこれを口の中に入れられたんだ。気づいたらここにいた」

銀時「流石は志村姉の料理だな。ゴリラを一撃で気絶させるとは」

零斗「ポ○モンでいう一撃必殺の技みたいないやつだな」

妙の料理の威力を再確認した銀時たちはウンウンと頷いた。

桂「腐つたカニを食べたり、暗黒物質を食べたりして入院するとは貴様らそれでも侍か?」

零斗「一般人だ」

霊夢「巫女よ」

魔理紗「魔女だぜ」

桂「そんなことは些細な違いだ。とにかく俺が言いたいのは貴様らには注意力が足りないということだ」

桂「というわけで貴様らにはこれを食べてもらおう」

そう言って桂が持ってたビニール袋から出したのはタツパーで、その中には団子が入っていた。

零斗たちはそれを一本ずつ手にとって口の中に入れた。

零斗「うん。中はネバネバ」

明久「外はゴリゴリ」

近藤「甘すぎず辛すぎず」

土方「この謎の風味が……」

全員『ンゴパツ!』

その途端、団子を食べた零斗たちは顔を青くして気絶した。

——零斗たちが目を覚ましたのは二日後で、退院は1週間後となった。

ノーパンって以外とスースーするよね

零斗は今日も禍終素学園に登校している。

となりには明久とアラタと鍵が居る。教室に向かう途中、零斗がふと思ったことを鍵たちに話しかけた。

零斗「にしても珍しいな。鍵が深夏と登校しないなんて」

鍵「ああ、なんか今日凄く機嫌が悪いんだよ。不機嫌オーラが半端なかった」

アラタ「リリースもそうだったんだ。一緒に登校しようと誘おうとしたら機嫌が悪くて」

明久「そう言えばさつき会った小猫ちゃんもなんか機嫌悪そうだったよ」

零斗「そういや今日霊夢からの飯の要求なかったな」

どうやらアラタと鍵が今日に限って一人で登校してたのはアラタとリリースの機嫌が悪いかかららしい。

鍵と深夏は同じ生徒会の副会長として仲がよく、いつも一緒に登校している。アラタはリリースやアリンたちと同棲している。だからいつも一緒に登校している女子が今日は居ないから気になって零斗は訊いたのだ。

ガシツ！（妙が銀時の顔を驚掴みする音）

妙「テメーのノーパン談義はどーでもいいんだよ。こちとらお気に入りのお気入りの勝負パンツ盗られたんだぞコラ」

銀時「勝負パンツってお姉さん、だれかと決闘でもするのかイ？」

妙が銀時から手を離す。

銀時「大体何がしたいんだお前等は。パンツが戻ってこればいいのか？」

女子全員『パンツを取り戻したうえでパンツを盗んだ奴を血祭りにしたい』

銀時「もう発言が文明人の発言じゃねーよ。裸で槍持つて野を駆け回る人の発言だよ」

色々言っていると三年の川神百代も入ってくる。

百代「下着泥棒なんて許せん！私も協力するぞ!!」

女子全員『よし、よく言った。ついて来い。杯を交わすぞ』

鍵「待って待って待って！落ち着け！死人が出るから！100%死人が出るから!!」

雄二「ほっとけよ。目星はついてるだろ？」

新八「え？一体誰が・・・」

雄二が一誠を見ると全員が一誠を見た。そして銀時が一誠へと近づいていった。

一誠「え、ちよつと待つて！まさか俺を疑つてんの!?紳士な俺がそんなことするわけ

ないじゃないですかア!!」

十六夜「紳士が覗きやセクハラするわけないだろ」

一誠「覗きやセクハラはしても下着泥棒なんてしませんよ! 訴えますよ!!」

銀時「訴えられるのはテメーだア!!」

一誠「ホントに待つてください! コレを見てみて下さい」

一誠がある新聞を取り出し、それを零斗が受け取り読み始める。新聞の見出しには『「またも出没、ふんどし仮面」と書かれてあった。一誠がそれについて説明を始める。

一誠「最近巷を騒がしてるコソ泥ですよ。その名の通り風体も異様な奴でして、真つ赤な禪を頭に被り、キレーな娘の下着ばかりをかつさらって、それをモテない男達には撒くという妙な奴ですよ」

新八「なんスか、ソレ。鼠小僧の変態バージョン?」

ふと新八が横を見ると銀時がパンツを持っていた。

銀時「そーか。このパンツはそーゆう意味か。俺アてつきりサンタさんのプレゼントかと・・・」

雄二「アンタ貰ってたんかいイイイイイイイ!!」

ふと一誠を見るとポケットからパンツが出ていた。

一誠「残念ですね先生。それはモテない男として見なされた証拠ですよ。哀れだな」

」

鍵「オーイ。見えてるぞー。懐からモテない男の勲章がこぼれ出てるぞー」

雄二「んで、女子達の下着をかつぱらったのもその変態鼠小僧の仕業だと・・・」

一誠「ああ。今じゃ、江戸中の女子たちが被害にあっています。でも民衆、とくにモテない男達になまじり人気があるから捕まえるのにも苦労してるようです」

銀時「ケツ、ただの変態のくせに義賊気取りか・・・。気に入わねー。気に入わねーぜ」

銀時はパンツを引っ張る。

銀時「なんで俺がモテねーの知ってんだアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

ビリイイイ!

全員『ああああああああ!パンツううう!!』

このあと、零斗たちが2ーZの男子全員が机の中を確認すると銀時や一誠と同じように女子のパンツがあり、モテない男扱いされたことに男子たちもふんどし仮面に怒り、他学年他クラスの生徒や教師を集め『ふんどし仮面虐殺計画』をたてるのであった。

女の下着には男達の夢がある

此処は禍終素学園の混沌寮。

その庭にパンツが吊らされている。

2ーZメンバーと他学年生徒たちが此処に集まってきてるのだ。

他の学年の生徒や教師もそれぞれ色々な場所に罌を仕掛けていた。

2ーZの担任兼被害者(?)である銀時が鎧を着て、木刀を持ちながら

2ーZの前に出る。

銀時「いいかい。奴はパンツの量より娘の質を求めてる真性の変態だ。だから必ず此処に忍び込んでくる。そこを叩く」

銀時は真剣な表情で演説を続ける。

銀時「フンドシ仮面だかパンティー仮面だか知らねえが、乙女の純情と漢の誇りをふみにじったその所業、許し難し」

銀時が右手を高々と上げる。

銀時「白ブリーフを鮮血に染めてやるぞオオオオオ!!」

2ーZ全員『オオオオオオオオ!!!』

銀時が叫ぶと何故か各々の武器と装備を身に着けた2ーZが銀時と同じように右手を上げる。零斗はそれを静かに見つめる。

神楽「わたア!!」

アラタ「フン!!」

一誠「とらアア!!」

小猫「やあ」

2ーZがそれぞれ特訓を始める。

瓦割りをやったり、武器の素振りなどをやったりしている。

そして近藤や山崎は何かを地面に仕掛けてる。

新八「スイマセーン。下着泥棒ぐらいで殺気立ちすぎじゃないですか? つつーかアンタ何で居んの?」

近藤「細かいことは気にするな新八君。それよりコレを頼む」

新八は近藤が仕掛けてる物を見る。

新八「何スか? それ」

山崎「地雷だよ。新八くん」

新八「・・・」

新八はまさかの物体に思わず黙る。

近藤「これを庭一面に仕掛ければどんなものでも立派な要塞になるぞ」

新八「アンタら戦争でも始める気かつ!？」

妙「新ちゃん。此処はもう戦場なのよ。遊び気分なら帰りなさい」

新八「姉上。僕たちの帰る家つてこの混沌寮なんですけど」

妙「戦場が帰る場所とは良く言つたわ。

それでこそ侍よ」

新八「いや・・・。そういう意味じゃ・・・」

アラタ「戦場こそが我々の住処。共に戦おうじゃないか」

一誠「たかが一万の兵なんてちよちよいのちよいだ」

新八「いや、アンタら関係ないでしょ。後、一万つて何だ一万つて」

調子に乗るアラタと一誠にツツコミを入れる新八だった。

少し離れたところでは呪詛を唱えるようにブツブツ呟いている箒、セシリア、鈴音、ラウラ、シャルロットを近くにいた一夏たちが青ざめた顔で見たり、処刑方法を考えている霊夢たち女子に雄二と鍵がツツコミしたり、零斗が武器を用意したりしていた。

零斗「ところでライカと志乃も下着盗まれたのか？」

志乃「いえ、盗られたのは私たちじゃなくてアリ先輩なんです」

ライカ「それを怒つたあかりの手伝いで私たちもきたんです」

銀時「来るに決まってるんだろ。あんなこれ見よがしにパンツが干されてるんだぞ？」

新八「いや、どう考えても罨丸出しでしょ」

雄二「あんなものにつられるとしたらふんどし仮面は相当な変態だな」

神楽「どうなんだよ変態」

一誠「俺は変態じゃない！仮面に変態だとしても変態と言う名の紳士だ!!」

華扇「変態は認めるんですね」

霊夢「あんなたち嫌いいわよ！ふんどし仮面に気づかれちゃうでしょ!!」

土方「テメエも煩えんだよ貧乏巫女が!!」

零斗「お前も煩えんだよマヨ方が!!」

新八「テメーら全員煩えんだよ!!バカ共!!」

新八の怒鳴り声をきっかけに泥棒が来ないことにイライラしていた2ーZの全員がそれぞれ取っ組み合いを始めた。

流石にこれは不味いと思つた近藤が止めに入った。

近藤「あーもう、止めて止めて！喧嘩しない!!皆暑いからイライラしてんだ。よし、

ちよつと休憩。何か食べよう」

そう言つた瞬間、全員が一斉に近藤に注文する。

神楽「あずきアイス！」

銀時「何かパフエてきなもの！」

お妙「ハーゲンダッツ！」

新八「僕、お茶！」

山崎「アンパン！」

土方「土方スペシャル！」

沖田「やきそばパン！」

明久「パエリア！」

雄二「ハンバーガー！」

康太「なんか適当なパン」

秀吉「のり巻き！」

アラタ「サンドイッチ！」

アリン「旦那様と同じもの」

レヴィ「饅頭！」

ユイ「おにーさんと同じの！」

零斗「チャーシュー麺！」

霊夢「おにぎり！」

魔理紗「キノコ炒め！」

華扇 「烏龍茶をお願いします」

百代 「ピーチジュース！」

妹紅 「やきとり！」

幽香 「紅茶で」

鍵 「カレーパン！」

深夏 「肉！」

一誠 「エロ本！」

ゼノヴィア 「シユークリーム！」

アーシア 「お、お茶で……」

小猫 「甘いもので」

ライカ 「私は先輩と同じものを」

志乃 「リーフパイで」

近藤 「ハイハイ。じゃあ買ってくるから大人しくしてなさいよ」

近藤は注文の品を買いに行く。

近藤 「つたく、しょうがない奴ら——」

ピツ (近藤が何かを踏んだ音)

近藤 「え？」

ドオオオオオオオン!!! (近藤の足元が爆発する音)

突如爆発が起こる。煙が晴れてそこを見るとその中心で近藤が気絶していた。

お妙「あらあら。近藤さんが爆発しましたわ」

零斗「あく、暑かったから」

銀時「んなわけねーだろ。自分で仕掛けた地雷に引つかかったんだよ。バカだね」
すると新八があることに気付く。

新八「アレ? ちよつと待って。ひよつとして地雷何処に仕掛けたか皆知らないの?」
2ーZ全員『・・・・・・・・・・・・・・・・』

新八の一言で皆が黙る。鍵がヤバイという顔をする。

鍵「大変だ。このままじゃ明日、新聞配達の人が爆発する」

新八「言ってる場合ですかアアアア!!」

新八がおもつきりシャウトする。

新八「僕等此処から動けなくなっちゃったんですよ!?! もう泥棒とか言ってる場合じゃ
ねーよ!!」

???「フハハハハ!滑稽だ!滑稽だよお前等!!」

突然知らない笑い声が聞こえる。見るとそこには口元を布で隠した赤フンの変態が
屋根の上に立っていた。

アラタ「お、お前は・・・」

ふんどし仮面「パンツのゴムに導かれ、今宵も駆けよう漢・浪漫道!!怪盗・ふんどし仮面参上!!」

明久「回答・ふんどし仮面だって!？」

雄二「答えてどうすんだよ!最悪のタイミングで出たぞ!?!ふんどし仮面が!!」

ふんどし仮面「アツハツハツハ!何だか俺のために色々用意したようだが全て無駄に終わったようだな!!」

ふんどし仮面が笑いながら叫ぶ。

ふんどし仮面「こんな子供だましに俺が騙せれると?天下の義賊、フンドシ仮面もなめられたものよ。そこで指をくわえて見てるがいい。己のパンツが変態に奪われる様を!!アツハツハツハツハツハ——」

ザシュツ!! (ふんどし仮面の頭に槍が刺さった音)

ふんどし仮面「・・・は?」

いきなりのことにふんどし仮面は啞然とし、頭から血を流しながら屋根から転げ落ちた。

その光景に銀時たちも啞然とし、槍が飛んできた方を見た。

そこにはダーツを投げる状態の零斗がいた。

みんなの視線に気づいた零斗はそれはすごくいい笑顔でサムズアップした。

零斗「わざとじゃないんです!!」

明久「そんないい笑顔で言っても説得力皆無だよ!」

零斗「変態死すべし慈悲はない」

鍵「いやだからって本当に殺すのはアウトだろ!」

零斗「安心しろ。峰打ちだ」

銀時「頭に槍ぶつ指すのに峰打ちもくそもあるか!!」

零斗に明久たちが文句を言っていると地面に倒れていたふんどし仮面がよろよろとしながら立ち上がろうとした。

ふんどし仮面「ま、まだだ……俺はまだ倒れない……全国の変態たちが俺の帰りと下着を待って……」

カチツ。チュドオオオオオオオオン（ふんどし仮面が隠れてた地雷を踏んで爆発した音）

運悪くふんどし仮面が落下した場所に地雷が隠されてたようで、地雷が爆発し、煙が晴れるとそこにはボロボロになったふんどし仮面が横たわっていた。

新八「えつと……これで一件落着つてことはいいんですかね?」

一夏「そういえば箒たちも下着盗まれてたのか？」

箒「いや盗まれたのはラウラとシャルロットだけなんだ」

ラウラ「ああ全く許せんものだ！せつかくクラリツサから教えてもらった買ったばかりの下着だったのにな!!」

鈴音「あんたどんな下着買ったのよ」

ラウラ「なに、ただの嫁を夜這いする時に使う下着さ」

一夏「それただの下着じゃねえよ！お前何ても買ったんだよ!？」

ラウラ「シャルロットの盗まれたのなんて勝負用ー」

シャルロット「い、言わないでー!？」

そんな会話が零斗たちが見張っている場所とは違う場所にて行われたりしていたりいなかったりする。

や猫などが連れ去られるという事件が多発しております。幕府はこれを天人による盗難事件なのではないかということなのです」

零斗「物騒な世の中だなー。最近は」

明久「でもこの町で多発してると聞いて聞くとやっぱり少し怖いよね」

鍵「でも流石にこの学園に手を出そうなんて考えるやつはいないだろうな」

テレビを見てると画面が砂嵐状態になった。

銀時「おいおい、何してんだよこのポンコツテレビ」

雄二「だからこんな古いヤツとつとと買い換えろって言ったんだよ」

一誠「誰かドライバー持ってるか？」

十六夜「直す気かよ」

アラタ「まあ、ダメ元でやってみるのもいいんじゃないか？」

零斗「あ、俺持ってるから使うか？」

零斗はそう言いながら一誠にプラスチックドライバーを差し出した。

「……………ドライバーとなってる自分の指を

零斗「え？な、なんだこれ!？」

銀時「おいおい竜ヶ崎。いくらメインキャラなのに出演が少ないからってそんな改造

するなよ。やるなら腕にサイコガンつけるとかもっとド派手な改造にしろよ」

零斗「違うわ!! 誰が好きでこんな改造するか!？」

新八「どうせ源外さんが勝手に体をいじったとかじゃありませんか?」

明久「普段から気を付けないからそうなるんだよ」

鍵「まあドンマイとしかいえないな」

雄二「おい、お前らの指も同じ感じになってるぞ」

雄二の言うとおり、新八たち三人も同じように指がプラスチックライバーになっていた。

そして零斗はそれを見てあることを思い出した。

零斗「ま、まさか。あれは夢じゃなかったのかっ!？」

アラタ「あれってなんだよ?」

アラタが聞いてきたので零斗はそれを説明し始めた。

「……あれは昨夜10時頃、霊夢と博麗神社で話し終えた後に男子寮に帰る途中だった。」

零斗「すっかり遅くなっちゃったな。明日はトランプ大会やるってのにな」

零斗は帰る途中で買った飲み物を飲みながら帰っていると、空に星とは違う何か光るものが飛んでいた。

そしてこっちに向かってきていた。

零斗「な、なんだあれ、こっちに来てないか？」

零斗は近づいてくる謎の光の物体に驚いて、その場から逃げようとするが間に合わず謎の光の物体から放たれた光によって連れ去られてしまった。

零斗「うわあああああああ!!」

そこで一旦意識を失ってしまった。

その後目覚めたら謎の研究室のような場所の診察台のようなものに拘束されていて、目の前に黄色いタイトのようなものを着ているおっさんが二人いて、その手には3〇Sがあつた。

覚えてる限りの限りの会話ではドラゴンハンター略してドラハンをやつてたら3〇Sが壊れてしまったから直すために零斗の指をプラスチックドライバーに変えたいが、結局業者に頼むことにしたそうで零斗は指がプラスチックドライバーのままもとの場所に戻されたそうだ。

銀時「つてことは何か？お前ら3〇Sを直すために指を改造されたつてことか？」

一誠「ぶぶっ。可愛そうな奴ら」

アラタ「ドンマイだなお前ら」

銀時たちは零斗たちを馬鹿にするように笑いながら言つて、三人はトイレへと向かつた。

勿論零斗はそれを素直に受け止めるほど心優しくはない。

零斗「んだとゴラア!! テメエラの指もドライバーに変えてやろうかアアン？」

秀吉「どうしたのじやお主らこんな朝から」

綾人「喧嘩ですか？」

ルクス「朝から元気ですね」

明久「あ、秀吉たちおはよー」

しかし明久は言葉を続けることが出来なかった。

何故なら秀吉たちは全身ドライバーに改造されてしまっていたのだから。

鍵「ゆ、指の改造どころか全身がドライバーに改造されてるよー!!」

十六夜「おいおいどうなってやがるんだ？」

当麻「どうすりやいいんだよ!」

全身ドライバーに改造された三人に驚いていると銀時たちが顔をしたに向けながらトイレから戻ってきた。

新八「銀さん？」

明久「一誠？」

零斗「アラタ？」

三人の様子がおかしいことに気づいた零斗たちは声をかけるが反応がない。

銀時「へっ、ぱっつあんよお。」

宇宙人つて殺しても罪にならないよな？」

そう言う銀時たちの目は血走っていた。

新八「(や、ヤられたああああ!!? 銀さんたちのアナログステイックがやられたああああ!!?)」

こうして零斗たちの体を取り戻す戦いが始まるのだった。

なんて雲を掴むような話じゃない？」

雄二「いや、そうとも言えないぞ。このゲームー星人はお前らの話から察するといまドラハンにはまってるでそれでネット版をプレイしようって話をしてたんだろう？」

十六夜「つまり、俺たちもこのドラハンをやっていけばゲームー星人にたどりつくってことだな」

雄二「そういうことだ」

アラタ「ああん？んなことやるよりその辺の天人片っ端から潰してった方が早くないか？」

一誠「そうだぜ。そっちの方が確実にその天人ぶっ殺せるだろう？」

綾人「なんか二人とも荒んでるね」

アラタ「そりやそうだろうが！お前らはいいよな。全身がドライバーか十本あるジョイステイックのうちの一本がドライバーに変わったただけだもんなあ」

一誠「俺たちはたった一本しかないアナログステイックが見たことない形のドライバーに変わったんだぞ」

鍵「たぶんボックステイックドライバーだと思っぞ。あんま見ないドライバーだし」

アラタ「何に使えんだよこんなもん！これじゃありりस्ताちと夜にニヤンニヤン出来ねえだろうが！」

零斗↓Z E R O 『よし、みんな集まったな』

明久↓デュラハン 『うん、こっちはバッチリだよ』

雄二↓悪鬼羅刹 『しばらくの間村に戻らないだろうから道具はしつかり準備しとけよ』

康太↓ニンジャサン 『……問題ない』

秀吉↓キャット 『うむ、最近は採集クエストばかりしてたおかげで道具は十分あるぞい』

十六夜↓アンノウン 『装備もきちんと揃えたしな』

一誠↓乳龍帝 『いつでもいけるぜ！』

アラタ↓魔王 『さっそくいこうぜ！』

鍵↓キー 『ちよつとまで』

全員集まったのでさっそく狩り場に行こうとしたがキーがみんなを止めた。

キー 『いやさ、一つ聞きたいんだけどさなんで一誠とアラタはなんで女のアバターなの？』

当麻↓不幸さん 『そう言えばそうだな』

鍵の言う通り、一誠とアラタの二人のアバターは何故か女のアバターだった。しかも装備は初心者専用のものであった。

零斗たちはまず最初にこのエリアから探すことにした。

ZERO 『おい、そっちはどうだった？』

デュラハン 『ダメだよ。全然見つからない』

アンノウン 『つか、ゲーマー星人は愚かハンターの姿が一人も見当たらねえぞ』

キー 『おかしいな。この辺りはドラゴンの狩場スポットとしてハンターたちで有名なところの筈なんだけども』

最弱無敗 『今日は何かのイベントでもありましたっけ？』

ニンジャサン 『・・・そんな情報俺は聞いたことがない』

キヤット 『ニンジャサンが知らないというならないということじゃろう』

叢雲 『そうですね。ニンジャサンはこのドラハン世界のあらゆる情報を持つてるんですからね』

キー 『そういや乳龍帝たちはどうした？』

悪鬼羅刹 『ああ？アイツらならあつちに』

雄二がそう言って指をさす方には大量のドラゴンたちに追われている不幸さんたちの姿があつた。

不幸さん・乳龍帝・魔王 『『ギヤアアアアアアア!?!?』』

乳龍帝 『なんで俺たちだけこんな追われてんだよ!?!?』

魔王『知らねえよ!!つか喋る暇あるなら足動かせ!!』

不幸さん『ふ、不幸だああああああ!!』

ZERO『なんでアイツらだけあんなにドラゴンに追われてるんだ?』

悪鬼羅刹『確かこの世界だと今はドラゴンたちが発情期らしいぞ』

キヤット『成る程。じゃから女キヤラをしているあの二人は追われているのじゃな』

デュラハン『でもそれじゃあ、なんで当麻も追われてるの?』

ニンジャサン『多分性質……』

叢雲『現実の性質がゲームでも影響されるなんて……』

最弱無敗『どれだけ不幸なんですか……』

ZERO『とにかく早く三人を助けよう。やられてまた村から始めるなんてめんどく

さいからな』

デュラハン『やれやれ、しょうがないね』

当麻たちを助けようと零斗たちはそれぞれの武器を構えてドラゴンたちのところへ
いこうとしたがその前にドラゴンたちの前に和服をモチーフとした装備の太刀使いの
男女が立ちふさがった。

ドラゴンたちは先にその二人を倒そうと、二人の頭上に向かって腕を降り下ろした。

……刹那、二人のハンターが背中中の太刀を抜き、ドラゴンたちを斬った。

二人のハンターが太刀を鞘に戻すのと同時にドラゴンたちは地面に倒れた。その光景に零斗たちは唾然とした。

ドラゴンたちの体には幾つもの真新しい傷があることから今の一瞬で斬りつけたのだろうが、そんなこと普通のプレイヤーには不可能な芸当だ。

??? 『怪我はないか?』

乳龍帝 『あ、あんたたちは』

??? 『フツ、なにただの通りすがりのハンターさ』

ZERO 『それでも仲間たちを助けてくれてありがとうございました』

悪鬼羅刹 『何かお礼をさせてくれないか?』

??? 『いや、私たちはそのような利益を求めて助けた訳じゃないからいいさ』

デユラハン 『ならせめて名前を教えてくださいませんか』

零斗たちが二人のハンターに名前を尋ねると二人はフツと笑って答えてくれた

??? ↓唯にゃん 『私はギルドリトルバスターズの一員のユイユイだ』

??? ↓(21) 『俺はリトルバスターズリーダーのキョースケだ』

何故か二人とも表示されている名前とは違う名前を言った。

というか

ZERO 『おもつくそ知り合いじゃねえか!!』

唯にゃん『おのれキョースケ！勝手に私の名前を変えたな！唯にゃんなんて恥ずかしいだろ！』

(21)『お前もだろ！なんだ(21)って!?!』

悪鬼羅刹『(21)って急いで書いたらロリに見えるからじゃないっすか?』

キヤット『ロリコンじゃから仕方がないのう』

ニンジャサン『・・・ロリコン』

(21)『俺はロリコンじゃない！ただ妹と来ヶ谷を愛してるだけだ!!』

魔王『ガチじゃねえかよ』

乳龍帝『その妹や仲間たちは今日はどうしたんだよ?』

唯にゃん『みんなそれぞれの相手とデートに行つたから私たちもゲーム内でデートす

ることにしたんだ』

不幸さん『あんたらもデートいきやよかつたじゃないか』

(21)『いや俺たちはこの間八雲校長の部屋にロケット花火をぶちこんで謹慎くらつち

まつたんだ』

アンノウン『先輩たちまじパネエ』

魔王『それじゃあまさか先輩たちは!』

乳龍帝『二人で部屋の中でにゃんにゃんしてたりとか!』

唯にやん『いや』
(21) 『俺たちは』

ドライバーをやっています』

↓恭介と来ヶ谷が二人同じ部屋で全身ドライバーの姿でパソコンを操作してる
ZERO 『あんたらもかよオオオオオ!!』

叢雲『ありそうで怖いですね』

零斗たちは一旦狩り場から移動して集会所の酒場に集まって話していた。

(21)『ああ俺たちも驚いた』

最弱無敗『そうですね。普通こんなことってー』

唯にやん『まさか君たちも源外先生が実験で作った魂入れ替え装置によってドライバーと融合するなんてな』

ZERO『違うんですけど?! あんたたち二人だけ俺たちとは別件に巻き込まれてるんですけど?!』

魔王『つかあのじいさん生徒相手になにしてんだよ』

(21)『いやな、源外のじいさんがバイト代くれるつていうから実験台になったんだがな』

唯にやん『実験に失敗して数日はこの姿のままなんだ』

恭介と来ヶ谷からドライバーになった原因を聞いて零斗たちはゲーマー星人とは無関係で残念に思った。

一応自分たちはゲーマー星人によって体をドライバーに改造されてしまったことを教えて、何かゲーマー星人について知らないか訪ねると恭介が興味深い情報を教えてくれた。

(21) 『俺たちはそのゲーム星人とやらのことは知らないが知ってそうな奴なら知ってるぞ』

唯にゃん『恭介、奴とはまさか』

(21) 『そうだ。このドラハンの世界の全てを知り尽くしている伝説のハンターOのことだ』

最弱無敗『伝説のハンター』

叢雲『O、ですか』

唯にゃん『その姿を実際に見たものはいないようだが噂ではその伝説のハンターが通ったあとにはいつもドラゴンの死体の山ができてるそうだ』

(21) 『奴ならもしかするとそのゲーム星人について何か知ってるかもしれない』

ZERO『なるほど、それは会ってみる価値はあるな』

デュラハン『でも誰も会ったことない人間をどうやって探すの?』

ニンジャサン『町で伝説のハンターの情報を集めるしかない・・・』

キャット『噂を集めれば場所も特定できるかもしれないし』

悪鬼羅刹『それじゃ一旦町に戻るぞ』

とゆうことで零斗たちは恭介と来ヶ谷と共にOの情報を集めるために町に戻るのであつた。



町に戻ってきた零斗たちはそれぞれ別れてOについての情報を探した。

しかしどれも確かな情報と言えるようなものではなく、デタラメのようなものばかりだった。

零斗たちは一度それぞれが手に入れた情報を整理するために一度酒場に集合することになったが酒場に集まった零斗たちの顔は沈んでいた。

ZERO『お前からどうだった?』

デュラハン『何もなかったよ』

魔王『つか俺男にセクハラされかけたんだが』

最弱無敗『それはアラタさんが今女だからでしょ』

キヤット『しかし本当におけるのかのうそのその伝説のハンターは?』

悪鬼羅刹『それは確かだ。実際にそのOによるものだと思われる上級ドラゴンたちの屍の山を見たハンターがいるそうだ』

叢雲『でもその屍の山があった場所もバラバラすぎてとても特定できませんよ?』

乳龍帝『でもある程度の場所なら特定できるんだろ?』

アンノウン『その中で一番怪しい場所って言ったら』

(21)『Z級のハンターたちだけが入れることのできるエリア24だろうな』

エリア24とは最高ランクであるZ級のハンターのみが入ることのできる狩場である。こは上級ドラゴンが大量に巣くう危険地帯でZ級のハンターといえど油断できないのである。

ちなみにランクは一番上からZ、S、A、B、C、Dである

唯にゃん『しかし私たちのランクは一番高いので恭介と吉井のS級、Z級に上がるのもまだ先だからエリア24に入ることは出来ないぞ』

悪鬼羅刹『ならとる手段はZ級の人に頼んで一緒に同行するしかないな』

魔王『だけど俺たちの知り合いにはいないよな』

ZERO『いや一人だけいる』

乳龍帝『え、心当たりあるのか？』

ZERO『まあな、ちよつと呼んでくるから待っててくれ』

零斗はそう言うとその相手を呼びに行くのか一旦ログアウトした。

デュラハン『心当たりあるって言ってたけど誰のことだろうね？』

叢雲『僕たちの知ってる人ですかね？』

不幸さん『でも俺たちの知り合いでこのゲームやってる人って誰だ？』

唯にゃん『わからない。だがこは零斗くんを信じて待とうじゃないか』

ということで零斗のことを信じて待つことにした明久たちは酒場で時間を潰すこと

にした。すると

??? 『あのーすみません。同席いいですか?』

不幸さん 「あ、大丈夫でー」

後ろから声をかけられたので当麻が振り返るがその人の姿を見ると固まってしまった。そして恭介と来ヶ谷以外のメンバーも開いた口が塞がらないでいた。

??? 『あ、大丈夫みたいですよ先輩』

??? 『いやー、いきなりすみません』

その二人の姿ははつきり言っつて変わっており、全身黄色いタイツにオモチャの銃の形をした銃を腰につけ、頭部から二本の触角が生えていた。

そう、その姿はまさしく

『ゲーマー星人じゃねえかよ?!』

明久たちが探しているゲーマー星人その人であった。

なぜ彼らがここにいいのか?そして零斗が呼びに言った助っ人とはいったい??

次回に続く!!

ゲーマー星人B『なんて心の広い方々。最近は人の心が冷たくなっていると聞くがあなた方のような暖かい心を持つ人もまだいるのですね』

何故か明久たちはゲーマー星人たちと一緒に席に座って談笑していた。

明久たちは内心冷や汗をかいていたのは言うまでもないことだろう。

乳龍帝『オイイイ!!なんで零斗が消えた瞬間にこいつらが現れんだよ!!』

悪鬼羅刹『(知るか!そんな俺に聞くな!!)』

キヤット『(しかしこれは運が良いのではないか?)』

叢雲『確かにそうですね。ここでこの人たちを取り押さえれば僕たちの体が元通りにー』

(21)『(いや、ここで取り押さえるのはやめた方がいい)』

最弱無敗『(え、どうしてですか?)』

アンノウン『(例えこのゲーム内で奴らを取り押さえたとしても現実世界で捕まえないければ意味がねえ)』

乳龍帝『(それじゃどうすりゃいいんだよ!!)』

ゲーマー星人が目と鼻の先にいるというのに手を出せないと言う現状に一誠が文句を言うがそれに対してアラタが冷静に答えた。

魔王『(オフ会だ)』

不幸さん『(オ、オフ会?)』

魔王『(そうだ、このゲーム内で仲良くなってオフ会を開いてリアルで会うんだ)』

唯にやん『(なるほど、確かにそれはいいかもしれないな)』

ニンジャサン『(さっそく作戦実行・・・)』

ゲーマー星人A『あのーどうかしたんですか?』

ゲーマー星人B『何か問題でもありましたか?』

さつきからコソコソ話している明久たちが気になったのかゲーマー星人たちが声をかけてきた。

乳龍帝『いえ、何でもありません!それより狩りにいくなら私たちも一緒にいいですか?』

魔王『私たちほしい素材があるんですけどまだランクが低いので一緒に手伝ってくれと嬉しいんですけど』

一誠とアラタは女性アバターの体を利用してゲーマー星人たちを誘惑し始めた。

ゲーマー星人A『え、そのぐらい別にいいですけど』

ゲーマー星人B『まあこちらもこれから狩りに行くところなので問題はないですし』

(21)『それではさっそくミッションスタートだ!』

『『『『『『『『『『『オオオオオオ!!』』』』』』』』』

蓮太郎「誰がロリコンだ！」

武市「ロリコンじゃありませんフェミニストです」

アリア「ちよつと五月蠅いわよあんたたち。食事中くらい静かにできないの？」

蓮太郎の叫び声が五月蠅くて文句を言いに来たらしい神崎・H・アリアが桃まんがたくさん入った紙袋を片手に抱えながらやって来た。

零斗「うるせーよド貧乳。文句言いたいなら胸に桃まんでも詰めてからー」
パアン！（アリアが零斗の額に銃弾を放った音）

零斗はアリアに対しての地雷を踏んでしまい額を撃たれてそのままのけぞった。

蓮太郎「普通撃つか？」

アリア「しようがないじゃない私だって気にしてるのにこいつが」

アリアは撃つたことを後悔してるのか蓮太郎に俯きながら顔を向けた。

そしてアリアは持ってた銃をそつと蓮太郎に持たせた。

蓮太郎「ん？」

アリア「普通撃つ？」

蓮太郎「なに人に罪擦り付けてるんだこの野郎オオオ!!」

アリアはさらつと蓮太郎に罪を着せるように蓮太郎に渡すと銃を渡すと後ろに移動していた。

アリア「みんな大変よー蓮太郎がロリコン拗らせて零斗のこと撃っちゃったー。私の手に負えないわー」

蓮太郎「だからロリコンじゃねえって言うてるだろうがあ！ってか誰かコイツ止めてくれえ!!」

蓮太郎とアリアが騒ぎ始めると隊士、武偵、民警たちが野次馬として集まって面白騒ぎとして騒ぎ始めた。

零斗「つたくいきなり撃つなんて正気の沙汰じゃねえよアイツ」

武市「おや大丈夫なのですか？」

零斗「こんなこともあろうかと額に装甲板つけてたので」

いつの間にか体制を立て直してた零斗は額に出した装甲板を取って机の上に置いた。

武市「それにしてもまさかあなたたちも改造されてしまったとは」

零斗「あなたたちもってことはまさか鬼兵隊の中にもゲーマー星人に改造された人がいるんすか？」

鬼兵隊とは高杉先生率いる不良チームのようなもので新撰組とはよく衝突する。

武市「じつは仁蔵殿の右腕がドライバーにまた子さんが指。そして晋介殿は股にぶら下がってるナニです」

零斗「なんで攘夷戦争で活躍した英雄たちの内二人が同じとこ改造されてんだよ」

零斗はため息をつきながら残りのメロンソーダを飲み干した。

そんな零斗にライカと志乃がやって来た。実は零斗は武市を呼びに行くときに二人に事情を話して新撰組の中にも零斗たちと同じように体のどこかがドライバーになっている人がいないか聞いたのだ。

零斗「どうだった？」

ライカ「はい、新撰組では近藤さん、土方さん、沖田さんの三人が全身ドライバーになつてました」

志乃「他にも武偵の剛気さん、理子さん、レキさん。民警の玉樹さん、彰磨さん、ティナちゃん、夏世ちゃん、弓月ちゃん、翠ちゃんたちが全身ドライバーになつてました」

山崎「そうですね。ことは幕府が動く事態にまでになつてるんですよ」

いつの間にか会話に参加してきた山崎がゲーマー星人に対して幕府が動き始めてることを教えてくれた。

木更「幕府が動いてるってことはそのゲーマー星人を捕まえたら報酬を貰えるはずね」

延珠「蓮太郎！妾がそのゲーマー星人？とやらを捕まえて見せるのだ！」

あかり「もし捕まえられたらアリア先輩に誉めて貰えるかもっ！」

の討伐あるいは捕縛、魔導遺産の確保などといった魔法に関連することを行っているのだ。

零斗はここにいるとある人物に会いに来たのだ。

しかし現実是非常である。先ほどからいくら零斗がチャイムを鳴らしても返事がないのだ。

零斗「すいませーん誰かいないんですか？」

しかし反応はない。あまりに反応しないので零斗はイライラし始めた。

零斗「はい、あと5秒以内に反応しないと門をブツ飛ばしまーす。はいーち」

タケル「何してんだお前はああ!!」

ミサイルランチャーを門に向かって構え数を数え始める零斗の頭に向かって第35試験小隊長の草薙タケルがキツクを決めた。

零斗「あ」

タケル「あ、じゃねえよ!なに人の学校の門をぶつ壊そうとしてんだよ!!」

零斗「イライラしてつい」

タケル「つい、でぶつ壊そうとすんな!」

タケルに注意されたあとタケルのおかげで零斗は何とか学園内に入ることができた。

因みに先ほどからチャイムに反応なかったのは今日は魔術・魔法科のほぼ全生徒が実習

で学園外にいたので反応がなかったようだ

斑鳩「それにしても体を改造するなんてそいつらはいったいどんな科学技術を持っているのかしらね？」

零斗「そつち？ねえ、気になるのそつちなのか？」

事情を知った斑鳩はしかし、被害のことよりもゲーマー星人の技術力に興味を示していた。

確かに人間の身体をドライバーにするなんてどんな技術だと気になるかもしれないが——実際に被害を受けた側としてはたまったものではない。

零斗「そういえば鳳たちはいないのか？」

タケル「いや、特に用事とかは聞いてないから、そろそろ来ると思うが——」

桜花「……すまない遅れた」

斑鳩「あら、遅かっ——」

噂をすればなんとやら。ほんの一瞬だけそんなことを思っただけ振り返った瞬間、零斗たちは呆然とした。

何故ならそこには全身がドライバーと化した鳳桜花と西園寺うさぎがなんか色々死んだ魚のような目で立ち尽くしており、その後ろでは零斗の妹である竜ヶ崎紫音が苦笑いを、二階堂マリが笑いを堪えていたのだから。

零斗「……どうやらこの学園にも被害者がいたみたいだな」

もありませんね」

零斗「だよなー、まあ元からそこまで期待してなかったけどさ」

妹の申し訳なきような返答に、零斗は苦笑いしながら答えた。

元々こんなバカらしい改造など今までにあつたはずがないのだ。むしろ当然のことだとと言えるだろう。

仕方ないので零斗は明久たちと合流するために帰ろうとしたとき、零斗の携帯が鳴つたので確認すると『マヨ方』からメールがきていた。

そのメールの内容を見て零斗は少し驚いた顔をした。

紫音「あの、どうしましたか兄さん？」

零斗「あ、うん、それがな」

零斗は言いにくいのか代わりにマヨ方こと土方から送られたメールを紫音たちに見せた。

零斗「なんかオフ会に誘われたんだけど」

from:土方

ゲーム★星人のことについて話がある。今回のことで巻き込まれたやつらを連れて叙苑に來い。オフ会をやるぞ。40秒で支度しな



叙●苑の宴会用の席には零斗と紫音に第35試験小隊メンバーにドライバーに改造されてしまった明久たちドラハン組と銀時、新八、神楽、さっちゃん、桂、エリザベスに新撰組、そして三つの学園の内の最後の一つであるMSやKMFなどといった巨大ロボットなどの操縦や操作を中心としているフレーム学園の生徒であり今回の事件にも巻き込まれたのはソレストル・ビーイングの刹那・F・セイエイ、フェルト・グレイス、ティエリア・アーデ、ロックオン・ストラトス（弟）、アレルヤ・ハプニズム、黒の騎士団所属のルルーシュ・ランペルージ、C・C；、紅月カレンが座っていた。

因みに誰がどのように変化したのかはまとめると以下の通りです

指がドライバー組

零斗、新八、明久、鍵、ロックオン

全身がドライバー組

神楽、秀吉、ルクス、綾人、土方、沖田、近藤、恭介、来ヶ谷、桂、エリザベス、ティエリア、刹那、アレルヤ、桜花、うさぎ

股にぶら下がってるナニがドライバー組

銀時、一誠、アラタ

右腕がドライバー組……組？

カレン

ギアスの形がドライバー組

ルルーシユ、C・C・

被害なし組

当麻、雄二、ムツツリーニ、十六夜、タケル、斑鳩、さっちゃん、フェルト、紫音』

叙●苑に来て全員が席に座ってから既に10分ぐらい経っているがまだ誰も声を発するものもおらず、ただただ無言の時間が流れていた。

新八「・・・ちよつと、みなさんなんか喋ってくださいよ」

ルクス「そ、そうですね。せつかくのオフ会なんですから」

銀時「オフ会つーかほとんど知ってる奴なんだけど？」

零斗「そーですね、見慣れたバカヅラしかありませんね。つーか」

零斗はゆらりと立ち上がるのと今までの怒りをぶちまけるように立ち上がった。

零斗「オフ会なんてやってる場合じゃねーだろオオ!! もう五話目なんだよ! なんでこ
んなくつつつっただらねー事いつまでもやってんだよ! つーか全く事態が好転してねー
んだよ! むしろ悪化してんだよ!! なんだったんだよ! 俺をポツチにさせてまで情報集
めにいったお前らの成果はよお!!」

零斗は顔を少し赤くさせながら主に明久たちに対して文句を言っていた。

明久「なんか凄いい怒ってるね」

雄二「そりやそうだろ、助っ人呼びにいったのに無視して俺たち勝手に行っちゃったんだからな」

明久と雄二は零斗に聞こえないようにこそこそ話していた。

ただ紫音は一人別のことを心配していた。

紫音「あの、兄さんもしかして酔ってませんか？」

零斗「・・・酔ってらい」

一誠「いや完全に酔ってるだろ。顔も真っ赤になってるしフラフラじゃねえかよ」

零斗「らい丈夫だ。問題らい」

零斗は一誠にそう返すと、銀時の前に置かれているビールジョッキを持つとそのままイッキ飲みした。

銀時「——ってオイイイ!?なに銀さんの糖分の次の楽しみのお酒勝手に飲んでるんだよ!!」

新八「つーか、なに酒飲んでるんですか!未成年でしょアンタ!!」

零斗「おねーさあん♪お酒おかわり!」

店員「はいな♪」

タケル「なんで普通に注文聞いているんだこの人!!」

アラタ「いい飲みっぷりだからじゃないか?」

だんだん話がずれてきたのを不味いと思ったのかルクスが話を戻そうとした。

ルクス「と、ところで銀さんたちはゲーム星人たちのことで何か情報はないんですか？」

銀時「んなもんねえよ。ゲームの中でゲーム星人だと思って話しかけたらニコ廚にDSだし、伝説のハンターだと思っただけの長谷川さんだったりで散々だけ」

土方「そりゃこつちのセリフだ。わざわざ奴等を誘き寄せるためにあんな格好でゲームしてたのに釣れたのがお前らみてえなバカどもだなんてな」

銀時「なんだやる気かコノヤロー」

土方「上等だテメエのその汚ねえ天バごと斬り捨ててやらあ！」

新八「ちよつと！さつきから話を脱線させすぎですよ!! あんたらゲーム星人探す気あるんですか!!」

銀時と土方は互いに睨みあい、取っ組み合いの喧嘩を始めようとしたが新八がそれを止める。

沖田「そういやそちらさんもゲーム星人の姿をしたプレイヤーに会ったらしいけどどうだったんでさあ」

沖田は明久たちに明久たちがゲームで出会ったゲーム星人のことについて尋ねると明久たちは苦虫を噛んだような顔をしながら顔をそらした。

恭介「まあゲーマー星人のふりをしてた二人は問題なかったんだけどな」

唯湖「問題があるとしたら伝説のハンターOだな」

神楽「なんだお前ら。マダオ以外にもその伝説のハンターに会ったアルか？」

当麻「まあクエストの途中で会ったんだけどな」

綾人「意外な人だったよね・・・」

マリ「いったい誰なのよ？その伝説のハンターOって」

当麻「もうすぐ来るのでせう」

当麻がそう言うのと扉が開き、そこからボロボロ状態のおそ松が荒縄で縛られており、その後ろから全身がドライバーになっている知弦と華扇が入ってきた。

桜花「なあ伝説のハンターって・・・まさかコイツのことか？」

十六夜「だな」

雄二「本人はゲーマー星人に全身無職のダメ人間に改造されたって言ってたぞ」

秀吉「因みにプレイ時間は1469時間じゃ」

ムツツリーニ「ほぼ家に引き込もってプレイしてたらしい」

マリ「クズね」

斑鳩「まあそんなのみんなが知ってる周知の事実じゃない」

とりあえず知弦はおそ松を部屋の端に転がすと知弦は零斗の隣に華扇は鍵の隣に

座った。

おそ松「つて、このまま放置は酷くない?!」

華扇「煩いですよダニ虫。セクハラしようとしたあなたには当然の報いです」

知弦「連れてきただけでも這いつくばりながら頭を地面にこすりつけて感謝しなさい」

新八「なんですかその女王様みたいな態度」

おそ松「ならせめて肉食わせろ!!」

カレン「なんてみつともない大人なのかしらね」

ムツツリーニ「情けない」

雄二「まあ俺たちの回りには銀さんみたいな口クでもない大人しかいないからな」

銀時「あれ? 銀さんさりげなく貶されてない?」

おそ松のみつともない姿をカレンたちはゴミを見るような目で見下していた。

零斗「・・・肉を食べば黙ってくれるのか?」

それまで黙っていた零斗がユラリと顔を俯かせながら立ち上がりながらおそ松に尋ねた。それを明久たちは驚いた顔をして零斗を見た

おそ松「ああ、約束するよ~~~~~つ。だから 食わせろ・・・早く食わせろ!」

零斗・紫音「だが断る」

しかし零斗は紫音とジョジョ立ちをしながら言った。

零斗「この竜ヶ崎零斗が最も好きな事のひとは——自分が強いと思ひ込んでいる奴に「NO」と断つてやる事だ……」

紫音「そしてこの私、竜ヶ崎紫音の最も好きなことは兄さんによつて絶望した人を鼻で笑うことです」

新八「ろくな兄妹じゃねえ!？」

零斗と紫音のあまりの言いぐさに新八はツツコミを入れた。

知弦「まったくいくらなんでも酷いわよ二人とも。ほらこれを食べなさいよ」

知弦は零斗と紫音に軽く注意するとおそ松の前にシビレ生肉の皿を置いた。

おそ松「食べなさいって言われてもこんなの食べないし」

C・C「そうだぞ、生のままでと腹を壊すから焼いてから渡してやれ」

おそ松「いや、問題なの生つてるところじゃないし」

雄二「そう言われると思って」

ムツツリーニ「こちらに焼いたものを用意してある……」

いつの間に用意したのかムツツリーニは皿に盛られてるシビレ焼き肉をC・Cに渡した。

C・C。「ほら折角焼いてくれたんだから食べ」

神楽「おらさつきと口開けろよ」

おそ松「ぐぼおっ!？」

おそ松は神楽に無理矢理口を開けさせられるとC・C.が皿にのつてるシビレ焼き肉を流し込むように口の中に入れて神楽が顎を無理矢理動かして食わせた。そしておそ松は肉を飲み込むと体が痺れたように痙攣し、そのまま倒れた。

土方「よしそれじゃあこれからのことについて話すぞ」

鍵「切り替えはやっ!ほっといいていいのかアレ」

ルルーシュ「あんなの気にする必要はない」

ルルーシュの言うことに同意なのかうんうん、と頷いていた。それを見て鍵もまあいいかと思った。

アラタ「やっぱドラハンやって情報収集するしかねえんじゃないか?」

秀吉「ワシらにはそれしかないからのう」

うさぎ「あれ?では刹那さんたちも皆さんと同じようにドラハンに参加してたんですの?」

うさぎは刹那たちがどのようにゲームー星人を探していたのか知らないので零斗たちと同じ方法だと思っただけだ。

テイエリア「いや、私たちは近くの電気屋を張り込んでいたんだ」
十六夜「ほうそれまたどうして？」

アレルヤ「スメラギさん曰く『ゲームが壊れたって言ってたのならそれを修理に出しに来るかもしれない』だつてさ」

華扇「あー、そういうえばそんなこと言っていましたね」

明久「それなら僕たちも同じことすればよかったね」

刹那「ああ、ヤ●ダ電機にはたくさんのガンブラがあつて素晴らしかった」

ロックオン「お前は何を見てたんだ？」

一人ガンブラを見ていた刹那にロックオンは呆れるが、みんな刹那がガンダム馬鹿なのは知ってるので気にしない。

桂「よしここは二つのグループに別れよう。一つはここら一帯のヤ●ダ電機のガンブラコーナー、もう一つはトイ●ラスのおもちや売り場だ」

銀時「なんでその二択!?!普通に電気屋かドラハンに別れるでいいだろうが!」

一誠「それだったらメ●ンブックスカとらの●なに行こうぜ!」

雄二「それお前がエロ本買いに行きたいだけだろ」

C.C.「ならピ●ーラかピザ●ットだな」

ルルーシュ「まだピザを食うつもりかお前は!?!」

中々ゲーマー星人が見つからないのでみんなやる気がなくなったのかふざけ始めた。鍵「ああもう！いい加減にしろよみんな!?俺たちはゲーマー星人を探してこの改造された身体をもとに戻さなきゃいけないんだぞ!」

十六夜「たしかにそうだがよ、今はろくにあいつらの情報もないんだからしようがないだろ」

土方「とにかく今は少しでも情報を集める必要がある」

フェルト「だから今は情報を集めるんですよね?」

斑鳩「まあそういうことね」

雄二「それじゃそれぞれ別れて情報を集めるつてことで今日は終わりにしようか」

というところでそれぞれグループごとに別れて情報を集めることで今日のオフ会は終了。のはずだったが……

知弦「あれ?零斗はどこにいったの?」

紫音「兄さんならさつき気持ち悪いからつて外にいきましたよ」

新八「まあお酒飲んだんですから仕方ないですよ」

明久たちは零斗がいなくなったことに特に気にしないのかそのまま帰ることにした。すると明久の携帯が鳴り始めたので明久が画面を確認すると『射命丸文』からだつた。

文『あ、もしもし明久さん?』

明久「どしたの文、こんな遅い時間にかけてきて?」

文『いや実は明久さんたちがゲーマー星人という人たちがさつきテレビに映ってましたよ』

明久「ええ!?!?」

文からの言葉を聞いて明久とその会話が聞こえた他のみんなも驚いた。

まさか今まで必死に探していたゲーマー星人がこう簡単に見つかったとは普通は思わないだろう。

文『まあ口で説明するより実際に見た方が早いと思うのでちょうどテレビで今やっているのを見てくださいよ』

文の言葉が聞こえたのでルルーシュが携帯している小型通信機から今放送されているニュースを見ると結野アナが映っていた。

結野『現場の結野です。先ほど逢魔ヶ刻町〇丁目の×番地にある叙●苑から少し離れた道路にてバイクとUFOの衝突事故が発生しました』

『なお、衝突事故を起こしたUFOの中から気絶していた最近巷を騒がしているゲーマー星人と呼ばれる二人組が見つかり、政府はゲーマー星人によって改造されてしまった人たちをさっそくもとに戻しています』

銀時「つてこたあ、俺たちの体ももとに戻せるってことか」

来ヶ谷「フ、これで源外先生に頼んで体を治してもらう必要はないな」

ルクス「いやー、もとの姿に戻れるってわかったら一安心ですね」

華扇「これでみんなも元通りの姿に戻って普通の学園生活に戻れますね」

全員、もとの姿に戻れることに安心しているのか軽口を叩いていた。しかし、ふと明久はあることを思い出した。

明久「そういえば零斗まだ戻ってこないね」

明久の一言により空気が凍ったように固まってしまった。

当麻「……そういえばまだ帰ってこないよな」

知弦「まだ気分が悪いんじゃないかしら？」

十六夜「それにしても遅すぎだよな」

マリ「そういえば零斗はバイクでここに来たわよね」

アレルヤ「いや流石にそれはないんじゃない？」

綾人「ですよー」

結野『なお、ゲーマー星人が乗っていたUFOとぶつかったバイクの少年に怪我はなかったようですが少年は飲酒運転したことがわかり、只今警察にて事情聴取が行われています。また、警察に連行されるとき少年は「俺はただ風邪になりたかつたオエエー!!!」

と吐きながら謎の言葉を言つて警察に連行されました』

映像を見ると結野アナの後ろの方で大破した見覚えのあるバイクとパトカーに連行されているモザイクがかかつていてなお見覚えのある男がいた。

紫音「すいません、急用が出来たので失礼させていただきます」

知弦「紫音ちゃん、私も行くわ」

テレビの男が誰なのかわかった紫音と知弦は冷や汗をかきながら焦った様子で外に出ていった。

銀時「…………よし、さっきのことは忘れてオフ会続けつか」

全員『はい』

こうしてドライバー事件も終わったということ、銀時たちは朝までフィーバーすることになったのであった。

ちなみに警察に捕まった男は紫音と知弦によって嚴重注意と免許取り消しだけとなったが男は警察署から出るとき「二度と酒なんて飲まねえ……」と言つたのは紫音と知弦だけが知つてる話である。

おまけ

殺せんせー「黄色い稲妻の触手ドライバー！ドライバーイエロー！」（触手が全てドライバー）

洋「元警察の探偵ドライバー！ドライバーレッド！」（頭の耳がドライバー）

黒うさぎ「ルール違反は認めません！ドライバーピンク！」（ウサミミがドライバー）
ナジエンダ「原作ではあまり戦わないが戦ったら強いんです！ドライバーグリーン
！」（義手がドライバー）

エスデス「蹂躪することに喜びを感じる！ドライバーブルー！」（全身がドライバー）
辰馬「船は好きじゃが船酔いしまくる！ドライバーブラウンぜよ！」（股にぶら下がっ
ているナニがドライバー）

学園長（トリニティセブン）「可愛い女の子は愛できるもの！ドライバーシルバー！」（後
ろ髪がドライバー）

『我ら、ドライバー戦隊ドライバーレンジャー！！』

圭「なにやっつてんの因幡さんたち！！」

洋「せっかくドライバーになったから記念つてことで」

飛鳥「どんな記念よ！！」

耀「そして以外にも黒うさぎ、ナジエンダ先生、エスデス先生たちがノリノリだった
件について」

黒うさぎ「あ、いえこれはその・・・」

ナジエンダ「その場のノリというか・・・」

エスデス「フツ、たまにはこういうことをするのもありだからな」

ラバック「あ、エスデスさんこれお礼の零斗の盗撮写真です」

陸奥「おい、思いつきり買取されとるじゃろうが」

学園長（トリニティセブン）「まあ、こういうのは楽しんだもの勝ちってことで！」

リリス「そういうものですかね・・・」

辰馬「ちゅう訳で！次回からは『ドライバー戦隊ドライバーレンジャー』の連載開始
じゃ!!」

ツツコミ一同『やらねーよ!?!』

かもしれない運転で行け

逢魔ヶ刻町にあるとある屋敷にて元特殊警察現テロリスト組ワイルドハントが集まっていた。

ワイルドハントは元は同じ特殊警察であるイエーガーズと同じようにこの町を好き勝手暴れる天人などを取り締まるために結成されたが、ワイルドハントのリーダーであるシユラやその父親であるオネストは天人たちを取り締まるどころか賄賂などを受け取り好き勝手やったり、罪もない人々に無実の罪を着せたり、密告しようとした部下を殺すなど警察組織としてあるまじきことをしていたため犯罪者としてワイルドハント及びその上司、関係者を全て処刑することが決定していたが新撰組とイエーガーズが本部に踏み込んだときには既に逃げた後で、それ以降裏組織などと手をくんでこの町を支配しようとする画策しているらしい。そして今日もまたその事について話し合いを始めようとしているのだった。

シユラ「——つうわけで、次に俺たちがすることは」

ドロテア「オイお主ら見たか昨日の『●いる町』」

イゾウ「あれは面白いものであった」

コスミナ「コスミナちゃんもあれには感動しちゃったよ」

エンシン「あのヒロインを犯してみたって思ったな」

ニヤウ「僕はあの子の顔の皮を剥いでコレクションに加えたいって思ったよ」

チャンプ「ロリシヨタ成分が足りねえ！」

シユラの言葉を無視してドロテアたちは昨日見た映画についてのこと話していた。

シユラ「最『ワイワイガヤガヤ』」

シユラ「イエ『ワイワイガヤガヤ』」

シユラ「いい加減にしやがれ！ここはあのクソ野郎共を絶望に叩き落とすことを考える場だ！！井戸端会議なんかじゃねえんだよ！！」

あまりに話を聞かないのでどうとうシユラがキレながら机を叩き割った。

シユラ「大体なんだよ●のいる町』って!？」

ドロテア「なんじゃ知らんのか？人気のアニメのことじゃよ」

エンシン「最近ようやくレンタルシヨップに出てきたんだよ」

シユラ「アニメなんてくだらねえもんには踊られやがって！そんなんであいつら倒せる

と思っつてんじゃねえよ！もういい！！俺は帰るぜ！」

コスミナ「ああ待ってくださいよシユラさん!？」

チャンプ「悪かったってシユラ!!」

講師「教えてねーよ。何ちよつと先生のせいにしてんの」

教習所の講師は、零斗に呆れながらこう続ける。

講師「だから言ったでしょ、『だろーう運転』はダメだつて。『多分大丈夫だろう』とか『誰も飛び出して来ないだろう』、こんな気構えじゃ急な時に対応しきれないの。『かも知れない運転』でいけて言ったでしょ。『UFOが来るかも知れない』とか、『自分は酔ってるかもしれない』とか、そういう気構えで運転していれば何が起きてもすぐに対応できるでしょ?」

そして、講師は零斗を教習車に案内する。

講師「とにかく、君に足りないのは技術より注意力だから。他の人の運転を隣で見て、注意力を養う」

そう言うと、講師は教習車のドアを開いた。

講師「じゃあ、よろしくね。今日は合同教習だから」

教習車の運転席には、見覚えのある顔の人物がハンドルを握っていた。

シユラ「よう、宇宙キャプテンシユラマルだ。足引つ張るんじゃねえぞ」

ガシヤアアアアアン!!

零斗はシユラを蹴り飛ばし、シユラは窓から数メートル飛んでいった。

講師「竜ヶ峰さん、かも知れない運転でいけて言ったでしょ?『もしかしたら合

同教習の相手が宇宙キャプテンかも知れない』、そーいう気構えでいかないとダメ」

零斗「あつ、スイマセン。ちよつとビックリしちゃったんで」

と零斗は講師にそう言い訳する。

講師「早く、シユラマルさん車に乗って。乗車する前にちゃんと周囲確認ね」

講師の指示のもと、シユラはまず車の周りをきちんと確認した。

シユラ「もしかしたら車の下に危険種がいるかもしれない」

シユラは講師の指示のもと、車の下を確認する。だが――。

ブオオオオオオ

シユラ「あぐっ!？」

突然、教習車が急発進し、シユラを轢いた。

零斗「もしかしたら、確認作業中に車が急発進するかもしれない」

車を動かしたのは零斗だった。だが、シユラは頭から血を流し、肩で呼吸しながらも

確認作業をまだ続けていた。

シユラ「もしかしたら車の後ろで危険種がかくれんぼしてるかもしれない」

零斗は講師の指示のもと、車の後ろをきちんと確認した。しかし――。

ブオオオオオオ

シユラ「ごぶっ!？」

シユラはまたしても教習車に轢かれてしまった。

零斗「もしかしたら、車がバックしてくるかもしれない」

またしても零斗の仕業だった。二度にわたるこの仕打ちにシユラはどうとうぶちぎれた。

シユラ「いい加減にしやがれ!! 俺はめんどくせえの我慢して免許とりにきてやつてるんだよ!!」

講師「シユラマルさんはね、ビデオ屋の会員になりたくて免許をとりにきたんだよ」

零斗「どこが真面目だア!! 俺だつてなア、真面目に免許取り直しに来てんだよ! 一般的な人類の中でも最底辺のクズと付き合うのは絶対嫌だ! 先生何とかしてくれ!」

零斗はシユラと一緒にやるのを心の底から嫌がっているが講師はそれを無視してそのまま零斗を助手席に座らせ、講師は後部席に座った。

講師「もしかしたら仲の悪い二人が一緒に乗車するかもしれない」

と講師は言つて零斗の反論を取り合わなかった。

講師「ね? かもしれない運転だよ二人とも。あらゆる状況を想定して、臨機応変で安全で速やかな運転に心がけるんだ」

講師は零斗とシユラ(クズ)に運転するときの注意事項を教えた。

講師「それから今日の試験は色んなコースに別れてるからその説明もしますね」

零斗「コースってどんなのがあるんですか？」

講師「コースはGコース、Aコース、Kコース、Mコースの四つに別れてるよ。ちなみにAコースが一番簡単でMコースが一番難しいです」

シユラ「ならとつとと免許とりたいから一番簡単なAコースだな」

講師「わかりました、それならこのまま車をまっすぐ運転してください」

シユラは講師の言うことにしたがって車をそのまままっすぐ進ませた。

まっすぐ進んだ先には見覚えのある集団が武器を構えてこちらを見ていた。

零斗「なあAコースのAってまさか・・・」

講師「ああそういえばその説明していませんでしたね。AコースのAとは」

チユドーン！

車の真横に集団の一人による射撃が放たれた。

その射撃は帝具『パンプキン』によるものだと言われ、零斗はすぐに気づき、その帝具を持つてるのは零斗の知ってる限り一人しかいない

講師「——暗殺集団&特殊警察のAです」

そう、暗殺集団『ナイトレイド』の狙撃主であるマインだ。

零斗「なんでだあ——!!」なんて自動車学校の免許取り直し試験でナイトレイドとイエーガーズが出てくるんだよ!!」

講師「実はこの自動車学校に指名手配犯が来ると噂があつて試験コースにはそれぞれ見張りをかねて試験官をしてもらつてるのですよ」

零斗「指名手配犯つてこいつのことだから！冗談じゃない俺は逃げさせてもらうぜ！！」

零斗は巻き込まれるのを恐れて助手席のドアをこじ開けて脱出を心がけようとしたがドアは開けることはできなかった。

シユラ「もしかしたら不慮の事故で助手席側のドアが開かなくなつたかもしれない」
シユラは下衆びた笑い顔をしながら零斗を見た。それを見て零斗は冷静になり右手に拳銃を作り出すとシユラのこみかみに突きつけた。

その間もシユラは車をUターンさせてルートを変更させていたが、ナイトレイドとイエーガーズはそれを追つてきている。

零斗「もしかしたらとなりにいるのが指名手配犯だから殺してもいいのかもしれない」
「い」

講師「ちよつと二人とも、これはただの試験なんですからそこまで心配する必要はないですよ」

零斗「どこが心配する必要ないだよ。ボルスさんとか見ろよ、普段温厚なのに今は般若みみたいな顔してるぜ」

零斗の言うとおりに常に覆面姿のボルスがおぞましいオーラみたいなものを醸し出しながら帝具『ルビカンテ』をこちらに向けていた。

講師「ボルスさんはね、原作で凌辱された上で殺された妻と娘の仇を討つんだって言うってたんですよ」

零斗「100%お前のせいじゃねえかよ!!ほんとお前はクソ松ども以下のゴミクズだよな!!」

シユラ「うるせえ!確かに俺は原作じゃあ女の方をエンシンと犯したけどガキの方はチャンプのほうがやったことだろうが!!」

マイン『待ちなさいこの犯罪者!』

クロメ『骸人形にしてやるっ!!』

零斗はこの状況を引き起こす原因となったシユラを責めるがそのシユラは全くと言っていいほど反省する気がなかった。

流石はクズと誉めるところだろう。

そして

講師「あ、そこから先はKコースになりますね」

零斗「おいKコースってなんだよ、なんか嫌な予感しか感じねえんだけど!!」

講師「KコースのKはですね——」

「またもや講師が説明する前に車の横にアサルトマシンガン、ヴァリス、輻射波動砲、ハ
ドロン砲の弾などが飛んできた。」

講師「黒の騎士団&ブリタニア軍のKですな」

零斗「やっぱりな！うつつら予想してたけどね！」

ルルーシュ『よし、そのまま攻撃を続ける』

『『『『『了解！』』』』』』

零斗「了解、じゃねーんだよ!!一般人が巻き込まれてるだろーが!!」

ルルーシュの指示を受けてナイトメアフレームたちの銃撃や砲撃の雨が零斗たちが
乗ってる車に向かって放たれた。

講師「もしかしたら彼らに竜ヶ峰さんがこの車に乗っていることを教えていないかも
しれない」

零斗「もしかしたら、じゃねーよ!どう考えても教えてなかっただろーが!!」

シユラ「おい!無駄口叩いてる暇あるなら何とかしやがれカスが!!」

零斗「よーしわかった!今この場でお前の息の根を止めてやんよ!!」

零斗がシユラのかみかみに突きつけている銃を撃とうとトリガーに指をかけようと
したその瞬間、突然車体が宙に浮いた。

零斗・シユラ「は?」

零斗とシユラは突然の出来事に驚いて間拔けな声を出してしまったが、窓の外を見る
と何が起きたのか理解してしまった。窓の外には超大型メイスを降り下ろした状態の
ガンダムバルバトスルプスレクスがいたのだから

三日月『あれ、外れた?』

零斗「何やってんだ三日月イイ!?」

零斗はバルバトスのパイロットである三日月・オーガスに文句を言うのだった。

講師「あ、ここからはGコースに入ってますね。ちなみにGコースのGは」

零斗「ガンダムのGだろ!言わなくてももうわかるよ!!」

車は何とか地面に着地し、シユラはアクセルを踏んで勢いよく逃げた。

零斗は後ろを見るとナイトレイドにイエーガーズ、黒の騎士団そして三日月を含めた
鉄華団、ソレスタルビーイングが武装した状態で迫ってきたのだった。

零斗「なんだよこれ?なんだよこれ?!何で免許取りに来ただけなのになんでこんな目
に遭わなきゃならないんだよ!!」

講師「もしかしたら——」

零斗「もうもしかしたら運転はいいっての!!」

シユラ「おい!なんか前方にゴールって書いてる看板があるがなんだあれは?!」

シユラの言う通り、アーチ状の看板があった。

講師「あれはゴールですね。あそこさえくぐれば試験は終了し、あなたたちに免許を差し上げます」

零斗「つまりあそこさえ通りすぎれば後ろのやつらに襲われることはなくなるってことではないんだよね？」

講師「そうですね」

シユラ「ならとつとと終わらせてやるよ！」

シユラはそう言うのと車が出る最高速度を出して後ろの連中を引き離しにかかった。そしてあと数メートルのところまで来た。

零斗「よし！これでこの地獄から解放され——」

チユドーン

零斗「ふえ？」

ゴールを過ぎたと思つた瞬間、車にバズーカが放たれ車が爆発した。零斗とシユラは爆発する前に何とか車から脱出した。講師の人はこの状況を想定していたのか講師専用の脱出機構を起動して逃げていた。

沖田「土方さーん、指名手配犯のシユラ見つけましたぜ」

土方「よし、とりあえず動けなくなるまで攻撃しろ」

ゴールの方を見るとバズーカを構えた状態の新撰組に鬼呪装備を構えている帝鬼兵、

店員「わかりました。ところでお客様は会員証の方をお持ちになっていますか？」
シユラ「ねーよそんなもん」

店員「じゃあ身分証明になるものは何か……………」

シユラ「じゃあこれで」

シユラはそう言いながら自分の指名手配書を店員に見せた。

——数分後、通報を受けてやってきた新撰組によってシユラは顔面の原形がわからなくなるほどボコボコにされたが帝具を使用されて逃げられてしまうのだった。

文字でしか伝わらないものがある

零斗「えっ。新八の様子がおかしい？」

最近、学校にも顔を見せない新八を心配した零斗、明久、鍵、一誠、霊夢、妹紅、深夏、ゼノヴィアは新八の家に来たが零斗は思わず声をあげてしまった。

妙「そうなのよ。昨日から様子がおかしくて、鼻の穴にごはん突っ込んだじゃうし、ボケても返してくれないし」

妙が新八の事を零斗たちに伝えていた。

妙「それに、朝方まで寝ないで部屋で何かシコシコやっているようなの」

一誠「シコシコ？」

鍵「へんな妄想すんなよ一誠」

一誠「し、してねーし!!」

妹紅「声がどもってるぞ変態」

一誠が変な想像をしながら声を漏らすので鍵が注意するが凶星だったのでへんな声になったのを妹紅が冷たい目で見た。

妙「そうなの。部屋の前に丸めた紙みたい物が散乱していて……。一体何をしている

のかしら？」

と、妙は新八の部屋の前に向き、零斗たちも続いて新八の部屋の前を見た。妙の言う通り、新八の部屋の前には丸めた紙が散乱していた。

妙「昨日から何をシコシコやっているのかしら」

妙の話を聞いた零斗は、うーんと唸りながら考える。

零斗「まああのアイドルオタクのことだからどうせ下らないことじゃないのか？」

ゼノヴィア「取り敢えずもうしばらく様子見でもいいんじゃないか？」

妙「そんな悠長なことは言ってもらえないわよ。とにかく、難しい年頃だからこういう事は女の子をたくさん侍らかせている童ヶ崎くんたちに聞いた方がいいと思って。ちよつと様子を見てもらえないかしら？」

明久「お妙さん、僕たちの事何だと思ってるの？何そのひどいイメージは」

霊夢「そんなのほつときゃいいじゃない。どうせなんか書いてるだけなんじゃない？」

妙「ダメよ、新ちゃんは万年発情期ですもの」

深夏「それ弟に言うべき言葉か？てゆーか扱いひどくない？」

深夏は妙の新八に対しての扱いの酷さにツッコんだ。

結局新八の様子が心配なので零斗たちは新八の部屋に向かうのだった。

一誠「ばつつあん、あんま姉さんに心配かけんじやねーよ」

襖を開けながら入ってきた一誠は新八に話しかけてきた。

新八「え？何言ってるんだ」

一誠「あと、それからコレ、乙組一同からの差し入れ」

一誠はいつもと違う優しい口調で、妙以外の乙組の面々から新八に対する差し入れらしいエロ本を襖の隙間から差し込んできた。

新八「何を気持ち悪い氣イ回してるんだアア、お前ら!!」

新八は妙を除く乙組クラスメイト全員にツツコミを入れた。

新八「何、勘違いしてんだよ！違うからね！僕そいうんじやないからね!!つか、なんでいつもよりちよつと優しくなってるんだよ！気持ちわりーんだよ！」

一誠「えー？違うのかよ？こういうんじやないのか？」

一誠は残念そうな顔をしながら後ろに抱えていた紙袋を下ろした。

その紙袋には襖の隙間から差し込んだのとは異なるエロ本が大量に入っていた。零斗「なーんだ、てつきり欲求不満なのかと思ったのによ」

明久「せつかくムツツリーニに頼んで持ってきた秘蔵の奴なのにね」

鍵「俺たちの勘違いだったか」

新八「あんたら僕のこと何だと思ってるんですか!？」

妹紅「性欲の眼鏡」

霊夢「否定してたくせにこっそり取ってるしね」

新八「あ、いや、これはその……」

新八は一誠が紙袋から出した大量の工口本の内、自分の好みらしきものを数冊取つていたのを女子たちに見られて焦っていた。

ゼノヴィア「ところで机の上のこれは何だ？手紙みたいだが？」

新八「あ、ちよつと！勝手に見ないで下さいよ」

新八が机の上に置いてある書きかけの手紙を見ないように言うが、零斗たちはそれを無視してゼノヴィアの持つてる手紙を見た。

零斗「何これ？新八手紙出すような相手なんているのか？」

霊夢「この写真の娘に向けてじゃない？」

明久「それじゃ新八くんの様子がおかしかつたのは」

妹紅「どうやって手紙を書くのか悩んでたんだらうな」

完全に自分のやつていることが知られたので新八は誤魔化すのは無理だろうと思ひ正直に話した。

新八「姉上にはこのこと話さないで下さいよ。女の子と文通なんて知られたら色々とおアレなんで」

零斗「アレってなんだよ」

一誠「やらしい事でもかんがえてるのか」

新八「かつ……、考えてねーよ!!そっそーいう風に思われるのが嫌なんだよ!」

新八は恥ずかしさで顔を赤らめながら一誠に返し、その後こう言った。

新八「僕はただ、純粋な気持ちで彼女と交流したいだけなんだよ。だってあの広大な海を漂って、僕に届いた手紙だよ。何かの縁があるんだよ。でも、姉上が知ったらふしだらだとか怒られるに決まってるよ」

霊夢「アイドルオタクのくせによく言うわね」

新八「うるせエ、殴るぞバカ巫女」

呆れた顔をして言ってきた霊夢に新八はそう返した。

鍵「でもお妙さんも意外とそういうのは理解あるんじゃないか?」

新八「いやないですよ」

新八が鍵の言葉を否定したときだった。

妙「新ちゃん」

襖の向こうから、妙が新八に声をかけてきた。

新八「姉上!」

妙「お茶とお菓子、持ってきたから、よかったら食べて」

その妙の差し入れは、いうと――。

妙「ハイ、こんにやくとローション」

ざるに置かれた、中央に奇妙な切れ目の入ったこんにやくと、ローションだった。

妙は、悲しそうな目をしながら新八に目を合わせることもなくこう新八に言った。

妙「……新ちゃん。新ちゃんはどんなになっても……、私の……、弟だから」

言い終わると妙は、パタンと襖を閉めた。

ゼノヴィア「ホラ、わかってくれてるじゃないか」

新八「どんな理解のされ方してんだアア!!お前ら、人の姉ちゃんに何話してんだアア!!なんでお茶としてローション出してくんだよ!なんでこんにやくに穴開いてんだよ!完全に勘違いしてるよ!一回も目エ合わせてくれなかったよ!!どーしてくれんだア、これから超気まずいだろーがア!!」

明久「まあまあ、落ち着いてよ。ローションがアリって事は文通もアリって事じゃん。

良かったじゃん」

妹紅「そうだと、これで堂々と文通をしても文句は言われなくなるぞ」

明久と妹紅はこんにやくを食べながら、新八を宥める。

新八「全然良くねーんだよ!!文通バレた方が遥かにマシだったわ!!」

新八は明久たちに返した。ちなみに妙の一件は零斗たちと会話してるうちに妙が勝

手に勘違いを重ねた末であり、別に零斗たちが妙に何かを吹き込んだわけではなかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

新八の文通を書くのを手伝うことにした零斗たちは取り敢えず新八の書いた文章を読むのだった。

新八の書いた手紙の内容は、一言で言うとは煩雑だった。

零斗「おい新八、何だよこの手紙。長いし内容も煩雑だし要点どこだか解らないし普通だし。こんなのわっかりづらくて文通続かねえぞ？」

明久「そうだね。僕だったらこんなの読んだらすぐに寝ちやいそうだね」

霊夢「つまらないわね」

零斗たちはダメな子を見るような目をしながら新八の手紙にダメ出しする。

新八「ベ……、別にいいでしょ。奇をてらったって仕方ないでしょ、手紙で」

零斗「奇をてらわれないでどーすんだよ？あつちは手紙を海に流してランダムで文通相手を探すような奇のてらい方してんだぞ？しかも、この簡潔な文章。こんな奇抜な事をする人は飽きっぽい人が多いんだよ。多分、この様子だと三行以上は全然読まないかもしれないぞ？」

零斗は新八にそう言った。

新八「……確かに、僕の手紙は長い上に要点がよくわからないな」

妹紅「むこうの情報もろくすっぽない以上、こっちの事をわかってもらうしかない。自己紹介くらいなら三行あれば十分だ」

鍵「あと、写真もだよ。むこうに合わせて写真も送らないと」

新八「そうか。そーいやそーうだ」

新八は写真も送らなければならぬ事に気がついた。しかし、当然疑問もあつた。

新八「でも、自己紹介なんてたつたの三行でできる？」

零斗「いや、できるつて。試しに俺がやってみるから」

そう言うとき零斗は新八の便箋の用紙にさらさらと書き出した。

零斗

零斗だ、

これからよろしくな！

新八「つて、お前の自己紹介かよオオオ!!」

新八は零斗にツツコミを入れた。零斗は自らの自己紹介を手紙に書いたのだ。

新八「なんで人の手紙に自分の自己紹介書いてんだお前!! しかもほぼ二行しかねーし」

零斗「えー、一応試してみただけじゃねーかよ」

新八「とにかく、僕の自己紹介で試してよ」

深夏「それじゃ今度は私がやるよ」

零斗の次に深夏が書き出した新八の自己紹介はこうだった。

志村 新八

眼鏡買い替えました

何故か、漫画の単行本の表紙の裏の著者近影とコメントのようになっていた。しかも、著者近影の部分はメガネオンリーになっていた。

新八「なんの単行本だアアアア!!コレ、単行本の裏のアレだろアレ!よく見たことあるわ!」

新八は怒りを露にしながら深夏にツッコんだ。

新八「なんで著者近影眼鏡しかねーんだよ!」

深夏「著者は姿見せると作品の人気の下がる場合があるらしいからな」

新八「失礼な事言うんじゃねーよ!つーか文章ギリギリ二行から完璧に一行に減ってんでしょーが!写真も文章も眼鏡にしかふれてねーよ!」

深夏「色々書こうと思ったんだけどさ。思い当たるのが眼鏡しかなかったんだよねー、凸凹が。ホラ、新八って平面に眼鏡だけ転がったような人間だろ?他に凸凹ないだろ?できるだけ引き伸ばしたけど、私の力じゃこれが限界かな?」

新八「どんだけつまんねー人間だよ!!」

頭を掻きながら言い訳する深夏に、新八はまたツツコんだ。

霊夢「いやでも、これ位の方が想像の余地あつて深いカンジでしょ。オシヤレなカンジに」

新八「どこが!?眼鏡買った報告しかしてねーよ。つーか買ってないからね眼鏡なんて」

新八は深いカンジだと言つた霊夢にツツコむ。

ゼノヴィア「なら次は私の番だな」

深夏のも没になつたのでゼノヴィアの番となり、ゼノヴィアの書いた新八の自己紹介はこうだつた。

志村 新八

めがねを

買い替え

ただヨーグルト

ゼノヴィア「これなら三行になつたし新八の特徴も相手に伝わるだろう」

新八「お通ちゃん語になつただけだろーが!!」

新八はどや顔をするゼノヴィアにツツコミを入れた。新八の自己紹介は三行になったが、何故かお通ちゃん語がつき、しかも結局メガネにしか触れていない点は全く解決されていなかったのだ。

新八「ミミリたりとも深さ増してねーよ！眼鏡買っただけだからね！つーか何度も言うけど買つてないからね眼鏡」

ゼノヴィア「話を多少面白くするためには、多少色づけも必要なんだ」

新八「全く面白くなってないから!!もつと鮮やかな色塗つてよ!!」

と、新八はゼノヴィアに怒った。

新八「三行だよ！やっぱり最低三行たつぷり使わないとキツイって」

鍵「三行以内なら楽なんだけどなー、さすがに三行ちようどはな。うーん、ちよつとやってみるか」

ゼノヴィアの次の鍵は少し悩み、新八の自己紹介をこう書いた。

たくさんのメガネ送って頂き

ありがとうございます

Sといっしょにかけます（新八）

鍵「コレなんてどうだ？」

新八「ジャ○プの目次になってんだろーが!!」

新八は鍵のを見て今まで我慢してきたがとうとうぶちギレてしまった。

新八「何でバレンタインみたくなつてんだよ!! 何でたくさんのメガネが送られてきてんだよ!! S (スタッフ) って誰だア!!」

鍵「S (スタッフ) じゃない、S (しんぱち) だ」

新八「結局、新八しか眼鏡かけてねーだろうが! 何にも状況打破できてねーよ!」

と、鍵に対してぶちギレた新八だが、ここで主旨が完全にずれている事に気がついた。

新八「つーか完全に主旨ずれてるじゃないか! こんなもん送つたらあの娘から手紙じゃなくてメガネ受け取つたみたいになつてるじゃないかコレ! 一旦原点に立ち帰ろう!! 振り出しからやり直そう!!」

新八がそう零斗たちに言ったときだった。

零斗「そうだ、原点に立ち帰ればいいんだ! 新八の言う通りだよ。最初に戻つて考えればいいんだ」

零斗は新八にこう訊いた。

零斗「新八、この手紙のどこに惹かれたか思い出してみる」

「そう、それは奇抜な手紙の送り方でも、簡潔な文章でもないハズだ」

「写真 (コレ) だ!」

新八「うっ!!」

新八は歯を食い縛り、声を上げてから、慌ててこう否定する。

新八「ちつ、違う!! 僕はそんな、人を見た目で判断……」

零斗「ハイ、じゃあ聞きます。おまえはもし、この娘がキャサリン並みのバケモノみたいな女だったら文通しようと思いましたが」

零斗が言った正論の前に、新八は返す言葉もなかった。

そして、零斗はこう結論付けた。

零斗「そう、つまり幾ら頭悩ませて名文作ろうが何しようが、結局最後にモノを言うのは」

零斗はここで一旦言葉を切ると、声を張り上げて新八に写真を見せつけた。

零斗「写真（みため）なんだよ!!」

『あゝゝ』

零斗の言っていることを納得したのか明久たちはその言葉に頷いた。

新八「うぐつ……、否定できない。いや、しかし、だとすればこんな冴えない僕に……、勝ち目は……」

新八がうろたえ出したときだった。

零斗「新八、メガネとれ」

新八「ムツ……、ムダだよ、眼鏡なんてとったって僕なんか」

見た目に自信がない新八は零斗にそう返す。だが、零斗は新八に背を向けながらこう言った。

零斗「大丈夫だ、新八はお妙さん譲りのいい顔してつから。安心しろ。新八はメガネなんか無くてたつて十分イケるから」

鍵「そうだな。新八はそこの奴よりは顔はイケてるな」

霊夢「もつと自分に自信持ちなさいよ」

明久「安心しなよ新八くん」

妹紅「バックアップくらいしてやるよ」

ゼノヴィア「お前ならやれるさ」

新八「みんな」

新八は勇気が湧いてきた。そして、新八は突然着替え始め、零斗たちは新八の部屋を出て外で待機する。

そして新八はこんな感じに着替えた。

髪型をリーゼントにし、昔のスターのような格好をしてマイクスタンドを持ち出した。

その格好を見た霊夢たちはクソダサイと思ったが心の中に閉まっておいた。

新八「やります！僕やってみます！どうですか!!こんなカンジで」
しかし、当の零斗はというと――。

パシャ、パシャ

零斗「うーん、もうちよい左かな。ハイ笑って、新八くん」

しやがみながら、地面に置いた新八のメガネをスマホで撮影していた。

新八は零斗に対して怒りがこみ上げてきた。

新八「僕を撮れよオオオオ!!新八くんこつちイイイ!!」

怒りが頂点に達した新八は、零斗の後頭部に蹴りを入れた。零斗は倒れこんで、地面に顔を着けてしまう。

零斗「イタタタ……、だつて今の新八じやメガネ成分高過ぎるだろ。成分比にして95%メガネだろ。イケメン成分がメガネ成分追い越すのは多分あと五年位かかりそうだぞ?」

新八「5%しか僕の居場所ねーのかよ!!つーか五年位しないとメガネと釣り合わねーのかよ!!」

霊夢「今の新八だと、残りの3%が水分で、2%がゴミかしら?」

新八「ゴミの中に入ってんの!?!もしかして2%ないの!?!」

新八は零斗と霊夢に対して声を上げ、零斗に対してこうツツコミを入れた。

新八「つーかコレ、さつきと寸分違わねーだろうが!! 違う意味で振り出しに戻ってるだろ!!」

明久「いやでも、この木にかかっている一枚はいいよね。サマになっってるじゃん」

と、明久は零斗が撮った写真の一つである新八のメガネを桜の木にかけた一枚を新八に見せる。その写真は枝の下のうろの部分の口に見立て、枝を鼻に見立てた写真だった。

新八「新八にかけるオオオ!!」

鍵「うーん、イマイチ決定打にかけんなさ」

新八「あたりめーだろ! 本体ねーんだよ」

新八は鍵にツツコむが、零斗はまだメガネを返そうとせず、スマホで撮影を続ける。

零斗「もつといいモチーフはないかな、あれも違う、これも違う……」

零斗は色々模索した。障子にメガネをぶついたり、地面に置いてレンズにタンポポの綿毛を付けてみたり、灯籠にかけてみたり……。

そして、最終的にこうなった。

パシヤ

零斗「よし、これだ」

写っていた。

「プハハハハ、なにこの人決めすぎ〜!!でもちよつとかっこいいかも。それにお姉ちゃんと同じ年頃よ。良かったじゃない」

もちろん妹が言ってるかっこいい人とは写真の手前にいる新八のことではなくアラタのことであるのはお察しいただけるだろう。

姉「う……うららちゃん。……私……うららちゃんに謝らなきゃいけないことが」

うらら「?」

姉「じ……実はわ……私、あの手紙にうららちゃんの写真を同封して……流しちゃったの」

どうやら新八が貰った手紙の主は写真の女の子のうららではなくその姉が書いたものだったようだ

うらら「いつ?!私の?なんで?」

姉「う……うららちゃんもつてもカワイイから。この人が手紙を書いてるってなったら……きつと誰か手紙を返してくれると思つて。ごつごめんなさい!!」

姉はそう言い終えると肘まで砂辺の砂に付けて謝つた。

うらら「もおー何でそんな事するかな。自分の写真入れればいいのに」

霊夢「やったじゃない新八のこと知りたいつてあるわよ」

アラタ「もうメロメロじゃね？どうする新八。教えるか？あんな事やこんな事まで教えるか？」

霊夢とアラタは後ろの方で新八が書いた手紙に同封した写真を見ている新八に言っていた。

新八「・・・いや・・・皆さん・・・コレ彼女が知りたがつてるのつて僕じゃなくてアラタくんじゃね？」

新八の言う通り、実際この写真を見た姉とうらはは手紙の送り主をアラタと思っていた。

新八「コレが僕、志村新八ですつてこの写真渡されたら誰が見てもアラタくんを新八と思わね？」

明久「大丈夫だよ。ちゃんと写ってるし」

妹紅「新八もいい顔してるじゃないか」

新八「写ってるつて身体半分以上フレームアウトしてるだろうが!!ただの斬られ役Bだろーが!!」

ゼノヴィア「細かいことをグチャグチャ言うな。二枚目に勘違いされるならそれに越したことはないだろう」

深夏「私たちは別に一つもウソは言っていないからな。ちゃんと新八も写ってるしな」
零斗「それをむこうが勝手に勘違いしてもそれはもうこっちは知らないって話だから」

新八「こんなもん誰が見たって勘違いするわ!!」

鍵「ま、まあともかくにも返信してもらおうって言う第一関門はなんとか突破つてこ
とで・・・」

「甘いな」

「ええ砂糖と蜂蜜をぶっかけたショートケーキより甘々です」

突然縁の下から男の声、屋根から女の声が聞こえてきた。

近藤「第一関門? そんなものはまだまだ先だ」

文「あなたたちはまだ門の前にすら立てていないのです」

そう言いながら縁側の下からは近藤が、屋根の上からは文が姿を現した。

それを見た新八と妹紅はカチンと来たのか新八は近藤の顔を踏みつけ、妹紅は文に
アッパーカットを決めた。

新八・妹紅「門から入ってくることもできない奴に言われたくないんだよ!!」

近藤・文「ぐぼオ!!」

二人は悲鳴を上げ、近藤の後頭部は地面にめりこみ、文は空中に浮かびそのまま地面

に落下した。

しかし二人はその程度では大して怯まなかった。

文「何も言わないでください明久さん。ここ数日といわず明久さんの毎日のいきさつは完璧に把握してますので」

近藤「俺は新八くんのここ数日ぐらいいしか把握していないがだいたいのは理解しているつもりだ」

妹紅「なんで把握してるんだよストーカーかお前らは!!」

文「ストーカーじゃありませんよ!! 恋の新聞記者って呼んでくださいよ!!」

近藤「そうだ! 失敬だぞ君たち!! 俺はただの恋のハンターさ!!」

新八「つうかあんたらいつから待機してたんだよ!!」

近藤「恋の相談なら何故この恋愛のエキスパート近藤にしてくれない」

零斗「いや、どう考えてもあんたは恋愛じゃなくて嫌がらせのエキスパートだろ!! あんたらみないな泥だらけになってる恋愛のエキスパートなんて見たことない!!」

文「そう! 恋をつかむコツは泥だらけになっても諦めないことです!」

アラタ「諦めろ! 頼むから諦めてくれよお!!」

近藤と文はそれぞれ殴られた場所を押さえながら庭に出た。

近藤「しかし文通かあ、懐かしいな。俺もやったことあったな」

深夏 「いやあんたが貰ってるの想像出来ないんだが」

霊夢 「どうせ真選組のマヨ方かサドの奴と勘違いされて渡されたやつよ」

近藤 「失礼な!! 六割はトシたちのだったけど残りは俺のだよ!!」

妹紅 「あつたのかよ」

近藤 「手紙がくるたびにドキドキしたな」

近藤は自分が貰った文通のことをこう振り返った。

『この度は貴殿が利用された有料アダルトサイト利用料金について運営業者は利用料金
遅延に関してブラックリスト掲載要請を承けました。至急30万円を下記の口座に振
り込んでください』

近藤 「何度振り込みに行ったかわからんよ」

新八 「文通じゃねーよそれ!! 架空請求!!」

近藤 「架空じゃない!! 確かに俺の胸に残ってる」

一誠 「利用したのかよアダルトサイト!!」

どうやら近藤が貰った文通というのはアダルトサイトの利用料金支払いの催促の手紙だったようだ。

近藤 「新八君。あんな恋愛のれの字すら理解してない男たちや好きな相手に奥手な女
たちに文通などというプラトニックな恋愛がわかるワケもない。ここは未来の兄たる

俺に任せなさい」

近藤が新八にそう耳打ちしているのを聞いた零斗たちは近藤の言葉にカチンときたのか額に青筋を浮かばせていた。

零斗「なんだゴリラテメーコラ。金の発生する疑似恋愛しかしたことなさそうな奴に言われたくねーんだよ」

霊夢「邪魔すんじゃないわよ。今いいトコなんだから」

近藤「じゃあ聞きますがね、君たちここからどこにするつもり？相手は新八くんに興味を持ち始めた。しかし一体何を語る!!」

そして近藤は新八の現在の状況を示した。

『僕は万屋に在籍しています。万年金欠で趣味はアイドルの追っかけです』

近藤「こんなんでもてるかアアア!!なんだよ万屋ってうさんくさっ!!なんだよアイドル追っかけて気持ち悪っ!!」

近藤にこき下ろされた零斗たちはとうとう堪忍袋の尾が切れ、思ったことを口に出した。

妹紅「テメエみたいなクソゴリラに言われたくねーんだよ!!」

深夏「一生モテそうにない癖に馬鹿にすんな!!」

ゼノヴィア「アイドルの追っかけがなんだ!嫌がる女性を追いかけるストーリーカーより

マシだ!!」

文「じゃあ皆さん聞きますけど新八さんって現在モテてますか？」

零斗・明久・鍵・アラタ「二「いや全然」三」

新八「少しは否定しろやテメーら!!」

新八がモテないことを零斗たちが肯定すると新八は涙目で文句を言った。

近藤「そうだとモテてねーだろ! そうさ基本今の新八くんの生活を正面から書けば女性の食いつきがいいわけがあるまい!!」

ゼノヴィア「なら嘘をつけというのか?!」

零斗「いくら新八がアイドルの追っかけだからって!!」

霊夢「新八がシスコンでキモイからって!!」

鍵「いやまったくフォローになってないから!!むしろ新八傷つけてるから!!」

零斗と霊夢が新八のフォローをしようとしているが、むしろ新八の心を抉るような言葉を言ってる二人に鍵がツツコミを入れる。

文「新聞記者の誇りとして嘘を書くなんて出来ませんよ。ですか文章というのは言い方を変えるだけで大分印象が変わるものなんです。たとえば……」

文はそう言いながら例を一つあげた。

『僕は銀さんという侍の下で侍道を学ぶべく日夜修行に励んでいます。趣味は音楽観

賞。こればかりには財布のヒモも緩みます。おかげで万年金欠です』

深夏「おお!!」

妹紅「さつきと書いてることは同じなのに印象がまったく違う!!」

近藤「さらに付け加えるところだ!!」

『僕の夢は実家の剣術道場を再興させることです、姉も僕の夢を支えようと一緒に頑張ってくれています。姉は本当によくできた女性で、キレイだし気も回るし僕も結婚するなら姉のような奥さんが欲しいと常々思っています。最近はその美しさも磨きがかかり、弟の目から見ても眩しささえ感じます。その美しさはたとえるなら、一輪の花。

触れれば散ってしまいそうな儂さを持つていながらその花は決して折れない凜とした強さも内包しているのです。さらに驚嘆すべくは、そんな美しさを持ち合わせながら彼女はそれに傲ることなく、その魂すらも清く美しく暁光の如く光輝いていることにあります。これは奇跡でしょうか。いや奇跡ではない。何故なら奇跡とは、彼女の存在そのものであり、今我々が目にしているのは奇跡が起こしたプチ奇跡に過ぎないからです。さらに、驚くことに姉は……』

新八「長いわアアアア!」

延々と妙の事ばかり語る近藤に新八はツツコミを入れた。やはり近藤は近藤であつた。

鍵 「どんだけ長々とお妙さんの事語ってるんだよ!!こんな弟、気持ち悪いわ!!視点変えるって、完全にアンタの視点になってるでしょーが!」

新八 「まあ確かに、僕を語る上で姉上の存在は欠かせませんよ。でも、もうちよつと簡潔にしないと何のための手紙がわかりませんよ」

一誠 「まあ新八は根っからのシスコンだからな」

新八 「うるせえ変態ドラゴン」

新八をからかう一誠が新八に茶々を入れるが新八はそれを一蹴する。

近藤 「そうだな、仕方ない涙をのんで一行にまとめよう」

『ムラムラします』

零斗 「どんな弟だアア!!」

明久 「コレ、完全に近藤さんの気持ちじゃん!!あんだけ長いことゴタク並べて結局ムラムラしてるだけかい、アンタ!!」

近藤 「言わないでね、お妙さんに」

新八 「言えるかアア!!」

ゼノヴィア 「もうお妙さんの事省こう。今回の文通にあんま関係ないだろ。ヤバイキーワードは全部とろう。必要な事だけ書いてればいいんだ」

ゼノヴィアがそう言って修正した手紙の内容はこうだった。

『僕は、銀さんという侍の二元で零斗くとゼノヴィアさんがイチヤイチャしてるのを見て日夜ムラムラしてます』

新八「なんでそーなったアアア!!」

新八の怒号が部屋中に響き渡った。

新八「何でいつの間にかあんたと零斗くんが入ってんだよ!!てか堂々と嘘を書くなよ!？」

ゼノヴィア「いや、こうやって周りから囲んでいけば私と零斗が恋人になれると思つて」

新八「全然マシじゃねーんだよ!!なんで僕の手紙なのに他人のこと書かなきゃいけないんだよ!？」

霊夢「そうよちゃんと書きなさいよ」

アラタ「そうだと俺たちを見習えよな」

妹紅「ふざけるのも大概にしとけよな」

『霊夢さんと零斗くんは毎日博麗神社でイチヤイチャしています』(霊夢)

『アラタくんは多くの美少女と毎日まぐわっています』(アラタ)

『藤原さんと吉井くんは誰もが認めるカップルです』(妹紅)

新八「あんたらもふざけてんじゃねえかよ!？」

近藤「しかし、無下にもできませんぞ。相手は彼女の肉親、優しくフォローを入れてからさりげに話題をうつさんと」

新八「でもフォローって、一体どうやって」

新八が近藤に返したときだった。

「あつ、やつぱココにいやがった」

開きつぱなしの窓から、聞き覚えのある、低い声音がした。

土方「近藤さん、いい加減にしてくれよ」

窓に手をかけて、近藤を呼んでいたのは、真選組鬼の副長土方十四郎だった。彼は近藤を探しにここにやって来たのだ。

土方「隊士達にフォロー入れる俺の身にもなってくれよ」

近藤「おつ!! 丁度いい所に来た!! フォローの男、土方十四郎!!」

近藤が待つてましたと言わんばかりにそう言った。

近藤「上にも下にも問題児をかかえ、フォロー三昧の日々。トシにかかればまずフォローできないものはない!!」

土方「なんの話だよ」

近藤「コレを読んでみろ、十四フォローくん」

土方「十四フォローって何だよ、十四郎だ! 無理があるだろ!」

新八「お願いします、フオロ方さん」

土方「統一しろよ!!何もかかってねーよ!!」

と、土方は新八にもツツコんだ後、渋々手紙に目を通した。

土方「オイ、メガネ。お前、こんな女のどこがいいんだ。コイツあどう見てもB型の女だぞ」

新八「B型？」

土方「B型の女は自分勝手に、まず人の話を聞かぬエ」

土方はタバコを吸いながら手紙の書き手の血液型と性格をそう言つて、新八達にこう続けた。

土方「自分の話だけまくしたてるように喋り、それで会話が成立してると思うタチの女だ。この手合いは下手にフオローに回ると延々と一人で喋り続けるぞ」

ここで土方は一旦言葉を切り、くわえていたタバコを口から離して煙を吐く。

土方「かといつて、強引にこつちの話を振つてもまず聞かぬエ。相当にうまくやる必要がある」

と、土方が言ったときだった。

銀時「ちよつと何この人？血液型なんかで人を見るのかよ？」

妹紅「あの人B型の女の人に何か恨みでもあるのか？」

土方「ねーよ!!」

近藤「トシ、アレまだひきずってんのか」

土方「いい加減なことを言うな!!」

土方は銀時、妹紅、近藤にツツコミを入れた。

一誠「いや、でもモテる男はやっぱ言う事違うわ。便りになるぜB方さん」

土方「イチイチ呼び方変えんじやねエ!!」

と、またしても呼び方を変える一誠にも土方はツツコんだ。

鍵「A型は今日は何をやっても空回り。めげずに頑張れ」

零斗「AB型は今日は友達とうまくいかないかも。トラブルには気を付けて」

深夏「O型は急な雨にみまわれるかも。外出の際は傘を忘れずにな」

土方「ただの占いだろーが!!なんでO型の上だけに雨が降るんだよ!」

土方は何故か血液型占いを始めた鍵、深夏、零斗にもツツコんだ。

知弦「要するに、絶妙なさじ加減のフオロ、そして相手が気づかない程の自然な話

題替えが必要ってことね。まあ簡単ね、私に任せて」

知弦は自分が考えた、新八の手紙の内容を書き始める。

知弦の書いた手紙の内容はこうだった。

『お姉さんのことを思うと、とても心が痛みます。でも、うららさんのお姉さんを思う

気持ちはきつと伝わっていますよ。いつかきつと心を開いてくれると思います。

……開くといえば、うららさんはSとMの扉、どちらをひらいてくれるんでしょうか

新八「不自然過ぎるだろーが!!」

新八はとんでもない書き方をした知弦に対してツツコミを入れた。

新八「なんつー話題に切り替えようとしてんだ、あんたは！原始人でももつとマシな

口説き方するわ!!」

知弦「人はSとMのどちらかにしかなれないのよ」

幽香「私と知弦はいうまでもなくSよ」

新八「あんたらは原始にでも帰れ！」

新八は3年のドSコンビにツツコミを入れるのであった。

霊夢「ダメダメ、あんな建前もクソもないドSに書かせちゃ。ここは私がいくわ」

と、今度は霊夢が書き始める。

霊夢が書いた手紙の内容はこうだった。

『……お姉さんのことを思うと、とても心が痛みます。でも、うららさんのお姉さんを

思う気持ちはきつと伝わっていますよ。いつかきつと、お姉さんのATMの番号を教

えてくれますよ』

新八「だから不自然過ぎるだろーが!!」

新八は霊夢にツツコミを入れた。

新八「なんでここからATMの番号を聞くことになるんだよ！魚介類でももつとマシな口説き方できるわ!!」

霊夢「恋をする時、人は皆、生命の海に帰るのさ」

新八「お前だけ海に還れ、二度と戻ってくるな」

新八は、かつこよくキメているようだが、全然かつこよくキマっていない霊夢に対して、冷たく怒りを込めながら言った。

近藤「全く話にならん」

知弦、霊夢に続き、近藤がそう言って動き出した。

近藤「フォローが足らん。お前ら揃ってペラペラじゃねーか。お前らは真剣にお姉さんのことを考えていない」

そう言うのと近藤は新八の手紙にこう書いた。

『お姉さんを思うと、ムラムラします。』

新八「見境なしかい！」

近藤の一文を見た新八は、思わず叫んだ。

新八「フォローどころかお姉さんのことしか考えてねーじゃねーか!!アメーバでももつとマシな思考してるぞ!!」

近藤「恋をする時、人は皆、ネバネバさ」

新八「お前の頭の中がネバネバだろ！」

知弦・霊夢と同じようにキマっていないカツコ付けをする近藤に、新八はツツコんだ。

一誠「仕方ないな。今度は俺がいくぜ」

一誠が新八の手紙に書かれた一文を訂正し、こう書いた。

『ところで、うららさんのスリーサイズはいくつですか？』

新八「なんでだアアアア!!これ、もうフォローもクソもねーんだけどオ!!重要な事何も訊いてねーじゃねーか!!っーかスリーサイズ聞くってただの変態じゃねーかよ!!」

銀時「兵頭だからこんなもんだろう」

文「まあ新八さんも一誠さんも同じ変態なんだからこの手紙を送ってもいいと思いますよ」

新八「ぶちのめすぞテメーら」

銀時と文による変態扱いに新八は顔に青筋を浮かべるのだった。その後もリリス、零斗、鍵、明久、ゼノヴィアたちが新八の手紙の内容を考えて書いてみたが、どうもしくり来なかつた為、新八は土方に声をかけた。

新八「土方さん」

土方「……仕方ねエ」

やれやれ、といった感じで土方が動き出し、新八の手紙を代筆し始めた。

『お姉さんのこと、色々と心配なさってるようですが、僕はその必要はないと思います。

僕はお姉さんに対し、同情の気持ちも励ましの言葉も何も持てません。

だって、友達ならいるでしょ、僕が。』

近藤「なにイイ!!突き放すと見せて、超弩級のフォローに!!」

近藤が驚いて声を上げる。土方は新八の手紙をまだ書き続ける。

『僕がお姉さんの友達になります。自分の殻が破れないというのなら、僕が外から殻を破りに行きます。』

新八「しかもフォローからさりげに会う約束をとりつくろつた!」

新八も驚いて声を上げた。だが土方はまだ書き続ける。

『会わせてください、お姉さんに。 あっ……、ごめんなさい、突然こんな事書いて……。

キレイ事ばかり並べて……、本当は僕、そんな大層な人間じゃないんです。

だって僕……、本当は、……ただ、……ただ、君に……、会いたいただけだから。』

新八「フォローしたアア!!最後うららさんもフォローしたアア!!」

新八は更に驚き、声を上げた。しかし、土方のフォローの真髄はここからだった。

土方「最後じゃねエ、コイツを消しておしまいだ」

そう言いながら土方は修正液を筆に付け、先程書いた『君に会いたただけだから』の一文を消し去った。

明久「け……、消したアアア!? 『君に会いたただけだから』を消した!! 何故!?!」

明久が驚いて声を上げながら、土方の行動に疑問を感じたときだった。

零斗「ま……、まさか」

知弦『君に会いたただけだから』は新八くんのような純情ウブな人間は照れて書けな
い一文……」

妹紅「!!……じゃあ、書いた後、やっぱり照れて消したことを演出するために……!?!」

零斗と知弦は土方が『君に会いたただけだから』の部分を消した理由を理解した。

アラタ「スゴい! 新八にまでフォローを!!」

深夏「完璧……!! 完璧だアア!!」

幽香「これがフォロー方十四フォロー!!」

アラタ、深夏、幽香が驚いて声を上げるなか、土方は自慢気にタバコの煙を吐き出した。

土方「至急送れ」

うらら「気持ち悪い!!何この人!!ムラムラって何よ!!ちよつとお姉ちゃん、やめよ!!
もう、文通なんてやめっ……」

慌てたうららが姉にそう言ったのだが――。

うらら「……お姉ちゃん?」

うららの姉は、なぜかかたまっていた。

うらら「ちよつ……、どうしたの、お姉……」

姉「不思議な人」

うららの姉は、うららに背を向けたまま、言葉を返した。

姉「この人、手紙を書く度に別人のように文体が変わるの。まるで一人でたくさん的人格をもっているみたい。今まで友達なんて一人もいなかったのに、一度にたくさん友達ができたみたいだわ」

うらら「何言ってるのお姉ちゃん。ただの変態じゃない、コレ。ちよつと、しつかりしてよ」

うららに変なことを言う姉にツッコんだ。だが、姉はうららにこう返した。

姉「それに……、私……、うららちゃんのフリして手紙書いてたのに、私のこと……、助けたいて……。ム……、ムラムラするって」

うらら「お姉ちゃんんん!!ムラムラの意味わかってる!?!ムラムラっていうのはね

土方「元といえば近藤さんが悪いんだろ！俺も知らねーよ！」

土方以外の全員が頭を抱え、土方は責任転嫁をする近藤にぶちギレていた。

と、ここに新八が嬉しそうな顔をして縁側を走りながらやつて来た。新たな手紙を持つて。

新八「やりました!! ついにやりました!! うららちちゃん、僕と会いたいって!!」

新八の言葉を聞いた零斗達は絶望し、顔をひきつらせた。

アラタ「マジかよ女子恐いな」

明久「それでも会いたいつてことは」

鍵「まさか……、まさか」

そして、零斗達の頭の中を、ある予想が駆け巡った。

『(あつちも、ムラムラしてる!?)』

あつちの方、つまりうららもムラムラしているのではないか、と零斗達は深読みしてしまつたのである。

近藤「いつ……、いけません!!」

近藤は新八に届いた手紙を破り捨てるといふ行動に出た。

新八「ギヤアアア! 近藤さん、何するんですかア!!」

近藤「いけませんよオ!! 16歳でムラムラなんていけません!! 認めません!! 兄として!!」

新八「いや兄じゃねーし!! 大体アンタが一番ムラムラしてるでしょうが」

近藤「20歳越えてからです、ムラムラは20歳越えてから」

土方「いやアンタ20歳前からムラムラしてただろ」

土方も近藤にツッコむが、近藤は「認めません!!」と言つて手紙を破り続けるのであつた。

うらら「またア、そうやって逃げる!!お姉ちゃん怖いだけでしょ、人と接するのが!!
自分が傷つくのが!!そういう所から変えていかないと、お姉ちゃんずっと一人ぼっちよ
!!」

うららはネガティブな考え方をする姉に、そう言うてから、両手で姉の両方の頬に触れ、優しくこう続けて言った。

うらら「大丈夫……、自分に自信をもって、お姉ちゃん。お姉ちゃんはとつてもカワイイよ。当たり前でしょ。だって、私のお姉ちゃんなんだから。だから無理して自分を大きくみせようとしたり、偽ったりしなくていいの。自然体でいいのよ。だってお姉ちゃんはそのままで充分、素敵なんだから」

姉「自然体……」

うらら「そう……、無理して取り繕ったりするから緊張するのよ。ありのままに素のままに、思うままに自然にふるまえばいいのよ」

うららは姉にそうアドバイスした。

姉「(思うままに……)」

そう考えた姉は、次の瞬間、思いもよらぬ行動を取った。

姉「(超逃げたい!!)」

そう考えた姉は、突然、草むらに向かつて全速力で走って逃げていった。

!!
」

新八は、自身でもなくアラタが代打をするわけでもなく、何故か沖田が代わりにデートに行っているというよくわからない状況にツツコミを入れた。

零斗「いやまあ、あの人ならうまくやれそうだし」

鍵「だよなー」

新八「うまくやらんでいいわ！なんでようやくデートまでこぎつけたのに、他人に一番おいしい所もってかれにやならないんだアア!!」

知弦「他人じゃないわよ。あつちにとつてはあつちが文通相手の新八くんってことになつてるのよ。だからしょうがないのよ」

新八「いや、紛う事なき他人だろーが！写真にさえ写ってないだろーが!!」

アラタ「少しイメチェンした新八って事でどうよ?」

新八「少しどころか、顔も体型も全然違うんだけどオ!!写真の新八くんより全然背エ高いんだけどオオ!!つーか写真の新八くんお前!!」

新八には、写真の新八の代わりになってしまっている筈のアラタにツツコんだ。

妹紅「でも、むこうの食い付きが良かったのもこの写真のおかげだろ」

新八「うっ!!」

返す言葉が出なかった新八は、思わずそう漏らしてかたまった。

新八「そ……それにしたって、今まで文通頑張ってきたのに……。これじゃあ何のたぬにやっつてたんだか」

一誠「誰がこのままいくっていった」

新八「えっ？じやあ名乗り出るんです!?この状況で『実は僕が手紙書いてました』って名乗り出るっていうんすか!!」

霊夢「まあ落ち着きなさいよ。今そんな事しても沖田から新八に落ちるわよ。何もいいことはないじゃない。これじゃあ月からなんかヌメヌメする亀みたいな奴に落ちるようなもんよ」

新八「それスツポンじゃね？つーかヌメヌメするって、アンタスツポン触ったことあるのかよ」

一誠「まあ要するに、正体バラすにしても超カッコいい状況で言い出さなきやダメだつてことだよ。たとえヌメヌメした亀の甲羅でも、階段前に落ちてたら軽くお月様に見えてくるだろ？」

新八「見えねーよ。意味のわからんことを言うなよ！」

明久「なんか踏みつけてIUPしまくりたくなっちゃうしね」

新八「それどこのスーパーマリオだよ！つーかスツポンの甲羅ってやわくて途中で潰れそうだけど!!」

ゼノヴィア「もしくは前は前に走ってる車に投げたくなるんだよな」

新八「それはマリカーだろ！つーかさつきも言ったけどそんな事したらスッポン潰れるよ!？」

新八は変な例えを出した二人にツツコミを入れると、零斗は本題に入った。

零斗「そこで、沖田さんには今回悪役になってもらうってわけだ」

零斗は今回設定した新八と沖田の関係を具体的に説明し始める。

零斗「沖田さんは新八の因縁のライバル。ある日、新八がカワイイ娘と文通を始めたことを知り、これを横取りしようと画策、新八の一通目の手紙をもみつぶし、第三者の写真を送りつけた。その後、新八とうらちちゃんの中が深まった頃合いを見て会う約束を交わし、その純潔を狙う」

一誠「しかーし、そこに現れるのが新八だ!!」

新八「女の子を助ける救世主って、またそんなベタな」

沖田『事実は小説よりベタなりでさア』

新八「沖田さん？」

零斗が持っていた無線機から沖田の声が聴こえてきたことに新八は驚いた。どうやら零斗たちと沖田はグルのようだった。

沖田「まあ、そんなの方がわかりやすくいいでしょ。難しいのは覚えるのダリーン

で」

新八「いいんですか沖田さん。こんな事してもらって」

沖田「アイツらにはウチの後輩たちが世話になつてゐるからな。それに近藤さんの提言で局中法度に新しいのが加わりまして、第四十六条『万事屋憎むべし。しかし新八くんにはだけは優しくすべし。逆らえば切腹』でさア」

新八「気持ち悪い!!本格的に兄の座狙いだしたよ!」

霊夢「なるほどその手があつたわね」

知弦「私達も早速紫音ちゃんにやるべきかしらね?」

深夏「いやアンタらがやっても意味無いだろ」

新八はやけに積極的な近藤にドン引きして思わず声を上げた。だが、沖田はさらにこう続ける。

沖田「ああそういや、ちいと気になることが……」

沖田は姉を探し回って辺りを見回しているうららをチラツと見てから、無線を通して新八達にこう伝えた。

沖田『どうも奴さん、姉貴と一緒にこの街に出てきたらしいんだが、その姉貴が迷子になつたとかで気が気じゃないんでさア』

新八「お姉さん?あの手紙に書いてあつた」

新八「悪気はなかったんです！だます気もなかったんです！いやらしい事とかそんな一切考えてませんでした!!」

新八は涙を流しながら必死にうららの姉に謝り続ける。

新八「ただアまぶしくてエ、あなたの妹さんがあまりにもきらめいてエ、ヤケドしそうでエ、こんな娘と文通できたらいいなって必死で……、考えてたら写真とか色々やつちやつてエ、最低ですよね!!僕、最低ですよね!!ごめんなさい!!もう二度と妹さんに近づきません」

新八が言い終わったときだった。

姉「……かります」

うららの姉が声を漏らし、新八達はそれに注目する。

姉「わ……、私も、わかります。……その気持ち」

新八「お……、お姉さん？」

新八は思わず声を上げた。うららの姉は申し訳なさそうな感じで続けてこう言った。

姉「最低なのは……、私……、なんです。謝らなきゃいけないのは、……私なんです。私のせいでみんな……、みんな」

零斗たちは意外な感じでうららの姉を見つめた。そして――。

妹紅「いやまあ、なんて言うか。あんま深刻に考えないでいいんじゃないか。まだ致命的な問題は何も起きてないんだろ？だからそこまで悩む必要なんかはないよな」

アラタ「まあいい所新八そつくりの奴に取られちゃったけど、ここにいる本物の新八くんが何とかしてくれるから」

新八「沖田さん差し向けたのアンタらだろーが!!完全に別人だろーが!!っーか写真の新八くんお前だろ!!」

一誠「仲間が悩んでたらそりやアドバイスの一つや二つするじゃん、一応乙組のクラスメイトなんだし」

知弦「そうよ、先輩として後輩を心配するのは普通よ」

新八「アンタら面白半分でやってただけだろ」

ゼノヴィア「なあお姉さん、お姉さんもわかるだろ。今日は妹さんが心配でついてきたんだよな。引きこもりがちだったけど妹さんを心配して殻を破って来たんだよ。いい話じゃないか、なっ新八」

姉「そ……、そんなんじゃないんです。私……、そんな大層な人間じゃないんです。私……、私……」

鍵「ちよちよちよちよつと!やめてくださいよそのモード!そのモードもういいから!!なんかスツゴい悪いことした気分になるから!お願いだからやめてください!!それ

慌てる新八達にうららの姉はこう説明する。

姉「うららちゃんを芝居とはいえ、そういう目に遭わすのは嫌だから私を使つてくださいと言っているんです。例えば私が悪人にさらわれてそれをうららちゃんの目の前で助けるとか」

霊夢「いいわね、それ」

新八「いや、良くねーだろ!!」

零斗「いや、いいんじゃないか。むこうはお姉さん迷子になったと思ってるから実は悪漢にさらわれてたとか自然な流れでいい。ちなみにこういう役回りには銀さんたちに頼むつもりだ」

新八「そうじゃねーよ!!倫理的な問題で良くねエだろ!!つーかあの人にもとる事やらせる気?」

アラタ「問題ないって。お姉さんがいいって言うてるんだぞ。新八も少しはお姉さんの思いをくみ取ってあげろよ。妹さんが楽しそうに文通してる姿を見て、思うところがあつたんだろ」

そう言われて新八は、複雑な気持ちのまま考え出した。明久は無線機で沖田にこう伝える。

明久「沖田さん、予定変更だよ」

沖田『は?』

明久「うららちゃんには何もしくなくていいよ。銀さんたちに人さらい役になって、うららちゃんの前でお姉さんさうから、沖田さんはそれを止めようとあの人たちにかかってきてあっさりやられてよ。あの人たちがうららちゃんをさらおうとした絶体絶命の時に、新八くんが現れてあの人たちを倒す。そして『キヤー素敵』ってなるワケだよ」

深夏「要するにあんたは普通にデートしてればいいワケだ。まさかうららちゃんに何もしてないよな?」

沖田『大丈夫でさア。元々俺がこと起こす前にこちらさんが駆けつける作戦だっただろ』

アラタ「ああ、そういやそうだったな」

沖田『それなら問題ねエ、紳士的にエスコート中だぜイ。ようやく慣れてきてくれたみてーで』

と、沖田は零斗たちと無線で連絡を取りながらそう言うと、沖田はうららを連れて鈴谷達の隠れている路地裏に向かう。

零斗「そう。そのまま紳士的に俺達の所までエスコートして……」

零斗たちはうららをエスコートする沖田の姿をチラッと見た。

だが、それはとんでもないエスコートだった！

沖田「おう、モタモタしねーで歩けい」

沖田はうらららに首輪を着け、首輪から延びている鎖を右手に持つてまるで犬を散歩させるように歩かせていた。

零斗たち『『『どんなエスコートおおお?!』』』

鍵「エツエスコートじゃねーだろアレ!!ドSコートだろ!!」

沖田「この辺にうまいメシ屋があつてな、いくかい?」

明久「何で普通に喋つてんの!?!何で恥ずかしくないの!?!」

沖田のドSコートにツツコミを入れていると、沖田は階段前で皿に入ったエサを食べる野良猫の群れ十犬の着ぐるみを着た十四松の所までうららを連れていく。

沖田「あー、あつたあつた。メシ屋」

妹紅「メシ屋じゃねーよ、それ!!」

沖田「参つたな、満席だ。あつ一席空いてるか。うららちゃん食べてきなよ。俺のことはかまわないでいいからさ」

零斗「何コレ、何ファースト!?!レディーファーストじゃないよね、絶対違うよね!!」

零斗がツツコミを入れていると沖田は十四松の散歩に同行していた一松が座つている階段に腰を下ろした。

一松「なんだ、お前も散歩してるのか」

明久「一松さんそれ散歩じゃないから!!ただのドSの悪行だから!!」

沖田「そうツスねー、今日いい天気だからさア」

ゼノヴィア「お前のせいでこっちは心の中に台風が荒れ狂ってるよ!!」

一松「あれ?お前、なんか変じやない?」

隣にいた一松が沖田に何か言ってきた。

一誠「そうそう、それ!!」

沖田「え?何?何?何かあった?」

鍵「早く言ってやれ一松!アイツドS普通だと思ってるから!!コレ以上なんかする前

に止めてあげろ!!」

一松「お前、オデコになんかホクロできてるぞ」

霊夢「どんだけ繊細な事に気づいてんのよ!!つーか猫に紛れて女の子が猫の餌食って

んのに何で気づかないのこイツ!!」

沖田「お前こそ、シャンプー替えた?」

零斗「知らねーよんなこと!!てゆーか何でお前ら普通に談笑できてんだよ!!お前らど

ういう関係性だ!」

あまりの沖田によるうららの調教結果に零斗たちがツツコミを入れた。

姉「ひ……ひどい、う………、うららちゃん、うららちゃんが………」

新八「皆さん!!これは下手に芝居打つより沖田さんをぶつ潰してうららちゃんを救い出すべきだよ!」

沖田に対する怒りを露にした新八は、そのまま沖田と一松が会話している階段の前に走っていき、うららを救おうとする。

アラタ「新八!無茶だつて!!」

ゼノヴィア「行つたらやられるぞ!」

アラタとゼノヴィアは新八を制止しようとするが、既に遅かった。

新八「うららちゃん!!」

うらら「うにやう!!」

うららを助けようとした新八だが、うららは近付いてきた新八を下から顎を蹴り上げた。

新八はメガネが吹き飛び、数メートル先に飛ばされてそのままごろんと伸びてしまった。

深夏「こ……、これはっ」

鍵「完全に調教されている!!完全に服従しちゃってるよ!!」

零斗「つーかアンタあの短時間のうちに一体何したんだアアア!?」

知弦「真のドSなら五分もあれば調教は可能よ」

霊夢「ドSの女王は黙ってなさい!!」

うららのあまりの変わりように零斗立ちは驚愕するしかなかった。ただ、知弦だけは特に驚くこともなくむしろ当たり前だと自慢していた。流石はドSの女王様である

長谷川「おいおい、銀さんに呼ばれてきたけど、どういう状況だよコレ？」

銀時「なに？新八のデートって結局失敗したのか？」

銀時に呼ばれた長谷川と銀時がちょうど新八がうららに蹴り飛ばされたタイミングで来てくれたので零斗たちはすぐに作戦を開始するのだった。

零斗「二人とも、ちようどいいタイミングで来てくれて助かりました!!すぐにこの服に着替えてください!!」

零斗は慌てて二人に声をかけると、すぐにシヨツカーの幹部か何かが着そうな怪しい服を持ってきた。

長谷川「ちよつと待て!!何だその服は!？」

銀時「何で俺達がこんな子悪党みたいな格好しなきやいけねえんだよ!？」

明久「説明は後です!だから急いでください!!」

深夏「あとは、お姉さん!!」

姉「は……、はいっ!!」

深夏と顔を合わせたうららの姉はすぐに頷いて動いた。

姉「た……、助けてエエ、うららちやくん」

長谷川「フハハハハハ、中々にイイ生娘ではないか！」

銀時「コレならわが総統の妻にぴったりだ!!」

と、アフレコながら悪人っぽく見せる長谷川さんと銀さんはうららの姉を縄で縛って足で背中を抑えていた。

姉のピンチに気づいたのかうららが零斗達の方を見てきた。

鍵「見た!!こっち見た!!やっぱ実の姉の危機は放っておけな……」

うらら「ホクロホクロ」

うららは何故か沖田に向き直り、沖田のオデコに指差した。

鍵「またホクロかいイイ!!オメーらどんだけホクロ気になってんだよ!!」

深夏「お前何してくれてんだアア!!惚れさせる云々以前に人格変わっちゃってるじゃん!!」

沖田「すまねエ、思った以上に覚醒しちゃったようで。まあでも俺が惚れると言えば誰にでも惚れるぜイ」

妹紅「そんな偽りの愛はいらねエエ!!」

姉「……、ご免なさい」

「わ……、私……。新八さんの……。うららちゃんの……。誰の役にも立てない……。な……、なんだろう私って、本当に……。本当に」

「ごめんなさい!!」

新八「おつ、お姉さん!!」

新八はうららの姉を制止しようとしたが、それも虚しくうららの姉は涙をこぼしながらその場から走り去ってしまった。うららの姉の、宙を舞う涙を見た新八は、ある決心をした。

そして――。

明久「あ、新八くん!!」

零斗達の前から、新八は、うららの姉を追って一人走っていった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

その夜。街の道路を疾走する一台のパトカーに近藤と土方が乗ってパトロールしていた。

近藤「そういや今日って、新八くんが例の文通の娘と会う日じゃないか」

土方「知らねーよ。覚えてねーよそんなこと」

近藤「うまくいってるといいな。一回女ができるとお妙さんのことにも寛容になる気がする」

土方「総悟の姿が見当たらねエ。こりや失敗したと見たな」

変な期待をする近藤に土方がそう返したときだった。突然、パトカーの前に一人の女の人が姿を現した。その女の人は、髪を後ろで束ねメガネをかけた女の人だった。土方は慌ててパトカーをドリフトさせ、女の人を回避する。

土方「あ……、あぶねーだろ、どこ見て歩いてんだ!!」

? 「すつ、すいません!!」

いきなり飛び出して来た女の人に土方は怒鳴るとその女の方は謝るとそのまま走り去っていった。

土方「……何だ、あの女」

近藤「何か追われているようだったが」

土方「追われている?」

土方が近藤にそう返した、そのとき――。

ザザザザザザザザザザ――

突然、それは二人に襲いかかってきた!

近藤、土方「「おわアアアアアアア!!」

土方と近藤の悲鳴が夜の街に響き渡った。

粉々に割り、そのままパトカーの運転席に飛び込んだ。

近藤「なっ、何者だアア!!」

土方「テロリストどもの回し者かア!!」

うらら「車確保しました、御主人様」

近藤と土方が警戒してうららに刀を向けるが、うららは自らが走ってきた方に向いて言った。そのうららの首に首輪を着け、そこから伸びる鎖を右手に持っていたのは――。

沖田「よーし、良くやった」

ほかの誰でもなく当然沖田だった。沖田の後には、零斗、霊夢、知弦が付いてきていた。明久、妹紅、鍵、深夏、ゼノヴィア、一誠、アラタは零斗たちと別れて探し、銀時と長谷川は用事があるようでそのまま帰ったのだった。

沖田「さア、お前ら早く乗れイ」

零斗「なかなか気が利くじゃないか、この人」

零斗「これって犯罪じゃないの?」

知弦「細かいことは今は気にしちゃダメよ」

近藤「なっ……、何してんだおめーらアア!!」

沖田「あっ、お疲れさまです」

近藤「あ、おつかれ様です。じゃねーよ!!」

零斗「よし発進だ。お姉さんを追え」

うらら「勘違いしないで。私がお仕えしているのは御主人様だけ」

零斗は沖田と近藤が話している間にパトカーの運転席をジャックしたうららに言つて発進させようとするが、うららはそう言つて返していた。

土方「何勝手なことしてんだア!!あける、オイ!!」

土方が沖田達を制止しようとするがうららはそのままだパトカーのエンジンを動かした。

近藤、土方「あああああつ!!」

うららはパトカーを急発進させ、土方と近藤を置き去りにしようとしたがそうはさせまいと土方と近藤がそれぞれ右左のドアにしがみつくがパトカーの力に抗いきれずそのまま引きずられる。

近藤「あぶつ……!ちよつ……、とっ!止めてエエエ!!」

近藤は足踏みしながらドアにまだしがみついて沖田にそう言うが、うららは無視してパトカーを走らせる。

近藤「あぶないから!ちよ、止めて、マジ!」

近藤が止まるように再度頼み込むがうららは無視を続ける。ふと近藤は運転席にい

霊夢「お姉さんがうららちゃんとお手くいくように私達に手を貸してくれたのも、多分写真見てすっかりうららちゃんに惚れてた新八を見ていたたまれなくなっちゃったからじゃないかしら」

零斗「でも色々、沖田（じやま）が入ってな」

沖田「沖田と書いて邪魔と読むのはやめてくれ」

知弦「上手くいかなくて自分を責めてどっか行っちゃったのよ。だましてたのはお互い様だったのに」

うらら「お姉ちゃん……。あの引っ込み思案のお姉ちゃんが、手紙を見て会いたいて言つたの……。きつとお姉ちゃん、新八さんのこと……」

「……………辛かったんだと思う。そんな新八さんひとりの恋の手助けをするなんて。それでも……、自分のせいだって耐えて、でも、何の役にも立てなくて。……自分で自分が許せなくなっちゃったんじゃないかな」

うららは隣でうららの姉が新八との文通を楽しそうに書いてたのを見ていたからこそ、うららの姉の気持ちをよく理解しているのだろう。

近藤「新八くんは？」

霊夢「何も知らないわよ新八は」

知弦「何も知らないまんまお姉さん追いかけて行っちゃったのよ」

靈夢「目当ての娘をほつたらかしにしてね」

零斗「アイツは理屈で動く奴じゃない。目の前で泣いてる女がいたら、惚れた女ほつといて涙拭きにくく奴だよ。まあ、道理でモテないってワケさ」

土方「だつたら今頃そのメガネがその女見つけてる頃だろ。いい加減車を返せ。公務執行妨害で逮捕するぞ。ガキの惚れた腫れたに付き合つてる暇はねーんだ、こつちは」

靈夢「いや暇でしょ。コイツは呼んだら簡単に来たし」

零斗「それって、思いつきりサボつてるって事だろ」

土方「コイツはいてもいなくても同じなんだ」

うらら「そんな。お姉ちゃん、この街なんて初めてだから、変な所に行つて事件に巻き込まれでもしたら」

土方「知らん。事件なら起きてから言え。俺達や、くだらねー仕事こなす万事屋じゃねーんだ」

沖田「土方さん。それなら、心配いらねーや」

沖田が指さした方には中層のビルがあり、その周りには人ばかりが出来ていた。

沖田「事件、起きました」

そしてそのビルの屋上にうららの姉が、一人、胸壁の奥に立っていた。見た限りでは

んなに苦しんでたのに途端に変わった。私、結局自分が可愛かったただだったのね。自分だけが愛しくて尊い存在で。だから他人からどう思われているのか知るのが怖くて、傷つくことを恐れて逃げてずっと自分の殻に閉じ籠ってた」

その頃、下では新八が人だかりが出来ているビルの近くにまで来ていた。

姉「色んな人に支えられていながら、自分は誰かのために何かしようとも思わなかった。自分の事しか考えていなかった」

と、うららの姉がそう言っている時、新八は真選組によって立ち入り禁止にされているビルの入り口に来て入ろうとするが、真選組の隊士は通してくれなかった。

姉「新八さんの事もそう。うららちゃんの写真を送ったのは自分が否定されるのが怖かったから。新八さんは正体を明かしてくれたのに、私は……、嫌われるのが嫌で……、必死に隠して、そのくせに、……新八さんが私を見てくれないのが寂しくて、うららちゃんにとられるのが嫌で……」

そして、うららの姉は最後にこう言った。

姉「私……、汚い。こんなに……、汚い自分……、もう嫌……」

うらら「お姉ちゃん、ちょっと待って！私の話を聞いて！」

姉「いいの、私のことはもう放っておいて」

土方「ホラ見ろ、B型の女は話聞かねーっていったろ。俺の言う通りだ」

姉「私はA型です」

土方「……ヤベ、聞こえてた」

沖田「A型って、土方さんと同じじゃないですか。道理で最悪のはずだ」

土方「一緒にすんじやねーよ、あんなのど!!血液型なんぞで人を判断すんな!!」

うらら「ちよつとオオオ、刺さってますから!全部お姉ちゃんに刺さってますから!」

うららの姉に言葉が刺さっているとも知らずに沖田と土方はうららの姉の傷つく言葉を言うのだった。

姉「死にます」

零斗、霊夢、土方「「待て待て待て待て待て待て」」

零斗「土方さんA型だったんだ……、A型はアレ、なんかいいトコ沢山あったよな、なあ?」

霊夢「だよね、土方さん」

土方「オメーら俺に振んじやねーよ。わかんねーよ。ロクにしやべったことねーんだから」

零斗「テメエA型だろーが!適当でいいからなんか自分のいいトコ言えよ!」

土方「お前、俺が言ったら自画自賛してるみてーでなんか変なカンジになるだろーが

！お前らが言えや！」

霊夢「んなこと気にしてる場合じゃないわよ！」

零斗「なんで俺達がテメエのいい所発掘しなきゃなんないんだよ!!この恥知らず!!A型は恥知らずなのか!!」

沖田「そうでさア、A型は恥知らずなんだから汚くてもやってけるでしょう。だから死ぬな〜」

知弦「死んだらA型はマヨラーで恥知らずって明日の新聞に乗るわよ。だから死んじゃダメよ」

霊夢「説得になってないわよ！」

姉「死にます」

零斗、霊夢、土方「二「待って待って待って待って待って」」

再度飛び降りようとするうららの姉を三人は制止し、何とか説得しようとする。

零斗「あのアレ、A型はアレ、前髪がAを逆さまみたいになってるよな」

土方「完全に俺限定だろーが!つーかそれいいトコ!」

霊夢「ひろがらない、パサつかないわよね」

土方「シャンプーのCM!」

知弦「局長法度を守らない人を斬りたくなってしょうがなくなるわね」

土方「いやそれただの危ない人!! って誰が危ない人だゴラア!!」

零斗たちが説得? をしているがあまりうららの姉に効果はせず、土方にただツツコミを入れられるだけだった。

しかし、さつきから近藤の姿が見当たらない。零斗達は辺りを見回すと、階段の近くで近藤がうずくまっていた。

霊夢「ちよつとツ! ゴリラ、何やってんの! 説得に参加……」

零斗「……アレ、なんか泣いてない?」

うずくまっている近藤を見ると何故か泣いていた。

近藤「いや泣いてねーよ」

零斗「いや、泣いてんじゃん」

近藤「泣いてねーっていつてんだろ、うっせーよ」

知弦「アレ何かしら」

霊夢「いやアレじゃない、ゴリラもひよつとしてAが……」

近藤「いや違うよ」

近藤が自分がA型では無いと霊夢に否定した時だった。

姉「死にます」

うららの姉は、そう言いながらとうとう飛び降りてしまった!

近藤「なんでだよオオオ!!」

近藤はうららの姉が飛び降りたのを見て思わず叫んでしまった。

近藤「今、何も悪い事言っていないよね! 明らかに俺と同じとわかって飛んだよね!」

零斗「言ってる場合じゃない!!」

零斗は近藤にそう返すと、うららの姉を追ってビル胸壁に向かう。ビルの胸壁に

向かいながら零斗は鎖を創り出すと土方に向けてなげた。

零斗「ちゃんと掴んどけよ土方!!」

土方「テメエもな!!」

土方が鎖を掴んだのを確認した零斗は鎖を掴みながらビルから飛び降り、ビルの壁に脚をかけて急激に落ちないようにスピードを調節して、飛び降りたうららの姉を追いかける。

そして――

零斗は、見事にうららの姉の手を掴んだ。下からは野次馬の人々の叫び声が響き渡り、うららの姉の手を掴んだ零斗はビルの中程で宙吊りになった。

姉「……放して」

うららの姉は小さな声で、だがハッキリと聞こえる声で零斗にそう言った。

姉「あなたが放さないなら私が放す」

零斗「で、新八に助けてもらってワケか」

うららの姉の言葉に零斗がそう返すとうららの姉は驚いた顔をして零斗を見上げた。

零斗「うららちゃんの目の前でビルから飛び降りようとするところに新八が来て、うららちゃんにいいトコ見せる、そういう事だろ」

零斗はうららの姉の魂胆を見破っていたのだ。

零斗「悪いが、新八にはこんなアクロバットは無理だ。……なんでここまでやった」

姉「……………」

うららの姉は少しの沈黙の後に、零斗にこう返した。

姉「す……、すいません。飛び降りるつもりはなかったんです。……つい入り込んで

勢いづいてしまって。素敵な、……手紙だったから。新八さんの……、皆さんの手紙。あれ皆さんで書かれていたんですよね」

零斗はうららの姉の質問に答えなかった。しかし、零斗の考えていることはうらら

の姉の前にはお見通しだった。

姉「わかるんです。私、ずっと一人で文字にばかり触れてきたから。不器用で大雑把、でも表情豊かで不思議なぬくもりがあつて、新八さんのために皆さんで頭を悩ませて書いているのが伝わってくるようで、あれは私宛じゃない皆さんから新八さんに宛てた手紙だったんですね」

「私の手紙はいつも自分に宛てた手紙でした。誰か助けてって、私に手を差しのべてくれって。手紙の相手なんて見てなかった。私は自分しか見てなかったんです。自分に宛てた手紙が返ってくるわけもなかった」

「不思議ですね。人は自分のために筆をとつても、臆病で小さくまとまったつまらない文ができてしまうけれど、誰かのためになら、いくらでも強く自由な素敵な文が書けるんです。自分じゃなく誰かのためになら、いくらでも強くなれるんです。新八さんと皆さんを見てそう思いました。だからそんな大切な事に気づかせてくれた新八さんに……、私も何かしてあげたいと」

「差出人は不明でいいんです。私ってわからなくても、うららちゃんのままでも、それでも新八さん宛てに手紙を書きたかった。でも……、届かなかったみたいですね、……私の手紙」

うららの姉の話の黙って聞いていた零斗は何かに気づいた。

それに呼応するかのように、うららの姉も自分が飛び降りたビルの向こうにあるビルの屋上に目をやった。

そこには、スケッチブックを持った新八が立っていた。

姉「新八さん」

うららの姉が思わず声を漏らしたときだった。

うららとうららの姉こときららと別れてから数日後。

妙「新ちゃん、お菓子もっ……?」

妙がいつも通り新八に差し入れをしようとしたときだった。

妙「アラ……、寝てる」

新八は机に突つ伏しながらグーグーといびきを立てて眠っていた。

妙「もオ、だらしないんだから」

妙は新八の事をそう言つてから、眠っている新八の後ろに近づき、机の上に置いてある物を確認した。

そして、妙は口元を緩めせると見守るように新八の部屋を後にした。

新八の机に置いてあったのは、きららとうらが、他の女の子に囲まれて笑顔になっている写真と、きららから届いた手紙の数々であった。

玉藻「ご主人様。部屋の飾り付け終わりましたよ」

零斗「じゃあネロの手伝い頼める？」

玉藻「了解しました♪」

ネロの次に声をかけてきた狐耳に巫女装束の女性、玉藻の前にそう言うのと玉藻はネロのいるツリーへと向かった。

ネロと玉藻はこの間零斗がたまたま見つけた『英霊召還』で遊び半分で召還した二人で、ネロは零斗のことを『マスター』、玉藻は『ご主人様』と呼んでいる。

そして零斗は二人を『女子を部屋に連れ込むのは禁止』という規則があるにもかかわらず、寮の自分の部屋で召還したため寮から追い出され、実家であるこの家に紫音を含めた四人で暮らしているのだった。

紫音「兄さん、こっちの料理は作り終わりました」

零斗「そうか、こっちもあと少しで終わるよ」

紫音は出来た料理を皿に盛り付けながら言ったので、零斗はそう言いながら最後の仕上げであるケーキに苺を乗せながら答えた。

零斗「よし。完成だな」

零斗は出来上がったケーキを冷蔵庫にしまいながら、テーブルに並んでいる大量の料理を見ながらそういうのであった。

紫音「たくさん作りましたけど足りませんか？」

零斗「まあ明久とか今日参加する奴らも色々持つてくるって言ってたから大丈夫だろ」

ネロ「余はマスターの料理が食べられるなら問題は無いぞ！」

玉藻「まあ私もネロさんと同じですね」

ツリーの飾り付けが終わった二人も零斗と紫音の会話に参加してきた。

零斗「二人ともお疲れ様」

ネロ「うむ！余は頑張ったのだ。故にマスターに褒美を求めるのだ!!」

玉藻「あ、ネロさんずるいです！なら玉藻さんもお願ひしますよ!!」

紫音「兄さん私も」

零斗「はいはい、少し待ってて」

零斗はそう言うのと台所のテーブルの上に置かれているクツキーの入ってる小さな袋を三つ取るとそれを三人にそれぞれ渡した。

零斗「元から手伝ってくれたお礼にあげる用にみんなに配るやつとは別に作つといたんだ」

ネロ「うむ、流石は余のマスター！」

玉藻「ありがとうございますご主人様!!」

紫音「兄さんありがとう」

三人は零斗にお礼を言い、他のみんなが来るまで紫音たちは零斗から貰ったクッキーを食べるのだった。



パーティーの準備を終えた零斗たちは他のみんなが来るまでの間、居間にあるコタツでのんびりと過ごしていると玄関のチャイムが鳴った。

零斗「来たみたいだな。じゃあ俺が出るよ」

ネロ「うむ、わかったのだ」

零斗はネロにそう言うのと玄関のドアの前まで行き、ドアを開けるとそこには予想通り明久たち男性陣が荷物を持って立っていた。

明久「おはよう零斗。これ作ってきたパエリア」

雄二「コンビニで買ってきた飲み物だ」

秀吉「隣の和菓子屋で買ってきた大福じゃ」

康太「ピザ？のピザ」

鍵「俺はバイト先から貰ったフライドチキン」

守「姉貴のファンから貰ったお菓子の余り物」

中目黒「ポッキー」

アラタ「リリスたちと作った手巻き寿司」

一誠「おっぱいプリン」

どうやら男性陣たちは基本的におかずになりそうなものを買ってきたようだ。

零斗「いらっしやい。料理は出来てるからみんなのも居間に運んで」

男性陣『お邪魔します』

明久たちはそう言つて家の中へと入つてきた。

明久「にしても零斗の家って結構大きいよね」

康太「普通の家の二、三倍くらいの大きさはある……………」

守「もしかしなくても零斗の家って金持ちなのか？」

零斗「いや、別に俺の家は金持ちとかじゃない。この家は両親がタダで貰ったいわく

付きの屋敷なだけだ」

雄二「いわく付きって例えばどんなだ？」

零斗「いや別に大したもんじゃねえよ」

鍵「いやいや、そこは教えてくれよ」

零斗「まあ別にいいけどさ」

零斗は頭をかきながらこの家のことについて話した。

全員『メリークリスマス!!』

零斗の掛け声を切つ掛けとして乾杯を始めると皆料理を食べたり、? w i t c h のマ? カで真冬が無双したり、桃鉄で団結して一誠を破産に追い込んだり、大食い対決が始まったり、姫路作クツキーを食べて三途の川一步手前まで旅立つ者が現れたり、近藤がお妙に襲いかかつて撃退されて吹っ飛ばされたり、新八(メガネ(本体))が死んだり、銀時がケーキを食べたり、東城が九兵衛にミニスカサンタコスさせようとしてぶつ飛ばされたり、ギルガメツシュウがキャスト・オフしようとしてアルトリアにカリバラれたり、士郎がエミヤと料理対決したり、春虎が夏目と一緒に料理を食べたり、明久が革命したり、クーフリーンが死んだりなど皆思い思いに楽しんでいた。

そしてもちろんクリスマスを楽しんでいるのは零斗の家だけではない。例えば近くのバイキングの店では

トリコ・ルフィ・インデックス 「「おかわり!!」」

ゼブラ・ゾロ・ナミ 「「酒樽ごと持ってこい!!」」

元春・ピアス 「「とある魔術の禁書目録三期決定おめでとう!」」

店長 「もうやめてええええええ!!? (泣)」

店にある食料と酒を全て食い尽くそうとする勢いの麦わらの一味、美食四天王とその仲間たち、とあるシリーズメンバーがどんちゃん騒ぎをし、店長が悲しみの悲鳴をあげ

ている。

浅間神社では境界線上のホライゾンメンバー、禍終素学園教師陣、地獄の獄卒たちや白澤に桃太郎、ソレスタルビーイング、鉄華団が大量の酒や料理でどんちゃん騒ぎしていた。

オルガ「お前ら、止まるんじゃねえぞ……………」(『フリージア』が流れる)

三日月「こんだけかいほうが食ってる感じがして美味い」

刹那「俺がガンダムだ！」

トリー「俺の全てをさらけ出してやるぜ☆」

鬼灯「死ね淫獣」

白澤「お前が死ね鬼畜」

ジェレミア「私はオレンジではない！」

洋「キューティクル体操始めるぜ！」

オルガ、三日月、刹那が自分の名言を言ったり、トリーが全裸になったり、鬼灯と白澤がいつも通り仲が悪かったり、ジェレミアがオレンジとからかわれたり、洋がキューティクル体操を他の一部の酔っぱらいどもと踊ったりなどして楽しんでいた。

他にもハマトラメンバーと武装探偵社職員が酒場で一緒に飲み会したり、緋弾のアーア、最弱無敗の神装機竜、インフィニット・ストラトス、第35試験小隊の主人公達が

女の子たちと一緒に出かけたり、松野兄弟とイヤミがデカパン作の惚れ薬を飲んでしま
いとト子を襲おうとして吹っ飛ばされたり、ジャンヌとジークがデートしているのを剣
ジルとアストルフオが尾行していたり、キリトとアスナがホテル街へと向かったり、エ
リアスとチセが家でささやかなクリスマスパーティーしてたり、玄奘三蔵一行がサンタ
コスとトナカイコスしてケーキを売ったり、アスタリスクメンバーがクリスマスパー
ティーしてたりなどみんな思い思いにクリスマスを楽しんでいた。

それでは皆さん、メリークリスマス!!

正月は楽しいものである

ネロ「マスターよ、お年玉とはなんだ？」

正月のある日の昼間、零斗、紫音、玉藻がこたつでぐだぐだしているとネロが零斗にお年玉のことを聞いてきた。

玉藻「ネロさんいきなりどうしたんですか？」

ネロ「うむ！実は昨日近所の子供たちが親からお年玉というものをもらったと話しているのを聞いてどんなものか気になってな!!」

紫音「なるほど」

お年玉のことを聞いてきた理由に玉藻と紫音が納得していると零斗は飲んでいたお茶をこたつの上に置き、真剣な表情でネロに向き直った。

零斗「ネロ、お年玉について知りたいんだな」

ネロ「マスター？」

零斗「お年玉。それは七人の侍たちが最後の一人になるまで殺し合い、最後の一人に与えられる願望器と呼べたり呼べなかったりするものだ」

玉藻「どこの聖杯戦争ですかそれ!？」

おそ松 「それただのカツアゲじゃね!？」

とりあえず貰える可能性は低いが一応貰える可能性がFGOの10連ガチャで星5サーヴァントが3体来るぐらいはあるかもしれない。

カラ松 「フツ、お年玉? いいだろう。なら俺からはこれをやろうじゃないか」

カラ松がカツコつけながら渡してきたのはカラ松の写真集だった。

ネロ 『童女謳う華の帝政(ラウス・セント・クラウデイス)!!』

カラ松 「ぐわあああああ!？」

六つ子 (カラ松除く) 『カラ松うううっ!?!』

もちろんネロがそんなものを気に入る訳もなく、宝具を放ってカラ松の写真集とカラ松の服を切り刻んだ。

ネロ 「さて、次は誰が出すのだ?」

一松 「じゃあこれ、猫にあげる予定だったこの猫缶は?」

玉藻 「OUTです♡」

そう言うのと玉藻は呪術用の札を一松に向けて投げ、札が一松の額につくと一松の全身が燃え上がった。

一松 「ア」 アアアアアアアアア!？」

十四松 「兄さああああああん!？」

零斗「ちなみにOUTな理由はなんだ？」

玉藻「猫つて私の分霊のこと思い出してしまっただけでちよつと嫌なんですよ」

チヨロ松「そんな理由!？」

六人の松の内二人の松が渡したお年玉？はネロと玉藻に気に入られなかつたのでやられてしまった。残りの松は一体どんなお年玉を渡そうと考えているのか

十四松「じゃあ 僕からはコレ！」

そう言つて十四松が渡したのは年末に良くやつてる笑つてはいけないのお仕置きに使われているゴムバットと何かのボタンだった。

ネロ「これはどうだろうか？」

玉藻「少なくとも前の二人の二人のよりはまともなのでセーフだと思えますよ」

紫音「ならこれは合格ですね」

チヨロ松「なんか採点つけられてるんだけど!？」

いつの間にかネロと玉藻によるお年玉の採点が始まつていた。

おそ松「じゃあ俺からはこれをあげるぜ」

零斗「なんですかコレ……………」

おそ松は4人にそれぞれ今書いたばかりと言わんばかりの紙を渡してきた。

零斗の紙には『おそ松様の言うことをきく券』、ネロ、玉藻、紫音には『おっぱい触ら

せる券』と書かれていた。

おそ松「どうよ！即興で考えたけど結構良くな？」

零斗「去勢拳!!」

おそ松「はうつ!?!」

最低なことをドヤ顔でいうおそ松に零斗は玉藻から教えて貰った対男性特攻攻撃である去勢拳（拳という名でありながら蹴りとはどうなのだろうかという疑問はある）でおそ松の急所を蹴り上げた。

おそ松は蹴られた痛みのあまりに顔を青くし、蹴られた部分を両手で抑えてそのまま地面に前倒れになってビクンビクンしていた。

これを見ていた他の松もその痛みを想像してしまったのか顔を青ざめていた。

紫音「さて、大人しくお年玉を渡しますか？それともこの人と同じ目に……………」

チヨロ松・トド松「お金渡すんで勘弁してください!」

チヨロ松とトド松は紫苑の言葉に身の危険を感じ、二人で財布から一人に二千円渡るように差し出した。

ネロ「おお！これがお年玉というものか!!」

玉藻「わーい、玉藻さん大勝利です〜」

ネロと玉藻の二人はお年玉を手に入れたことを素直に喜んでいた。

零斗「そうなるな」

知弦たち第二生徒会メンバーを捜しながら他の餅つきしている生徒達の様子を見ている。例えば魔術師のグループでは遠坂凛が餅をつき、衛宮士郎が餅をこねていた。

凛が杵で餅をつく度にぺったん、ぺったんと音がし、その音を聞いた ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト がボソリと呟いた。

ルヴィア「ミス・遠坂の胸はぺったんこ」

凛「オラア!!」

クーフリーン「ぐはあっ!?!」

ルヴィアの言葉が聞こえた凛は杵をルヴィアに向けてぶん回した。

ルヴィアはそれをかわしたが代わりに隣にいたクーフリーンの鳩尾にクリティカルヒットした。

アルトリア「ランサーが死んだ!」

士郎「この人でなし!」

クーフリーンが倒れたのを見てアルトリアと士郎がお決まりのネタを言っていた。

また別の場所では明久、当麻の金があまりない二人が食費を浮かすために大量の餅をついていた。

明久「これだけ餅をつけば1ヶ月は持ちそうだよね」

当麻「そうだな。こんだけありやインデックスの奴もしばらくの間満足してくれらるろう」

そして明久と当麻はついた餅の山がある場所を見るとそこには口をリスのように膨らませているインデックスが座っており、餅の姿はどこにも見当たらなかった。

インデックス「とうまくこの餅すごく美味しかったよ」

明久・当麻「餅がああああー！？」

インデックスによつてついた餅がすべて食われてしまった明久と当麻が膝を付いて絶叫していた。

他にも生徒や教師達が餅をついたりそのついた餅を焼いて食べたりしていた。

そしてようやく零斗たちが知弦たち第二生徒会メンバーのいるところに行くと共に鍵と深夏が餅つきをしていた。

知弦「あらやつと来たわね」

零斗「すいませんもしかしてもう終わりですか？」

知弦「大丈夫よ。今のキーくんたちがやっるのが最初だから」

紫音「それは良かったです」

そう話している間に鍵と深夏は餅つきが終わってしまったそうで、つき終わった餅を置き、道具と餅を零斗たちに渡した。

深夏「私たちはこれで終わりだから次は零斗たちがやっていいぜ」

零斗「それじゃ俺がつくけど誰がこねる？」

ネロ「もちろん皇帝である余が一番最初である!!」

ということだ。零斗とネロが餅つきをすることになった。初めての餅つきということだ。中々上手く餅をつけないでいたが何回もやっていくうちに慣れてきたのか普通につけるようになってきた。

零斗「慣れると結構簡単だな」

ネロ「流石は余とマスターだな！まるで夫婦のように息がぴったりだな！」

零斗「はは、そうだな」

ネロが笑顔でそんなことを言い零斗は苦笑したが、零斗のことが好きな女子たちはその言葉を聞き逃すことなどなかった。

零斗「よし、これで完成だな。それじゃ次は誰が——」

玉藻「次は私がこねるのでご主人様またついてくれませんか？」

零斗「え？まあ別にいいけど」

紫音「ならその次は私ですね。よろしくお願いします兄さん」

零斗「え？」

知弦「じゃあ紫音ちゃんの次は私ね」

た料理のパーティーが行われ、餅以外にも教師達がコンビニで買った酒を飲んだり生徒達による餅の大きい大会などをやっているうち昼間から始まった餅つき大会があつたという間に夜になり、それぞれ家や学生寮に帰り始めた。

零斗「色々あつたけど今日も楽しかったな」

紫音「そうですね。やっぱりこの学園はいつも賑やかで楽しいのがいいですよね」

ネロ「うむ！マスターも楽しんでたみたいで余も嬉しいぞ！」

玉藻「そうですね。今日はとても楽しい日でしたね」

零斗たちは話しながら帰っていた。

最近この世界に来たネロと玉藻の二人もこの生活に慣れてきてくれたのか今日を楽しく過ごしてくれたようで零斗は安心していった。

紫音「そういえばお父さんとお母さんからお年玉がありましたよね」

零斗「ああそういえば貰っていたの忘れてたよ」

朝に零斗と紫音宛に両親からのお年玉があつたのだが、まだ中身も開かないで机の上に置いたままにしていたのだった。

零斗「家についたら開けてみようか」

紫音「そうですね」

そして家についた零斗たちは、ネロと玉藻が風呂に入り、紫音は貰った年賀状の確認、

零斗は明日の朝ごはんの下ごしらえをしてから両親から届いたお年玉を確認した。お年玉が入っているポチ袋の中には五千円札と金色の札が三枚入っていた。

零斗「お金は正直嬉しいけどこの札はなんだろう？」

零斗はお金とは別の四枚の札を見るが特に金色以外にこれといった特徴はなさそうだ。

零斗「まあ明日にでも二人に聞けばいいか」

零斗はそう言って札を机の上に置き、部屋を出ようとした直後、突如札がバチバチと光り始め、それに気づいた零斗は危険と思い札を捨てようとしたがその前に光が部屋を包み込むまでになり、零斗はそのあまりの眩しさに目をつぶってしまった。

ネロ・玉藻「マスター（ご主人様）!!」

紫音「兄さん何があったんですか!？」

零斗の部屋からの突然の光に気づいた三人が部屋に来た時には既に光が収まっていたが、部屋を見て固まっていた。そして目が慣れた零斗もまた自分の部屋を見て固まってしまった。何故なら

「アーチャー、第六天魔王織田信長参上じゃ!!」

「セイバー、沖田総司です!! いえーい土方さん見えます?」

「アサシン、静謐のハサンです。どうぞよろしく願います」

「バーサーカー、清姫です。これからよろしく願いますね旦那様？」

部屋には4人の美少女がおり、台詞からネロたちと同じサーヴァントのようだ。

零斗「なんでさ……………」

零斗はこの状況に衛宮士郎の口癖を言うしかなかったのであった。



それは、ある日の放課後の禍終素学園校庭

紫「というわけで学園の行事として東京に旅行します」

生徒全員『マジで!?!』

学園長のお墨付きによる学園全体での旅行。

ネロ「なに？余たちも行けるのか？」

エミヤ「そのようだな」

玉藻「こうしちゃいられません！急いで旅行の準備をしなくては!!」

クローリン「おい、ほんとにこいつ来ても大丈夫なのかよ？」

ヘラクレス「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!」

生徒達以外にもサーヴァントたちも参加する旅行。

洋「よし！まずはけだまんを探すために東京湾にいくぞ！」

裕太「はい先生！」

圭「いませんから東京湾にそんな生物！」

リーシャ「ルクス！上野の動物園にいくぞ！」

ルクス「は、はいリーシャ様！」

アルトリア「土郎、秋葉原にて私たちのコラボカフェがあるそうですよ！」

土郎「セイバー、そのカフェはもう他の作品のコラボに変わってるぞ」

アルトリア「なん、ですと……………」

トリー「よし！お前ら！今日は秋葉のエロゲショップを周りまくるぞ！」

『イエーイ!!』

刹那「俺がガンダムだ」

ロックオン「お前がお台場の等身大ガンダム楽しみにしてるのわかったから少し静かにしろ」

皆、それぞれ行きたいところに行ってそれぞれのしたいことを楽しんでいた。

しかし、楽しい旅行の途中で彼らを襲う者達が現れた。

零斗「コイツらいきなり襲ってきやがったぞ！」

銀時「テメエらには、俺の仲間を傷つけさせねえ!!」

当麻「テメエらのくだらねえ野望なんて俺のこの右手でぶち壊す!」

襲つて来た侵略者が通つてきた門を見て驚愕するもの

紫「どうしてこんな所に門が現れるのよっ!!」

アインズ「どうやらこの世界にまた新たな争いが始まってしまふようだな」

マーリン「これもまた運命なのかな」

そして舞台は門の向こう側にある異世界へ

『GATE編』 始動

GATE編 異世界の戦い 第一部

GATE編第一話 そうだ、東京へいこう

ある日の放課後、禍終素学園校庭にて全生徒全教師たちが集まっていた。

零斗「今日のこれってなんで集まってんの？」

霊夢「知らないわよ。紫がなんか全員に話があるからここにいるだけなんだから」

魔理沙「まあどうせ紫のことだからまたなんかやるんだろうな」

学園長である紫からの話ということでみんな集まっているがまた何かイベントをや
るのだろうかという軽い気持ちであった。

藍「全員静かにしろ。これから紫様のお話がある」

紫「みんな集まっているわね」

紫の式神である藍と紫が生徒達の前に立つと話していた生徒達も静かになり紫の話
を聞くようにしていた。

紫「まあ細かい話は後で各々のクラスの担任に聞いてもらおうとして、要点だけ言うわね」

紫は一度コホンと咳払いしてから言葉が続けた。

紫「学校行事として学園の全員で来週に東京に旅行しに行きます」

生徒全員『マジで!』

紫「マジです。というわけであとの詳しい話は各々の担任から聞いてね。私は旅行の手続きとか色々あるのでこれで失礼するわね」

紫はそう言うのとスキマを作り出して、そのままスキマの中へと入っていった。紫が消えたあとには生徒達は旅行の話で大いに盛り上がっていた。

アラタ「よっしゃ! 何持っていこつかな」

くりむ「知弦、東京行くならデイズニー行こうよ!!」

知弦「アカちゃん。デイズニーは千葉県にあるのよ」

くりむ「え、そうだったの!」

真冬「真冬はやっぱり秋葉ですな!!」

圭「猫カフェとかいきたいなあ〜」

刹那「ガンダム」

セリナ「いろんな場所で写真を撮るのもいいですよね」

神楽「美味しいものがたくさん食べれたら私はそれだけでいいアル」

凜「東京ならもつと安くて質のいい宝石が手に入るかしら?」

しかし、生徒の一部というか結構な割合で深刻な顔をしている者達があった。

霊夢「旅行ってなによ、こっちは東京で遊ぶお金なんて全くないのよ」

銀時「だろうな。俺も昨日パチンコで有り金全部消えちまったんだよ」

鍵「いや先生のは完全に自業自得ですよね？」

銀時「心配するな。そういうことも考えて今町で短期バイト雇ってもらえるように学園長が町内の人達に頼んであるからな」

雄二「つまり遊ぶ金が欲しいなら働けってことか」

銀時「まあそういうことだ。学校の掲示板にバイトの要望があるから興味あるやつは後で見えておけ」

神楽「銀ちゃん！東京って私たちは東京のどこに行くアルか？」

銀時「一応普通科は銀座と秋葉原の二つに行く予定だ。機動科の奴らはお台場らしいけどな」

アラタ「お台場ついたらあれだよな等身大ガンダム」

十六夜「刹那の奴が暴走するだろうな」

輝夜「妹紅のバカが事故つたら面白いわよね」

妹紅「お前が事故れ引きこもり」

銀時「まあとにかく旅行は一週間後だから、その間に必要なもんは準備しとけよ」

はい、と全員が銀時の言葉に返事したのを確認すると銀時は読みかけていたジャンプを読むのを再開した。

そして生徒達はアルバイトを受けるために教室を走って掲示板の元へと行くのだった。



零斗「というわけで、来週の旅行のためにバイトをしようと思ってるけど、みんなはバイトするのか？」

零斗は家に帰って夕食の時間になった時に新しい住居人であるサーヴァントたちと紫音にバイトをするかどうか聞いた。

紫音「私は学園のカフェでウェイтрレスのバイトします。せっかく東京に行くなら可愛い服とか欲しいですし」

沖田 (Fate) 「私は団子屋の売り子のバイトしますよ」

玉藻 「私は清姫さんと近くの定食屋でバイトですね」

信長 「わしはまだきまっとらん」

静謐 「私もまだです」

ネロ 「もちろん余もまだだぞ！」

零斗 「そうか」

清姫 「旦那様？今日の夕食はどうですか？」

零斗 「ん、今日も美味しいよ清姫の料理は」

清姫「ふふ、ありがとうございます」

同居人が増えたことで料理を作る量が増えたのだが作れる人も増えたので料理を作るのが当番制になった。

零斗、紫音、玉藻、清姫の4人が交代で料理を作っている。

玉藻「ところでご主人様はなんのバイトをするつもりですか？」

零斗「神社の掃除が三つ。喫茶店のウェイターが一つ。ラーメン屋が一つだな」

信長「結構あるのお」

零斗「まあ神社は霊夢と早苗と朱乃さんからの頼みだけだな。それにラーメン屋はなんか人気無かったからな」

沖田 (Fate) 「また女の人ですか」

ネロ「まあマスターだから仕方ないのだ」

零斗「何その人を女誑しみたいない方。霊夢たちは親切心からの頼みなんだから」

玉藻「まあそういうことにしといてあげましょうか」

紫音「というか霊夢さん給料払えるんですか？」

零斗「そこは紫が払ってくれるそうだから問題は無い」

話が終わると同時にみんな夕食を食べ終え、食器を流しに置いて零斗が洗い始め

ヴァイセ先生に襲われかけ、それを見たバラキエルに追いかけて回されて1日が終わった。

4日目? アキオの店の手伝い。同じく働きに来たシャルロットのメイド服を褒めたら顔を赤くしたので可愛いと思つたらアキオと店に来ていた百代に蹴られた

5日目? ライカと志乃と共に戦闘訓練。その途中、零斗は転んでその時に二人の胸を揉んでしまい、それを見たアカメとエスデスに見つかつて一日中追いかけられた。

6日目? 言峰綺礼が経営するラーメン屋でバイト。まかないで出された麻婆ラーメンが美味かつた。ただそれを食べているのを見たギルガメッシュとクーフリーンが信じられないものを見たような目で見ていたのが気になった。

7日目? 知弦とマルギツテの二人と旅行に持つていくための日用品を買いにいった。それを須川に見られ、非リア充軍団に襲われ処刑されそうになった。

零斗「まあ色々大変だった」

鍵「なんか想像できそうだから深いことは聞かないことにするわ」

そんな話をしてしていると前回同様紫が生徒達の前に立つたので静かになった。

紫「みんな揃つてるわね? それじゃさつそくいくわよ!!」

トリー「Hey先生! どうやって東京までいくんですか?」

紫「港に寝台電車ならぬ寝台客船があるからそれでいくわよ」

結弦「あんたが吐くのかよ!」

殺せんせー「それじゃ皆さん。先生が用意したしおりをしつかり持つていってくださいね」

E組全員『しおりがデカすぎて持てないんですけど!』

やはり旅行ということで余計なものを持つてくる生徒の姿がちらほら見える。

零斗「やっぱ旅行って聞いてみんな色々持つてきてるな」

新八「本当にそうですよね。ちゃんと規則を守らなきゃいけませんよね」

銀時「そういうお前らは違反してるモン、なんも入ってねーのな。こういう時にボケないから眼鏡とか地味主人公とか言われるんだよ」

零斗・新八「余計なお世話だよ!」

そうこうしているうちに全員の荷物検査が終了し、港にある寝台客船にのって東京へと向かうのだった。

GATE編二話 東京観光しようじゃないか

紫の発表により学園全員による東京旅行。今は東京に向けて船が出航して1時間。深夜なので明日に備えてみんなそれぞれの寝室で寝ている――

零斗「よっしやあ、一上がり！」

アラタ「くそ、あと少しだったのに!？」

鍵「そして俺も上がりだ」

十六夜「ヤハハ、俺もだ」

明久「3人とも早くない!？」

当麻「不幸だー!？」

――などということは無い!!

旅行の前日とはテンションが上がるもので寝付けることができなないので生徒達はこうしてトランプをやったり、どこをまわるのか友人と話していたり、酒盛りしていたりなど生徒も教師も好き勝手に過ごしていた。

エルネステイ「ああ……東京の自衛隊基地にあるロボットたちを見れると思うとワクワクが止まりません」

アデイ「うう……エルくんが冷たくて硬いものばかり愛でてるよう………」
キツド「ハア………」

セイバー「士郎、東京に行くなら秋葉原に行きましょう。今なら映画記念で私たちのコラボしてるカフェがあるそうです」

士郎「セイバー、そのカフェもう終わってるよ」

セイバー「なん、ですって……」

しかし真面目な人達というのはどこにでもいるもので、彼らを注意する者達はいるのだった。

リリス「みなさん！明日は朝から回るんですからいい加減寝てください!!」

奏「みんな、明日大変になるから寝た方がいいわ」

千冬「貴様ら寝ろ」

『ほーん』

流石に眠いのか注意されるとみんな大人しく自分たちの寝室へと移動していった。

この客船は学園の全員が入れるほどの大きな客船であるが元は攘夷戦争で使われた戦艦で格納庫には学園の生徒達が所有しているMSやKMF、幻晶騎士、カタクラフト

深夏「私はゲーセンで少し遊びたいな」

早苗「私はプラモが欲しいので模型店に」

霊夢「何でもいから何か食べたい」

鍵「そういう零斗はどこか行きたいとこないのか？」

零斗「俺？俺はちようど今開催されてるらしい地下の裏市場に行きたい」

『思ったより危険そうな場所行こうとしてる!?!』

零斗の行こうとしている場所が危険そうで鍵たちは驚いていた。

零斗「いや裏市場って言っても危険じゃないよ。ただ魔獣やら妖刀やら魔剣やらちよつと表じや出せないようなものが売ってるだけだから」

鍵「充分危険じゃねえかよ!?!」

零斗「他にも勝手に動くガンプラやら一ヶ月で育つ米とか組手ができる人形とか面白そうな道具が売ってるんだぜ？」

『よし行こう』

鍵「うちの女性陣は行動力溢れてるなあ!!」

裏市場に売ってるものに興味を惹かれたのか霊夢たちもそちらに早速行こうとしていた。



場所は移動して秋葉原の地下にある裏市場。天人やら異世界人といった人間以外の人も珍しいもの見たさなどで来ていた。

檻に入った狼などといった小型のものから翼竜などの大型のものがおり、魔剣やら魔銃などといった武器が並べられていたりなど色々なものがあつた。

零斗「おじさん。これください」

店員「あいよ。毎度あり」

零斗は店に売ってる特殊弾丸を色々買っていた。武器も弾丸も零斗自身の力で作れるが、こういっただころのものは特別製なので一般的な性能のものしか造れないから買う必要がある。

零斗「さて、次は何買おうかな」

零斗は市場で売ってるもので興味が引かれるものがないか探しているとイヤンクックやボルボロスなどといったモンスターによる競馬のようなものが行われているのが目に入った。

銀時「いけえーイヤンクック!!お前に全て賭けてんだ!!」

長谷川「負けんないヤンガルガ!!」

イヤミ「チミに全財産賭けたザンスよクルペッコ!!」

六つ子『こいこいこいこいこい!!』

零斗「……別の場所見よ」

大人達の汚い姿を見てしまった零斗はそれを見なかった事にして別の場所へと向かった。

そして少し歩いてみると零斗の前に謎の女性が近づいてきた。その女性は片手にクーフリーンと同じ赤い槍を持って紫色のタイツを着ており、口元は布で隠されていた。

零斗「えつと、何か？」

謎の女性「何、ただお前に渡したい物があるだけだ」

零斗「それってなんですか？」

謎の女性「既に渡してる」

零斗「え!？」

女性が指さした方を見ると零斗の手元に一本の剣があった。驚いて手元にある刀を凝視する零斗だが説明を求めようと顔を上げるとそこには既に女性の姿はなかった。

零斗「何だったんだらう今の女の人？まあタダで剣を手に入れられたんだからいいか」

心残りはあるが別に怪しいセールスとかではなさそうだから一応後で士郎に見てもらってこの剣が危険かどうか確認してもらえばいいと考えた零斗は剣を腰に差してそ

のまま市場を見ることにした。

クーフリーン「くたばれ弓兵!!」

エミヤ「貴様に負ける私ではないこの狗が!!」

凜「アンタらこんな所で喧嘩するな!!」

クーフリーン・エミヤ「グホオツ!!」

新八「ぶはあっ!?!」

鍵・雄二「どうした新八!?!」

守「なんかR18禁に加工された寺門通のフィギュア見たらいきなり鼻血出して気絶したんだが」

銀時「しょうがねえよ。新八は童貞なんだからこういった刺激には弱えんだよ」

殺せんせー「おお、これは素晴らしい。ぜひ買っておかなくては・・・」

松平「おい、買ったらおじさんにもちよつと見せてくれよ」

タツミ「マインの方が世界一可愛いにきまってんだろ!!」

ウェイブ「バカ野郎!クロメの方が宇宙一可愛いに決まってんだよ!!」

マイン・クロメ「恥ずかしいからヤメなさいよこのバカアア!!」

タツミ・ウェイブ「ぎゃああああああ!?!」

道中クーフリーンとエミヤが喧嘩をしてそれを凜によるガンドで止められたり、新八

零斗「そうだな。やっぱ東京には美味しいものが多いな」

早苗「甘いものはすばらしいですよね」

鍵「お前から食いすぎじゃね？」

零斗、霊夢、早苗の3人が食後のデザートということで駅前ガンダムショップで買ったガンダム焼きを食べていた。それを見た鍵は呆れていた。

霊夢「よく言うじゃない。女の子は普通の胃袋だけじゃなくて甘いもの専用として別腹を持つてるって」

早苗「そうですねよ杉崎さん。そういった女の子のことがわからないとハーレムなんて一生つくれませんよ」

鍵「マジか!? それじゃあ女の子のことを理解すればハーレム王になる夢も叶うってことか!!」

深夏「そんなわけないだろ」

華扇「そんなので出来たら殆どの人がハーレム王になっちゃいますよ」

鍵「だよな」

鍵も本気にしてなかったようであっさり退いた。

そして秋葉の街には2-Zの生徒以外の学年の生徒達も来ていた。

トリー「よーしお前から!! さっそくエロゲショップで今日発売の『お姉さんが快樂天国

にイかせてア・ゲ・ル♡」を買いにいくぜ!!」

境界線上のホライゾン男メンバー＋学園の変態たち『おぉー!!』

武市「青少年権限育成条例改正案反対イイイイ!! 表現を律する暇があるなら己の心を律する術を覚えよ!! 漫画もネットもアニメもない時代からロリコンは存在しているんだ!! そこに蓋をするではない。向き合い律する心を育むのが大切じゃないのか!! ちなみに私はロリコンじゃないフェミニストです」

また子「マジで死んでくださいよロリコン」

武市「だからおめえー、ロリコンじゃねえって言ってるだろうが」

松野兄弟『ま、負けた・・・』

リーシャ「ルクス、アレはなんだ？」

ルクス「リーシャ様。アレは見てはいけないものです」

クルルシファー「アレはただの敗者よ」

箒・セシリア・鈴「二一夏ああ!! 逃げるなあああ!! 二」

一夏「ああああああ!!?」

ラウラ「シャルロット、クラリツサに聞いたのだが男はコスプレとやらが好きらしいぞ」

シャルロット「ええとラウラ? その人の言ってる事って本当なのかな? 前もそれで酷

「目に——」

ラウラ「実際零斗先輩もそういうものに興味を示していると聞いたことがあるぞ？」

シャルロット「ラウラ？ 僕ちよつとその服屋に行つてくるね」

姫路「明久くん。良かったらお昼にこれをどうぞ♪」

明久「あ、ありがとうね姫路さん・・・」

白雪「キンちゃん退いて！ ソイツ殺せない!!」

アリア「退きなさいよバカキンジ！ ソイツに風穴開けられないじゃない!!」

キンジ「頼むからお前ら喧嘩するなよ!？」

トーリが点蔵たち境界線上のホライゾンメンバーと一誠たち学園の変態たちを連れてエロゲショップで新作エロゲを買いに行ったり、武市が駅前で青少年権限育成条例改正案反対の演説をやつてまた子に呆れられたり、賭けで惨敗した松野兄弟をみたリーシャが気になってルクスにたずねたがルクスとクルルシファーはリーシャにそれを見ないようにはしたり、一夏が好きな箒、セシリア、鈴がデートするために一夏を捕まえようとしていたり、ラウラがコスプレ専門の服屋で服を買おうとするのをシャルロットが反対しようとしたが零斗がコスプレに興味があると聞くと真つ先に店の中に入ったり、姫路が明久に手作り料理を渡して明久が冷や汗をかいたり、白雪とアリアが道の真ん中で喧嘩しそうになるのをキンジが止めようとしたりなどどこいつてもこの学園の生

徒たちはバカなようである。

零斗「どこいつてもうちの奴らって問題しか起こさないよな」

霊夢「すつごい今更よねそれ」

ガンダム焼きを食べ終わった零斗たちは街を歩いていると禍終素学園の生徒たちが騒いでいる姿があちこちで見られていた。

零斗「まあどこに言っても変わらないってのはいいことなのかもな」

鍵「はは、そうかもな」

深夏「そのおかげで街が酷い目にあってるけどな」

華扇「まあ学園長が何とかするでしょうから大丈夫だと思いますが」

早苗「そうですね。ところで霊夢何持ってるんですか？」

霊夢「コレ？何かそこに落ちてたから拾ったのよ」

早苗が霊夢の持ってる物が何か聞いてきた。それは黒光りに光る鉄で出来た球体だった。

零斗「おい、それってどう見ても爆だ——」

ドオー——ン!!

霊夢の持っていた爆弾が爆発し、それは零斗たちを巻き込んだ。

ちなみにこの爆弾は相良宗介がパン屋の店主を拳銃で脅している時にかなめにハリ

かっていた。

鍵「いやあ、あいつらも命知らずだよな」

明久「まあ気持ちもわからなくもないけどね」

雄二「なんだ明久？お前も覗きに行きたかったのか？」

明久「イヤイヤ！そんなことしたら命がいくつあつても足りなくなるから!!」

そんな感じで話していると上から何かが降ってきて、それが露天風呂に落下すると四つの水柱ができ水柱が消えた時にはボコボコにされた一誠たちが浮かび上がってきた。

零斗「予想通りだけど早かったな」

一誠「クソっ!!あと少しだったのによ!!」

アラタ「もう一度チャレンジするぜ!!」

そう言つて一誠たちは今度はムツツリーニ、近藤、東城、土御門元春、青髪ピアスらを入れて覗きに再度挑戦するのだった。

零斗「ところでお前らなんか面白い物した？」

雄二「俺は頑丈な錠前を大量に買った」

明久「僕は限定版のゲームソフトが安く買えたよ」

鍵「俺も限定版のエロゲとギャルゲ買えたな」

零斗「明久と鍵のは予想出来たけど雄二は何でだ？」

雄二「……翔子の奴がまた俺の部屋に侵入してきたんだよ」

鍵「なんだ惚気かよ」

明久「くたばれ雄二」

零斗「彼女の惚気がしたいなら他所でやれ」

雄二「今の話でどうして惚気になるんだよ!？」

雄二が彼女の惚気?を言ってきたので零斗たちは舌打ちするのを雄二はツツコミした。

雄二「つうか、そういうお前はどうかんだよ零斗?」

零斗「俺?」

明久「そうだよ。零斗って今女の子7人と一緒に同じ屋根の下で一一緒に暮らしてるよね?」

鍵「何も無いってことないだろ?」

零斗「いやいや、紫音たちには好きな人がいるんだから俺のことなんて思ってるわけな——」

カコーン!! (零斗に大量の風呂桶が当たった音)

零斗「げぼらっ!？」

風呂にいた男子達が投げた風呂桶が見事に全て零斗の顔に当たりそのまま湯の中へ

と沈んでいった。がすぐに浮かび上がった。

零斗「つて何すんだテメエら!？」

銀時「うつせえんだよこのクソガキ!! 銀さんはなあ、お前みたいな鈍感系を見るとイラつくんだよ!!」

新八「あんた少しは女心とか理解しろよ!!」

零斗「黙れ腐れ天バにメガネ掛け機!! 一生彼女できそうにないテメエらにアレコレ言われたくねえんだよ!!」

銀時「あ、言ったな? 銀さんが気にしていること言ったなこの野郎」

須川「おい!! この裏切り者をこの場で処刑するぞ!!」

『おうよ!!』

零斗「上等だオラア!! かかってこいや!!」

こうして男湯が風呂桶が飛び交う戦場へと変貌するのだった。

銀時「くたばれこのクソガキがあああ!!」

新八「オラアアア!!」

零斗「当たらなければどうということはない!!」

当麻「ドムっ!？」

春虎「ギャンっ!？」

沖田「土方シールド!!」

土方「がはっ!? ってめえ総悟! 俺を盾にすんじやねえよゴラア!!」

沖田「土方さんが盾に向いているV字分けしてるからいけないんでさあ」

土方「そうかなるほど。ならてめえもV字に分けてやらああああ!!」

クーパーリン「坊主、お前もマシユの嬢ちゃんたちの裸が見たいんだろ?」

ヘクトール「おじさん達がちよちよいと向こうにマスターを投げてやるよ」

立香「いやいや!? そんなことしたら俺邪ンヌたちに殺されるよね!」

エミヤ「ええいやめないか君たち!!」

トリー「なら女装すりやいけるよな!!」(武蔵アリアダスト教導院の女制服姿)

東城「なるほどそれは名案ですね」(胸を隠すようにタオルを体に巻いたソープ嬢の姿)

近藤「よし、もう1度再挑戦しようじゃないか!!」

ホライゾン「Jud・トリー様はお帰りください」

九兵衛「うがああああ!!」

お妙「死ねゴリラああああ!!」

『ぎゃあああああ?!』

当麻や春虎のように戦いに巻き込まれて風呂桶が顔面に当たって気絶したり、土方を

幽香「花符『幻想郷の開花』!!」

華扇「龍符『ドラゴンズグロウル』!!」

妹紅「炎符『フェニックスの羽』!!」

早苗「奇跡『神の風』!!」

鈴仙「波符『月面波紋(ルナウエーブ)』!!」

輝夜「神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』!!」

文「風符『風神一扇』!!」

神楽「くたばれオラア!!」

夏目・京子「急急如律令(オーダー)!!」

リリス「みなさんのバカー!!」

アリン「難しいのね」

ミラ「変態っ!!」

飛鳥「燃えなさいっ!!」

耀「えい」

遠坂「このっ!!」

アルトリア「カリバー!!」

邪ンヌ「『吼え立てよ、我が憤怒(ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン)』!!」

新八「確かにそうですね」

アラタ「あと二日もあるんだから面白おかしい旅行にしようぜ」

一誠「そしてエロもだ!!」

当麻「それは相変わらずなんだな」

春虎「どうしようもないな」

十六夜「ヤハハハ、全くだな」

零斗たちはそうやって談笑しながら男女ごとに別れた部屋へと歩いていった。

——この時、このありふれた楽しい日常が終わってしまうなどと誰も思いもしなかったのだった。

GATE編三話 旅行の夜は就寝時間が過ぎても眠れな

い

時間は夜の十時。普通の学生旅行ならば生徒達は既に就寝している時間だがそこはこの禍終素学園の生徒たち。大人しく就寝している訳もなく

トリー「それじゃあ第一回！『男達による夜の恋バナ合戦』を始めるぜ!!」

『『『イエー~~~~~イ!!』』』

こうしてバカ騒ぎをするのだった。

ちなみにここには高等部男子生徒が全員揃っている。

部屋割りは高等部、中等部、小等部それぞれ男女ごとにそれぞれホテル一層ずつ分かれていて教師たち含めてホテル七層を借りているのだ。ちなみに他の客とかいたら絶対迷惑かけるだろうと予想していた紫はホテルを丸ごと借りてるので特に問題は無い。

トリー「よーし、最初は俺からだな！俺はもちろんホライゾンが1番LOVEだぜ!!
次にオパーイ!!」

ウルキアガ『いや、それは知っていることなのだが』

ネシンバラ「なんの面白もないね」

司会をしたトリーが最初に答えたがそれは全員が知ってる事なので特に面白くもなかった。

トリー「んじゃー次は点蔵な！ぶっちゃけメアリともうS〇Xした？」

点蔵「唐突にとんでもないこと聞くでござるなトリー殿!？」

トリーが最初に選んだのは点蔵・クロスユナイト。点蔵は恋人にメアリという金髪巨乳美少女がいるリア充パシリ忍者である。

アラタ「まあいいじゃねえかよ先輩。ここはぶっちゃけちやいませしょうよ」

沖田「そうですね点蔵さん、どうせどこぞの奴らみたいに毎晩スターバーストストリームしたり夜の一刀修羅してるんでしょ？」

キリト・一輝「いやしてないんだけど!？」

沖田の言葉に反応したのは2ーSの桐ヶ谷和人ことキリトと2ーXの黒鉄一輝。

彼らにはそれぞれ2ーSの結城明日奈ことアスナと2ーXのステラ・ヴァーミリオンという美少女の彼女がおり、学園でも有名なバカツプルである。

零斗「いやそんな否定しなくてもいいから。みんな知ってる事だし」

明久「そうだよ今更否定したってなんの意味もないよ」

ムツツリーニ「殺したいほど妬ましいっ!!」

青髪「視線だけで人を殺せたらええのにつ!!」

キリト「イヤイヤ！そんなことしてねえよ!」

一輝「そうですね！そんな毎晩だなんて!」

心外だ、と言わんばかりにキリトと一輝は否定するが

キリト・一輝「週に五回しかしてないですよ!!」

『結局やることやってんじやねえかよ!!』

キリト・一輝「ぶっ!」

やることはやっていることを暴露したキリトと一輝の二人にドロップキックをキメた。

一誠「まったくそんな彼女とやりまくってること自慢しやがって。新八なんて二年経つても童貞のままなんだぞ」

新八「おい、なんで原作の僕の話を出してんだよ?」

零斗「気にすんなよ新八。お前が一生童貞なのは原作から決まってることなんだから」

新八「誰が一生童貞じゃゴラアアアア!!」

銀時「やかましーんだよ。テメエら発情期ですか?コノヤロー」

新八がブチ切れて零斗に殴りかかろうとしたところ、騒ぎを聞き付けてきたのかいちご牛乳のパックを片手に銀時が部屋に入ってきた。

銀時「新八が一生童貞なのは既に決まってることだろうが。あのゴリラ作者だつてその気で原作の新八にヒロインがいねえんだから」

雄二「いや、メタ発言やめろよ!!」

タケル「それにまだそうとは決まってるんだからそういうことも言っちゃまずいだろう!？」

銀時「気にすんなもしもの事があつたら腹切るから。作者が」

ハヤト「ダメだからな!作者が切腹したらこの小説終わっちゃうから!!」

銀時のとんでも発言にツツコミを入れる雄二、タケル、ハヤトであった。

ちなみに銀時は生徒達が寝ているか確認するためにここに来ていたが本人はどうせ起きているだろうと確信していたのでついでにサボろうと考えていた。

恭介「ところで銀さんは誰か恋人とかいるのか?」

日向「いやいや棗先輩。それを聞くのは酷つてもんですよ」

近藤「そうだぞ、こんな糖尿病真つ逆さまな男を好きになる女性なんているわけがないだろう」

銀時「黙れストーカーゴリラ」

近藤「ストーカーじゃない!ちよつと恋愛の仕方が粘着質でしつこいだけだ!!」

古城「それを世間一般でストーカーっていうんじゃないやねえっすか?」

冬児「お、流石はストーカー被害にあつてる男は言うことが違うな」

古城「いや、姫終はそういうんじやねえっすよ・・・」

近藤に2ーBの暁古城がツツコミを入れるが古城も一時期1ーKの姫終雪菜にストーカー紛いのことをされたのでそれを冬児にからかわれるのであった。

零斗「ちなみに噂で聞いたんだけど鍵が幼女三人を連れて商店街に買い物してたつて噂聞いたんだけどそれつてマジ？」

零斗がふと思ひ出したことを鍵に尋ねた瞬間、鍵を囲むように非リア充軍団がそれぞれ武器を構えていつでも襲いかかれるようになっていた。

鍵「しまった!?!逃げ場がなくなった!!」

須川「さあ杉崎、正直に話してもらおうか？」

鍵「いやそれはプランとその妹二人のロムちゃんとラムちゃんの三人の買い物荷物持ちされただけだからな」

嶋田「隊長、詮議の程は？」

須川「有罪（ギルティ）!!」

岳人「よし、この者を火あぶりの刑に処す!!」

『イーーーー!!』

鍵「あ、ちよつ、まつ——あああああ!?!」

部屋の隅にて鍵が簀巻きにされてそのままキャンプファイヤーの如く燃やされるのであった。

明久「まったく杉崎くんにも困ったものだよね。ロリコンは武市先輩と御広敷先輩の二人だけで十分なのね」

春虎「いや、二人いるだけでも十分危ないと思うぞ?」

天馬「あ、あはは・・・」

「明久、ロリコンってなに?」

明久「ロリコンって言うのはね、小さい女の子が好きな人のことを言うんだよ」

「そうなんだ」

雄二「おい明久、その子は誰だ?」

ムツツリーニ「ツ!! (無言で少女を撮る)」

いつの間にか明久の隣にいたゴスロリ服を着ている少女について雄二が質問し、ムツツリーニは無言で一心不乱に少女を撮りまくっていた。質問された明久は額に冷や汗をかいて必死に誤魔化そうとしていた。

明久「えっと、この子は・・・」

オーフィス「我の名前はオーフィス。明久の・・・嫁?」

ゴスロリ少女——オーフィスの発言はこの場の空気を凍らせるには十分なもの

で、鍵をキャンプファイヤーしていた非リア充軍団もその手を一旦止めて明久を血の涙を流しながら睨んでいた。

零斗「えつと、110番つと・・・」

明久「待つて待つて!!これには丘より高く湖より深い事情があるんだよ!!」

秀吉「明久よ、それを言うなら山より高く海より深いじやろう」

銀時「オイイイイ!警察沙汰だけは勘弁してくれ!!俺がクビになるから!!吉井はどうなつてもいいからそれだけはやめてエエエ!!」

新八「ちよつとお!生徒の心配より自分の仕事がそんなに大事かアンタはアアア!」

教師としてあるまじき発言をする銀時に新八がツツコミを入れていると、鍵を放置して須川を筆頭に非リア充軍団が明久を囲んだ。

非リア充軍団『死ねええええ!!』

明久「ギヤアアアアアア!」

そして明久をリンチしようそれぞれが鎌やらモーニングスターなど多種多様の武器を構えて突撃する非リア充軍団から明久が逃げようとするが逃げ場などない。

オーフィス「明久虐めるのダメ・・・」

非リア充軍団『ギヤアアアアアア!』

オーフィスがそれを見て明久が虐められていると思ったのか巨大な魔法弾を非リア

充軍団に向けて放つと非リア充軍団は吹っ飛ばされるのだった。しかし

『ギャアアアアアア!』

オーフィスが放った魔法弾は非リア充軍団だけではなく明久を除いたこの部屋にいる男子全員を巻き込んでしまい、高等部男子部屋はまるで嵐が過ぎ去った後のように荒れ放題だったと銀時が中々帰ってこないことが気になって部屋を見に来た洋は語ったのだった。



おまけ

妹紅「おい、嫁ってどういう事だ?」

幽香「さあ? 私も分からないわよ。ただ……」

咲夜「明久には今度その事についてしっかりと話し合いませんか」

小猫「賛成です」

レイヴェル「そ、そうですね!」

文「にしてもまさか興味本位で置いた盗聴器が役立つとは私も捨てたものじゃありませんね!」

美鈴「いやいや! そんなこと自慢げに言うことじゃありませんよ!」

美波「アキにはオシオキガヒツヨウミタイネ」

姫路「そうですねちゃんと明久君にはセツメイシテモラワナイト」

ネプテューヌ「ねぷ!?!この二人怖いんだけど!?!」

ノワール「気にしたら負けよ ネプテューヌ」

明久LOVEの女性陣が明久にオフィスのことについて聞こうとしてたり、アスナとステラの二人に週に5回ナニをしているのか詳しく聞きに言っているものや好きな人がどのような女性が好みなのか調べようとしていたり、明日どこを回るのか話してたりなどと女性陣もまた夜を楽しんでいるのだった。

GATE編四話 異世界からの侵略者（前編）

零斗「牙闘（キリングバイツ）？」

東京旅行二日目の朝。零斗は朝食をとっている時、雄二から牙闘というものの噂を聞いた。

雄二「何でもそれは獣化手術を受けた人間同士で殺し合いという名の賭け試合らしい。それを紫学園長が止めるために東京に来たらしいぞ」

明久「完全に遊び目的の旅行だと思ってた」

鍵「まあそう思われても仕方ないわな。あの学園長じゃ」

同じように話を聞いていた明久と鍵はいつもの紫のお気楽で決まった旅行だと思っていたがそんなことを考えているとは思いもしなかった。

雄二「噂じゃ数日前に牙闘獣獄刹（キリングバイツ・デストロイヤ）ってのが起こってその戦いでも多くの死者が出たらしいぞ」

明久「それって非公式の試合だね？なんでそんなに詳しく知ってるの雄二」

零斗「そりやうちのクラスには優秀な情報屋がいるからな」

明久「情報屋って？」

鍵「ほらそこでその写真を売りまくってる奴がいるだろ？」

鍵が指さす方にはその牙鬪獣獄刹の女性参加者らしき写真を売っているムツツリー
ニの姿があつた。

ムツツリーニ「回線に侵入するなんて楽な作業」

明久「すごい事言ってるけどそれってただの犯罪行為だよね？」

一誠「バレなきや犯罪じゃないんだぜ!!」

松田「お前らも見ろよこの女たちのエロい格好!!」

元浜「その上ケモ耳美少女だぞ!!これに興奮しない奴なんて男じゃない!!」

零斗「あーはいはい。わかりましたよ」

興奮してる3人を軽くあしらつて零斗は朝食を再開した。

アラタ「そういや今日は俺たちどこ行くんだつけ？」

雄二「今日は銀座らしいぞ」

明久「銀座って何かすることあるの？」

零斗「ザギンでシースー食ったりするんじゃないやねえの？」

鍵「古いなそれ」

十六夜「まあ銀座には色々あるみたいだからそれ見りやいいんじゃないやねえか？」

そんな感じで今日のことを話しているうちに朝食の時間が終わり、全生徒が銀座へ向

かうバスや電車に乗るために駅へと移動するのだった。



銀座の大通り。そこは常に多くの人が歩いている場所で基本的に人がいないということがないのである。

零斗「しっかし人が多いなこは」

ネロ「これではマスターとはぐれてしまうかもしれぬな。というわけで手を繋ごう!!」

零斗「ははは、ネロ。そんなことしたら俺の命がなくなっちゃうよ」

ネロが手を繋ごうと提案した瞬間、零斗に明確な殺意と言葉では言い表せることができない恐怖が向けられ、背中で冷や汗をかいていた。

鍵「にしても全校生徒が集まって思ったけどこの学園って色んな奴らがいるよな」

深夏「確かにそうだよな」

生徒達を見ると人間以外に天人や異世界人のドワーフ族やらエルフ族、獣人族などといった亜人や悪魔、天使、墮天使などと探せば色んな人種がいることが見られた。

玉藻「あら？」

紫音「どうかしましたか玉藻さん？」

玉藻「いえ、何かあちらで魔力のようなものが感じられるんですよ」

沖田（FGO）「ええ。魔力かどうかはわかりませんが私も何か嫌なものを感じます」
玉藻のような魔術やら呪術を使うものや沖田などサーヴァントたちは銀座に着いてから何か異様な気配を感じ取っていた。

「おいーなんだあれ!？」

会社に向かう途中らしきスーツ姿の男が驚きの声をあげていた。

零斗たち禍終素学園生徒達や周りにいる人たちは男が声を上げた方を見るとそこには巨大な中世の門があった。

明久「何だろあれ？」

妹紅「さあ？さっきまでこんななかったけどな」

立香「マシユ。アレなんだかわかる？」

マシユ「すいません先輩。私にもアレが何だかわかりません。ただ、あの門から何か感じられるだけです、それが何なのかまでは・・・」

タケル「とりあえずアレにはあんまし近づかねえほうがよさそうだな」

アレルヤ「そうだね」

遠巻きに門を見ていると門が開き始め、その門からワイバーンやゴブリン、オークなどといった魔物や槍や剣を装備した西洋鎧の軍団などその数は軽く万を超える数だっ

た。

それを見た人達は映画の撮影か何かだと思ってスマホなどで写真を撮っていた。

しかし、銀時たち攘夷戦争に参加した経験のあるものやアルトリアやイスカンドルなど戦争の経験のあるサーヴァントたちは警戒態勢をとっていた。

銀時「新八、戦えない奴ら連れてこの場所から逃げろ」

新八「銀さん？」

イスカンドル「坊主、お前もだ。奴らこの地を侵略しにきたようだぞ」

ウエイバー「なんだと!？」

銀時やイスカンドルの言葉を聞いた新八とロード・エルメロイ二世ことウエイバー・ベルベットが驚いていた。他の人たちも最初は信じられなかったが先生たちの表情が真剣そのものだったのでそれが真実だと思ったように急いで行動に移した。

浅間「みなさーん!ここは危険ですので逃げてください!!」

早苗「先ほど警察と自衛隊に連絡したので速やかに避難してください!!」

「なんだあの子達?」

「さあ?映画のエキストラかなんかじゃないのか?」

生徒たちが一般人である人達に避難するように呼びかけるが、映画の撮影だと思っ
ているようで誰も逃げようとしなかった。

デイン 『DEEEEEEEEEEN!!』

エルネステイ 『雷轟嵐（サンダリングゲイル）!!』

クレア 『焔獄の縛鎖（フレイム・チェイン）!!』

億泰 『ザ・ハンド!!』

蓮太郎 『隠禅・黒天風』!!』

綾斗 『九牙太刀』!!』

一子 『大車輪!!』

セリステイ 『重撃!!』

銀座で謎の軍団が侵略を始め、それに対抗するように警察と禍終素学園教師、生徒たちが戦い始めてからしばらく経った。

銀座の大通りには大量の死体が転がっていた。剣や槍で殺された者、ワイバーンに上半身を喰われた者、など様々な死体があった。

零斗 「クソっ！キリがねえぞコイツら!!」

鍵 「ああ全くだな!!」

明久 「とかこれ減ってるのかな!？」

零斗は自身の能力である『創造（クリエイション）』で創り出した武器を装備を持ってない禍終素学園の生徒達に渡し、ゴブリンやオークを狩っていた。

また、銀時や桂たちのように戦争を経験したことがある者たちは一般人を守りながら兵士たちと戦っていた。

銀時「まったく何だよコイツら？まるで十年前の時みてえだな」

桂「あの時よりも酷いものだろう。あの時は会話が通じる相手だったが今回はいきなり攻撃してくる野蛮人だ」

辰馬「言葉が通じるんなら交渉が出来るんじゃないやがのう」

晋助「あんな野蛮な奴らにも交渉をしようなんざ相変わらさずお前はバカだな辰馬」

陸奥「馬鹿は死んでも治らんじやき、仕方無かろう」

辰馬「あはは、ぶち殺すぞおまんら」

会話しながら戦っている銀時たちだが状況はあまり良くなかった。

敵は銃などといった近代兵器は所持しておらず、兵士たちの実力もあまり高くはなかった。

しかしあまりに数が多いうえに非戦闘員を守りながらの戦いなので戦いにくかったのだ。

一夏「クソ、これじゃあジリ貧じゃないかよ」

ルクス「何とか戦えない人たちを安全な場所へ避難させたいんですけど・・・」

タケル「そんなところの近くにあるのかよ!？」

空中にてワイバーンと戦っているIS『雪羅』を纏った一夏と装甲機竜『バハムート』を纏ったルクス、レリックイーター『ミスティルティン』を纏ったタケルがそんなことを話していると空を飛んでいたワイバーンの一体が突然爆発した。

一誠「な、何だ今の爆発!？」

アラタ「俺にもわからねえよ!？」

アリア「何かあつちから砲撃が飛んできた気がするわ」

全員が突然ワイバーンが撃墜したのを驚いているとズシン、ズシンと重量感のある音が響いていた。

音が聞こえた方を見るとそこには五十機のMW（モビルワーカー）と十五機の量産型カタクラフト『アレイオン』が75mmマシンガンやグレネードランチャーなどを装備し、こちらへやって来た。

『こちら銀座守備隊の者だ！民間人は直ちに皇居へ避難してください!!』

鞆戸「こちら嵐獄島の鞆戸大尉だ！そちらの指示に従う!!」

千冬「全員、皇居に逃げろ!!」

アレイオンに乗っている銀座守備隊の隊長らしき人物から皇居に避難するように指示されたので教師達は一般人と学園の非戦闘員を守りながら皇居へと移動するのだった。



銀座で謎の中世の門が現れたのと同時刻。南の森を警備している幻晶騎士『カルダトア』、『サロドレア』、『カルデイトーレ』やMS『グレイズ』、『ガラム・ロディ』、『GN-XⅢ』。KMF『ヴィンセント』、『グロースター』、『暁』など色々なロボットたちと銃や剣を持った警備兵が南の森の上空でそれぞれ武器を構えながら突如現れた空間のヒビを警戒していた。

この空間のヒビは一時間前、この周辺をパトロールしていた警備隊が発見し、他の警備隊に連絡し今はこうして警戒態勢をとっているのだった。

コーラサワー『しっかし一体なんだこりゃ?』

騎操士(ナイトランナー)『さあ・・・我々もこのような現象は初めてでして』

パイロットA『こういったことに詳しい人たちもこの島から外出していますしね』

ギルフォード『ダールトン将軍は何かご存知ありませんか?』

ダールトン『わからぬ。門の形をしたものなら十年前の戦争で見たことがあるがこのようなものは初めてだ』

サザーランドパイロット『十年前と言うとあの攘夷戦争のことですか』

クランク『そうだ。あの戦争の発端の一つは門から現れた我々のせいだからな』

アイン『そうですね、クランク二尉』

警戒しながらそんなことを話していると空間のヒビが広がりはじめ、そしてその空間のヒビが崩壊した。

そこから体が水晶らしきもので出来ているコオロギやヘビなどの姿をした人と同じくらいの大きさのものやエイやクマなどの姿をしたMSと同じくらいの大きさのものが様々な動物の種類で五十体を軽く超えていた。

コーラサワー『なんだこりゃ!?!』

コーラサワーはその異様な姿とその数に驚愕した。

水晶の生物たちは警備兵の姿を見ると最初にコオロギ型のもものが六本ある脚の内、前にある二本の脚を伸ばして警備兵の体を貫いた。

警備兵「がっ!?!」

警備兵は刺された場所が悪く、そのまま即死してしまった。それを合図に他の水晶生物たちが警備兵を襲い始めた。

クランク『警備兵は全員逃げろ!ここは我々が食い止める!!』

クランクの命令を合図に警備兵はその場から撤退し、ロボットたちはそれぞれの武器を構え突撃した。

騎操士A『くらえ!』

カルダトアが剣をクマ型の生物に振り下ろしたがその斬撃は傷をつけることも出来

ず、逆に跳ね返されてしまった。

隊長騎操士『下がれ！一斉砲撃で倒す!!』

カルダトアが一度下がると入れ替わるように十八機のサロドレア、十機のカルダトア、七機のカルデイトーレが魔道兵装を水晶生物たちに向けていた。その数は四二。これを喰らえばただの大型魔獣なら群れで現れたとしてもほぼ全滅させることが可能だろう。

隊長騎操士『全機、一斉放射!!』

騎操士の隊長の合図と同時に幻晶騎士たちは魔道兵装を水晶生物たちに向けて一斉に放った。

それによって水晶生物たちが炎に包まれた。

騎操士B『やったのか?』

隊長騎操士『油断するな！まだ敵がやられたとは限らんのぞ!!』

隊長がそう言ったのと同時に燃え盛る炎の中から水晶生物たちが飛び出して来た。その姿はあれほどの砲撃を受けたというのに全くの無傷だった。

隊長騎操士『な!?あれほどの砲撃を受けて全くの無傷だということのか!?』

パイロットA『ならビーム兵器ならどうだ!!』

空を飛んでいるGN—XⅢの一機が空中にいるエイ型の水晶生物にビームライフル

を撃つが水晶の体によってビームは反射されてしまった。

パイロットA 『バカな!?!』

ギルフォード 『実弾ならばどうだ!?!』

ガラム・ロデイ、グレイズ、サザーランド、グロースター、無頼によるマシンガンの一斉射撃が水晶生物に再度迫った。それは魔道兵装とビームライフルに比べると確実に水晶生物に効果があり、水晶生物の脚や腕など体の一部を破壊していった。

ダールトン 『よし、このまま射撃を続けるぞ』

パイロットたち 『イエス、ユアハイネス!!』

ダールトンの命令を聞きマシンガンを放ち続けるが、水晶生物たちは脚や腕を破壊されてもすぐに再生しそのままロボットたちに襲いかかったり逃げている警備兵たちを殺したりしていた。

パイロットB 『こ、コイツらコックピットを狙っ——うわああああ!?!』

パイロットC 『アレックス!?! よくもやりやがったな!!』

騎操士B 『待て! 陣形を崩すな!!』

警備兵B 『ヒツ!?! く、来るなあああ!?!』

警備兵C 『撤退だ! 一度森の入口まで撤退するんだ!!』

警備兵D 『バカなことを言うな! こんな化け物たちを町の近くまで連れていけば町の

人間に被害がでてしまうだろうが!？」

警備兵E 『ならどうすりゃいいんだよ!? あんな武器が効かない連中をどう倒せるんだよ!!』

魔道兵装もビーム兵器も剣も効かない水晶生物たちに全員が恐怖し、正常な判断をくだすことができないでいた。

コーラサワー 『不死身のコーラサワー様を舐めるんじゃねえよ!!』

飛行型の水晶生物がコーラサワー率いるGN-XⅢ部隊を襲ってくるがそれをランズで攻撃して撃退する。

ギルフォード 『しかしこれではキリがないっ!!』

ダールトン 『実弾は少なからずだが効果がある! 再生出来ぬほどのダメージを与えるんだ!!』

パイロットD 『りよ、了解!!』

ダールトンの指示に従いグレイズたちは水晶生物たちへの射撃を継続するのだった。しかしそれは水晶生物の体を削るだけで倒すことはできないでいた。

銀座の門からの侵略者。嵐獄島の魔獣の森の空間のヒビから現れた謎の水晶生物。これは単なる序章に過ぎない。今後どのようなことが起こるかなど誰も予想することはできないのであった。

零斗「クソツタレが・・・」

零斗は背中中に刺さっている二本の短剣を抜きながらゆっくりと立ち上がった。

零斗の様子に気づいた銀時やネロたちが助けに来ようとしていたが距離が離れすぎているうえに敵が多いので中々零斗のいる場所に近づけなかった。

零斗「ハッ、上等じゃねえかよ。死にたいやつからかかってこいよ!!」

零斗は創造の力で使える武器を片っぱしから創り上げながら敵にそう叫んだ。それに応えるように敵は零斗に襲いかかって来ようとした。

——その直後、門の近くで爆発が起こった。

その爆発は半径約五十mほどでその場にいたジャイアントオーガなどの巨大な魔物や後続の兵士たちの多くが跡形もなく消え去っていた。

これにはこの場にいた全員が驚愕するしかなかった。一体誰がやったのかわからないうえに敵に恐怖を与えるには充分すぎるものだった。

零斗を襲おうとした敵も今の爆発を見て動けないでいた。

『転身火傷三昧』!!」

そしてその隙をつくかのように青い炎の竜が零斗を囲むように零斗の周りにいた敵を燃やし尽くした。

清姫「旦那様!!お怪我はありませんか!？」

零斗「清姫か、大丈夫だよ」

零斗の元へと走ってきた清姫に対して零斗は清姫に心配をかけないようにそう言ったが、清姫は零斗の背中の中の傷を見てしまい清姫は背後にゆらりと炎のようなオーラを出しながら敵を睨みつけた。

清姫「旦那様に傷をつ！許しません!!」

清姫に恐怖したのか、あるいは先程の爆発に対しての恐怖が残っているのか敵は武器をかなぐり捨てると門へと逃げていった。それは目の前にいる敵だけではなくほかの全員もまた門へと逃げていた。

無論、大人しく逃がす訳もなく、アレイオンやMWによる射撃で逃げている敵兵の背中を撃ち抜いていた。

そして最終的に銀座には敵兵と民間人の死体で溢れかえり、残りの敵兵は全て門の向こう側へと逃げていったのだった。



銀座の中で最も高いビルの上に1人の女性が馬に乗って下の様子を見ていた。

その女性は顔を獅子の鎧兜で隠していて表情はうかがえないが何処か悲しそうだった。

「久しぶりだな『獅子王』」

「・・・何の用ですかスカサハ」

スカサハ「なに、久しぶりに会ったから挨拶しに来ただけさ」

獅子王「そうですね、ならば一つあなたに聞きたいことがあります」

獅子王がそう言うのと同時に右手に槍を出現させ、その槍の切っ先をスカサハに向けた。スカサハは特に驚くこともなく冷静に獅子王を見た。

獅子王「何故、零斗にあの剣を渡したのですか？」

そう、先日の秋葉の裏市場で零斗にあの剣を渡したのは何を隠そうスカサハなのである。

スカサハ「奴は強くなる必要がある。だからあれを渡したのだ」

獅子王「ですがあの剣はまだ正体が不明なのですよ!!もしアレが魔剣の類で零斗に何かあつたら!!」

スカサハ「その時は私が止めるだけだ。それが私の——否、奴と契約している私たちの役目だ」

スカサハは獅子王に槍を向けられてもそれを恐れることはなく自らの言いたいことを言い切った。スカサハの目を見た女性はその言葉が真実だと長年の付き合いから分かったのか槍を霊体化させた。

は当たり前だと言わんばかりに見下した言い方をした。

プロフェッサー「それで、嵐城島のほうも問題なく終わったのか？」

研究員B「はい。そちらの方では水晶で出来ている動物をモデルした生物が現れ、嵐城島の警備隊はそれを倒すことも出来ず大損害を受けたようです」

プロフェッサー「ほう、それは中々使えそうだな」

研究員B「ただ、空間のヒビが修復するのと同時に水晶生物は消えてしまい、捕獲することは無理でした」

プロフェッサー「なに、機会はまた来る。その時にでも捕獲すれば良い」

研究員B「はっ！」

プロフェッサー「さあてこれから忙しくなるのう」

プロフェッサーはそう言いながら後ろにある大量の培養液を見た。

その大量の培養液の中にはガストレアや危険な魔獣や魔物、牙闘獣獄刹で死んだはずの城戸や竜次たち獣闘士、他にも悪名を轟かせた悪魔や堕天使など様々な人種とあらゆる生物があつた。

プロフェッサー「さあ始めようか、我ら『ウロボロス』の世界支配を!!」

プロフェッサーは壁に掛かっている旗を見上げながら狂気の笑みを浮かべながら笑った。

その旗には黒い太陽を飲み込む龍が描かれていた。



門の向こう側の世界。

本来ならばそこはGATE自衛隊の原作と同じモルト皇帝が支配する帝国を中心とした世界のはずだった。

しかし何の因果か門が開いた影響で多数の異世界が融合してしまったのだ。

例えば

炎龍『ゴガアアアアア!!』

ダグネス「カズマカズマ！あのドラゴンの爪と私の鎧、どちらが強いかな勝負したいんだが!!」

カズマ「こんな時にバカなこと言ってんじゃねえよこのドMクルセイダー!!」

めぐみん「カズマ、ここは私の爆裂魔法で倒すので足止めしてください」

カズマ「足止めする前に殺されるわ!!」

アクア「カズマさんカズマさ——」

カズマ「てめえは黙ってるこの駄女神!!」

アクア「なーんーでーよー!?!」

カズマ一行が森にて炎龍に襲われていたり

リムル「プルプル。ボク悪いスライムじゃないよ」
サトウー・冬夜『・・・・・・・・・・・・・・・・え?』

スライム形態のリムルがサトウーと冬夜に敵意がないことを示しているのを見てサトウーと冬夜が驚いていたり、

豊久「首をだせええええええい!!」

直文「クソっ!!なんだってんだよ!?!」

信長（ドリフターズ）「ごめんねーうちの大将バカで」

ラフタリア「あ、いえ・・・・・・・・」

フィーロ「ごしゅじんさまがんばれー!」

与一「がんばれー妖怪首おいてけー」

薩摩バーサーカーこと島津豊久が盾の勇者岩谷直文と戦い、それをラフタリアや信長（ドリフターズ）が観戦していたり、

ハジメ「ユエ・・・・・・・・」

ユエ「ハジメ・・・・・・・・」

シア・ティオ・香織・雫『・・・・・・・・』

ハジメとユエがイチヤイチャしているのを見せつけられてシアたちが死んだ魚のような目をしていたり

アインズ「セバス、この辺りを調査せよ」

セバス「かしこまりましたアインズ様」

アインズがセバスにナザリック周辺の調査を命令したりなど門の向こう側は向こう側で混沌としていた。

—— 正体不明の悪の組織、あらゆる世界が融合した世界などさらに混沌としていくとはまだ誰も知らないのであった。

GATE編五話 東の間の休息

門が出現してから一週間が経っていた。

門へと軍勢が逃げ帰ったあと自衛隊が用意した簡単な施設にて怪我をしたものは治療を受け、それ以外の者達は自衛隊と一緒に避難した人に炊き出しを配ったり家族や友人と離れ離れになった人を一緒に探したりなど今自分にできることをしていた。

本来なら三日前には禍終素学園の全員は皇居から出て嵐獄島へと戻れるはずだったのだがマスコミが皇居の門前にて集まっているので出るに出れない状況なのだった。

零斗「うざいな」

鍵「本音を言うなよ。そんなこと言っただって何も変わらないからな」

明久「でも零斗の気持ち凄く分かる」

零斗たちは自衛隊が用意した簡易テントから出てそんなことを話していた。

零斗たちがマスコミをウザがっているのには理由がある。それというのも四日前にマスコミがまだ事件の傷が癒えていない被害者に対して『事件のことを詳しく話してくれませんか?』などといったことを無理やり聞こうとしたり禍終素学園で戦闘に参加した人達に敵を殺したことをどう思うかなどとてもじゃないが相手のことを全く考え

ずに自分たちがネタに出来ればいいとしか考えてないようなことばかり聞いてきた。

それで自衛隊もマスコミが入ってこないように規制しているのだ。

沖田「土方さん。あいつらうぜーんでぶっ飛ばしますか?」

土方「止めとけ。んなことしたら余計騒がしくなるだけだ」

紗夜「麒麟ちよつと視界のアレがウザいから撃つてもいいよね?」

麒麟「ダ、ダメですよ紗夜さん!!」

クレア・ユリス・ステラ『燃やす(わ)』

ハヤト・綾斗・一輝『やめて!』

マスコミにいい加減嫌気がさした生徒達がチラホラ出てきて中には沖田たちのようにマスコミを蹴散らそうと考えるもの達まで出始めてきていた。勿論本当に蹴散らしたりしたらそれこそマスコミが好き勝手書くに決まっているのでそれを止めるのだった。

銀時「おいてめえら。これから帰るからとつととテントの中に戻れ」

新八「帰るってどうやってですか?」

神楽「そうアルよとうとう頭の中糖分で埋まっちゃったアルか?」

銀時「酔昆布しか頭にねえ奴に言われたくね——」

ゴシヤツ(神楽が銀時の顔を殴った音)

銀時「いい、いいから言われた通りにテントの中に入れ」

『はあ……』

痛々しい顔をした銀時を見てとりあえず言われた通りそれぞれのテントへと移動するのだった。

零斗「よし明久お前が先に入れ」

明久「杉崎くん！君に決めた!!」

鍵「零斗ここはお前に任せた」

零斗たちはテントに何か仕掛けがされているんじゃないかと思ひ、それぞれ生贄として最初に入るように勧めるが中々入らないのであった。

銀時「いいから入れ」

零斗・明久・鍵「「オウツ!」」

中々入らない三人にイラついた銀時が蹴りを入れてテントの中へと無理やり入れるのだった。

そして三人はそのままテントの床――

零斗・明久・鍵「「へぶっ!」」

ではなく船の甲板に顔を打ち付けるのだった。

これは紫がテントにスキマを作つてテントから船の甲板まで繋げたことでマスコミ

に気づかれることなく移動出来たのであった。

霊夢「なんで顔から着地してんのよアンタ達」

零斗「いや、ちよつと事故つただけ・・・」

妹紅「どう事故つたら顔を地面に打ち付けるんだよ」

明久「アレだよアレ。柔らかい布団に飛び込む疲れきった社会人の真似」

華扇「どんな真似ですか・・・」

鍵「ま、まあ細かいことは気にするなよ」

零斗たちは霊夢たちに顔を打ち付けている姿を見られたのを恥ずかしく思つて誤魔化そうとしていた。

周りを見るとちゃんと着地できたようで零斗たちのように間抜けな格好をする者はいなかった。

紫「さ、色々あつたけど今回の東京旅行はこれでおしまい。明日からまたいつも通りの授業をするわよ」

いつの間にか船の先頭部分に来ていた紫

が手をパンつと叩いてみんなの意識を向けさせ、今回の旅行終了を告げた。

それに対して生徒達はええーつと嫌な顔をしていた。やはり楽しい旅行の筈が侵略者との戦いやその後の後始末やらで旅行の殆どが潰れてしまつてそこまで楽しめな

野党は天人や天竜人などに対しては友好的というかゴマをすっているがイニシエーターや魔術師、亜人、悪魔、墮天使、天使などといった人間とは異なる種族のものを劣等種と蔑む者達を中心とした派閥で日本にも数は多くないが野党派の人間がいるのだ。そもそも何故門が現れたのを紫たちが責任を取るようになってくるのかと言うとそれは十年前の攘夷戦争に遡る。

十年前の地球にはKMFといった機動兵器は存在していたがカタクラフトや幻晶騎士は当時なかったし、軍に関してもギャラルホルンやヴァース火星騎士なども存在していなかったし、イニシエーターや亜人なども存在していなかった。

では何故今の世界では普通にいるのかというとそれは今回銀座に出現した門とは別の門が嵐獄島に出現したからだ。

今ではその門も地下深くにて封印されておりその場所に行けるのは紫など限られたものだけである。

最初に門を通ってきたのはエルフやドワーフなどといった亜人族とライヒアラ国の幻晶騎士を扱う騎操士などのファンタジー感溢れる者達で最初は動揺していたがあっさりと受け入れは行われた。

次に来たのはイニシエーターと名乗る少女たちとその少女たちをパートナーとしてガストレアなる化け物を狩る民警と別世界の東京の一般市民、ヴァース帝国と別世界の

地球の軍。

イニシエーターたちは八意永琳が造ったワクチンのお陰でガストレア化することがなくなったのである。そしてそのイニシエーターの少女を害悪として虐待していた者達やヴァース帝国の火星騎士の身勝手な行動をするものは紫たちによつて容赦なく島から追い出された。そのもの達が勝手な逆恨みでテロリストになつていたりする。

そして最後にやつてきたのがギャラルホルンやザフト、ジオン、連邦軍などといったMSを扱う軍組織。

最後に門を通つた後に門は機能を停止し、やつてきた者達の世界とこの世界が融合し今の世界では本来存在しなかつた大陸や国が出現したりあらゆる世界の歴史が混ざりあつたり機動兵器の素材などになる鉱石などが発見されたり、世界各地にて魔獣や魔物が発見されるなど色々と世界で異変が起こり、世界は混乱していた。

その中でも嵐獄島は争いがなく資源も豊富だつたため平穏を保つていた。

しかしそれをよく思わない者達が嵐獄島を手に入れようと侵略しにやつて来てそれに対抗するために嵐獄島の住民と侵略者たちの敵対組織が手を組んで戦つた。これが攘夷戦争の始まりである。

その戦争は一年と続いていたがこれ以上血を流すことをよしとしなかつた各国の権力者たちは話し合いの場をとり、戦争は終わった。

通り魔に殺されて異世界で魔物に転生

トラックに引かれて転生

神様の手違いで殺されてお詫びにチート能力持つて異世界転生

くじ引きで特賞を引いてチート能力を持つて異世界へ

図書館で本を読んでいたら無理矢理勇者として異世界転移

ヤンデレストーリーカーに殺されてゴブリンに転生

サラリーマンが気づいたら貴族の八男として転生などと異世界系ラノベにはこのような様々な展開がある。

——しかし、このような展開を誰が予想できるだろうか？

零斗「な」

銀時「な」

ルルーシュ「な」

士郎「な」

『なんじやこりやあああああああ?!?』

——島にいる禍終素学園在校生と教師、卒業生全てが異世界の草原へと転移するなどと誰が予想できるだろうか？

GATE六話 異世界突入開始

門の向こう側にある世界は今混乱していた。

始まりは一ヶ月前に帝都『ウラ・ビアンカ』の帝国軍の総戦力が門の向こう側へと攻め入ったがその内六割も喪失、更には門があるアルヌスの丘を自衛隊によって奪われ、それを奪い返そうと属国や周辺諸国を含めた連合諸王国軍が攻めてきたがこれも自衛隊たちによって壊滅させられた。これにより敵は合計で12万もの兵を失った。これは帝国兵士だけを数えた数であり、ゴブリンやワイバーンなどといった魔物や奴隷兵士などを含めたらその数は倍に届くかもしれないようだった。

それでも帝国は戦争を止める気はないようだった。
しかし問題はこれだけではなかった。

帝国が門の向こう側へと軍を派遣したのと同じ頃、原因は不明だが多数の異世界がこの世界と融合してしまい、本来地図になかった国や都市が出現したり、今まで見たこともないような魔物が現れるようになったのだった。

何故か言語が通じないなどということは無かったが通貨や文化などが全く異なるために問題が起こることは多かった。

に新撰組を中心として高等部学生の半分と戦闘力のある教師たち十名ほどがこの辺りの散策をし、残った者達は簡単な拠点を作り始めた。幸い近くに森があるから材料に困ることもないし、学園教師や生徒にはフランキーやウソップのような手先の器用な者やエドワード兄弟のように錬金術を使える生徒達がいるので短時間で拠点が出来たのだった。

そして日が傾いてきた頃には散策組が帰ってきてきてその中には散策の途中で狩ったらしき猪や熊などを運んでいた。そして最後尾列である幻晶騎士『ツェンドリンブル』部隊が赤い甲殻で覆われているドラゴンを引きずっていた。

松平「それで？何かわかったことはあるか？」

近藤「残念ながらこの辺りには街や村がないようで情報を聞こうにも人に会うことが出来ませんでした」

土方「だがいくつか野営の跡らしきものが幾つか見られたから明日には散策範囲を拡大するつもりだ」

松平「そうか、ならその事は俺から学園長に言っておく。だがなあ……」

松平は近藤と土方から調査の話を聞き、それを紫に伝えに行くと言ったがどうしても気になったことがあったので近藤たちに尋ねた。

松平「あのドラゴンはどうしたんだ？3秒以内に答える。はい、いーち」

バンバンツ!! (松平が近藤と土方に向けて銃を撃つ音)

近藤・土方「2と3はあああああ!?!」

松平「知らねえな、男は1だけ覚えてりや十分なんだよお。いいから早く答えないと鉛玉脳天にぶち込むぞ?」

近藤「わかったから!ちゃんと説明するから銃を下ろしてくれよとつつあん!?!」

松平が近藤の額に照準を合わせるので近藤は焦りながらちやんと説明した。
要約するとこんな感じである。

現地人を探す途中に森に入った一同

←

散策途中、猪など森の獣たちが襲ってきたのでそれを討伐

←

討伐が一段落したと思ったら赤いドラゴンが空から襲ってきた

←

襲ってきたのを返り討ちにして討伐する

←

そして今に至る

松平「なるほどなあ。まあドラゴンの一匹や二匹ブチ殺しても別におじさんは気にし

ないけどさあ」

近藤「そうだよな。やつぱり情報が手に入らなかったのはダメだよな」

松平「いや、そんなことよりおじさんはあのドラゴン早く食べたいんだけど」

土方「おいこらおっさん」

松平「お前らはタレと塩どっちで食べる？」

近藤「なんで食べることに前提なんだよ!？」

沖田「まあまあ落ち着きましようよ二人とも」(モグモグ)

山崎「そうですよ腹が減っては何とやらなんですからここは頂きましようよ」(モグモグ)

終『ここはこのお肉でも食べて落ち着きましようよ』(モグモグ)

土方「何お前ら食ってんの!?!そんでいつの間にか調理したんだよ!?!」

土方はいつの間にか調理されたドラゴンや猪などの肉を食べている沖田たちにツツコミを入れていた。因みに狩ってきた獲物の解体などは零斗など魔獣や魔物を島で狩っている経験者たちがやり、調理は小松などの学園の食堂で働いている者達が行っていた。施設などは残念ながらここにはないが包丁やフライパンなどといったありふれた道具は零斗や士郎が創り、塩や醤油などの調味料は料理人たちが元々所持していたのを使っていた。

沖田「大丈夫ですよ土方さん。今は特になんの問題もねえんですから今は明日に備えて体力つけやしようぜ」

土方「まあそりやそうだが・・・」

近藤「おいトシ、このドラゴン肉の塩焼き美味いぞ。お前も食ってみろ!!」

土方「なんであんたは平然と食ってんだよ!？」

近藤「まあ落ち着けよトシ、ここは総悟の言う通り明日に備えた方がいい。明日からは範囲を広げていくんだからな」

近藤がそう言いながら肉を食べるのを見て土方は何を言っても無駄だと感じるとため息をつきながらもその言葉に従った。

土方「はあわかつたよ。おい山崎俺の分の肉取ってこい、マヨネーズ忘れんなよ」

山崎「了解です!」

土方に命令された山崎は肉をとるために肉の置かれている場所へと走っていった。

そして拠点の中心にはステージのようなものがあり、そこでシエリル・ノームやランカ・リーなどのアイドルやスクールアイドルグループの『μ's』、『A-RISE』、『アイドルマスターズ』などがステージで歌ったり踊ったりして盛り上がっていた。

これはいきなりのことで生徒達が混乱しているのを落ち着かせるためにとランカや穂乃香たちからの提案によって決まったのだった。

桂「そうだな、つまり今回のことは紫殿も預かり知れぬ事だということだな」

銀時「まあそういうことだった」

銀時と桂は今回の出来事を軽く話しながら歩いていった。すると

ガサガサツ（近くの草むらが揺れる音）

銀時・桂「っ!？」

銀時と桂は物音がした方に意識を向け、すぐに武器を取り出せるようにそれぞれ木刀と刀に手を伸ばしていた。

そして音がする草むらから現れたのは迷彩服を着た明らかに日本人らしき肌の色をした男だった。

その迷彩服を着た男が銀時と桂の顔を見て驚き、声をかけてきた。

「あれ?もしかしてお前らって銀時と桂か?」

銀時「そういうお前は確か……この間ジャンプ借りた磯村くんだった?」

「違えよ!?!誰だよ磯村って!?!」

桂「ならこの間、俺とエリザベスと三人で駅前でラップをした有本か？」

「違えよ!?伊丹だよ!!お前らと高校で同じクラスだった伊丹耀司だよ!!」

銀時「ああそういえば——」

銀時は伊丹の名前を聞いて高校時代、銀時が桂や坂本と話している席の斜め後ろでラノベを読んでいる伊丹の姿を思い出していた。

伊丹「いや最初に思い出すのそれ!？」

銀時「悪いお前で思い出せるのオタクだったことだけだわ」

桂「奇遇だな銀時、俺もだ」

伊丹「お前ら酷いな!?確かに事実だけどさあ!!」

銀時と桂のあんまりな言葉に伊丹はうっすらと目元に涙を流すのだった。

伊丹「つてかなんでお前らここにいんの?」

伊丹はふとこの二人が特地にいることを不思議に思った。本来ならこの特地にいる日本人は伊丹たち自衛隊か特地からの侵略者達によって連れ去られた者達だけのはずだ。なのに何故この特地に彼らがいるのだろうか。伊丹は気になったので二人に聞くと

銀時「あん?なんで俺たちがここにいいのかだ?んなもん俺たちが知りてえよ」

桂「我々も気づいたらここにいたからな」

といった感じで彼らがここにいる理由は本人達も分かっていないようだ。

伊丹「そうか、なら一応このことを伝えるために本部に戻った方がいいかもな……」
桂「本部？自衛隊は既にこの土地に本部があるのか？」

伊丹「まあな、それで悪いんだが一度俺らの本部に来てくれないか？」

伊丹としては上官からの命令があるためこの特地の調査を続ける必要があるのだが、流石に同郷の友人達をこの未知の場所に放置するのは危険すぎるので今現在安全な場所である自分たちの本部へと来てもらいたかった。

銀時「ああわかった。それじゃあ明日ガキ共連れてここに来るから明日の朝ここに集合な」

伊丹「そうか、助か——え？今なんて言った？」

桂「学園の生徒たち全員がこの世界に飛ばされてな。これから説明するから明日また来てくれ」

銀時「じゃ、そういう事だから」

銀時と桂はこれで会話は終わりと言わんばかりにその場から去っていった。伊丹は何も言えずに立ち尽くしてしまい、気づいた時には既に銀時と桂の姿は見えなくなっていた。

伊丹「はあ……上になんて知らせりゃいいんだよ……」

伊丹は頭をかきながら部下たちにこのことを知らせるために野営している場所へと戻っていった。

GATE編七話 異世界での生活の始まり

——アルヌスの丘。そこには異世界である日本へと繋がる『門』が存在し、そこを中心にして自衛隊が拠点を造られていた。その拠点にはいくつかのグループのようなものとして『自衛隊』、『禍終素学園』、『現地人』、『異世界人』の四つに簡単に別れている。現地人と異世界人の違いだが、異世界人は自衛隊や禍終素学園の人々が暮らしている地球と同じようにこの世界へと飛ばされてきた別の異世界の住人で現地人からはこの異世界に住んでる者達のことである。

伊丹は銀時たち禍終素学園の人々を自衛隊の拠点到連れていく途中、自衛隊によって敗北した諸国軍と帝国軍が混ざった盗賊によって村を襲われ逃げていた現地人とこの世界の情報を知るために自衛隊に同行を求めた異世界人が加わった。その事を知らせなかったことで伊丹は上官に怒られたが現地人とコンタクトをとれたことでそれ以上のお咎めはなしとなった。

また、言語の通じあわないことで意思疎通が困難と考えられていたが八意永琳作『コトバワカール』のおかげで意思疎通は問題なくなつた。薬学の力スゴい。

そして互いのことを話していると昼間だったのがあつという間に夜になってしまつ

清姫「夜這いです♡」

ネロ「抱きに来た！」

玉藻「わあ正直過ぎて玉藻ちゃんもびっくりですよ」

清姫「そう言う玉藻さんはどうなんですか？」

玉藻「ご主人様に抱かれに来ましたか何か？」

このサーヴァントたち、欲望に忠実過ぎである。本来の物語なら誰がいくかで血で血を洗う戦いが行われるがこれはギャグとシリアスとやっぱりギャグがメインの物語。静謐のハサンが身につけている防毒の腕輪のお陰で静謐の毒で死ぬような人は嵐獄島には悪党やクズ以外ではあまりいないし、清姫は一応一夫多妻制を認めているなど原作？何それおいしいの？と言った感じでキャラが崩壊しているが気にはしていない。

玉藻「まあここは平等にと行きたいところですが中には杉崎さんと吉井さんもいるので今日は諦めますか」

清姫「？普通にお二人は私たちのテントに運びますが？」

ちなみに静謐のハサンのテントには百貌のハサン、チビハサン。清姫のテントには妹紅と幽香。ネロのテントには深夏と華扇。玉藻のテントには紫音と立花とに別れている。清姫の考えとしては清姫のテントに明久を、ネロのテントに鍵を入れることで互いに幸せになれると本気で思っているが実際は明日の朝に二人の男の断末魔が聞こえて

終わるだけだろうと玉藻は考えたがまあどうでもいいかとその考えを即切り捨てるのであった。

ネロ「うむ！では早速中に入るとするか!!」

ネロが勢いよくテントの中に入り、玉藻たちもそれに続いて入った。そして彼女たちはテントの中で衝撃のものを見てしまった。それは――

『下着姿で零斗に覆いかぶさっているゼノヴィアとピンク髪的全裸美少女』

『鍵の寝袋に入ろうとしている下着並に布地が少ない服を着ている幼女』

『明久の隣ですやすや寝ているオーフィスと眼帯くノ一』

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

清姫「『転身火生三昧』!!」

『ぎゃあああああああ!?!』

清姫の宝具が容赦なく放たれ、それはテントを燃やすのにはオーバーキル過ぎて零斗と鍵は火達磨になって玉藻がそれを消化し、ネロと静謐はその手伝いをし、清姫はゼノヴィアをファイヤーしようとし、それをゼノヴィアはデュランダルで防ぎ、離れたと

紫「それじゃあ、まずはサーヴァントの皆さんには紹介をしてもらいましょうか」
紫はそう言うところからか取り出した眼鏡をかけ、まるで面接官のようにサーヴァントたちに自己紹介するように言った。

メイヴ「ライダー。コノートの女王メイヴよ」

タマモキヤット「バーサーカーのタマモキヤットなのだ！とりあえずオリジナル死すべし慈悲はなしだワン！」

エリザベート「サーヴァント界のアイドル。ランサーのエリザベート・バートリーよ！」

ジャック「アサシン。ジャック・ザ・リッパーだよ。よろしくねお母さん!!」

アルトリア・オルタ「セイバー。アルトリア・ペンドラゴン・オルタナティブだ。とりあえずハンバーガーを寄越せ」

邪ンヌ「アヴェンジャー、ジャンヌ・ダルク・オルタよ」

千代女「アサシン。望月千代女でござる」

段蔵「同じくアサシン。加藤段蔵です」

巴「アーチャー。巴御前でございます」

刑部姫「アサシンの刑部姫だよ。とりあえず引きこもっていい？え、そんな場所ない？そんなく！」

零斗が新たに契約したのがメイヴ。鍵が契約したのがタマモキヤット、エリザベト、ジャック、アルトリア・オルタ（以降オルタ）。明久が契約しているのは邪ンヌ、千代女、段蔵、巴、刑部姫。何故二人と契約したのか尋ねるが気づいたらこの地に召喚され、契約のパスが繋がっていた三人の元へとやってきたのだそうだ

ちなみにメイヴ、ジャック、千代女の三人の行動については深く追求してはいけない。いいな？

紫「まあ問題を起こさないのならこちらから言うことは特にないからこのままで別いいいわ」

零斗「理事長、生徒が二人ほど丸焼けになったんですけど」

紫「そんなことは些細なことよ」

鍵「酷え!？」

体の至る所に包帯を巻かれている零斗が被害を受けたことを訴えるが紫にあっさり切り捨てられるのだった。

まあ、丸焼けの実行犯である清姫は零斗のサーヴァントであるからこその処置かもしれないが細かいことは気にしなくていい。

紫「じゃあ後のことは坂田先生。よろしくお願いしますね」

銀時「ああ？なんで俺がそんなメンドクセエことしなきゃ——「給料二十%カット」

——よし、テメエら俺がしつかりと見てやるから真面目にやれよ？」

紫は銀時に新たに現れたサーヴァントたちのことを頼むが、銀時はそれを面倒くさがっていたが紫の給料二十%カットの言葉で真面目にやることを誓った。なお、この変わり身の速さには生徒達含めサーヴァントたちも銀時に対して冷たい視線を向けるのだった。

玉藻「それにしてもまさか刑部さんが召喚されているとは」

清姫「そうですね。刑部さんのことですから一生座に引きこもっているものだと思いますけど」

零斗「え、あの刑部姫って子、二人の知り合いなの？」

玉藻「ええあの子とはメル友なんです」

零斗「メル友」

清姫「他にもウズメちゃんとか色んな人ともメル友なんですよ？」

零斗「そうなんだ」

日本の妖怪やら神様などがメールしあっている姿を想像しようとしたが全く想像出来なかつたのでその想像を頭の隅に片付けながら零斗は新しく来たサーヴァントたちをただなんとなく眺めていると離れた所でネロがエリザベートと楽しく話しているのを視界の端に捕らえた。

ネロ「おお！久しぶりだなエリザ!!」

エリザベート「あらネロじゃない！こんなところで会うなんてスゴい偶然ね!!」

ネロ「うむ！これはあれだな！この再会を記念に一つ歌うべきだな!!」

エリザベート「そうね！それじゃあ早速歌いましょうか!!」

ネロ・エリザベート『ボエ~~~~~』

——その日、アルヌスの丘に騒音や絶叫が響いたのだった。



ネロとエリザベートによるコンサートによって気絶した者達が目を覚ましたのは昼過ぎだった。とりあえず二人には歌を歌わせないようにしろと歌を聞いてしまった全員が二人のマスターである鍵と零斗に言い聞かせてきたがこれが効果があるかどうかは神のみぞ知ることであった。

その後、現地人と異世界人はこの世界の情報を欲している自衛隊とそれぞれの代表たちが集まって会議のようなことをしていた。無論、この会議には紫や白夜叉などの禍終素学園代表も参加していた。

この会議が行われている間、参加していない人達もまた互いに住んでいる世界のことを話していた。そして夜の夕食時に禍終素学園の全員が集まっている場所で紫が今日

の話し合いで決まったことについて説明を始めようとしていた。

紫「さて、皆も知ってると思うけど今後私たちがどうするかについてのことを話すわ」
華扇「あの先生、私たちは今すぐにでも島に戻ることは出来ないんですか？」

紫「本来ならすぐにでも島に送りたいところなんだけど今、あつちの門の付近ではどこからか嗅ぎつけた報道陣が私たちに取材しようと集まっているからしばらくはここにいた方がいいわ」

C・C「随分とまあ報道陣も暇なものだ」

ルルーシュ「言ってやるなC・C。奴らはハイエナみたいなものだからな」

ライ「うん、ルルーシュのも酷い事言ってるよね」

C・C「とルルーシュが報道陣に毒を吐いているのをルルーシュの親友であるライ・クロックスは苦笑していた。」

紫「それで皆には自衛隊の基地に残って暮らすか、この異世界を自衛隊の人達と協力して探索するかどうかどうする？」

紫はニツコリと微笑みながら禍終素学園全員に聞いてくる。それによりザワザワし始めた。生徒の中にはこのよくわからない異世界に対して恐怖しているのかこの場所に残ろうと考える人もいるが学園の生徒及び教師の半数——否、八割は異世界の探索に対して興味があるようだ。

遠坂「異世界なんだから純度の高い宝石もあるはずよね！（魔術師として異世界なんて放置できないわ）」

一誠「まだ見ぬおっぱいを！（更なる戦いを！）」

百代「まだ見ぬ美少女たちとの出会い！（強敵との死闘！）」

ルフィ「肉！（冒険！）」

洋「毛！（キューティクル！）」

銀時「異世界のもんを売りまくって帰ったらスイパラ通いだ！（ガキどもだけを置いてくわけにはいかねえな）」

新八「テメエら本音と建前が逆になってんじゃねえかよ!!いや、一部両方とも本音のやつもいるけどお!？」

単純に異世界に興味を持つ者もいるが殆どの人間は自らの欲望を隠しきれないでいる銀時たちに新八は青筋を浮かべながらツツコミを入れた。

紫「それじゃあ、外の世界に行きたい人は後で担任の先生に許可を貰ってきてね。それじゃあ話は終わりです」

紫がそう言ってこの話を終わらせると生徒達は異世界の旅に行くのかそれとも残るのかについて相談してたり、行く予定の人達はどんなものがあるのか予想しあったり、まだ見ぬ未知の異世界を楽しむにしていたりなどとそれぞれ様々な思いを溢れさせ、時

そして『異世界人』。この人々はこの世界にやって来た禍終素学園や自衛隊のいる現在の世界と同じようにこの特地と融合してしまった他の異世界の住人である。中には彼らの世界とは異なる地球から召喚された者達もおり、どの世界でも魔法は存在しているがその魔法でも色々異なるものも多く、とある国では地球と異世界の知識を利用して造られた列車や飛空船などが存在するようだ。

そして今現在この基地にいる異世界の人々は『アクセルの街』で冒険者をしている者とその関係者、異世界『トータス』に召喚された三人の学生とその仲間たち三人、死ぬ前に異世界に飛ばされた『漂流者(ドリフターズ)』九人と彼らと共に戦っているエルフ、ドワーフ、オカマ、十月機関。『盾の勇者』の仲間と彼が管理している村の住人達。彼らの世界以外にも異世界の住人がいるそうだが、この基地にいるのは彼らで全てである。彼らもまた自衛隊の人達同様この世界の情報を知るためにここにおり、また彼らが戦っている敵が彼らと同じようにこの特地にいるかもしれないのでその情報も集めるためである。

紫が禍終素学園の全員に今後のことを話した次の日に『現地人』が自衛隊が倒した飛龍の鱗を売るためにイタリカと呼ばれる街に行くことを自衛隊に許可をもらっていた。自衛隊はこれを了承した。ただし、イタリカに行くのには自衛隊を護衛として同行することを条件としてであり、それには『禍終素学園』と『異世界人』も同行することになっ

た。



イタリカに向かう一行、異世界『トータス』出身の南雲ハジメたちは大型自動車アーツイファクトの魔力駆動四輪『ブリーゼ』、伊丹たち自衛隊と現地人であるテユカ・ルナ・マルソー、レレイ、ロウリイは装甲車、『盾の勇者』こと岩谷尚文が鳥の魔物の『フィロリアル』ことフィロによる鳥車、と『漂流者』こと島津豊久たちは馬車、禍終素学園の中で実践戦闘経験のある生徒や教員及びサーヴァントの一部が零斗が魔石から召喚した四足歩行で頭部に三本の角が生えている黒い竜『地竜』五匹によって引かれている竜車に乗っている。

倉田「いやー、異世界の人達だから変わったものに乗っていると思いましたけど、こっちの世界でもあんなのあるんですね」

伊丹「まあ嵐獄島の腕の経つ人達の中には魔物や魔獣を役使して移動用に使っている人も結構いるから別に珍しくないんだよね」

一番後ろで装甲車を運転している倉田が前にいる人達の乗っているものを見て呆気に取られていた。伊丹としては元々あの島で生まれ、自衛隊になるまではあそこで暮らしていたので特に違和感はなかった。

零斗「異世界なら少し歩くだけで問題にぶつかると思ったんだけどな」

霊夢「あなたは一体異世界に何を期待してたのよ」

零斗「んく、何だろ？最近戦いが楽しくなってきた気がしてさ」

最近というより例の黒い剣を手に入れて銀座で戦ってから零斗は何故か敵と戦うことに楽しみを感じるようになっていた。

銀時「何だ？バトルジャンキーに転職でもするつもりか？そういうのは既にありふれるから人気は上がらねえぞ？」

零斗「誰がバトルジャンキーだ腐れ天パ」

銀時「黙れ存在感のない主人公」

零斗・銀時「……やんのかゴラア!?!」

新八「ちよつと！こんな所で暴れないで下さいよ!!」

零斗・銀時「黙れ童貞腐れ眼鏡掛け機!!」

新八「テメエら表にでやがれ!!」

零斗と銀時が喧嘩を始めようとしたので新八が止めようとしたがそれはなんの効果もなくそれに対して二人が新八を童貞腐れ眼鏡掛け機と言ったため、新八まで喧嘩に参加しようとしたがものの5秒でフルボッコされるのであった。

アラタ「なあ、イタリカってどんな所だろうな？」

リリス「レレイさんから聞いた話ですがイタリカでは亜人や人間が共存している街だ

そうです」

飛鳥「あら、そんなの当たり前の事じゃないのかしら？」

十六夜「いや、レイの師匠の爺さんから聞いたがこの特地じや亜人の地位は圧倒的に低いに貴族連中が狩りと称して襲つてるらしい」

タツミ「とてもじゃないが正気の沙汰じゃないよなそれ」

ウエイブ「俺たちとこつちの世界の連中とでは価値観が全く違うんだからまあ仕方ないっちゃあ仕方ねえな」

後ろに乗っているアラタたちはイタリカがどんな場所かについて話していた。

ちなみにこの場所に乗っているのは以下の通りである。

・竜ヶ崎零斗・竜ヶ崎紫音・ネロ・クラウディウス・玉藻の前・清姫・静謐のハサン・
 沖田総司・織田信長・メイヴ・坂田銀時・神楽・志村新八・春日アラタ・浅見リリス・神
 奈月アリン・山奈ミラ・不動アキオ・兵藤一誠・リアス・グレモリー・姫島朱乃・ロ
 スヴァイセ・ゼノヴィア・クアルタ・アーシア・アルジエント・逆廻十六夜・久遠飛鳥・
 春日部耀・黒ウサギ・博麗霊夢・東風谷早苗・アカメ・タツミ・マイン・クロメ・ウエ
 イブ・エスデス・藤丸立香・マシユ・キリエライト・ベディヴィエール・クー・フリー
 ン（キャスター）・アヴィケブロン・ヴラド三世・謎のヒロインXである。

え、数が多くないかって？これでも学園全体で見たらほんの一部なんだから良くない

?

因みに彼らは早朝にアルヌスの丘から出発して既に今は夜になっていた。

また、他の乗り物に乗っている者達もまたそれぞれ今後どうするかを仲間たちと話し合っていた。

ユエ「ハジメ、私たちはこれからどうするの？」

ハジメ「まあこの世界に大迷宮があるかどうかともわからないし、しばらくは一緒にいた方が情報も集まるだろう」

香織「あの人たちは私たちの世界とは別の世界の人たちって言ってたけど本当なのかな？」

雫「それは間違いないでしょうね。少し話をしたけどあの人達の世界にある嵐獄島なんて私たちの世界には存在しない島だからね」

シア「私みたいな兎人族みたいな種族もいるみたいですね」

ティオ「まあ妾みたいな竜人族とかドラゴンなども種類も数も少ないらしいがいろいろらしいの」

南雲ハジメ一行は最初は自衛隊や禍終素学園の人達がハジメ、香織、雫たちの地球と同じかと思っていたが異なっていることを知ったが今後の活動もまだ決まっていないのでしばらくの間は一緒に活動することに決めたそうだ。ユエやシア、ティオも同族の

ような人々がいるから異論はないというかハジメの言うことには常に従うので特に問題は無いのであった。

ラフタリア「尚文様としては彼らについて行くことに何か異論はないんですか？」

尚文「正直あのヴィツチヤクズ王にアホ勇者たちがいないってだけで今の気分はいい。だが、『波』がいつ来るかもわからないんだ。早いうちに女王たちと合流した方がいいだろう」

フィーロ「フィーロもメルちゃんに会いたいよ！」

リーシア「わ、私も樹様が気になるので……」

尚文の心情としてはヴィツチヤクズ王、アホ勇者たちがいない今の状況がいいものだと感じている。しかし尚文を含めた四人の勇者は『波』と戦う必要があるからその『波』がいつくるのか、またこの世界でも『波』はくるのかを知るためにも女王に会う必要があると考えている。

フィーロは王女であるメルディを、リーシアは『弓の勇者』川澄樹のことを心配しているようだった。因みに他の勇者である『剣の勇者』天木練とフィロリアル萌えになった『槍の勇者』北村元康は以前よりまともになっているが樹だけはこの世界の飛ばされる前から消息不明になっていた。

豊久「おい信長、おまんはあのおまんと同じ名を名乗つとるおなごのことをどう思っ

ちよるか?」

信長(ドリフ)「まあ恐らくだが儂とは違う世界の信長だろうな。実際に話してみたが彼奴の考えは儂と全く同じだったからのう」

与一「まあ信長と同じ考えをするだなんて本人ぐらいしかいないよね」

オルミーヌ「ところでなんで私たちはここにいるんですか!?!」

シヤラ「あんたの所の大将がイタリカに廃棄物(エンズ)の情報がないか調べろって行かせたんだろ」

長老ドワーフ「ワシらそれに従っただけじゃし」

豊久を大将とした軍は十月機関の長である安倍晴明(あべのはるあきら)の命令によつてイタリカに調査をしに向かつていた。この馬車に乗っているのは豊久、信長、与一、オルミーヌ、シヤラ含むエルフ族十五名、長老ドワーフ含む十名である。今のところ廃棄物の存在はこの世界では確認されていないがそれは戦力の補給のために目立つ活動をしていないだけで既にこの世界のどこかで人類殲滅のための活動を始めているのかもしれない。

——各々それぞれ様々な思惑を抱きながらイタリカの街へと向かうのだった。しかし、この時の彼らはまだ知らなかった。イタリカは今、戦場となっていることを。そして自衛隊基地もまた戦場になるということを——

G A T E 編八話　イタリカ攻防戦（前編）

——零斗たちがアルヌスの丘を出発してから三日、零斗たちは無事何事もなくイタリカに到着したが、イタリカの街は戦場となっていた。

何故このイタリカが戦場になっているのかという原因は自衛隊によつて敗れた帝國軍と連合軍による敗残兵が盗賊になり、彼らは戦つて死ぬことを誇りに思つていたために死ににきていた。

それを防ぐためにアルヌスの丘を目指していた途中でたまたま立ち寄つたウラ・ピ・アンカ帝国第三皇女ピニャ・コ・ラーダ皇女が街の市民に指示を出してピニャの騎士団である白薔薇騎士団が到着するまで持ち堪えさせようとしたが、その前にワイバーンの鱗を売ると情報収支に來た伊丹たちが先に到着し、伊丹たち自衛隊は市民を守り尚且つ自分たちと敵対するより友好的にするほうがいいと思わせるために盗賊たちと戦うことをきめ、零斗たちは最初はテロリストを助けるのは否定的だったが街の人々を守るということには賛成のためピニャの指示により仕方なく零斗たちは南門で警備することになった。そして松明の光しかなく夜空に月が浮かんでいない深夜の時間帯。

零斗たちはそれぞれ二人一組の交代制でいくつかの場所に別れて監視していた。そ

して何故か零斗はロウリイと組むことになり、門の上で警戒していた。

零斗は自分の力で創った双眼鏡で門の外の様子を見ているのに対してロウリイはつまらなさそうに足をぶらぶらさせながら外を見ていた。

ロウリイ「ねえ、少し聞いてもいいかしら？」

零斗「何をだよ？」

ロウリイ「エムロイの神は戦いの神。戦う理由を明確にすることはとても大切なのよ。だから最初は協力することを嫌がっていたあなた達がどうして街の人達のためなら戦う気になったのか気になったのよ」

零斗「俺の戦う理由なんて大切な人たちを守る、ただそれだけだよ。街の人達を守ろうとするのはあの人たちがいくら敵国の人間でも罪のない人たちが殺されるなんて許されることじゃないからな」

ロウリイ「守れるの？あなた一人でその大切な人たちを」

零斗「その時はみんなで守り合うんだよ。俺たちは1人じゃない。だからみんなで力を合わせて守り合うんだよ」

嵐獄島の住人はあらゆる人々を受け入れ、互いに協力しあって生きている。そのため嵐獄島の住人同士での絆は深く、信頼も高い。そして困っている人がいると言うなら助けるのが信条である。だから零斗の戦う理由とは嵐獄島の人々が共通して持っている

ものである。ロウリイはその理由を聞いて満足したのか零斗に笑みを浮かべていた。

ロウリイ「ふふっ！耀司も面白いけどあなた達も中々面白いようね」

零斗「そりやどうも、神官様に褒められてこちらも嬉し——うん？」

ロウリイに対して適当に返事をしながら双眼鏡で見張りを続けていると、森の方から武装している兵士らしき男達がこの南門へとやって来ているのが見えてきた。

零斗「ロウリイ、悪いけど銀さんたち呼んできてくれないか？」

ロウリイ「別にいいけど私にも獲物を残しときなさいよお」

零斗は両手にマシンガンを創り出すとロウリイに銀時たちを呼んでくることを頼み、ロウリイは少し不満そうであるが向かってくれた。そしてロウリイは銀時たちに南門に敵が来たことを知らせるとそのまま多くの死者の魂が流れ込んでくるのを感じ東門へと走っていきそれに伊丹たち自衛隊と尚文、豊久、ハジメ一行が東門へ、残りの銀時たちは零斗が戦っている方へ向かうのだった。

——これより長い夜が始まろうとしていた。



戦闘が始まってから既に五時間ほど経過していた。最初は敗残兵による

盗賊達だけが相手に銀時たちは苦もなく倒していたが途中から盗賊とは全く異なる存在が同様に襲撃してきた。襲撃してきたのは無数のステージIとIIのガストレア、キメラアントの下級兵、ワイバーンやウェアウルフにスケルトン（FGOに出てくる奴ら）、ゴブリンやコボルトにオーク（廃棄物の配下）。そしてユンジュを筆頭に数十体のキメラアントの兵隊長と数体の師団長、ステージIとIIのガストレア、廃棄物のジャンヌ・ダルクとジルドレに土方歳三（エンズ）。それぞれ東門を土方歳三が南門をジャンヌ・ダルク（エンズ）を筆頭として攻め込んでいた。

土方（エンズ）「島津ううううう!!」

豊久「首おいてけええええ!!」

東門の内側の広場で豊久が土方（エンズ）の首を刈るために刀を振り下ろし、それを土方（エンズ）は刀で防ぐのを繰り返していた。土方の周りにいる霧状の新選組隊士の幻影もまた豊久に襲いかかろうと刀を構えるが、幻影が一步踏み出そうとするたびに堀の外からドワーフによる銃弾が飛んできて幻影たちはそれによって現れてはすぐに消えてしまうのだった。そして高台の方からは与一がエルフを指揮しながら迫ってくるゴブリンやコボルト、オークに対して弓を引いていた。

信長（ドリフ）「ちっ！まさか廃棄物の連中もこの街に責めてくるたアなあ!?!しかも何じゃあの化け物共は!」

伊丹「人の形をしている虫みたいのがキメラアントで、あの異形な姿をしたでかい奴なのがガストレアっていう俺たちの世界の生き物ですよ!!」

信長（ドリフ）「それがなんでこんな所におるんじや!!」

伊丹「俺だって知りませんよ!」

突然の予想外の出来事に苦虫を噛み潰したような顔をした信長は信長がエルフとドワーフに対して指揮をとっていた場所に来ていた伊丹に謎の生物について聞き、それが伊丹たちの世界に存在しているキメラアントとガストレアだと知った。本来の信長が考えていたとおりに進んでいれば盗賊たちを信長たちが倒し、その報酬を貰い尚且つ街の市民たちの支持を得ようとしていた。しかし戦闘経験皆無である市民たちはガストレアやキメラアントの姿を見ただけで逃げてしまい、今現在残っている戦力は北門からこちらに来た伊丹たちとピニヤ皇女含めた騎士団四名、それと降伏した盗賊たち。どうやら盗賊たちは廃棄物たちと全く関係がなかったようでキメラアントやガストレアに襲われ喰われてしまったので生き残るために信長たちに降伏し、後ろの方でシヤラたちエルフに監視されながら後方支援させられていた。

尚文「『ヘイトリアクション!!』」

尚文が盾を掲げながらスキルを唱えるとガストレアが尚文へと集まってきた。

そして尚文に集まってきたガストレアをラフタリアが剣で斬り、フィー口が足の爪で

切り裂いていた。尚文もまたシールドプリズン↓チェンジシールド↓アイアンメイデーのコンボでガストレアを一体ずつ倒していた。

ハジメ「消えろ雑魚ども」

離れた場所でハジメたちもキメラアント下級兵に対してドンナーで頭を撃ち抜いたり重力魔法で潰したり、ドリユツケンで叩き潰したり、ブレスで燃やしたり、爆光刃で切り裂いたり、刀で袈裟斬りしたりして蹂躪していた。

信長（ドリフ）「戦況は今のところこちらが有利。あの岩谷と南雲とその仲間たちが思ったより使えるおかげだな。しかしもし豊久がああ土方に負けてもしたら戦況は一気に変わっちゃうかもしれないねえ」

信長は全体の戦況を見てそう判断するが実際のところ豊久がやられても今のところまだ問題は無い。何故かと言うとハジメや尚文たちにとってステージⅠとⅡのガストレアや下級兵キメラアント、ゴブリンやコボルト、オークなどは数が多いだけで一体一体の力ではそこまでの脅威ではなく時間をかければ全滅させることは可能であり、土方が豊久を倒すより先に全滅させれば土方を全員で攻撃することが可能になる。しかしまだ兵隊長クラスのみメラアントやステージⅡのガストレアが東門の外で逃げ回っている盗賊たちを楽しそうにしながら狩りをするかのように戦う気力をなくした者達を殺していた。

信長（ドリフ）「もし門の外にいる奴らが外の連中を全員殺し終えたら次はこっちに
来るだろう。そうなりやこっちの戦況が不利になっちまう」

ハジメや尚文たちは特に息切れなどを起こしていないがエルフやドワーフ、ピニヤの
騎士達、後方支援をしている降伏した盗賊たちはそろそろ体力の限界に来ていた。出来
れば豊久たちと先程まで一緒に監視していた銀時たちにこちらの援護をしに来てもら
いたい、こちらからでは詳しく様子が見えないが先程から南門ではなにかの爆発する
音や燃え上がる炎をチラッと見た為、あちらも戦闘中だと分かり援軍を呼ぶのは厳しい
と信長はすぐに判断した。

信長（ドリフ）「まあいざとなったら街ごと焼き払って豊久たちを連れてこの場からと
んずらするかのおう？」

信長は最悪の事態を想定しながらいざという時のための仕掛けを用意してあるので
豊久が死にそうになったらこれらを使おうと考えているのだった。

信長（ドリフ）「しっかし、あっちはあっちで一体どうなつとるんじや？」

信長は迫ってきているゴボルトたちの眉間を撃ち抜いたり刀で切ったりしながら南
門を見るのだった。



南門では北門よりも多くの敵がやって来ていた。単純に見ただけでも東門の戦力の

二倍はいた。しかし禍終素学園の生徒達にとって戦闘や狩りを日常茶飯事で行っているものばかりで一般生徒達でも死線をくぐり抜けたことがあるものばかりだった。

ジャンヌ（エンズ）「燃える燃える燃えるおおおおお!!」

ヒロインX「ユニバースサーヴァントである私の前ではそのような炎恐るるに足ら——熱い!？」

立香「マシユ！ベデイヴィエール！こつちで援護するから二人はヒロインXの援護を!!」

マシユ「はい！マシユ・キリエライトいきます！」

ベデイヴィエール「承知しましたマスター！」

ジャンヌ・ダルク（エンズ）の相手を邪ンヌがし、立香はマシユとベデイヴィエールに魔術による強化を掛けてヒロインXの援護をする。復讐という概念が込められたジャンヌ（エンズ）の炎がヒロインXを襲うがヒロインXは炎をX字に斬り裂いていた。ジルドレ「貴様らはジャンヌにとって害だ。故にここで殺す」

姫島「あらあら？随分と大胆に言うんですね？」

ロスヴァイセ「ですがこちらも容赦はしません」

ゼノヴィア「貴様らがこの先の街に攻めてくるなら、私たちは街にいる人々を守るために貴様たちをここで倒す!!」

リアス「イツセー、貴方はここでアーシアを守りながら限界まで倍加してなさい。アーシアは私たちの誰かが傷ついたら治療をお願い」

一誠「任せてください部長!!アーシアは俺が守りますし、直ぐに倍加を終わらせて部長たちも助けますんで!!」

アーシア「わ、私も頑張ります!!」

リアス「ええ、お願いね。それじゃ行くわよ!!」

オカ研メンバー『はい!!』

ジルドレの相手を一誠たちオカ研メンバーがし、ゼノヴィアがデュランダルでジルドレに斬り掛かるがジルドレはそれを十字槍で防ぐと力任せに押し返してゼノヴィアを吹き飛ばすがその瞬間をロスヴァイセ、朱乃、リアスの三人による魔法の一斉放射を放ち、ジルドレはそれをかわすこともせず寧ろ自分から当たりに行くようにリアスたちに迫ってくるがそれを叩き落とすかのようにゼノヴィアがジルドレに斬り掛かる。それをジルドレが受け止め、そこにリアスたちが魔法を放つのを繰り返していた。こちらはジルドレが強靱な体と再生能力を持っているため中々攻めきれていなかった。

クー・フリーン「焼き尽くしな!『焼き尽くす炎の檻(ウィツカーマン)』!!」

ヴラド三世「蛮族共め、ここで朽ち果てるが良い。『血濡れ王鬼(カズイクル・ベイ)』!!」

清姫「旦那様のお願いです。あなた達はここで消し炭になりなさい。『転身火生三昧』!!」

信長「乱れ撃つぞ『三千世界』!!」

ガストレア&キメラアント『ギシヤアアアアアア!?』

アヴィケブロン「いけ、ゴーレムたち」

沖田（FGO）「沖田さんもノツプに負けていませんよ!」

タツミ「俺だつて負けてられねえよ!!」

キメラアントの兵隊長たちやステージIIのガストレア、そして大量にいるステージIとIIのガストレアや下級兵キメラアントやクー・フリーンの燃え盛る木々の巨人が、ヴラド三世の無数の黒槍が、清姫の竜の如き青い炎が、ノツプによる無数の種子島による雨霰の銃弾によって蹂躪されそれを逃れたガストレアやキメラアントをアヴィケブロンが製造したゴーレムや沖田たちが相手取っていた。そして少し離れたところで銀時と零斗がキメラアント師団長であるユンジュを相手取っていた。

ユンジュ「オラア!」

ケンタウロスのように下半身が馬になっているキメラアントが前脚を勢いよく銀時に向かつて踏みつけに来たが、銀時はそれを紙一重でかわしそのままユンジュの脇腹に木刀を叩き込み数メートル飛ばした。

ユンジユ「クソがアっ!! てめえらみたいなゴミクスは大人しく俺様の奴隷になつてればいいんだよ!!」

零斗「銀さん何か馬鹿がほざいてますよ」

銀時「気にすんな。アイツはカルシウムが足りねえからあんなイライラしてんだよ」

ユンジユ「黙れえ!!」

ユンジユは零斗と銀時を殴ろうと向かってきているがわかりやすい動きなので、銀時と零斗は軽くそれをかわし銀時は顔に木刀を、零斗は剣で背中を斬りつけた。そしてユンジユは攻撃を当てようと拳や後脚など自分ができる攻撃手段を使って出鱈目に攻撃するがそんな攻撃は当たることもなく、攻撃する時に出来る隙について銀時と零斗が攻撃をしているうちにユンジユは体の至る所から血が流れており傍から見てもボロボロだった。

ユンジユ「がああああああああ!!」

ユンジユは強者である自分が虫けらとして扱っていたはずの人間に面白いように好き勝手扱われていることにブチ切れ怒りに身を任せながら攻撃を始めた。それは先程よりも大振りとなつているのでかわすことは難なくできるのだがさつき以上に出鱈目なために近づいて攻撃することが難しくなり、銀時と零斗は距離をとつた。

銀時「つたく奴さんがああも暴れられちゃあこつちから仕掛けられねえな」

零斗「大丈夫ですよ先生。もう終わりですから」

零斗は拳銃を創り出し、装填されている銃弾を取り出し別の銃弾に入れ替えそれをユンジュに撃ちだすと銃弾は吸い込まれるように額に当たりそのまま頭部を貫通するとユンジュは崩れるように倒れた。今零斗が撃った弾は魔獣の牙を弾丸に特殊加工することによって貫通力を上げること、装甲車すらも貫けるほどの威力を持つのだった。

零斗「これでまず一体」

銀時「よし、じゃあ俺は新八と神楽のここに行くからな」

零斗「わかりました。俺もこの雑魚倒したらネロたちと合流します」

銀時は零斗に伝えると目の前にいるガストレアやカメラアントを木刀で薙ぎ倒しながら新八たちのいる所へと向かうのだった。零斗は銀時が去るのを確認すると少なくともったカメラアントを斬り伏せる。そしてこの辺りで最後の一匹となったカメラアントを殺すと一旦深呼吸しながら周囲を確認すると全体的に数は最初に比べ減っているがまだまだ敵はいた。

零斗「よし、それじゃあネロたちのところにつ！」

ネロたちのところに手助けしようとして足を動かさそうとした瞬間、背後から強烈な殺気を感知後ろを振り向くと拳がすぐ目の前にまで来ていた。かわせないと判断した零斗は剣で拳を受け止めたが拳の威力を抑えることは出来ず、そのまま壁まで殴り飛ばされ

た。

零斗「がはっ!？」

殴り飛ばされた零斗はぶつかった衝撃で崩れた壁にそのまま気絶するように倒れてしまった。そして新八たちのところに行こうとしていた銀時やほかの場所で戦っているネロたちは突然現れ、零斗を殴り飛ばした存在に驚いていた。そしてその存在を知っているのかジャンヌ（廃棄物）とここにいるキメラアントたちに指示を出しているらき師団長のカエル型キメラアントは顔を歪ませていた。

??? 「よお、随分楽しそうじゃねえかよ」

そこに立っていたのは一人の男だった。その男は黒いロングコートを身にまとい、その背中からは三対の悪魔の翼が出ていた。そして銀色の長髪を靡かせながらもその赤い瞳は肉食動物のような獰猛さを感じ取れた。

ジャンヌ（エンズ）「貴様、一体何しにここへ来た？」

??? 「ああ? てめえらが役たたずだからその回収に来てやったんだよ」

ジャンヌ（エンズ）「なっ!？」

??? 「説明するのもめんどくせえからこっちで勝手にやるぞ」

ジャンヌ（エンズ）が男の言葉に怒り、文句を言おうとしたがそれより先に男が指を鳴らすとジャンヌ（エンズ）たち敵陣営たちの足元に魔法陣のようなものが浮かび上が

ると同時に敵は死体も含めて全て消えていった。

??? 「さて、これで終りだから後は帰るだけだが・・・」

エスデス 「大人しく帰すと思っっているのか？」

男がこの場から去ろうとしたがそれを大人しく見逃すようなものたちはこの中には当然おらず、エスデスの槍状の氷が男の周囲を囲み、その外側で円を囲むように全員が戦闘態勢をとかず警戒を続けていた。

??? 「俺としちやアンタらと戦うつてのは好ましいが流石に全員を相手するのは難しいからな」

エスデス 「なら降伏して情報を吐いて死ぬか、ここで殺されるか選ばせてやろう」

??? 「それどっち選んでも死ぬじゃねえかよ？ じゃあ三つ目の選択肢を選ばせてもらおうか」

エスデス 「三つ目だと？」

??? 「————竜ヶ崎零斗を殺してこの場から逃げるのさ」
『！！！！！！』

男がニヤリと笑みを浮かべるとエスデスは男の周囲に浮かべていた氷槍を飛ばし氷槍が男に向かっていく瞬間、エスデス、アカメ、ネロ、沖田はそれぞれの得物で男に斬り掛かる。しかし男は迫り来る氷槍を右手の掌から赤黒い球体を男の周囲を回るよ

うにして飛ばして水槍を砕き、男はそのままエスデスたちが攻撃するよりも早くその場から離れ、一直線に零斗が埋まった壁へと向かいそのまま拳を振り下ろした。

——次の瞬間、男は空に飛ばされていた。

男はそのまま空中で体勢を立て直そうとするが男のすぐ目の前にまで黒い炎の塊が迫り、それを手を振り下ろすことで発生した魔力の刃で切り裂き、炎の塊はそのまま空中に霧散していきそれが消えるのと同時に男は着地した。

男は壁の方をまるで玩具を貰った子供のような楽しそうな笑みを浮かべ見ていた。そして壁の方から零斗が現れたが先ほどとは違い、その手には黒い剣を持っておらず代わりに両腕を纏うように漆黒の鎧で覆われていた。そして零斗もまた男と同じように笑っていた。

零斗「よお、久しぶりだなブレイズ・バルバトス？」

ブレイズ「ああ久しぶりだな零斗、てめえとまた会えて嬉しいぜ？」

話をしながらも零斗は最初は腕のみに纏っていた鎧を徐々に全身に纏っていき始めた。ブレイズも全身から魔力のようなものを溢れださせていた。どちらもいつでも戦いを始めるように準備を始めていた。

霊夢「ねえ零斗、あいつの事知ってるみたいだけど一体何なの？」

いつの間にか零斗の隣に来ていた霊夢がブレイズという男が以前からの知り合いの

ように話しているのが気になったのかブレイズについて詳しく聞こうとしてきた。

零斗「いやまあそこまで大した関係じゃないさ。ただの――」

ブレイズ「まあそうだな俺たちはただの――」

「昔ちよつと殺し合いた仲なだけだ」

GATE編九話 イタリカ攻防戦（後編）

イタリカの街東門広場。そこは先程まで戦闘があつたことが分かるほどに周囲は崩壊しており地面や壁などの至る所に赤や緑、紫色の血がこびりついているがブレイズが死体も含めてキメラアントやガストレアなどの敵軍を転移させてしまったので血肉はどこにも見当たらなかった。

そんな場所でドラゴンそのもののような黒い鎧を全身に纏った零斗と両手に赤黒い球体を作り出し、互いに戦闘態勢を崩さないまま睨み合っていた。それを離れていたところで銀時達はいつでも加勢できるようにしながらも二人の様子を見ていた。

ブレイズ「こうして戦つたのは五年前の夏だったか？」

零斗「ああそうだな。その時は俺が勝つたな」

ブレイズ「ああ？ 何寝ぼけたこと言つてんだ。あれはどう考えても俺の勝ちだろうが」

零斗「負け越してるからって嘘言つてんじやねえよクソ悪魔」

ブレイズ「負け越してるのはためえだろうが駄竜」

零斗・ブレイズ「………死ねやこのカスがあああああ!!」

右腕部分を剣に変えた零斗が、赤黒い球体を剣の形に変えたブレイズが叫びながら斬りかかろうとしていた。

銀時「オラアアアア!!」

零斗・ブレイズ「へぶううううう!?!」

その剣がまじわろうとした瞬間、銀時によるドロップキックが二人に炸裂し二人は勢いよく地面を転がっていくのだった。

零斗「ちよつ、銀さん。そこは黙って見てくれるところじゃないんですか?」

銀時「いや、確かにジャンプ好きの俺としては一対一の戦いを邪魔するのは気が引けるけど、馬鹿なことしてる奴を止めるのも教師の務めだからな」

零斗「いや、銀さんってそんな真面目に教師してないじゃないですか」

銀時「たまにはこういうこともあるんだよ。とりあえずまずは俺に糖分を渡し、あの男について詳しく話せ」

新八「いや糖分渡しする必要はないでしょ」

零斗「わかりましたよ、おいブレイズ。説明したいから一旦休せ——」

零斗は銀時たちにもブレイズとの関係を話すために一時休戦を提案しようとしてブレイズの方を見るとそこにはエスデスによってやられたと思われる氷漬けにされたブレイズの姿があり、その周囲を殺る気に満ち溢れた零斗に恋する乙女たちがいつでも攻撃出

来るように準備していた。

零斗「じゃあそいつはどうなってもいいので話しますね」

ブレイズ「言いわけあるか!!」

零斗はブレイズが氷漬けになっているのも気にせず話そうとしたが氷の中でもその声が聞こえたらしいブレイズが氷を壊して外に出てきた。

零斗「ちっ、大人しくそのままくたばってれば良かったのにな」

ブレイズ「零斗くうーん? その態度は何かな? そっちがその気ならこっちも本気で殺すぞ」

零斗「やれるもんならやってみろよクソボケ悪魔」

ブレイズ「上等だやってやろうじゃねえかよクソ駄竜が」

今すぐにも殺し合いを再開しようと互いに頭をぶつけながら襟元を掴んでおり、それぞれ右手に剣を握っていた。

???「落ち着けバカ者共」

ゴスっ!!

「グフツ!!」

二人が睨み合っている時、突如二人の頭に赤い槍を勢いよく叩きつけられたことで二人の頭に大きなタンコブができ、二人はあまりの痛さに頭を抱えてしゃがみこむのだっ

た。

零斗は痛みを堪えながらも聞き覚えのある声を聞いたため顔を上げるとそこには紫色のタイトスを来た女性と銀色の鎧を纏い、馬に乗った女性がいた。

零斗「あの、なんでスカサハ師匠とアルトリアがここにいるんですか？」

スカサハ「ほう、私たちのことを思い出したか」

アルトリア（槍）「安心しました。忘れられたままというのも悲しいですから」

零斗「まあ思い出したのもついさつきなんだけど」

零斗は苦笑しながらスカサハとアルトリアと話した。

マシユ「クー・フリーンなどケルトの兵士を鍛え上げた影の国の女王であるスカサハ。

ブリテン王国の騎士王であるアルトリア・ペンドラゴン。どちらも有名な英霊ですね」

立香「あれ、でも士郎と鍵のアルトリアとは違うよね」

一誠「ああ、こっちの人はオツパイの大きさはメロン並だしな！」

ヒロインX「あの女とついでにこの変態も殺すべきですね」

信長「まあ落ち着くのじゃヒロインX。こういう時は茶を飲んで煎餅食うのが一番じゃよ」

沖田（FGO）「いや、それは落ち着きすぎじゃありませんか？」

さつきまでシリアス展開の開始を思わせるような感じだったがやはりいつも通りの

ギヤグというかぐだぐだな感じで話は別の方向へと進んでしまふのだった。

とうか存在をまるでないかのように扱われているブレイズは孤独を感じていた。

スカサハ「まあ私とアルトリアは零斗の師匠として修行をつけていてな、バルバトスは勝手にやってきた奴だ」

霊夢「そういえば零斗がいなくなった時がたまにあるけどそういうことだったの」

零斗「ああ、だけどさつきまでスカサハたちとに関する記憶が消えてたんだよな」

アルトリア（槍）「そ、それはどうしてでしょうね（目逸らし）」

スカサハ「不思議なこともあるものだ（目逸らし）」

ブレイズ「いやこの二人いつも修行終わらせたあとの食事に色々な薬ぶち込んでるか
らそれで記憶飛んでっから」

キヤスニキ「師匠、あんた……………」

ベデイヴィエール「我が王……………」

スカサハ「ち、違うぞ!!別に影の国に連れ込んで既成事実を作って共に暮らそうなど
考えておらんぞ!!」

アルトリア（槍）「わ、私だつて別にブリテン王国で一緒に夫婦のように暮らそうなど
とは考えてはいませんよ!!」

二人は否定しているがその顔は林檎よりも赤くなつておりその様子から察すること

が出来たのか霊夢達はジト目で二人を見るが当の本人である零斗はなんの事かよく分からないのか首を傾げているがいつもの事なので皆特に気にしてなかった。

ブレイズ「まあ暇つぶしでたまたま見つけたのが零斗で、そこからちよくちよく殺し合いするようになったんだよな」

零斗「野垂れ死んでなかったのが今でも残念だよ、その間抜け面を見てると心底腹立つ」

ブレイズ「あ”あ”あ”!”!?”!”!”

零斗「あ”あ”あ”!”!?”!”!”

新八「凄いですね。僕零斗くんがあんな喧嘩腰になつてるのめつたに見ませんよ」

一誠「ああ、シユラみたいなクズ連中ぐらいしかあんな喧嘩腰しないよなアイツ」

アラタ「つまりこいつもそれほどのクズってことか」

ブレイズ「流石にそれは否定するぞオイ」

スカサハ「おい、いい加減話の続きをしたいたんだが」

ブレイズ「うるせえよ若作りババ————」

「残酷な描写があるので暫くの間お待ちください。気になる方は自分で好きなように想像することをオススメします」

スカサハ「——————さて、これで一通り私たちについての話は終わりだな」

のを零斗は見逃さず中指を突き立てた。

メイヴ「マスターちゃんあのブレイズって奴のこと嫌いすぎじゃない？」

零斗「いや別に嫌いってわけじゃないんだ。ただアイツ相手には何故かあなんだよな」

早苗「つまり新撰組の土方さんと沖田さんみたいな関係ですか？」

飛鳥「見た感じはそれが近いのかしらね」

耀「そうだね」

零斗「お好きに解釈してくださいって結構だ」

一誠「なああさっきの奴は本当にいなくなつたのか？ 実は近くで隠れてて油断したところを攻撃とかさ」

零斗「アイツは騙しや罠とか姑息な手段を考えないからそういうことはないんだよ」

立香「じゃあこれで終わりってことでいいんだね」

零斗「多分な」

戦闘が終わりだと実感出来たのか肩の力を抜き、地面に座り込んだり壁に寄りかかったりするものもいた。伊丹たちが向かった東門の方も戦闘が終わつたようであり、こちらの方にも市民による勝鬨の声が聞こえていた。

——こうしてイタリカの街に一時的なものだが平穏が訪れた。しかし、これは

これらを見ても出来損ないと言えるか？」

プロフェッサー「フン、青二才の小僧が抜かしおる。雇われの傭兵は黙って言われた通りの仕事をしておればいいんじゃないよ」

ブレイズ「へいへい、それじゃ俺は次の仕事まで待機させて貰いますよ」

興味が無くなったのかブレイズは死体の山から降りると手をヒラヒラさせながらその場から離れていった。それを研究員たちは睨むのだった。

研究員B「プロフェッサー、何故我らが王はあのような輩を雇ったのでしょうか？」

プロフェッサー「そのような些細なことを我々が知る必要は無い。我々は我々がすべきことを行うだけだ」

研究員C「そうですね。それに新たな実験体もすぐにも実験投入できますから次の作戦で目にもものを見せてやりましょう!!」

プロフェッサー「無論だ。それに新たな実験体を確保し、更なる実験を行えるというものじゃ」

プロフェッサーは心底愉快そうに実験出来ることを想像し笑っていた。彼らにとつてこの世全ての生命が実験するための存在としか見ておらずその命がどうなろうと構わないと言う考えを持って行動していた。

??? 『ならば次の作戦にはそれらを出撃して貰おうか』

そう言いながらプロフェッサーの前に現れたのは全身を金と黒で裝飾された鎧を身に纏った青年だった。彼がこの『ウロボロス』を纏める組織の王、クロノス。

クロノス『次の作戦は未知の戦力との戦いになる。その実験体たちがどれほどのものか見せてもらおう』

プロフェッサー「いいだろう。して次の作戦ではどのような敵と戦うのですかな？」

クロノス『——この世界の住人だよ』

GATE編十話 アルヌス基地での騒動（前編）

——零斗たちがイタリカの街に着いたのと同時刻、アルヌスの丘にある自衛隊たちによつて造られた特地の調査用基地。そのアルヌスに到着した一団が存在していた。彼らは多種族平等主義の国の使者及び国の代表であり自衛隊が彼らの国にとつて危険な存在であるのかそれとも友好関係を築ける存在なのかを知るために実際に会いに来ていたのだった。

リムル「ジユラ・テンペスト連邦国の盟主のリムル・テンペストだ」

冬夜「ブリュンヒルド公国の国王、望月冬夜です」

ハヤト「サガ帝国の勇者、ハヤト・マサキだ。よろしく頼む」

ガゼフ「リ・エステイーズ王国騎士団長ガゼフ・ストロノーフだ」

狭間「本日はこのような場所へ来ていただきありがとうございます。私がこの基地の最高責任者である狭間陸将であります」

冬夜「こちらこそ急に来たというのにこのように会談の場所を設けていただき感謝しています」

初めに互いの紹介をしあったリムルたち。本来ならこういった場にはハヤトやガゼ

めぐみん「私としてはキャベツが飛ばないことが信じられませんがね」

立香「まあこつちの世界でも色々面白おかしいものが沢山あるし特に驚くことじゃないよね」

ダグネス「そうかそちらの世界も色々あるんだな」

めぐみんとダグネスも立香たちの世界の話を聞いてその世界の様子に驚きを隠せないでいた。特にめぐみんは島一つを跡形もなく消す兵器があることを聞くとそれと同等の威力の爆裂魔法を放って見せるとカズマにドレインタッチでアクアから魔力を限界まで絞り出してその魔力をめぐみんに渡すようにお願いするが当然のごとく却下されることがあったのは特に語ることもないだろう。

当麻「そういや自衛隊の偉い人がこつちの世界の人と話し合っているらしいけど、一体何の話してるんだだろうな」

十六夜「まあ十中八九こつちがどんな目的でこの世界に来たのかを聞きに来たんだろうな」

飛鳥「そうね、それに乗ってきた乗り物は全員異なるけど見た目からして高価なものだと思うわ」

耀「つまり偉い人が来てることだよな」

キンジ「まあそういう事だよな」

当麻たちはこの酒場に入る前に自衛隊の居住エリアにそれぞれ異なる装飾が施された馬車や狼車、船などが止められていた。現地人が乗っていた馬車と比べてもその豪華さはよく分かるものだった。

ランスロット「それにしても同行者たちの女性陣は皆美しい方ばかりですね」

ガウエイン「ロリ巨乳の人妻が居ないのは残念ですが皆さん中々のものをお持ちで」

トリスタン「私は悲しい・・・友が居ないのをいいことにこのようなことを楽しんでるなんて」

黒髭「でも異世界のおんにやの子を見るだなんて素晴らしいことですぞ？」

フェルグス「頼んだら抱かせてもらえるだろうか？」

ダビデ「僕はやるよ、かなりやるよ」

ランスロットを筆頭に禍終素学園文化系部活のカルデア部所属の藤丸兄妹が呼んだ変態サーヴァントたちが双眼鏡でリムルが連れてきたシオンとシュナ、テストアロツサ、ウルティマ、カレラ、冬夜の嫁であるリンゼ、エルゼ、八重、ユミナ、スウシイことスウ、ルーシアことルーヒルデガルドことヒルダ、リーン、桜。ハヤトの仲間であるリーングランデ、ルクス、ファイファイ、ロレイヤ。全員異なる良さがある美人美女である。ちなみにガゼフの連れてきた部下（全員男）やリムルが他に連れてきたゴブタ、ディアブロ、ヴェルドラには一切興味はないようひたすら女性陣を邪な目で見ていた。そんな彼

らに同意するもの達もいるが女性たちがランスロットたちを養豚場の豚を見るような目で見ているため表立って同意できないのであった。

キンジ「なあ藤丸、お前んとこのサーヴァントってさ——」

立香「言わないで、私も兄さんもその事を理解してるし何とかしようと思ってるんだけど全く改善できないんだよ」

白雪「どつかのバカアリアだっけいつまでたつても銃を撃ちまくるのやめないしね」
アリア「どこぞのヤンデレ白雪よりもましよ」

白雪・アリア「……（互いに目が笑っていないまま武器に手を掛けようとする）」
飛鳥「あなたたち五十歩百歩って言葉知ってるかしら？」

耀「ダメだよ飛鳥、二人とも話聞いてないから」

十六夜「心配するな。喧嘩し始めたら肉壁で周りに被害が出ないようにするからな」

カズマ「おい待て、どうして肉壁と言いなながら俺の方を見るんだ」

明久「いや本当に生き返るのか実際に見てみたいし」

カズマ「そんな理由で死にたくねえんだけど!? ってかあの二人止めるって選択肢はねえのかよ?」

ダクネス「それよりカズマ、もし肉壁になるのだとしたらぜひその役目を私に……」

（*、*、*）ハアハア」

——今日の朝、自衛隊からこのアルヌスの丘に近づく怪しい集団がいると話された。その集団の正体もその数も不明なので自衛隊は警戒態勢を取っていた。これには新撰組と今回話し合いに来たりムルたちも協力することになっており行動する時も二人以上と言われていた。

明久「にしても今日は嫌な天気だね」

鍵「ああこういう時に限って嫌なことが起きるんだよな」

カズマ「おいフラグ建てるのはやめろ」

今朝聞いた話を思い出して不安なのか明久と鍵が不安を紛らわせようと話すがどう考えても折れなそうなフラグを立てている2人にカズマはツツコミをいれた。

明久・鍵「こんなこといいな できたらいいな あんな夢 こんな夢 いっぱいあるけど〜♪」

カズマ「おい！ドラ○もん歌って誤魔化そうとすんな!!」

明久と鍵は気を紛らわせようとドラ○もんを歌い始めカズマは人選を間違えたかと頭を抱えていた。

そんな時、前の通路の右側の曲がり角からドゴンツ!!と大きな音が聞こえてきた。その音が聞こえるのと同時に濃厚な殺気を感じ取れた。

明久・鍵「————っ!?!」

殺気に気づいた二人はそれぞれ木刀と日本刀を構えた。少し遅れたがカズマも愛刀『ちゅんちゅん丸』を構えた。

そしてズシン！ズシン！と重量感ある足音が近づいてくるのが聞こえた。曲がり角から現れたのは柔道着を着た熊だった。その熊の手から真新しい血が滴り落ちていたために恐らく誰かと戦った後なのだろう。熊は明久たちに気づくと襲いかかろうとしてきたがその前に明久が熊の前まで移動しそのまま木刀で熊の右目を潰し、それで怯んだ隙について鍵は熊の右足を斬り反対の足にも中級水魔法『アイスランス』を突き刺すと熊は倒れた。

カズマ「え、おかしくね？なんで普通の世界にいる奴らが俺より強そうなの？」

明久「いやうちの学園じゃ戦闘訓練も授業の一環だし普通科でも武器や魔法の扱いは学ぶよ」

鍵「後金ない時とかは森に行つて魔獣や魔物狩ったりするからな」

カズマ「納得いかねえ!!」

カズマはどう見ても自分より強い二人に絶望していた。因みに明久たちの世界では生まれてから五年経つと検査を行つて何か能力を持っていないか調べる。魔法を使えるものはそこそこおり、また魔法を使えないとしても超能力や摩訶不思議な力を宿していることが多い。明久は妖力と呼ばれる力をその体に宿しており木刀に妖力を込めた

りして実体のないものを斬れたりする。鍵は刀と魔法の両方を使いこなしており特に魔法は生活に使ったりするので結構器用に使ったりする。

熊？『キ、キサマら。ヨクモヤツテクレタナ』

明久「あれまだ意識あつたの!？」

鍵「つてかなんか回復してないか!？」

カズマ「つかアレ熊じゃなくね？」

熊が倒れた方を見ると刺された右目と左足、斬られた右足の傷が無くなっていた熊——否、力士が立っていた。そしてその後ろには眼鏡をかけた小柄な男と人間の腕が生えている人間サイズのコブラが立っていた。

矢部「まさか本郷に傷を負わせるのが現れるなんてね。僕は獣闘士『巨猩羅（ゴリラ）』矢部正太。君たちがさっき手傷を負わせたのは獣闘士『熊（ベア）』のジェロム本郷。そして獣闘士『壺舞螺（コブラ）』『大沼電』

眼鏡をかけた小柄な男——矢部が彼らの正体を話した。獣闘士はこの基地にいるのは瞳、獲座、大河、初、壺之介の五名だけなのでそれ以外の獣闘士は侵入者ということだ。

カズマ「一応聞くけどアンタらは何しに来たんだ？」

矢部「決まってるじゃないか。この基地を貰いに来たのさ」

ヘッドオーガ）、剣牙猫（サーベルキャット）などの魔獣、ケルベロスやペリュドン、装甲トカゲ（アーマーサウルス）、エビルムカデ、槍足鎧蜘蛛（ナイトスパイダー）、白刃巨大熊（ソードグリーズリー）、孤刃虎（ブレードタイガー）、巨大妖蟻（ジャイアントアント）などの魔物、GN-XIVやグレイズ、サーペント、ヴィンセント、ビルゴII、コダール、ベヘモス、GRK-7、DBM-2、ザクウォーリアーなどの自立行動する機動兵器、悪魔や堕天使などの他種族などとその数合わせて二百万を超えている。彼らもまたイタリカを襲った獣闘士連中と同じく『ウロボロス』の一員であり、このアルヌスの基地を奪い『ウロボロス』の戦略拠点としようとしていた。無論基地にいる人間は実験の材料か奴隷にすることが決まっているからか中には欲望を隠そうともしていないのもいた。

そんな彼らを見て獅子の獣人——グラディエルはこれから行おう彼らの軍が蹂躪する様を想像して笑みを浮かべていた。

グラディエル「ククク、雑魚を潰すだけの簡単な任務だが蹂躪するのは素晴らしいこととは思わねえかアルファ？」

アルファ『……………』

グラディエル「チツ！人形に話しかけても無駄か。まあいい先ずは奴らの無様に泣き叫ぶ声でも聞かせてもらおうじゃないか」

グラディエルは魔導人形（マジックゴーレム）アルファに話しかけるが、アルファは何も言わないため少し機嫌を損ねたがこれから始まる蹂躪によって敵が泣き叫ぶことを思い出し、そんな気持ちも直ぐに消えた。

確かに自衛隊の戦力だけならば多少の損害はでもこの戦力で蹂躪することは可能だっただろう。

——しかしグラディエルたちは知らなかった。あの基地には自衛隊だけではなく魔王や勇者、頭のおかしい学園教師生徒がいることを。そして彼らによってグラディエルたちが窮地に落とされるとは誰も思いもしなかった。

棘頭猿『ゴガアアアア!!』

進行してくる敵に気づいた自衛隊たちは戦車や、量産型カタクラフトアレイオン、日本製KMF暁、自衛隊MS紫電、ムラサメ、リーオーによる銃火器の弾幕の雨を張り敵の数を減らしていくが数が多すぎると敵の進行は遅れないでいた。そして一匹の棘頭猿がとうとう門の前に辿り着き門に向かって腕を振り下ろして門を破壊した。

自衛隊隊員A「魔獣が門を壊して入ってきたぞ！」

自衛隊隊員B「急いで魔獣たちを外に追い出すんだ!!」

門が壊れるとそれを切っ掛けに魔獣や魔物たちが基地の中へと我先にとなだれ込んできた。無論自衛隊はそれをただ見ているだけなどせず自衛隊隊員は銃火器で応戦す

るが前を行く殻獣による硬いからによって銃弾は弾かれてしまうのだった。アレイオ
ンら自衛隊の機動兵器は接近してきた敵の機動兵器の相手をするのに手一杯になつて
いるので魔獣や魔物の相手をすることが出来なかった。よって自衛隊員は今まさに蹂
躪されようとしていた。

自衛隊隊員C「た、隊長。ここは一先ず後方へ撤退するべきでは……」

隊長「駄目だ。後ろには民間人がいるんだ。我々は自衛隊として彼らを守る義務があ
る」

魔獣や魔物に恐怖を感じた自衛隊隊員の一人が隊長に具申するが隊長はその意見を
却下した。彼らの後ろには避難している途中のこの世界の協力者である戦うことの出
来ない現地人、異世界人、禍終素学園関係者がまだおり民間人を守る為にも退くわけに
はいかないのだ。具申した隊員も隊長に言われてそのことに気づき頭を下げるとすぐ
に対巨大生物用銃を構えた。他の隊員たちもバズーカやランチャーなど歩兵ができる
限りの火力の高い武器を構えた。

隊長「総員、一斉射撃!!」

魔獣たちが射程範囲内に入ると同時に隊長による合図を切っ掛けに持てる限りの火
力を放った。それにより数体の殻獣、棘頭猿を倒すがそれは焼け石に水程度で魔獣たち
の歩みを止めることが出来なかった。

自衛隊隊員D「そ、そんな・・・」

隊長「怯むな！急いで次弾を装填しよう一度攻撃を——」

めぐみん「その必要はありませんよ」

隊長が再度攻撃するために指示を出そうとした時、その言葉をめぐみんが遮った。そのめぐみんの後ろにはパーティメンバーのアクアとダグネス、更にアクセルの街の冒険者に新撰組を筆頭に戦闘力のある禍終素学園教師生徒が集まっていた。

隊長「き、君たちどうしてここに・・・」

桂「お心遣いには感謝するが我々は黙って守られるような存在でなくてな」

高杉「俺達の前に現れたのが奴さんの運の尽きって訳さ」

辰馬「アハハハ！まあ要するに儂らは暴れたいっちゆうことじゃよ」

隊長は避難してはるはずの彼らがここにいることに驚きを隠せないでいたが桂たちはそれを気にせずそのまま自衛隊たちの横を通り、魔獣たちへと武器を構えながら近づくのだった。

近藤「いくぞ新撰組!!」

ダクネス「我々も続くぞ!!」

隊長「一般人にはわかり戦わせるな！我々もやるぞ!!」

『!!!!!!!!!!』

近藤、ダクネス、隊長の言葉を切っ掛けとしてこの場にいる全員の戦う気が上がった。近接武器を持っているものは魔獣たちに近づき、銃や魔法などを使うもの達は後方で彼らの援護を始めた。

一輝「第一秘剣『犀撃』!!」

綾人「九牙太刀!!」

ゾロ「死・獅子歌歌!!」

ザップ「斗流血法・カグツチ『刃身ノ巻・焰丸 大蛇薙』!!」

ツエツド「斗流血法・シナトベ『刀身ノ伍・突龍槍』!!」

流子「武滾流猛怒（ぶった切るモード）!!」

キリト「スターバースト・ストリーム!!」

ハヤト「《歌え》アロンダイト!!」

リムルたちの世界でAーランクという一体だけでも街を甚大な被害を出すほどの危険な鎗足鎧蜘蛛が一斉に鎗のように鋭い脚で襲いかかってくるが、一輝たちによってその硬い甲殻ごと切り裂かれてしまい鎗足鎧蜘蛛は倒れるのだった。

ルフィ「ゴムゴムの火拳銃（レッドホーク）!!」

トリコ「50連釘パンチ!!」

百代「無双正拳突き!!」

いた。

ヒイロ「ターゲットロック、目標を消滅させる」

刹那「ダブルオークアンタ、目標を駆逐する！」

ガロード「くらいやがれ!!」

アムロ「ガンダムの名は伊達ではない！」

キラ「当れエエ!!」

シン「そんなに戦いたのか、アンタたちは!!」

カミーユ「ここからいなくなれ!!」

ジユドー「くらえ！」

バナージ「はあっ!!」

三日月「邪魔なんだよ」

ヒイロのウイングガンダムゼロ（EW）のバスターライフルと刹那のダブルオークアンタライザーソード、ガロードのガンダムDXのツインサテライトキャノンによるビームがサーペント、ビルゴイーを消し去り、アムロのレガンダムのフィン・ファンネルとキラのストライクフリーダムガンダムのドラグーンがザクウォーリアたちのコックピット部分を狙い撃ち、シンのデステイニーガンダムのアロンダイトがベヘモスの腕を切り裂きそこにカミーユのZガンダムとジユドーのZZガンダム、バナージのユニコー

ンガンダムがベヘモスの胴体に最大火力を叩き込み、三日月のガンダムバルバトスルプスレクスがメイスでグレイズたちを叩き潰すなどと先陣切って敵MSを蹂躪していた。それに続くようにガンダムグシオンリベイクフルシテイやガンダムデスサイズヘル、インフィニットジャステイスガンダム、ガンダムサバーニヤなどの嵐獄島のMSたちが暴れるのだった。

ルルーシュ「消え失せろ！」

オルドリ「落ちなさい!!」

オルフェウス「落ちろ！」

甲児「ブレストファイヤー!!」

鉄也「サンダーブレイク!!」

真上「インフェルノプラスター!!」

葵「断空剣!!」

シモン「フルドリライズ!!」

宗介「ゼーロス、一斉発射」

竜馬「ゲッタートマホーク!!」

ルルーシュの蜃気楼によるハドロンショット、オルドリンのランスロットハイグレイルのソードハーケン、業白炎の滑空砲、甲児のマジンガーZによるブレストファイヤー、

鉄也のグレートマジンガーによるサンダーブレイク、真上のマジンカイザーSKLによるインフェルノブラスターによって空を飛んでいたヴィンセントやGN-XIVは次々と破壊され、地上でも葵のダンククーガノヴァマックスゴッドの断空剣、シモンのグレンラガンによるフルドリライズ、宗介のレーヴァテインのゼーロス、竜馬の真ゲッターによるゲッタートマホークによってGKB-7、DBM-2、サーペントが次々と破壊されていた。

———こうしてアルヌスの基地での戦いは始まった。この地での戦いもまたイタリカ同様過酷なものになろうとしていた。

GATE編十一話 アルヌス基地での騒動（後編）

——アルヌス基地での戦闘が始まってから約五時間が経過していた。

魔獣や魔物、MSなど機動兵器との戦闘はアルヌス基地にいる人々が圧倒的優勢な立場で戦っていた。また別の場所では明久たちが獣闘士を逃げるフリして矢部たちを邪ンヌたち明久と鍵、立花が契約しているサーヴァントたちがいる場所へと誘導しており、魔獣たちが襲っているのとは反対方向では旧魔王派であるクルゼレイ、シャルバ、カテレアを筆頭に悪魔の軍団が進軍してきたがリムルの配下であるディアブロ、テスタロツサ、カレラ、ウルティマによってクルゼレイたちを除いた悪魔の軍団は殲滅されていた。二百万もあつた『ウロボロス』の軍勢は既に十万まで数を減らしていた。無論自衛隊側も少ない被害が出ているがリムルが持つてきた『完全回復薬（フルポーシヨン）』などの回復薬を使っているため死傷者は最初の攻撃の時以外出ていなかった。

その事を配下から知らされたグラディエルは信じられないと思つていてもこの場からでも聞こえてくる爆音や魔獣たちの断末魔などから配下の報告が正しいことを証明していた。グラディエルは信じたくないと言わんばかりに歯が砕けんばかりに歯を噛んでいた。

グラディエル「巫山戯るな!!何故劣等種である人間どもに我が軍が負けているなど、あつていいはずがない!!」

アルファ『だが実際に我々の軍は負けている。今から我々が戦場に出たとしても手遅れ』

グラディエル「黙れ!!口を開いたかと思えば余計なことしか喋らないのか!!」

機械的な声で現状を冷静に告げるアルファにグラディエルは怒りを隠そうとせずにアルファの胸ぐらを掴んだ。

アルファ『事実を言つて何か問題が?』

グラディエル「五月蠅い!!それが分かっているなら何か打開策の一つぐらい出せ!!それでも『機械王』様の参謀か!」

アルファ『残念ながら既に手遅れです』

グラディエル「どういう——」

意味だ。とアルファに問いたただそうとしたグラディエルだがその言葉が出るよりも早くグラディエルの体が無数の刃によつて貫かれてしまった。

グラディエル「な、何故だ……」

グラディエルは後ろから刺してきた存在を見ると信じられないとばかりに驚愕の表情を浮かべていた。グラディエルの後ろにいたのはアルファと同じ姿をした魔導人形

でその右手から出した大量の剣でグラディエルを刺していた。

ベータ『『獣王』の軍団長グラディエル。貴方は『帝王』クロノス様の命により不要な存在として処分が決定されました』

グラディエル「ま、まて・・・私はまだ負けてなど——」

ベータ『無様。命令を果たせなかつたものには死、あるのみ』

グラディエルが懇願しようとするもベータはそれを無視して左手を剣に変えてそのままグラディエルの首を斬り飛ばした。斬り飛ばされたグラディエルの頭は地面に落ちるとアルファの足元にまで転がった。

アルファ『質問。私も処分対象なのか』

ベータ『否定。貴方の任務は本作戦の監視であり作戦が失敗したのは敵対戦力を見誤った『獣王』派閥のせいである。よって貴方に対しての処罰はありません』

アルファは今回の作戦での自分の処罰を尋ねるが、それに対してベータはグラディエルの死体を本部へと転移させながら処罰がないと言った。

ベータ『転移完了。これ以上ここには敵に気づかれる恐れがあるため、この場から去ることを進言する』

アルファ『その意見に同意。直ぐに行動すべき』

ベータ『では直ちに転移を開始し——』

『そうはさせないよ?』

『!?!』

ベータが転移魔法を発動させようと前に出した右手がサークレット付きのボールで紫色の髪と白仮面を隠している狩衣を着た少年によって左腕を斬り落とされてしまった。

斬られるまでその存在を認識できなかったことに驚愕していたが、それも一瞬でベータは右拳を白仮面の少年に向かって勢いよく振りかぶった。白仮面の少年はその拳をベータの左腕を斬った剣で防ぐと反対側からアルファがマシンガンのように魔力弾を放ってきたので白仮面の少年は空間から新たに剣を取り出してその剣で魔力弾を全て斬り裂いた。ベータはその隙に白仮面の少年から距離を取ってアルファの隣へと移動した。

アルファ『驚愕。まさかただの人間が私たち二人を同時に相手取るとは』

ベータ『質問。貴方は一体何者ですか?』

ナナシ『僕は勇者ナナシ。こっちが名乗ったんだから君たちも名乗ったらどうだい?』

アルファ『否定。我々は他者に情報を与えられないよう設定されているのでそれには答えられません』

ナナシ『それは残念だね。なら君たちを捕まえて無理やりにも話させるよ』

白仮面の少年——ナナシはそう言うと同時に地面を勢いよく蹴ると一気に距離を詰めてアルファに向けて剣を振りかぶった。そしてアルファの腕に剣が当たるがベータの腕と同じように切り落とすことは出来ず防がれてしまった。

アルファ『無駄。ミスリルで造られたベータと違い私の体はオリハルコンで造られているので、その程度の攻撃で我が体を斬ることは不可能』

ナナシ『ならこれはどうかな？《踊れ》クラウソラス!!』

アルファの腕に攻撃したのとは別の剣に魔力を込めながら呪文のようなものを唱えると剣は十三枚の薄い剣身に分かれ、実剣の外側に青く輝く光が刃を形成した。その十三枚の刃はそれぞれ異なる軌道でアルファとベータに向かって飛ばされた。

アルファとベータはそれらの刃をかわそうと距離をとるが刃はアルファとベータが距離をとるよりも早く二人の体に当たり、四肢を切断された。魔導人形である二人は人間のような感情を持っていないがそれでもこれには驚きを隠せないようであった。

ナナシ『悪いけど君たちを捕縛させてもらうよ。君たちの組織について色々話してもらいたいからね』

アルファ『驚愕。我々に油断も慢心もなかったのに負けるとは』

ベータ『同意。この世界の人間は脅威だと記録します』

アルファ『ですが、既に我々は目的を果たしているのでこの場を去らせてもらいます』
ナナシ『何を——』

ナナシが何を言ってるのか聞くよりも早くアルファとベータがいる地面に転移の魔法陣が出現した。それに気づいたナナシは阻止しようとするがそれよりも早く転移が成功したためアルファとベータは別の場所へと転移されたのだった。

ナナシ『……逃げられちゃったか』

ナナシは気配が完全に感じられなくなると白仮面に狩衣の姿から一瞬にして黒髪に黒ローブ姿の少年に変わった。彼の名はサトウ・ペンドラゴン。彼は元の世界に戻る手段の手がかりが門にあると考えて仲間たちとともにアルヌスにやってきたのだ。『ウロボロス』が自衛隊基地を襲ってきた時に最初は仲間であるアリサ、ルル、リザ、ポチ、タマ、ミア、ナナ、ゼナ、カリナ、セラと一緒に魔獣や魔物を撃退していたが戦っている途中に『地図（マップ）』で周囲の敵を確認した時アルヌス基地から少し離れた場所になんかの敵がいることを見つけたサトウはアリサにその事を伝えてからその敵に接触した。勇者ナナシの姿になっていたのは自分の本来の実力をあまり知られないようにするためである。

サトウ「でも、全く収穫がないって訳じゃないんだよな」

サトウは手に持っているアルファとベータの体の一部であるミスリルとオリハル

コンの欠片を見ながらそう呟いた。

この世界はいくつかの異世界と融合してしまったことで通貨や奴隷などで問題になっており鉱石もその一つである。リムルの世界でミスリルは魔鉱石と銀が混ざったものでオリハルコンは魔鉱石と金が混ざったものであり、鉱山なども確認されていないため入手するのは難しいものである。それに対してサトウーの世界では魔鉱石などと言うものは存在せずミスリルも魔法金属の一種でその中でも比較的手に入りやすいものとされている。

このように同じミスリルでも世界によって異なるためその金属を使って造られた武器や装備に性能差が出るため現在多民族平等主義国家の研究者達が集まってその性能を比べあっていた。このミスリルとオリハルコンを調べればアルファとベータがどの世界から来た存在なのかを調べることが出来る。

サトウー「さて、アリサたちの方はどうなっているかな？」

サトウーはアリサたちの現在の状態を見るために『地図』を使ってアリサたちを見るとアリサたちは無事なようで既に基地の周囲には敵は存在していなかった。

サトウーはそれを確認するとアリサたちの元へと向かうのだった。



アルヌス基地での戦闘が終わったのはサトウーがアルファとベータとの二人と戦っ

ているときだった。グラディエルが死んだことで指揮系統が乱れてしまい、グラディエルと副官の一人が従えていた魔獣や魔物たちの統率が乱れたことで倒すことも容易になり、機動兵器の方も無人機であるため動きが読みやすく機体性能が劣るリーオーなどの自衛隊の機体でも次第に倒すことも容易になった。

そして最後の一体の槍足鎧蜘蛛が倒されたことで戦闘は終了した。戦闘が終了された頃には太陽が上り始めるのを見るとまるで祝福しているかのようだった。

しかし戦闘が終わっても基地の中は慌ただしかった。自衛隊たちは基地に侵入したジェロニムたち獣闘士による被害者と基地の被害、消耗品などの確認をしていた。破壊されたMSなどの機動兵器や魔獣や魔物の死骸は禍終素学園生徒によって解体された。また、捕虜になったクルゼレイ率いる旧魔王軍と魔獣と魔物を操っていた副官。そして副官を捕えるときに近くにいたエルフや獣人などの亜人の奴隷。この奴隷たちは全員副官の玩具としてある者は魔獣に四肢を喰われ、ある者は部下達の性処理に、そしてある者は実験の材料として使われていたなど度し難い悪行ばかりだった。副官の男はその事をまるで自慢するかのようだった。それを聞いた尋問を担当していた自衛隊員達はそのことに対して怒りを隠せなかった。しかし自衛隊がその怒りを副官の男にぶつけようとしたがそれよりも早くその副官の男の顔に禍終素学園の教師の一人である承太郎が拳を叩き付けた。

高杉と片栗虎の言葉に自衛隊員たちが顔を青くするがこれくらいはどの時代の戦争でもある事だ。捕虜になったものは情報を吐かせるためにあらゆる手段を使うのは過去の歴史などを見ても明らかである。故に高杉たちの行動は否定されることは無いのである。

自衛隊「ではその捕虜の扱いはそちらに一任させてもらいます。これは狭間陸将がそちらの代表と話し合つて決めたことです。ですが捕虜から聞き出した情報は・・・」

片栗虎「分かつてる。そつちにもちやあんと情報教えてやんよ」

自衛隊「ありがとうございます」

こうして副官の男を含めた捕虜たちは紫を含めた禍終素学園の預かりとなり、捕虜から引き出した情報は全て自衛隊及びリムルたち他種族平等主義国家にも提供することが決まっていた。

それを聞いた離れた場所にいた捕虜たちが顔を青くしてガクガクと身体を震わせていた。無理もないだろう。最初は気に食わない副官の男がボロボロになる様を愉快そうに見ていたが自分たちも同じ目にあうかもしれないと考えたら当たり前の反応である。

承太郎「じゃあ俺は仗助を呼んでくるからそいつらの見張りは任せるぜ」

高杉「ああ任しときな」

零斗「そうだな。もしかたブレイズと戦う時が来たら今のままじゃ負けるかもしれないしな」

スカサハ「まあお前なら真面目に修行すれば使いこなせるだろうさ」

零斗の世話は公正なジャンケンの元に二人一組の交代制することが決まり今はスカサハとアルトリア（槍）によって看病されていた。

零斗「ところで師匠、俺たちってこれからどうするかと決まってるんですか？」

戦闘が終わってからのこの部屋にいたのでこれからどうするかなどの話は零斗は何も聞いてないのでスカサハに聞いてみた。

スカサハ「ふむ。銀時という男から聞いた話だがどうやら明日にはこの街を出て基地に戻るそうだ」

零斗「それは俺達がこの街で襲撃されたからですか？」

アルトリア（槍）「いえ、それも関係あると思いますがどうやらアルヌスの基地の方でも襲撃があったそうです。それでまた襲撃がないとも限らないので私達も基地に戻るように学園長から言われてるそうです」

零斗「異世界って思った以上にやばい所だなおい・・・」

スカサハ「まあわしとしてはしばらくの間この世界で修行させようと思ったがこれでは考えを改めるしかなさそうだな」

零斗「（こんなよく分からない世界で修行させられなくて安心した。とりあえず襲撃した奴らの正体が分かったらお礼に半殺ししよう）」

アルトリアとスカサハから話を聞いて襲撃した敵（ブレイズを含む）を次会った時には必ず半殺しするぐらいはやってやろうと気持ちが悪く落ち着いた。

スカサハ「さて、まだ出発には時間があることだし・・・」

アルトリア（槍）「ええ、そうですね・・・」

零斗「まっつて、自分で食べられるからその手に持った果物を口元に運ばなくても大丈夫——」

零斗が両手を前に出しながら二人を止めようとするがその程度で止まるようなスカサハとアルトリアではなく零斗はそのままされるがままにお見舞い用の果物を食べさせられるのだった。その後、世話の交代をしに来た霊夢たち零斗に恋する乙女たちもまた同じように零斗に食べさせるのだった。

——そして何やかんや色々あったが一日はあつという間に過ぎてしまい、零斗たちはアルヌスの丘へと戻っていくのだった。来た時と違う点でいえば捕虜になった盗賊とピニヤ、ボーゼス、ハミルトンが加わったことぐらいであり、残った白薔薇騎士団は街の警護に当たることとなっていた。盗賊たちはアルヌスの丘の自衛隊基地で監視の元仕事することになっておりピニヤたちが付いてきたのは日本がどのような国

であるかを知るためである。伊丹たちも最初はピニヤたちが付いてくることを知った時は驚いたがピニヤたちが何としてでもついてくる気なので仕方なく同行を許可したのであった。そんな中零斗は地竜が引く竜車の手綱を握りながら考え事をしていた。

零斗「結局何者なんだろうな」

霊夢「何が？」

零斗「ブレイズを雇った連中だよ。その連中がイタリカの街とアルヌスの基地を襲撃したのには何か理由があつたのかなって」

アラタ「そうだよな。何か戦つたヤツらも全員が全員一枚岩って感じには見えなかつたしな」

一誠「少なくともあのブレイズって奴は嫌われている感じだったよな」

スカサハ「奴は己よりも弱者な者に対しては興味を持たないような奴だからな」

銀時「つまりあれか。あのキシヨイカエルや乳なしジャンヌはあのブレイズって奴より弱いから見下されていたってことか」

新八「いや確かにその通りかもしれないけど乳なしジャンヌって言い方は辞めませんか銀さん」

神楽「まあ実際あつちのジャンヌは絶壁だったアルしな」

マイン「マジでやめなさいよ!!」

「アヴィケブロン」ところでワイバーンの鱗でゴーレムを作ってみたのだがどうだろうかマスタ―？」

立香「まさかのスケイルゴーレム!? 先生一体いつの間にそんなの作ってたんですか!？」

「アヴィケブロン」今回売れなかった鱗を使つてね。次はこの世界特有の鉱物で作りたいものだ」

マシユ「そうですね。今回はゆつくり出来ませんでした。がまた機会があつたらそういったものを探すのもありですよ」

——— こうして異世界最初の街では騒動に巻き込まれたが全員無事帰ることが出来たのだ。イタリカの街とアルヌスの丘の基地での戦いはどちらも激しい戦闘で敵の正体もわからないままだが彼らにとってそんなことはそこまで重要なことではない。例えば敵として再び現れようと彼らは守るべきもののために何度でも戦うのだから。

G A T E 編 十二話 新たなる日々始まり

零斗たちがイタリカの街を出てから三日経ち、太陽が真上に上がった頃にはアルヌスの丘の基地が見える場所にまで来ていた。自衛隊が乗っている装甲車からその基地を見ていたピニヤ、ボーゼス、ハミルトンはアルヌスの丘のあまりの変貌に驚きを隠せなっていた。今、アルヌス基地では先日『ウロボロス』に襲撃されたために作業用MS『デスペラード』、『作業用ガンタンク』、『作業用ザク』、『コロニーフラッグ』。作業用に改良されたKMF『グラスゴー』、『サマセット』などの機動兵器を使用し木材や機材の運搬、破壊された箇所の修復、木々の伐採などを行っていた。

ピニヤ「な、何だあの鉄の巨人たちは……」

レレイ「あれはMSやKMFと呼ばれる兵器の一種。あれらは人が乗ることで動くことが可能」

ハミルトン「あ、あれには人が乗っているのですか!？」

レレイ「そう。そしてあれらの兵器は既に彼らの世界で大量に造られている」

ボーゼス「あ、有り得ませんわ……」

レレイから話された衝撃の事実によりピニヤたちは顔を青ざめながら体を震わせていた。

もしレレイの話が本当なのだとしたら帝国は例え他国と協力して自衛隊と戦ったとしても帝国が勝てる姿を想像することが出来なかった。

ピニヤ「何故、彼らは帝国に攻め込んできたのだ」

ピニヤはそんな言葉をつい言ってしまった。確かにこんな圧倒的戦力を見せつけられたらそう思ってしまうのも仕方がないかもしれない。しかし、忘れてはいけない。

信長（ドリフ）「馬鹿かお前は？先に侵略しようとしたのはお前さんらの国だろうが。奴らは自衛隊のためにこの地に来たんだからな」

与一「ですよねー。ぶつちやけ自衛隊の人たちも帝国の馬鹿な人達が攻めてこなければ何もしなかったんですもんねー」

ピニヤの言葉を正論で切り捨てた信長と与一の言葉にピニヤは反論することが出来なかった。ちなみに信長と与一が何故装甲車に乗っているのかと言うと、この間の戦いで豊久が重傷を負ってしまったために最初に乗ってきた馬車は豊久の治療で使っているのでエルフとオルミーヌを除いた他の連中はこうして他の所に乗せてもらっているのだった。

レレイ「帝国は古代龍の尾を踏んだ。こうなるのは必然」

ボーゼス「帝国が危機に瀕しているというのに、その言い草はなんですか!!」

レレイ「私は流浪の民、ルルドの一族。帝国とは関係ない。」

テユカ「はーい、私はエルフです！」

ロウリイ「フツ…」

三人のまるで関係ない他人事のような表情と返答にボーゼスは奥歯を噛みしめて悔しがる。彼女たちにとって帝国がどうなろうと関係の無いことである。ピニヤは三人の様子を見て彼女たちにとって帝国など滅ぼうがどうなろうと関係ないと考えていることが感じ取れた。

ピニヤ「(帝国は国を支配すれど…人の心までは支配できず…か…)」

ピニヤがそんなことを考えている間にも装甲車は基地の中へ入り戦車やMW、MS、KMFなどの兵器が整備されている倉庫に到着し、ピニヤたちはその整備されている兵器などに目を奪われ何も言葉が出なかった。その間に伊丹たち自衛隊の人達はイタリカでの出来事を報告しにいき、ピニヤたちは別の自衛隊に案内され狭間陸将や紫、多民族平等主義国家の各代表たちと話し合いをするのだった。

一方、零斗たちはそんな話し合いなどに参加する必要も無いのでそれぞれが仮住まいしているテントへと戻って行った。

その時、零斗はスカサハとアルトリアと一緒にいたためにまた新しい女を連れていることに気づいた非リア充軍団と死の鬼ごっこをすることになってしまったのと言うまでもないだろう。



零斗たちがアルヌス基地に戻ってから一週間。あちらの世界の報道陣を紫含む嵐獄島の権力者たちが黙らせた（脅迫など含む）おかげでマスゴミ連中も静かになっていった。その間零斗たち禍終素学園一同や異世界人の人たちは自衛隊と協力して基地を修復したり、現地人とコミュニケーションをとったり、炊き出しを手伝ったり、森で野生の鹿や鳥、食べられる魔物を狩りにいたりなど色々なことをして異世界を堪能していた。

その間にも自衛隊と多種族平等主義国家と嵐獄島、ピニヤたちの話し合いも続いており、話し合いが終わると自衛隊と多種族平等主義国家、嵐獄島は同盟を結ぶことになりピニヤもまた自衛隊や多種族平等主義国家、嵐獄島の力を理解したので和平をするために尽力を尽くすことを誓ったそうだ。

そして今日、零斗たちは元の世界へと帰ることになったのだがその前に紫から話があるとのこと。門から少し離れたところで禍終素学園一同は朝の朝礼のように列ごとに並んでいた。

紫「はいそれじゃあ皆さんに帰る前に話したいことがあるのでよく聞きなさいよ」

銀時「いよいよ職員の給料アップですかコノヤロー。ありがとうございますBB学園長」

桂「何をバカなことを言ってるんだ銀時。もちろんカツラップを校歌にするんですよ

ねBBA学園長」

辰馬「ツラも金時も何を言うちよるか。無論旧校舎に遊郭を建てる計画についてじゃよなBBA学園長」

紫「とりあえずそのバカ三人の今月の給料は5000円にして志村弟くんの眼鏡を壊すわ」

新八「いや、なんでだアアアア!?なんで僕のが壊されなくちゃいけないんだよ!」

神楽「うるさいアル新八」

妙「新ちゃん。学園長が真面目に話をしているんだから静かにしなさい」

新八「いや、何で僕が悪いみたいになってるんですか!」

新八がそう叫ぶが周りのみんなが『静かにしろよ新八』と言う目で見てきたので新八は泣く泣く黙るのだった。

紫「じゃあ話を続けるわね。私達はこれから帰ることになっているのはみんな知っているわね?」

紫が確認するように全員に尋ねると全員肯定の意志を示すように頷いた。

紫「それでその事を自衛隊の人達と話している時にこちらの世界に来た人達が、私たちの世界に興味を持ったみたいで学園に一時在籍したり島で働きに来ることが決まり

ました!!」

トリー「学園長!それはつまり新たなオパ―イを学園でも拝めるといふ事だよな!!」
学園の変態共『『なんだとお!?それはなんと素晴らしいことではないか!!』』

トリーの言葉に反応した学園の変態たちのテンションは天元突破するほど高ぶっていた。それも仕方ないことであろう。学園にも多くの美人、美少女がいるがそれに負けず劣らずの美人、美少女たちが異世界にもいることは既に全員知っていることなのでこれには変態の皆さん大歓喜である。

紫「誰が来るかまでは島に着いてからの、お楽しみ♪じゃあ伝えたいことは以上だからこのまま帰りましょう」

紫がそう言うのと次々と門を通るのだった。学生たちの後ろの方では伊丹たち第三偵察隊とテュカたちエルフ族、レレイを含む一部のコダ村住人、ロウリイ、ピニヤ、ハミルトン、ボーゼスたち現地人。南雲ハジメ一行、サトウ・ペンドラゴン一行、カズマ一行そして貿易を行うためにやってきたジュラ・テンペスト連邦国やブリュンヒルド公国などの多民族平等主義国家の商人などが門へと向かっていた。

栗林「隊長、どうして私たちまで嵐獄島に行くことになったんですか?」

伊丹「仕方ないよ。テュカたち現地人を一時的に嵐獄島で預かることになったんだから、その護衛しなきゃいけないんだから」

黒川「私たちの護衛なんて必要ないのでは？」

富田「我々よりも明らかに強いですからね。少なくともイタリカで戦った人達はずが」

伊丹「その認識で合ってるぞ富田。基本的にあの島の住人の殆どは戦争みたいな血なまぐさい経験があるからね」

桑原「つまり隊長も軍に入る前にそのような経験を？」

伊丹「まあ学園の授業の一つとして無理やり連れてかれて狩りに行っただけだよ」

伊丹は学生だった頃、授業の一環として強制的に狩りに参加させられ何度も命の危機を感じたのは遠い思い出でそれを思い出したのか伊丹の目から光が消えていた。

上司からの命令とはいえ、まさか嵐獄島に正月などの休み以外で戻ることになるとは伊丹も思いもしなかったが命令は命令なので、その言葉に従ってゆつくりと過ごそうと考えていた。

そして異世界人の者達もそれぞれの考えを持って嵐獄島へと行くのだった。

これから先、新たな仲間が増えたことよって面白おかしい日常が始まるのか、はたまた今回のような大事件に巻き込まれるのかは神も仏も悪魔すら知るよしのないことである。



——2つの世界を繋いだものを後に、人々は『GATE』と呼んだ。

何故『GATE』が現れたのかは未だ解明されていない謎の一つだが、一説によると異界の神々が暇潰しとして2つの世界を繋いだなどと言われているがそれも定かではない。しかし、今現在分かっていることはこの『GATE』という存在は争いや新たな出会いを呼びよせる存在だというのは変えられない事実だろう。

日常編

大晦日は思い思いに過ごすべし

大晦日。それは一年の最後の日で、日本では年神を迎えることにちなんだ行事が行われている。家族や恋人と一緒に年明けを過ごすものもあれば、友人とバカ騒ぎしたり、年末でも仕事に追われているなどその日の過ごし方は多種多様である。嵐獄島でも例外ではなく深夜の時間帯でも島の灯りは消えておらず、辺りから笑い声が聞こえていた。

そしてこの作品の主人公である竜ヶ崎零斗もまた幼馴染みの霊夢と知弦、妹の紫音、零斗が契約しているネロたちサーヴァントと一緒にのんびりとコタツに入ってテレビを見ていた。

零斗「今年ももう終わりだな」

紫音「そうですね。一年経つのもあつという間でしたね」

霊夢「そうね。ジャンプでの銀魂連載終了、BLEACHとニセコイ実写映画化、転スラのアニメ化、FGOの映画化とアニメ化の決定とか色々あったわね」

知弦「それこの作品の話じゃないわよね。全く別のところの話じゃない」

信長（FGO）「まあ是非もないんじゃない」

沖田（FGO）「今年の特番でも私たちの出番多分ないですよね」

玉藻「私はアニメに出れなかったんですけどお!？」

ネロ「フツ！余は今年の冬と夏で大活躍だったかな!!」

アルトリア（槍）「私は来年劇場で活躍しますがね!!」

静謐「私も出ますよ（ムフー!）」

スカサハ「クツ！何故私が大活躍した5章はアニメ化しないんだ!？」

清姫「スカサハさん嘘はいけませんよ。あなたよりも他の人たちが活躍していたのですから」

メイヴ「そうよね」

そんな他愛もないことを話している間にも時間は進んでいき、禍終素学園の部活の一つ、カルデア研究部が撮影した『笑ってはいけないカルデア24時』も中盤に入っていた。

零斗「あ、キリシユタリア先輩がマルタさんに連続タイキックされた」

紫音「ベリルさんがイヴァン雷帝にピンタされたのも中々面白いですね」

メイヴ「ねえクーちゃんが参加者じゃないのに何回もお仕置きされてるんだけど」

スカサハ「おお、このデイビッドとやら上裸にされた上に乗馬鞭で叩かれても動じな

いな」

信長（FGO）「どこか悦んでる感じがするがのう」

沖田（FGO）「あ、カドツクさんがアナスタシアさんに氷漬けされました」

霊夢「ムジーク先生もおでんの卵を口に入れられて火傷したわねアレは」

静謐「そういえばこの番組って誰が編集してるんですか？」

玉藻「確かダヴィンチさんとホームズさん、それから新茶さんが主に計画したそうですよ」

知弦「他にもウチの学園の人達やOB、OGの人達が協力してくれたそうよ」

スカサハ「この学園の連中は暇人ばかりなのか？」

零斗「まあ面白いものには首を突っ込む人は多いかな」

コタツに置かれている煎餅をお茶請けにしながらお茶を啜っているとTVではキラシユタリアたちはコンサート会場のような場所に移動し観客席に座っていた。そして舞台上にてアイドル衣装を着た見覚えのあるドラ娘と薔薇の皇帝が歌い始めようとするよりも早くアルトリアはTVのリモコンを取って電源を消した。これにはネロも涙目である。

ネロ「何故余の見せ場が始まるというのにテレビを消したのだ!？」

アルトリア（槍）「すいません手が滑りました」

ネロ「ぬう、手が滑ったのなら仕方がないのか？」

アルトリアが素直にすぐ謝ってきたのでネロもそれ以上文句を言うことが出来なかった。そしてTVをつけ直すと『トラブルが発生したためしばらくの間お待ちください』と書かれたフリップを持って謝罪している二頭身姿のマッシュが映っていた。こうなるのは分かりきっていたはずなのに何故ネロとエリザベートを呼んだのかは甚だ疑問である。

零斗「ところでノツプはこれに参加しなかったの？」

信長（FGO）「儂、紅白で敦盛するつもりじゃったからその練習しておったわ」

沖田（FGO）「まあ結局予選で落ちちゃったんですけどね」

知弦「確かうちの島からは今回は寺門通、シエリルさん、ランカちゃん、μ's、A

—RISE、アイドルマスターズ、フランシユシユが参加したのよね」

霊夢「うちの学園のアイドルたちって結構人気あるわよね」

零斗「まあ見た目も歌唱力もいいから是非もないよな」

そんなことを話している間に番組の方も元に戻っており、オフエリアがチビスルトとナポレオンに追いかけられたり、ヒナコが項羽だと思つて近寄ったら変装した赤兎馬だつたり、デイビッド、ベリル、ペペロンチーノが罰ゲームでギャングダンスを踊つたり、キリシユタリアがブリーフ一丁になってたり、ムジークがカルボナーラ作つたり、カ

ドックが一人でU・S・A.を踊らされたりしていた。なんとというかカオスである。

そして大晦日を集まって過ごしているのは零斗たちだけではない。

刑部姫「ああ、やっと終わったよ……」

幽香「そしてまた明日から次の夏コミにかけて描き始めるのね」

邪ンヌ「嫌よ、まだ夏コミまで時間あるんだからスマ？ラしてるわよ」

アルトリア・オルタ「そして調子に乗って締め切り前に泣くんだろ」

鍵「やめて、そういうことは言っちゃダメだから!!」

タマモキヤット「ごわははは！このキヤット、鍋將軍ならぬ網將軍としてご主人たちに極上の肉を食べさせてしんぜよう!!」

ジャック「じゃあ私心臓！」

千代女「拙者はレバーを」

深夏「私カルビ！」

真冬「真冬は鶏肉を」

明久「カロリーが高ければなんでもいいよ!!昨日までカロリーメイトと水しか食べてないからね!!」

妹紅「明久悲しいこと言うな」

オーフィス「ん、お肉美味しい」

巴「あ、ドラゴンステークというのもありますよ」

エリザベート「ちよ、そんな物騒なもの絶対注文しないでよね!？」

冬コミの打ち上げとして焼肉を食べに来た明久たち。冬コミ本制作に疲れ切った刑部姫に追い討ちをかける幽香、それを否定してスマ?ラする予定の邪ンヌに追い討ちをかけるアルトリアオルタを止める鍵、肉を焼くのを仕切るタマモキヤットに食べたいものを頼むジャックたち、巴がドラゴンステークを注文しようとするのをエリザベートが涙目で止めたり

銀時「オラアアアア!!銀魂の連載再開を記念して飲みまくりじやああああ!!」

おそ松「ならこっちは映画化決定を記念して一気じやああああ!!」

「ウエー~~~~~イ!!」

桂「やるなら今しかねーZUR A、やるなら今しかねーZUR A」

高杉「おい、酒が足りなくなってきたぞ」

辰馬「おおそうじやな。おーいお姉ちゃん!新しい酒を追加——オボロロロ」

千冬「すまない酒は後でいいので先に掃除道具を借りれないか?」

トリコ「おいゼブラ!それは俺の料理だろう!!」

ゼブラ「ああん?知るかよ、んなこと」

ココ「まあまあ二人とも落ち着きなよ」

小松「そうですよ。せっかくのめでたい日なんですから喧嘩なんてダメですよ」
サニー「ったく、相変わらず美しくねーなおめーらはよ」

荻野「ひーろーしー。見てくれよ梓がこの間までログハウスしか造れなかったのに最近はレンガの家を造れるようになったんだよ」

洋「うっぜえ！お前のオフの時ってホントにうぜえ!!」

島に数ある居酒屋の内の一件で酒を一気飲みしている銀時やおそ松を筆頭にした松野兄弟や酒好き連中が騒いでたり、桂がエリザベスと自作のカツラップを踊ったり、高杉が辰馬に酒が減ってきたことを伝え辰馬が店員に酒の注文をする途中で吐いたので千冬が店員に掃除道具を頼んだり、トリコとゼブラが料理の取り合いで喧嘩しているのをココと小松が止めサニーは阿呆らしいと思っていたり、荻野が酔っぱらっているのか娘の梓を元相棒の洋に自慢してウザがられたりなど大人たちも好き勝手楽しんでいたり

斉木『よしこれで終わりだな。さて帰ってコーヒーゼリーを食べながら年を越そう』

鳥東「いやなんでっスか!?!なんで俺除夜の鐘の中で縛られてるんスか!?!」

斉木『お前の煩惱まみれな頭を治したいと頼まれたからな』

鳥東「意味わかんないんスけどお!!」

除夜の鐘に先日女生徒に対して変態行為を行おうとした変態霊能力者・鳥東零太を超

雪遊びにはしゃぐのは大人も子供も関係ない

コタツが手放せない寒い日が続くある日のこと。異常気象か神の気まぐれなのかはたまた悪魔の悪戯か、原因は結局のところ不明だが某雪祭りが開催できるほどの量の雪が積もっていた。

紫「ええ、雪がこんなにも積もっていますが、そんなことは関係ありません！雨が降ったら行水！槍が降ったらリンボーダンス！どんな時も楽しむ余裕を忘れないのがこの島の住人の心意気よ！！というわけで！！第一回チキチキ禍終素学園雪祭りの開催決定！！」

紫の宣言によって急遽開催された雪祭りには多くの生徒が参加してそれぞれが個性的な雪像を作っていた。

沖田オルタ「魔神さんのまは真つ二つのま！」

スカデイ「愛そうか、殺そうか」

雪像をおでんの形に整えるように斬っているのは抑止の守護者であるアルターエゴの沖田総司・オルタナティブ。そしてその雪像を創り出したのは女神であるキャスターのスカサハ・スカデイ。二人とも零斗が新たに契約したサーヴァントである。ちなみに

メイヴと同じく勝手に契約されていて元旦に起きた時に布団の中に入っており、起こしに来た沖田さんの三段突きとスカサハの無数のゲイ・ボルグによつて零斗は包帯まみれとなっているが今はシリアスシーズンでもないので問題なく動いていた。

零斗「というかこの異常気象つて特に珍しいものでもないと思う自分がいるんだがどう思うよ鍵」

鍵「まあ、こういった異常気象つてこの島じゃそこそこあるしな」

嵐獄島では異常気象など可愛いもので他にも突然西洋の城、ピラミッド、東洋の城が重なったものが現れたり、雪ではなく等身大の水柱が落ちてきたり、梅雨の代わりに酒が降ってきたりなどと頭おかしいんじゃないかね？といったこともあるので特に動揺することも無くこのようなお祭り騒ぎが出来るのだった。

鍵「ところでお前は何か作らないのか？」

零斗「まだ始まったばかりだからな。他の人たちの少し見てから作り始めるよ。そう言う鍵の方はどうなんだよ」

鍵「俺のそこは半分くらい完成したから少し休憩だ」

零斗は鍵と話しながら周りにある雪像を見て回っていた。10人の父上の雪像を造っているモードレッドと水着モードレッド。R18禁な真尋の雪像を造ったニヤル子とクー子、ハス太の頭にフォークを刺す真尋。等身大のゼロの雪像を造ろうとするカ

レンとその雪像を壊そうとするスザク。マリーの美しさを完璧に表現した雪像を造ろうとしているアマデウス、サンソン、デオン、サリエリのフランス同盟。雪像を造らず雪合戦を始めているBASARA学園から転校してきた石田三成と徳川家康。エクシア、ダブルオーライザー、クアンタの雪像に囲まれる刹那などみんな思い思いに自らの望むものを作っていた。なので中には巫山戯た雪像を造るヤツらもいた。

一誠「よし雪玉はこんなもんか。あとは真ん中に棒を立てれば完成か」

一誠がそう言いながら雪玉を置いておりその一誠の端には同じ大きさの雪玉が置かれており、その話と二つの雪玉から何を作っているのか気づいた零斗と鍵は

零斗・鍵「連載打ち切られるわ!!」

それぞれ雪玉を蹴り飛ばすのだった。

一誠「おおい、何してくれてんだよ?俺がその二つの玉作るのにどれだけ苦労したか分かってんのか?」

零斗「お前こそ?!そんな事したら作者がどれだけ苦労するか分かってるのか!」

アーシア「一誠さん棒出来ました!!」

鍵「ギヤアアアア!!何持ってるの!?アーシアちゃん!」

一誠が肩を揉みながら言い、その一誠に零斗がツツコんでいると　アーシアが大きな雪の棒を持って来、それを見て鍵が叫ぶと

アーシア「皆さんどうかしたのですか？これはアレですよ。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲」

鍵「いやアームストロング二回言ったし!?ある分け無いだろそんな卑猥な大砲!？」

一誠「まあまあ、思春期はそう言う事考える時が多いから、棒とか玉があればすぐに話持つて行く奴も多いからさ」

アラタ「まったく、しょうがない奴らだぜ」

零斗「テメエらにだけは言われたくねえんだよこの変態どもが!!」

鍵「つてか結局それなんなんだよ!？」

一誠とアーシア、そしていつの間にか来ていたアラタがそう言いながらネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲の雪像作りに戻った。そして鍵がその雪像について聞こうとすると

銀時「おいおい、お前らも参加するのかわよ」

零斗「あ、銀さん」

鍵「銀さんも参加して——」

銀時の声が聞こえたので声のした方を見ると、そこには一誠たちが作っているネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を作っている銀さんたち万事屋メンバーがいた。

零斗「アンタらも何作つとんじやボケエ!!」

零斗は先ほどと同じように銀時たちの雪玉を粉々に蹴り碎いた。

銀時「何すんだこのヤロー。銀さんたちがどんな思いしてこのネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を作ったと思ってるんだ」

零斗「知るか! っていうか結局なんなんだよネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲って!」

一誠「攘夷戦争で天人側が放った開戦の一撃に使われたネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を知らないなんて呆れるな」

鍵「何!? こんなカッコ悪い大砲が開戦の一撃に使われたの!」

神楽「パピーも言ってたアル。『これ作った奴は絶対頭おかしい』って」

新八「海坊主さん実物見たことがあるんだ・・・」

壊された雪玉を直している銀時たちを見て再度破壊しても意味が無いと悟った零斗と鍵はその場から離れ、鍵は作業に戻りにいって零斗もそろそろ自分の作品を作ろうと空いている場所を探していると、藤丸兄妹とマシユを含めたカルデア部が作業しているのを見つけたので零斗はそっちを見に行つた。

立香「あ、零斗も参加してたんだ」

零斗「まあな。ところでそっちは何を作ってるんだ?」

立花「私達はなすびサーヴァントもといマシユマロサーヴァントのマシユの宝具を作ってるんですよ!!」

マシユ「デミサーヴァントです先輩!!」

兄である立香と少しリヨ化している妹立花そして雪で『いまは遙か理想の城（ロードキャメロット）』を作っているマシユが立花に訂正を言った。

零斗「これは凄いな。さっきのくだらない作品とは比べ物にならないな」

立香「設計図はダヴィンチちゃん。制作にはキャスニキや他のサーヴァントたちも手伝ってくれてるからね」

立花「更にオフェリア先輩の魔眼のおかげで崩れることもないという完璧仕様!」

零斗「間違いなく英霊や魔眼の無駄遣いだと偉い人達が見たら卒倒しそうな建造物じゃん」

よく見たら雪像を作っている人達の中に巖窟王や牛若丸、ロムルスなどの姿があり離れたところで3-Hのオフェリアが眼帯を外して『私はそれが崩れるさまを見ない!』と言っていた。そして更に離れたところでウェイバー先生が卒倒してグレイが看病していた。

カドツク「ふん、一般人マスターはその程度のものしか作れないようだな」

零斗「バカドツク」

カドック「カドックだ！余計なものを追加するな!!」

立香たちの前にやってきたのはオフエリアと同じクラスのカドック。アナスタシアのストーリーカーが日課で宝石入りの雪玉で迎撃される変態である。ちなみにクリプターの中でオフエリアを除いた者達は頭がおかしいのはこの小説だけの話なので決して原作と同じように考えてはいけない。

カドック「まあいい。一般人マスターがどの程度の作品を作っているか見に来たが、この程度なら僕達の優勝は決まったようなものだな」

立香「そこまで自信もって言うなら見せてもらおうじゃないか」

立花「ただし下手なもんを出したら分かってているんだろうな」

マシユ「先輩方！顔が少し危険になつてるので落ち着いてください!!」

カドック「ならあれを見てみる!」

カドックにムカついた藤丸兄妹がリヨ化し始めたのでマシユが抑える。そしてカドックが指さした先には羽が付いた全裸の男が片足立ちで立ち、両手を上に伸ばしているカドックの雪像、武装した項羽の雪像、マイクロビキニ姿のマシユとオフエリアの雪像が並んでいた。ちなみに製作者は虞美人ことヒナコ、ベリル、ナポレオン、シグルド（insルト）である。

カドック「どうだ！僕の最高傑作『飛翔』の出来は!!」

銀時「おいおい、うちの神楽になんて汚え汚物見せてんだ」

カドツク「ハア？何を言つて——つてなんだアレは!？」

銀時の言葉が理解できなかったカドツクがその指さした方を見るとカドツクの雪像の股下に男の象徴が追加されていた。

カドツク「いや僕流石にそこは作ってないんだけど!？」

銀時「んな事はどうでもいい。とりあえずこんなもんPTAやら教育委員会とかに見つかったら面倒だ」

立香「じゃあ壊しますか」

立花「魔力を回せ。決めに行くよマシユ！」

マシユ「は、はい！マシユ・キリエライト、いきます!!」

カドツク「ま、まてええええええ!？」

カドツクが静止の声を上げるがそれも間に合わず銀時、神楽、藤丸兄妹、マシユは雪玉をカドツクの雪像の男の象徴に向かって投げまくった。

そしてそんなことをしているのだからギリギリのバランスを保っていたカドツク雪像の足はポツキリと折れてしまい頭から項羽の雪像へと倒れていきカドツクと項羽の顔がぶつかってまるでキスしているかのようになってしまった。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

砲に羽根や四本の腕が追加されているのが見えるが無視である。

零斗は己の心に従った結果、リオレウスの雪像を作り始めるのだった。

桂「ほう、グレイ○ドラゴンを選ぶとは中々のセンスだな」

エリザベス『ナイスチョイスだな』

零斗「いや、全然違うんですけど」

零斗が作っている様子を見た桂とエリザベスが、零斗の作品を褒めるが、何故かリオレウスをド○クエのグレ○トドラゴンと勘違いしていた。

零斗「というか、桂さんも参加してたんですね」

桂「まあな。何でも優勝者には豪華な商品があると聞いたからな。きつとツインドライブのことだろう」

零斗「いや絶対違いますよ!?!ツインドライブとかSwitchがあるいまじゃ今時の若い人たちが欲しがらないでしょ!?!」

桂「馬鹿な!?!ツインドライブならあの配管工のヒゲのおじさんに会えるんだぞ!?!」

零斗「もうそのおっさんならほとんどのゲーム機に現れてるよ!!」

バカの帝王である桂は何故か時代遅れな感性を持っているため未だに最新ゲーム機はツインドライブだと思っている。

零斗「ところで桂さんは何を作っているんですか?」

桂「俺か？俺のは凄いぞ。銀時の完成度高いネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲も中々だが俺とエリザベスの作品も負けてはいないぞ」

零斗「え、桂さんもあんなバカみたいな見た目の大砲知ってるんですか？」

桂「ああかつて地球連邦軍が核を使用するザフトを倒すために使用され、ザフトの軍用機地を幾度も滅ぼしたがそのあまりの強力さに封印された悲しき兵器だ」

零斗「一誠から聞いた話と全然違うんですけど」

一誠と桂の言っていることが全く違うためネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲の謎は更に深まるが細かいことを気にしても無駄だと思いきや以上追求することを止める零斗。

桂「それより見たまえ。これが俺とエリザベスの作品だ」

桂が示した場所にはエリザベスを模した滑り台つきの雪像が作られており、最後の調整に入っているのか桂を慕っているものたちが作業していた。

零斗「これは凄いですね。これなら小さい子供とかも楽しめそうですね」

桂「こういったものは自分の創作意欲を満たすだけではないけない。子供たちにも楽しんでもらうのが大切なんだ」

零斗は素直に桂たちが作ったものに感心し、それに対して桂も感慨深そうに答えた。

ガ、ザクツ、ザクツ（スパイクつきの靴でエリザベスの雪像の滑り台を登る神楽）

桂「リーダー。遊び方が違うぞ」

神楽「ロッククライミング的な？」

零斗「神楽、それ滑り台だからな」

零斗がそう言うのと神楽はスパイクつきの靴のまま滑り台を滑り始めた。

桂「それで滑るなあアアア!!」

銀時「おい、ヅラ」

今度は銀時が、ロッククライミングの要領で雪像自体に登りながら桂に訊いた。

銀時「これ、どこに階段あんの？」

銀時「ヅラじゃない！桂だ！つーかお前らあくまでロッククライミングか!?明らかに

階段途中まで上がった形跡があるだろーが!!」

桂は銀時に怒号を上げた。

銀時は、途中まで雪像の階段を上がって、さらにスパイクつきの靴とストックで上まで登っていたのだ。

零斗「あーあ、滑り台傷だらけ」

零斗が滑り台をチエックしてそう漏らした。

桂「みんな！すぐ磨くんだけ！」

桂が仲間達にそう言うのとみんなそれぞれそれぞれの作業を一時中断させて滑り台の修理を始

めようとした

桂「よし！急ピッチで修理……」

桂が雪を持つて修理しようと、滑り台に入った時だった。

零斗「ん？」

桂達が修理作業しているのを見ていた零斗が何か気配に気づき、滑り台の上を見上げた。

そこには銀時と神楽が、滑り台を滑ってきていた。

桂たち「「んごおお!!」」

桂たちは思わず声を上げ、滑ってくる銀時と神楽を自らの身体を持ち上げて回避する。

桂「貴様らアアアア!!さては、グランプリを狙う為に俺達を蹴落とすつもりだな!!
それで嫌がらせをしたんだな!そう簡単にはいかんぞ!!」

桂たちは銀時たちを回避するとそのまま滑り台に着地する。だが

バキツ（滑り台が折れる音）

滑り台の耐久性は致命的なレベルまで落ちていた。

桂「ぎゃあああああ!!」

滑り台は折れ、桂たちは落下した――。



滑り台が壊れたショックで倒れている桂を見ていられなくなった零斗は、自分の作品作りに戻ると同時に警戒を始めた。先程の銀時と神楽の行動から優勝するため他人の作品を破壊することに躊躇いがないことが分かったからである。———姑息な真似を!!

清姫「まあまあ旦那様! 火竜を作るだなんて照れてしまいそうですわ♡」

玉藻「いや清姫さん。火竜は清姫さんって思ってるんですけど清姫さんはどちらかと言えば蛇寄りでしょ」

清姫「細かいことは気にしてはいけません!!」

零斗「それは細かくないよね清姫」

頭の中で何やら妄想してクネクネしている清姫を見て玉藻と零斗はつつい苦笑してしまふ。

ちなみにノツブたち零斗の契約している他のサーヴァントたちは全員で協力して安土城 on コロッセオ in 聖槍を作っていた。

玉藻「それにしても銀時さんたちがまさかネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を作っているだなんて。完成度たけーですね」

零斗「なんで玉藻もアレのこと知ってるの?」

玉藻「別世界の月の聖杯戦争にて月のAIを倒すために使われるはずがアバズレ尼が欲求不満で壊しちゃった悲しき兵器ですよ」

零斗「もう何が何だかよく分からんのだが」

というかあんなふざけた兵器が別世界にもあることに驚きを隠せない
オルガ「よう、そつちも中々のもんを作ってるみたいだな」

零斗「オルガか」

零斗に声を掛けてきたのは高等部2-Tのオルガ・イツカ。MSやMWなどを使ったボランティア活動をする鉄華団の団長であらゆる動画でネタにされている。

零斗「お前ら鉄華団も参加してたんだな」

オルガ「ああ最近はやることも無かったから息抜きがてら参加したのさ」

玉藻「まあこの間みたいな騒動も特にありませんしねえ」

オルガ「つて訳でどうだ？アンタらも俺たちが作ったもんを見てみねえか」

オルガが左目を瞑りながら零斗たちに聞いてきた。零斗は折角のお誘いということ
で玉藻と清姫と一緒に見させてもらうことにしたのだった。

オルガ「どうだ？中々のものだろ」

オルガが自慢するように鉄華団が造り上げた雪像たちを見せた。

テイルブレードでグレイズを貫きながら大型メイスでレギンレイズジュリアを叩き

のめしているバルバトスルプスレクス。シザーシールドでたわけのイオクのレギンレイズを挟んでいるグシオンリベイクフルシティ。スーパーギャラクシーキャノンやハーブビーク級戦艦に放つフラウロス。そしてその周りを紫電、ランドマンロディ、辟邪がそれぞれの武器を構えていた。それらは今にも動き出しそうな程の迫力があつた。

零斗「これは凄いな」

清姫「私ももびるすーつというものはよく知りませんがこれが凄いものだとはわかります」

玉藻「そうですね。それに迫力満点で周りの人達からも感心されてますね」

鉄華団の作品の出来の良さに零斗たちは素直に感心していた。そして鉄華団が作った雪像の周りには生徒や教師たちが写真を撮つてたり思い思いに見てたりしていた。

ちなみに離れたところでそのクオリティの高さに顔を強ばらせている銀時、神楽、一誠、アラタの姿があつたが特に気にすることではない。

遠くから見ている他の参加者たちもその出来のよさから今回の大会は鉄華団の優勝と思えるほどであつた。

「認めるものか!!」

ドン! バキツ!! (レールガンが放たれバルバトスルプスレクスの頭部が破壊された音)

そんなたわけの聲が聞こえたのと同時にレールガンが放たれた音がすると、バルバトスルプスレックスの雪像の頭部が破壊されその粉々になった雪が下にいた人達に襲いかかりオルガが一人逃げきれず下敷きとなっていた。

オルガ「お前ら……とまるんじや……ねえぞ……」

鉄華団団員『団長——!?!』

オルガが恒例のポーズと言葉を言うのと同時にビスケットを筆頭に鉄華団団員たちがオルガの救出作業にとりかかった。

ちなみにレールガンを撃ったたわけというのは

イオク「見たか!これぞ正義の一撃!!」

レールガンを構えた黒のレギンレイズに乗る鉄血のたわけことイオク・クジャンである。コイツのせいで鉄血二期は死ななくてもいい人達が死んでしまったのだから周りから叩かれるのは至極当然であり死んで当たり前のクソ野郎である。というか鉄血は二期からの新キャラの殆どがいらなかった。ジュリエッタ然りガラン然りラディーチエ然りケツアゴ然り

イオク「何故この私がボロクソに叩かれなくてはならないのだ!?!」

零斗「それはお前がイオクだからだ」

一誠「つてか何やってんだよアンタ!?!」

イオク「決まってる！鉄華団がこの私の機体を無様に作っているのだから破壊するのだ!!」

アラタ「いやアンタのは間違いなく原作通りだろ」

イオク「問答無用!!さあ残りの雪像も破壊してくれよう!!」

イオクがレギンレイズのレールガンで次の標的を近距離で撃とうとゆつくりとほかの雪像を破壊しながら歩いてみると横から吹っ飛ばされた。吹っ飛ばしたのは大型メイスを構えた三日月のバルバトスルプスレクス。その後ろにはガンダムグシオンリベイクフルシテイとガンダムフラウロスが武器を構えながらゆつくりと進んでいった。

三日月「アンタ、邪魔だよ」

昭弘「テメエは殺してやるよ。何度でもな」

シノ「やってやるぜ!」

バカを倒すために武器をバカに向けようとするがそのバカの前にカルタ・イシューを筆頭にグレイズリッター、レギンレイズジュリア、ガンダムキマリスヴィダール、ガンダムバエルが現れた。

ジュリエッタ「イオク様邪魔です」

カルタ「我らギャラルホルンの力を見せてくれる!」

ガエリオ「何故俺まで・・・」

マクギリス「仕方が無いさ」

鉄華団と戦うことを望むカルタとジュリエッタそしてそれに付き合わされるガエリオとマクギリス。ちなみに鉄華団とギャラルホルンの関係は最悪（たわけやイズナリなどのせい）なためこのような騒動も起こるのだった。

そして騒動はここだけで起こってはいなかった。

おそ松「なーにが雪祭りじゃボケエ!!」

カラ松「雪なんて溶けたらただの水なんだよ!？」

チヨロ松「ガキどもがバカみたいにはしゃいでんじゃねえよ!!」

一松「殺すぞゴラアア!!」

十四松「ボウエ!!」

トド松「ア”ア”ア”ア”ア!!」

イヤミ「(´,ω´)シエーッ!!」

作っていた雪像をイオクのレギンレイズによって踏み潰された6つ子とイヤミはその怒りを他の雪像にモザイクのかかった卑猥な玩具を投げつけることで八つ当たりをしていたり

桂「滑り台なんてつくったってなあ、そんなもん誰が滑るかアア!!この街にいるのはすれた大人にひねたガキだけじゃないかア!!滑り台なんてなくなってしまうばい

れたのだった。

そして唯一破壊されないで残っていた沖田オルタのおでんの雪像が優勝しおでん1年分手に入れたのだった。

バレンタインは甘ったるい

2月14日バレンタインデー。その日はお菓子会社の策略だのリア充爆殺！などと
言われているが、全国の男子女子が心待ちにした日でもある。恋人や友人、好きな人に
チョコをあげたり貰ったりする一種の記念日とも言える日である。

そんな日でもバカなことを考える奴らはいらるのだった。



2月13日深夜の禍終素学園地下。禍終素学園の地下にはMSやKMF、スーパーロ
ボットなどの格納庫の他に学園には秘密裏に作られている部活動やサークルがあった。
そしてその地下を人目を警戒しながら歩いているのは禍終素学園OBである松野おそ
松である。おそ松は周りに人が居ないのを確認すると足元のマンホールの蓋を開きそ
の中に入った。中にはハシゴがついていておそ松はそれを使ってさらに地下へと降り
ていった。ハシゴを降り終えると目の前に嚴重な扉がありおそ松はその扉を二、三回
ノックした。

『合言葉は？』

おそ松「バレンタインに浮かれてる奴は死ぬね！」

『入れ』

扉が開くとそこには覆面姿の集団がサバトをするかのように集まっていた。

彼らは非リア充軍団。女子にモテない悲しい生き物の中でも彼女持ちや女子と仲のいい男子を襲う傍迷惑な集団で学園創立時代から受け継がれていた。

そして現会長である3-Y武市変平太もまた同じように覆面姿をしておりゲンドウポーズで座っていた。

武市「皆さんよく来てくださいました」

嶋田「前置きはいいい。さっさと本題に入ろうぜ」

東城「全くもってその通りです」

須川「俺たちだって暇じゃないんだ」

嶋田結太、東城歩、須川亮は覆面の下からでも分かるほど目が血走っておりそれぞれ棍棒、日本刀、鎌を構えていた。

武市「落ち着きなさい皆さん。既に作戦準備は完了しております」

武市が指を鳴らすと後ろのカーテンが開き、中から巨大なロボットたちが現れた。それを見た非リア充軍団は歓声を上げた。

武市「さあ皆さん始めましょう。私たちの戦争（バレンタイン）を!!」

『ウオオオオオオ!!』

武市の言葉を聞いて奮い立つ非リア充軍団。その中で一人、黒田官兵衛は手錠の鍵の在処を教えて貰えるということまでここに来ていたのだが周りの空気についていけていなかった。

黒田「なんでこうなったんだ……」

そして時間が経って翌朝、学園内で男子学生は一樣にソワソワしていた。なぜならもし下駄箱にチョコとかあつたらどうしようとか門の前からいきなり「先輩つ、こ……これ……バレンタインデーのチョコですー」とか「べ……別にアンタの為に作ったわけじゃないんだからねっ!!」とか言われたらどうしようてなことを考えていた。

銀時「つたく、どいつもこいつも浮かれてやがる」

総司「そうだな」

銀時「大体あいつ等、何で現実を見てねーんだよ」

ジェレミア「理想と現実は違うからな」

ニール「なあ……銀時、総司、ジェレミア。なんなんだその衣装？」

会話の途中で初代ロックオンことニール・デイルンデイが入って来た。ニールは銀時と機動科の叢雲総司、3-O担任のジェレミア・ゴッドバルトの衣装に疑問を持った。なぜなら二人の衣装はいつもの服ではなかった。銀時は皮ジャンを着ていて、前にはエレキギターをぶら下げているし、総司の方はタキシード姿で胸ポケットに白いバラをさ

して、ジェレミアはオレンジカラーのブリタニアの騎士服を着ていた。

銀時「何って、これが俺の真の姿だよ」

千冬「銀時、お前はギター弾けるのか？」

銀時「大体な」

宇佐美「叢雲先生は結婚式にでも出るのかい？」

総司「これが俺の本当の姿だ。本当の俺は紳士なんだよ。いい意味での」

ラッセ「ジェレミア、お前その色はないだろ・・・」

ジェレミア「オレンジは私の忠義の証だ」

2ーSの担任宇佐美巨人、1ーTの副担任織斑千冬、狙撃科のラッセはそれぞれの同僚にツツコミを入れた。そんな中、ニールは1人自分の机に座り引き出しを開けると大量のチョコが入っていた。よく見ると机の下に置かれているダンボールの中もチョコで一杯だった。

ニール「やれやれ……今年もか」

イワンコフ「ヒーハー！モテモテねーニール先生！」

毎年変わらないチョコの量に呆れているニールの隣に回転しながら保健体育担当イワンコフ先生がやって来た。

イワンコフ「そう言えば今日の7時ぐらいに、たくさんの女生徒が職員室に来てたッ

シブル！」

ニール「……そうかい」

ニールは近くにあつたチヨコの包み紙を取り出し、中身を食べ始めた。

銀時「何であいつがモテモテなんだ？」

総司「アレじやないのか？ニールの大人らしさに女子達は弱いんじゃないか」

ジエレミア「ああ、あれか。あれね」

とりあえず銀時は荷物を取りに行くため自分のロッカーへ向かった。ロッカーを開けたら中には巨大なプレゼントの箱があつた。

銀時「何だこれ？」

ロッカーからプレゼントを取り出したプレゼントは人一人分が入る大きさで、持つてくるのに一苦労した。

真耶「何ですかそれ？」

銀時「しらねーよ、ロッカー開けたら入ってたんだから」

1-K副担任の山田真耶がそのプレゼントについて聞くが銀時も知らないのでプレゼントの中を開けた。そこには全身チヨコまみれの猿飛あやめが入っていた。銀時は有無も言わずにそれを外に向かって投げ捨てた。

ニール「おいおい容赦ねえな」

銀時「知るか、俺が欲しいのは甘いチョコであって変態じゃねえんだよ」

「銀時は自分の机に座ると引き出しからレロレロキャンディを取り出して舐め始めるのだった。」

——場所は変わって禍終素学園小等部6ーNでは担任であり学園長の紫の式神である八雲藍が生徒達にチョコを配っていた。

藍「お前達、今日はバレンタインということで先生からみんなにチョコのプレゼントだ」

橙「わーい！藍さまありがとうございます！」

チルノ「やっぱりアタシってサイキョーね!!」

インデックス「わーいやったー!!」

正太郎「先生ありがとうございます」

ワツ太「ありがとうございます!!」

勝平「サンキュー先生!!」

八雲橙、チルノ、インデックス、金田正太郎、竹尾ワツ太、神勝平を筆頭に生徒達は藍の前に並びチョコを貰っていたり

ルナマリア「はいシン、バレンタインチョコ♪」

ティファ「ガロード・・・これ／＼／＼／＼／」

さやか「甲児くん、私からもチョココよ♪」

サラ「ゲイナー、はいコレ／＼／＼／＼／＼／」

エウレカ「レントン／＼／＼／＼／＼／」

シン・ガロード・甲児・ゲイナー・レントン「二二二二あ、ありがとう／＼／＼／＼／」

禍終素学園地下の格納庫にて機動科の生徒であるシン・アスカ、ガロード・ラン、兜甲児、ゲイナー・サンガ、レントン・サーストーンはそれぞれの彼女からチョコを買っていた。なお、全員顔は真つ赤である。

竜馬・隼人・弁慶・號・凱・鉄也・真上・海道「二二二二……」
 溪「そりや親父たちみたいなのが購買でエプロン着てチョコ売ってるのに近づくやつなんていないよな」

ミチル「頼む相手間違えちゃったわね」

由木「そうですね」

購買にて体育教師の流竜馬、神隼人、車弁慶、剣鉄也、海道剣、真上遼そして3ーVの早乙女號と凱が購買部用のエプロンをつけてバレンタイン限定パン『乙女の甘い恋心ストロベリーチョコマフィン』、『乙女の苦い失恋ビターチョコクロワッサン』そして『友情のホワイトチョコケーキ』を販売していたのだが顔が厳つい竜馬たちが売っているため近寄るものはいなかった。それを離れたところで3ーVの車溪、3ーV副担任の早乙

零斗「チョコって美味しいけど食べ続けるのは結構キツイな」

明久「でもみんな飽きないように味を変えてくれてるから助かるね」

鍵「それに日持ちするから今日中に食べ切る必要は無いからな」

アラタ「女子達の愛情が籠ってるからなお美味い」

当麻「これでしばらくの間はチョコで飢えを凌げる」

十六夜「ヤハハハ、どんだけ金がねえんだよ」

チョコを貰える相手がいる零斗たちはそんなことを喋りながら、その一方でチョコをもらってない一誠達はそのチョコを食べている姿を離れたところから羨ましそうに睨んでいた。

一誠「ちくしょう!!なんでアイツらだけがあんなにモテるんだよ!？」

新八「主人公だからじゃないの?」

一誠「俺だって主人公なんだけど!？」

春虎「まあそういうこともあるだろ」

冬児「諦めて現実を見ろ」

今現在家族以外の女性からチョコを貰えていない新八と一誠は零斗たちを親の仇のように睨んでいた。春虎と冬児は彼女である土御門夏目と倉橋京子から貰ったチョコを食いながらそんなことを言う。

一誠「認められるかよ!! 原作なら俺だつてあつち側の人間のはずなのにどうしてこの作品じゃハーレムメンバーの殆どが取られまくつてんだよ!？」

新八「文句は作者に言いなよ。僕だつてきららさんとフラグが立つてるはずなのにそんなもの無かつたつて扱いされてるんだから」

銀時「おーいうるせえぞそこの変態ドラゴンと変態メガネ」

一誠・新八「誰が変態ドラゴン（メガネ）だゴラアアア!?」

銀時「んなことはどうでもいいから全員席につけ」

H Rの時間になったことで教室にやつて来た銀時が一誠と新八に注意して生徒達に席に着くように言った。全員素直にその言葉に従つてそれぞれの席に座った。

銀時「いいかテメーら。女どもからバレンタインチョコ貰つて浮かれてるんじゃねーぞ。女がお前たち男にチョコをやるのはホワイトデーのお返し目当てであつてそのチョコには愛情なんてものは籠つてないことをよく覚えておけ」

瑞希「あの、それは偏見なんじゃ・・・」

美波「先生、自分が貰えないからつてその発言はどうかと思いますよ」

銀時「うるせえーよガキども。つーかなんで俺が貰えないのにツラやバカの辰馬、低杉くんはそこそこ貰つてんだよ。なんで主人公の銀さんのところにはチョコがこないんだよお!!」

銀時は涙を流しながら机を叩きそのまま机に突っ伏した。それに同意するかのよう
に新八や一誠、青髪ピアス、土御門元春などチョコを貰えなかったもの達は力強く頷く
のだった。

銀時「つーわけで先生は糖分不足なのでチョコを持っていてる生徒達は速やかに先生に
渡すように」

生徒一同『巫山戯んな!!』

銀時「そげぶっ!?!」

切り替わりが早い銀時は机から顔を上げて真顔でそんなことをほざいたために生徒
全員から筆箱や雑誌など色々なものを投げつけるのだった。

銀時が色々なものにあたって黒板に叩きつけられるのと同時に教室の前の扉が開く
と巨大な掃除機のようなものを持った黒い覆面集団が入ってきた。

須川『バレンタインに浮かれてる奴らは』

嶋田『地獄に落ちやがれー!!』

須川が掃除機のスイッチを押すと強力な吸い込みが始まり、教室にあるチョコを全て
吸い込むのだった。

明久「僕のカロリーが!?!」

当麻「俺の飯が!?!」

鍵「俺への愛情の籠もったチョコが!？」

武市『次の回収に行きますよ』

覆面姿のリーダーである武市が他の覆面たちに指示を出すと退却して行った。武市たちが去るまで呆然としていたがしばらくすると正気に戻った。

霊夢「アイツら私たちのチョコをつ!!」

深夏「ふざけやがって!!」

アリン「殺す」

耀「潰す」

妹紅「燃やす」

特に自分の想いを込めて作ったチョコを奪われた霊夢たち女子はドス黒いオーラを纏い始めたのでチョコを奪われて怒りを感じた男子たちもその恐ろしさに引き気味である。

どうやらやられたのはこのクラスだけではないようで教員含め学園のチョコ全てが奪われたようだった。

そしてチョコを奪った武市たちは校庭に集まっており、その後ろにはキモブリヲのヒステリカを筆頭に鎌や斧、釘バットなどの武器を構えた覆面姿の集団にチョコ色に塗装された暁、武頼、ビルゴイー、ランドマン・ロデイ、ATスタンディングタートル、量

産型ゲッタードラゴン・ポセイドン・ライガー、ベヒモスなどのロボットたちが武装していた。

キモブリヲ「おい待て、なんで私の名前がキモブリヲなんだ。私の名前はエンブリヲだぞ」

武市「しようがありません。実際あなたはキモイですからね」

須川「俺たちも大概だけどそれ以上にキモイしな」

キモブリヲ「殺すぞ貴様ら」

ちなみにキモブリヲは多数の女性をレイプしたため現在指名手配中で何度も殺されているが何度も復活するため未だ完全に殺されたことは無い。ゴキブリ並にしぶといので皆さんも遭遇した時はご注意ください。

今回たまたま協力関係になっているが武市たちは全てが終わったら警察に連れて行く予定である。

キモブリヲ「さあこのチョコを返して欲しければスタイルのいい女性はいやらしい格好をして全身をチョコでコーティングして来い！」

アンジュ「キモイんだよあんた!!」

キモブリヲが興奮しながらそのような馬鹿げたことを要求してきたがアンジュがウイルスでヒステリカに飛び蹴りをくらわせた。ちなみに武市たち非リア充軍団は

チヨコを奪って男達の悔しがる姿を見て後日チヨコを渡した女性たちに返却することでバレンタインチヨコという存在をなくそうとしているのだった。バレンタイン以外の日にチヨコを渡したところでそれはただのプレゼントになるからだ。

アンジュ「せつかくのバレンタインを邪魔したアンタ達を絶対に許さないわ!!」

アンジュがそう言うのと学園の倉庫から次々とルー・ルカのZガンダム、プルとプルツのキュベレイMark-II二機、ルナマリア・ホークのフォースインパルスガンダム、ラクス・クラインのストライクフリーダム、カガリ・ユラ・アスハのストライクルージュ、マリーダのクシャトリヤ、マオのM9ガンズバック、C・Cのランズロットフロンティア、紅月カレンの紅蓮聖天八極式、アヤノのアレクサンダ・ヴァリアント、チームDのダンクーガノヴァ、ヨークのヨーコタンク、アデイのツェンドルグなどのロボットとその他武装した殺気立った女性たち。その恐ろしさに非リア充軍団とキモブリヲは恐怖を抱いて数歩後ろに下がった。

ラクス「ではお仕置きをしますね♡」

キラのストライクフリーダムに乗っているラクスがそう言うのとチヨコを奪われた殺気立った女性たちが攻撃を始めた。一瞬対応に遅れたが非リア充軍団とキモブリヲも反撃を始めたのだった。

——後に、この戦いは第一次バレンタイン戦争として学園の歴史の1つとして語

られていくのだった。

結果、キモブリヲは学園中の女性たちによって錬金術による蘇生が失敗したかのような肉片となり、非リア充軍団は半殺しになった後鉄人による鬼の補習を受けることになるのだった。

零斗「え、俺の出番今回少なくてね？」

鍵「作者もネタ切れになったらしい」

明久「またやる時はもつとネタを貯めるらしいよ」

尚、教室にてその戦いを傍観していた零斗たちは今回の出番の少なさに驚いているがあの殺気立った場所に入ってこつちに被害を被るのは嫌なので大人しくここで様子を見るのだった。

そして奪われたチョコは再度手渡しされるのだが微妙な空気が流れる人たちもいれば初々しい空気を流す人達、甘ったるい空気を流す人たちもいた。

——バレンタイン。それは人によつては素晴らしい日であり悲しい日でもある。それでもひとつの行事として楽しい日であることは間違いないだろう。それでは皆さん、ハッピーバレンタイン!!

黒田「俺の手錠の鍵は!？」

尚、黒田官兵衛の手錠の鍵については戦力に加えるために武市が教えた嘘であるため、今回彼は無駄に半殺しにされて終わっただけである。

珍しい食材には気をつけろ

竜ヶ崎家の家計は火の車である。以前までなら仕送りとバイト代で零斗と紫音の2人で暮らしていくのに問題ないというか十分な貯金が出るぐらいのお金があった。しかし零斗がネロたちサーヴァントと契約したことで二人だけの家の筈が1人も増えたことで大家族となつてしまった。しかも男は零斗1人なので周りからの嫉妬も半端ないし毎朝布団に誰かが忍び込んでくるため毎朝強烈な攻撃を受ける零斗もまたこの生活に慣れ始めていた。

無論、ネロたちもただ家でだらけきつた生活を過ごしてはおらずそれぞれできるアルバイトなどをやっており零斗もまたバイトの数を増やしていた。そんなある日、零斗はバイト先のラーメン屋にてランサーのクー・フリーンから貰った珍しい食材を食べることにした。

零斗「そんな感じで手に入れたのがこのラッコ肉」

紫音「兄さんラッコは本来なら輸出に規制がかかってるから手に入らない筈なんじゃ」

零斗「何でもたまたま釣れたらしい」

沖田（FGO）「ラッコって釣れるものなんですか？」

零斗「たまたま釣れたらしいから本来は釣れないんだと思う」

信長（FGO）「わし多分昔食ったことあるはずなんじゃがどんなもんか忘れたんじやが」

メイヴ「まあとりあえず食べてみたらいいんじゃない？」

零斗「それもそうだね」

今日は大雨のために体が冷えるので鍋にすることを決めていたのでネギや白菜、人参などの鍋に入れる野菜類は既に切っており炬燵の上に簡易コンロを置いて出汁を入れた土鍋に野菜とラッコ肉を入れて煮始める。暖房をつけているので部屋は完全に密閉されている。

グツグツと煮える音が食欲をそそる。

零斗「見た目は普通の鍋だな」

沖田（FGO）「今更なんですけどラッコって食べても大丈夫なんですかね？」

スカサハ「猪や熊の肉を食うのが許されているんだ。問題なからう」

玉藻「ケルトと同じにしないで欲しいんですけど」

メイヴ「ねえ調べてみたらラッコ肉って食用としてはイマイチってあったんだけど」

アルトリア槍「そういうのは煮込む前に言ってください」

そんなことを考えている間に鍋は完成し、各自箸でつついて食べ始めた。

ネロ「うむ、少し固いが特に問題は無いようだな」

静謐「そうですね」

零斗「(あれ?なんだろう……)」

紫音「(何故か分かりませんが……どう見ても……)」

零斗・紫音「(ネロ(さん)と静謐(さん)が色っぽい……)」

零斗と紫音は目の前で同じように鍋を食べているネロと静謐が色っぽく感じてつい顔を赤くしながらも魅入ってしまった。

玉藻「ご主人様と紫音さんどうかなさいました?」

スカサハ「何か問題でもあったか?」

信長「誰か変なもんで入れたか?」

玉藻とスカサハ、信長の3人が様子のおかしい2人を心配するように声をかけるが2人もまたおかしかった。零斗と紫音と同じように顔が赤くなっているが3人はランサー、アサシン、バーサーカーにクラスチェンジにして水着に変わっていた。

玉藻「あら?」

スカサハ「む」

信長「おっと、霊基が水着に」

信長「あ、オルタの方が沖田より乳デカ——」

沖田（FGO）「三段突き!!」

信長「ゴツファ!？」

零斗「ノツブ——!？」

スカサハ「第六天魔王が死んだ!!」

アルトリア槍「この人でなし!!」

そんなやり取りをしていると突然玄関の方で音がする。バタバタと走ってくるように来たそれは、扉を開けてこちらに向かってきた。

霊夢「鍋をやつてると聞いて!!」

魚屋で働いているキャスターのクー・フリーンから零斗がランサーのクー・フリーンから珍しい肉を貰って鍋をするらしいと聞いた霊夢は寶錢箱がここ最近空でその辺の野草や野ウサギなどしか食べていなかったのでちゃんとした美味しいものを食べるために走って来たのである。

『霊夢?』

外が大雨な中走ってきたために霊夢の体はびしょ濡れで巫女服が体に張り付いてしまい霊夢の食べているものの割に発育の良い体のラインがよく分かるようになってい。これによってこの場が更なる混沌に包まれるのだった。

零斗「そのままじゃ風邪を引くから着替えてこい。その間に霊夢の分を分けておいてあげるから」

霊夢「ありがとう零斗。昔から気が利くわね」

零斗「よしてくれ……」

零斗以外の全員『かわいい……』

紫音「そういう霊夢さんも水も滴るいい女って感じですよ」

霊夢「そ、そうかしら……」

メイヴ「くっ……（なんなのよ……この感情は。抑えきれないっ）」

スカサハ「むう……（この様な気持ち初めてだ……）」

沖田オルタ「ああ……／＼／＼」

鍋が煮える音だけが確かに聞こえる。それもうつすらとだが。それほどまでに意識が遠退きそうなのがわかる。

信長「そう言えば今思い出したんじやが……」

沖田（FGO）「何をですか？……」

信長「確かラッコの肉って媚薬みたいなもんが含まれとるんじやよ」

ピクツ（零斗とノツブを除いた全員が動きを止めた）

零斗「媚薬ってアレか？薄い本でよくお世話になるあれのことを言ってるのか？」

信長「それじゃよ。いやー昔ミツチーと信勝、サル、蘭丸たちに食わせたら大変なことになったのすつかり忘れとったわ」

零斗「おい」

ノツブが今思い出したかのように言ったことに零斗はツツコミをするのと同時に寒気を感じた。ゆつくりと周りの様子を見渡してみると

『・・・・・・・・・・・・・・・・（ギラギラと目を輝かせながら獲物を狙うかのように零斗を見るネロたち）』

今にも襲い掛かって来そうなネロたちから距離をとろうとゆつくりと後ろに下がろうとする零斗だが、その両肩を霊夢とノツブに掴まれてしまい動けなかった。

霊夢「添え膳食わぬは」

信長「男の恥じゃぞ？」

零斗「れれれれ冷静になるんだみんな。今のみんなはラッコ肉でおかしくなっているからであって——」

『問答無用!!』

零斗「アアアアアアアアアア!？」

その日、零斗の必死の抵抗と互いに潰しあったことで零斗の貞操は無事守られたのだった。なお翌日正気に戻ったネロたちと零斗は気まづい関係がしばらく続き、スカサ

立香「あ、ゲイザーよりは美味しい」

蘭陵王「マスター比べるものが明らかにおかしいです」

煮立ったすきやきラッコ鍋を一口食べた立香の一言に蘭陵王はツッコミを入れる。流石にゲテモノであるゲイザーと一応はマトモに食べられる？ラッコ肉を比べるのはおかしい。しかしこの藤丸立香はマスターゴリラの野菜マッシュやベディヴィエールによるゲイザーを筆頭としたゲテモノ料理、カーミラのような八連双晶みたいなチョコ、オケキヤスのキュケオーン祭りなどと過去今までに様々な料理を食べているので一応耐性がついている。

しかしそんな料理に耐性を持つている立香や名高い英雄である蘭陵王たちでもラッコの媚薬成分を防ぐことは出来ないのであった。

立香「あれおかしいな。いつもより蘭陵王が……色っぽい……」

普段仮面でその美しい顔を隠しているが今は仮面を外しているため男にしては色気がある方の蘭陵王であるが今日の蘭陵王は顔を赤らめておりいつも以上に色気を感じられた。

蘭陵王「マ、マスター流石に冗談ですよね？」

蘭陵王は立香がおかしなことを言ったため表情を引き攣りながら立香から距離をとった。

立香「冗談じゃないよ。俺、実は蘭陵王のこと前からアストルフオやデオンみたいな男女の性別を超えた存在だと思ってるから」

蘭陵王「どういう意味ですかそれは!?!今のマスターは少しおかしいですよ!?!英雄王殿とデイルムツド殿もそう思いますよね!?!」

明らかに立香の様子がおかしい事に気づいた蘭陵王はこの場にいる2人に助けを求めめるかのように声をかけるが、いつの間にか2人の姿が消えており先程まで2人がいた場所には紙が置かれていた。その紙には以下の文が書かれていた。

『ムラムラしてきたのでちよつとセイバー（青王）の所へ行ってくる（byギルガメツ シュ&デイルムツド）』

蘭陵王「バカなんですかあの人たちは!?!」

本能の赴くままに行動するギルガメツシュとデイルムツドに驚くのだった。

ちなみにこの作品のデイルムツドはセイバーとランサーが混ざっているのですこんな性格である。

立香「もう我慢出来ない!!」

蘭陵王「ちよつ!?!」

立香は耐えきることが出来ず蘭陵王を押し倒した。

蘭陵王「マ、マスター落ち着いてください!!」

蘭陵王は立香の様子が普通ではないと気づき落ち着くように説得するが、理性が蒸発したアストルフオのようになってしまっている立香には焼け石に水であり、とうとう蘭陵王の上着を脱がし始めた。

立香「さあ、俺のこの昂る気持ちを受け止め——」

ガラツ!!（勢いよく部室の扉が開く音）

マシユ「すみません先輩!! グランドロクでなしをお仕置きしていたら少し遅れてしま

走ってきたらしいのか少し顔が赤くうっすらと汗をかいて部室に入ってきたマシユだが、中の様子を見てしまい固まってしまった。そして立香もまたマシユが来たことで正気に戻ったのか赤くなっていた顔が青を通り越して死体のように土気色にまでなっていた。

マシユ「し、失礼しました!!」

立香「マ、マシユ——!!?」

誤解したマシユは脱兎のごとくその場から走り去り、立香はその誤解を解くべくそれを追いかけるのだった。

後日、立香はアレは誤解だと説明することに成功したが妹の立花や一部のサーヴァントたちからはしばらくの間ホモ扱いされてしまい、刑部姫やシェイクスピアなどの作家サーヴァントたちにネタ扱いされるのだった。

そしてセイバー（青王）に全裸になつて迫つたギルガメツシユとデイルムツドはカリバラれたため座に帰りかけてしまつたり、諸悪の根源であるモリアーティはホームズのバリツをくらつた上にバーサーカーとセイバーのダブルフランによる『パパクサイ』という口撃によつて心身ともにボロボロになつてしまつたのだった。

俺がアイツで、アイツが俺で、俺がコイツで、コイツが俺
で

春風が吹き桜が舞い散る今日この頃。禍終素学園はいつもと同じように――

ドゴオン!!（教室の扉が勢いよく飛ばされた音）

――バカ共がバカ騒ぎしているのだった。

銀時「うぼおオオ!？」

扉ごと教室から飛ばされたのは2ーZ担任の坂田銀時。教室の中には零斗を筆頭に
殺気立っている2ーZの生徒たちがいた

零斗「ぎっけんこの腐れ天パアアア!!」

霊夢「みんなが預けた今日の放課後からのカラオケ大会の費用を競馬（ウマ）ですつ
たってどういふことよ!？」

新八「みんなが今日この日をどれだけ楽しみにしてたと思ってるんだゴラア!!」

雄二「マジでぶつ殺すぞこの野郎!!」

どうやら銀時がカラオケ大会の費用を競馬で使い切ってしまったらしく零斗たちは銀時を糾弾していた。

銀時「ち、違うんだ。まさかジャスタウェイが天皇賞とるとは……。あんな駄馬もうとつくに馬刺しになつてるもんだと・・・」

春虎「んな言い訳はどうでもいいんだよ!!」

深夏「私らのカラオケ代はどうしてくれるんだつて聞いてんだよ!!」

ミラ「さつさと腎臓なり肝臓なり売ってお金にしてください!!」

追い詰められた銀時はなんとか言い訳してこの場から逃げようとするが当然そんなもので許す2ーZの生徒ではない。

それを悟った銀時は廊下の窓を壊して校舎から飛び降り着地すると同時に全力疾走で学園から逃げ出した。

魔理沙「ちいつ、無駄に逃げ足は早いな!!」

当麻「待てよ銀さん!!」

妹紅「人の金を競馬に使いやがって!!」

一誠「待てやゴラアアア!!」

銀時が逃げるのをそのまま見過ごす訳もなくブチ切れた2ーZの生徒たちは銀時と

ようで、おそ松以外の兄弟はおそ松を処刑する気満々なのかそれぞれ武器を手に持っていた。

おそ松「ち、違うんだ。途中までは運が良くて元金の倍まで稼げたんだよ。そこでやめときや良かったんだが頭の中で赤塚先生が『続けちやつてもいいさ』って言ってた気がしてそのまま続けてたら……」

チヨロ松「なに赤塚先生を言い訳にとんでもないこと言ってるんだよこのクソ長男!!」
おそ松もまたその場逃れの言い訳をするがそんなものでごまかせる訳もなくむしろチヨロ松たちの怒りを上げるようなものだった。

6つ子（おそ松除く）『死ねやクソ松うううう!!』

おそ松「死んでたまるかアアアアア!!」

おそ松は凶器を振り回してくる5人の兄弟から逃げるのため銀時と同じように路地裏を通って逃げるのだった。

また同じ頃、新撰組屯所にて

山崎「ぎゃあああ!?!」

突然、レストランの中から山崎が吹き飛ばされてレストランの自動ドアを破壊する。

土方「張り込み中にのんびり『ヒ○ナンデス』か、いい身分になったもんだな。おい？ 覚悟は出来てんだろうな？」

山崎「ちっ、違うんです副長。ヒ○ナンデスって平日は学校があるから中々見れなくてつい……」

土方「土道不覚悟で切腹だボケエエエ!!」

山崎「ヒイヒイヒイヒイ!!」

土方に恐怖した山崎はすぐさま逃げ出し、土方は山崎を全力で追いかけていった。それからしばらくした頃。

銀時「まいたか！」

零斗「逃がすわけねえだろうが!!」

銀時「ちいつ!!」

路地裏から出てきた銀時が走りながら後ろに振り向いて確認すると零斗の姿が見えず舌打ちするとまた走り出した。

その一方。

一松「どこ行きやがったあのクソ松!!」

トド松「相変わらず逃げのだけは早いね」

おそ松を見失ってしまったトド松たちは別れて虱潰しにおそ松を探しているが中々見つからないでいた。

おそ松「長男舐めるなっつーの」

路地裏の影からこっそりと見ていたおそ松は誰にも気づかれないようにそのまま走りだす。

そのまた一方。

土方「チツ！どこいきやがった」

路地裏で山崎を見失った土方が周りを見回し、こちらもまた走り出す。

そして、とある路地裏に差し掛かった辺り――。

零斗「くたばれクソ天パアアア!!」

銀時「そげぶっ!?!」

銀時に追いついた零斗は走った勢いを殺さずにそのままドロップキックを銀時にかました。

土方・おそ松「うおっ!?!」

山崎を追いかけていた土方と兄弟から逃げていたおそ松は突然飛んできた銀時と零斗にぶつかりそうになり足を止めてしまった。その間に山崎は遠くに逃げてしまった上にカラ松が近くでナンパをしていた。

おそ松 「何やってんだ！どけエ!!邪魔なんだよ」

零斗 「うるせえよクソニート!!こっちはこのクソ天パをぶちのめさなきゃならねえんだよ!!てめえらがどっかいけボケ!!」

土方 「てめーがどけエ!!こっちや任務中なんだよ!叩き斬られてーのか!!」

銀時 「つーかテメーら銀さんを足蹴にしてんじやねーよ!!」

4人は苛立っているようでこのままだと喧嘩に発展しそうになっていた。互いに意地になっているのかその場から離れず先に目の前の馬鹿どもを潰すことを考えていた。

銀時 「いいからどけて言ってるのが・・・」

銀時がそう怒鳴りかけたときだった。

プアアアアアア(トラックのクラクションの音)

突然横から鳴り出したクラクションに銀時、零斗、土方、おそ松が振り向くが、もう避けようがなかった。

そして――。

銀時が白衣の中に隠し持っていた木刀『洞爺湖』と零斗の腰にさしている黒剣が道路に転がり落ちた。

おそ松？「竜ヶ崎零斗。禍終素学園高等部の2年です」

おそ松もまたいつものだらしない顔ではなく真面目な顔つきで零斗の名前と学園の名前を名乗った。

零斗？「松野おそ松です。夢はビッグになることで今は無職です」

そして零斗もまた普段の真面目な顔が崩れ切ってだらしない顔の上に態度までだしなくなっていた

医師A、B、C、D『・・・・・・・・』

医師たちはカルテを確認する。

医師C「あつ、ハイハイ。これ、一緒に事故に遭われた方とカルテごっちゃになってますね」

医師D「申し訳ありません。こちらの手違いでした」

医師A「うん……。やっぱり何ともないみたいですね」

医師B「まあ、様子を見ましょう。何かあったらすぐ病院に来てくださいね」

「お大事に〜」

こうして、零斗たちも無事に診察を終えた。しかし。

銀時？「あー、頭痛エ。本当に大丈夫なんだろうな、コレ」

土方？「つたく。バカのせいでとんだ手間とらされちまったぜ」

零斗? 「つち、あの腐れ天パのせいで酷い目にあつたぜ」

おそ松? 「あーあ、今日はとことんついてねえな・・・」

4人は頭痛を気にしながらも病院を出て行き、何時も通っている艦娘の鳳翔さんと間宮さんが経営している居酒屋へと行った。この店は夜は居酒屋で昼間の間は定食屋として営業しているのだった。

鳳翔・間宮 「いらつしやーい」

土方? 「何時もの頼むわ」

おそ松? 「俺も何時ものお願いします」

笑顔で迎える2人に土方?とおそ松?はそう注文した。それからしばらくすると

鳳翔 「はい、土方スペシャル一丁!」

間宮 「はい、唐揚げ定食お待たせしました!」

鳳翔と間宮は土方がいつも注文しているマヨネーズがとぐろを巻いている丼とおそ松がちよくちよく来ては兄弟で来ては頼む唐揚げ定食を頼むのだが、土方?とおそ松?は何故か違和感を持って土方スペシャルと唐揚げ定食を見つめていた。

土方? 「おい・・・、鳳翔さん。誰がこんな犬のエサ注文したよ」

おそ松? 「間宮さん。俺もいつもの唐揚げ定食じゃなくてチキン南蛮定食ですよ」

鳳翔 「え?でも・・・」

間宮「お二人ともいつものだつて・・・」

鳳翔と間宮は2人の言っている意味が分からないようで首をかしげていた。

それに対して土方？とおそ松？は近くに置いてあつた宇治金時まみれの丼とチキン南蛮定食を引き寄せて鳳翔と間宮にこう言つた。

土方？「宇治銀時丼だよ！ホラツ、ホカホカご飯にこんもり甘い小豆が乗つた……」

銀時？「ひよつとして、この猫のエサの事ですか」

零斗？「じゃあこのチキン南蛮定食ももしかしておたくの？」

右側の席で同じく宇治銀時丼とチキン南蛮定食に違和感を持つていた銀時？と零斗？が土方に言つた。

土方？「あつそうです。ひよつとしてこの犬のエサ、おたくのですか？」

おそ松？「じゃあこの唐揚げ定食もそちらの？」

土方？「オイオイ鳳翔さくん、間宮さくん、ちよつと頼むよ」

土方？とおそ松？は土方スペシャルと唐揚げ定食をそれぞれ銀時？と零斗？に譲ると2人にそう言つた。それに対して鳳翔と間宮は笑顔で謝りながら二人にこう言つた。

鳳翔「あく、ごめんなさい」

間宮「今日は逆、なんです。坂田さん、土方さん。それに零斗くん、おそ松さん」

『逆？』

と言った具合に中身である魂が入れ替わってしまったようだ。

なお、次のセリフからわかりやすくするために中身（身体）と言った形で進めていきます。

銀時（土方）「警察が人の身体に不法侵入していいのかよコノヤロー!!」

土方（銀時）「人の身体に空き巣に入ったのはてめエだろーが！現行犯逮捕だコルア!!」

ドオン！

銀時（土方）「パクれんならパクってみろよ！今のお前はパチンコ三昧のダメ教師!!生徒の見本にもなりやしねエ無力なただの社会のゴミなんだよザマーミロ!!」

ドオオン！ ドオオン！

土方（銀時）「ゴミはてめーだ税金泥棒!!警察なんざ、税金を貪り食うだけの無能集団なんだよ!!今のお前には何もできやしねエ!!」

零斗（おそ松）「あの、殴り合うのやめませんか！なんかもう殴った拳が全部ブーメランみたいに全部帰ってるんですけど!?!」

おそ松（零斗）「じゃあお前も殴るのやめてくんない?!」

現実を認めたくない銀時（土方）と土方（銀時）は互いに殴りあい始めているのと同じように童貞クソニートと身体が入れ替わったことを認めたくない零斗（おそ松）が

おそ松（零斗）を近くに落ちていた鉄パイプで頭を何度も叩きつけながら止めた。

その後、一旦落ち着いた4人はそれぞれ現状の確認をした。

土方（銀時）「・・・夢を見た。あの時」

零斗（おそ松）「夢？」

土方（銀時）「ダンプにはねられた俺達の身体が、下に見えた」

銀時（土方）「・・・オイ、それってまさか・・・」

土方（銀時）「なんだか嫌な予感はしてた。早く戻らなければ取り返しをつかない事になる、直感的に思った。俺は同じように考えていた隣の玉と共に互いの身体に急いで戻ろうとした。その時、俺たちは背後から、妙な毛玉と薄汚れた玉がとんでもない勢いで飛んでくるのに気づいた」

銀時（土方）「ねエ、ひよつとしてそれ俺？なんで毛生えてんの？」

おそ松（零斗）「俺のに関しては何汚れてんだけど？どういうこと？」

ぎこちない表情をした銀時（土方）とおそ松（零斗）が思わずに訊く。恐らく銀時は天パが、おそ松はクズさが、魂にまで影響される程の影響力があるのだろう。

土方（銀時）「気づいた時には遅かった。俺たちはその二つの玉とぶつかってそれぞれあらぬ方向にお前とおそ松の身体の方に吹っ飛んだ。後ろからやってきた二つの玉は衝撃で真っ二つに割れ、半分は俺と零斗の身体に、そしてもう半分は猫の死骸のケツの

穴に吸い込まれていった」

おそ松（零斗）「二つに割れたってどーいう事だア!!猫のケツの穴ってどーいう事だア!!」

銀時（土方）「大丈夫なの!?毛玉大丈夫なの!?」

土方（銀時）「で・・・、気づいたらこうなってたワケだ」

銀時（土方）「毛玉はアアアア!?ケツの穴の方の毛玉はアア!」

おそ松（零斗）「汚れた方は!?猫のケツに入った汚れた方はどうなったんだよ!」

銀時（土方）とおそ松（零斗）はタバコをふかしている土方（銀時）が言った、猫の死骸に入っていたもう半分の二つの玉の行方について訊こうとしたが、土方（銀時）は話をここで締め括ってしまった。

土方（銀時）「つまりだ、俺達やダンプにはねられながらも奇跡的に五体は無傷だったが、魂は外に飛び出しちゃってた。で、お互い慌てて身体に戻ろうとする所にぶつかって、一回猫のケツの穴を通して、入れ違いの身体に入ってしまった。・・・という夢を見た」

零斗（おそ松）「そうか夢か・・・」

ここまで黙って話を聞いていた零斗（おそ松）はとんでもない行動を起こした。

零斗（おそ松）「じゃあ、目エ覚ませばこの悪夢も終わるな」

おそ松（零斗）・銀時（土方）・土方（銀時）「「待てエエエエエエエエエエ!!」」
零斗（おそ松）はおそ松（零斗）を廃ビルの屋上から落とそうと逆さまにしているの
を3人が止めた。

零斗（おそ松）「うるせえ！元の身体に戻るにはもういつペン死にかけて魂アスファル
トにぶちまけるしかねーだろが!!」

おそ松（零斗）「アホかアア!!こんな所から落ちたらためーの実家なくなんぞオ!!」

早まった行動に出る零斗（おそ松）を逆さまにぶら下げられたおそ松（零斗）が制止
する。しかし、零斗（おそ松）はまだ冷静さを欠いたままであった。

零斗（おそ松）「じゃあ、こいつの実家をメンチカツ屋にする」

銀時（土方）「落ち着けエ!!また死にかけたら魂が出る確証はあんのか!?!下手したら今
度は本当におつ死ぬかもしれないねーんだぞ!!」

土方（銀時）「元に戻る確実な手段を見つかるまでは勝手なマネはするな!」

零斗（おそ松）「確実な方法って、そんなもんあるんですか?」

廃ビルの屋上の手すりに捕まった零斗（おそ松）を銀時（土方）と土方（銀時）が止
めた。零斗（おそ松）は苛立たしそうに何か解決策でもあるのかを聞く。

土方（銀時）「知るか。だがこんなバカげた話、誰も信じてくれるワケもねエ。ためー
で搜すしかねーだろ」

銀時（土方）「オイ冗談じゃねーぞ。それまでこのニコチンまみれの身体でどうしろってんだ」

零斗（おそ松）「俺も嫌ですよ。このままじゃクソニート菌が移っちゃいますよ」

おそ松（零斗）「おい、クソニート菌ってなんだコラ？」

しばらくの間今の身体のまま生活しなければならぬことに3人は納得できてないのかどこか苛ついていた。

土方（銀時）「……やっていくしか……、ねーだろ。俺は禍終素学園の2ーZの担任の坂田銀時として、お前は真選組副長、土方十四郎として。そして零斗は童貞クソニートの松野家長男として、おそ松は禍終素学園2ーZの竜ヶ崎零斗として」

土方（銀時）も本当の所、銀時の身体が嫌だったようで、土方（銀時）の顔には怒りが出ていた。

銀時（土方）「ふざけんな冗談じゃ……」

メリツ

突然、土方（銀時）の後頭部から、何か嫌な音がして、血が噴き出した。

『見つけた』

既に銀時に対する殺意を顔に出していた2ーZのクラスメイトであった。土方（銀時）が出血したのは神楽に後頭部を鷲掴みにされた為であった。そして神楽は鷲掴みに

した土方（銀時）を地面に叩きつけた。

土方（銀時）「ぐああああああ!!」

零斗（おそ松）「ひ、土方ああああ!!」

神楽「どこまで逃げてんだてめーは。今日こそはカラオケ大会を開催させてもらおうネ」

鍵「まったく。ギャンブルばっかやってんじやねえよこの腐れ天パ」

セリナ「私達の事を裏切って競馬に全部使い込むなんて酷いですよ銀さん!!」

神楽に続き、鍵とセリナもまた土方（銀時）を糾弾する。そして彼らの後ろには殺気立っている他の2ー乙生徒達が土方（銀時）をボコる準備をしていた。

土方（銀時）「ちよっ……、ちよつと待てエエエ!!カラオケ大会って何だ!?オツ……、オイ!どーいう事だコレ!」

あまりにも急な事態に土方（銀時）は銀時（土方）に訊く。しかし――。

銀時（土方）「やれやれ、カラオケ大会の費用を全部ギャンブルに使い込むとはつくづく見下げ果てた野郎だ」

なんと、銀時（土方）はタバコに火を付けて吸い始め、本物の土方を装った。

銀時（土方）「ガキども、ついでに未納の寮費もむしつときな。色々な人に迷惑をかけるダメ人間はこの俺、真選組副長・土方十四郎が許さん」

土方（銀時）「何急に土方さんツラしてんだアアっ!!ダメ人間はてめーだろオオ!!」
ぶちぎれた2ーZのクラスメイトから暴行を受ける土方（銀時）は銀時（土方）にツツ
コミを入れながら手を伸ばして銀時（土方）を呼び止めようとするが、銀時（土方）は
他人事のように無視して背を向け、その場から立ち去っていく。

零斗（おそ松）「待てみんな!そいつは銀さんじゃなくて本物の銀さんは——」
ガシツ

『つーかまえた』

零斗（おそ松）が2ーZのクラスメイトたちに銀時と土方の中身が変わっていること
を伝えようとしたが、その前に一松に頭を捕まれ、土方（銀時）同様地面に叩きつけら
れてしまった。

トド松「このクソ長男が!!」

チヨロ松「兄弟の金全部パチンコで使い切りやがって!!」

十四松「ボウツエー!!」

怒りをぶつけるかの如く6つ子たちは零斗をボコリ始めた。

零斗（おそ松）「ちよっ、待てやクソ松共!!いきなり何しやがるんだ!」

零斗もまたいきなりのことで驚きながらもチヨロ松たちに訳を聞こうとするが——

おそ松（零斗）「やれやれ、童貞クソニートなだけあって他人の金を勝手に使って恥ずかしくねえのかよ」

おそ松（零斗）はポケットから取り出したキャンディーを舐めながらそんなことを言い出した。

おそ松（零斗）「おい、クソニートども。けつ毛から何まで全部むしり取ってやんな」
零斗（おそ松）「何勝手なこと言ってるんだゴミクス野郎が!!」

銀時（土方）同様他人事のように無視して背中を向けて去っていくおそ松（零斗）に殺意をのせた言葉を放つ。

土方（銀時）「待てコルアア!!何でてめーの負債を俺が請け負わなきゃならねーんだ!!
財布取り返すんじゃないア!!」

零斗（おそ松）「クソ松!!テメエも俺にギャンブルの借金を押し付けてんじゃないやねえぞゴミが!!」

土方（銀時）と零斗（おそ松）が2人を再三呼び止めようとするが2人はゆっくりと階段の方に向かっていった。

土方（銀時）・零斗（おそ松）「待て待て!!お前らの（ヘツポコ教師・クソ長男）、あつち——ぎゃあああああああああ!!」

哀れ土方（銀時）と零斗（おそ松）は2ーZのクラスメイトと松野兄弟によって血祭

りに上げられてズルズルと引き摺られていった。

銀時（土方）・おそ松（零斗）「……………助かった」

事故で魂が入れ替わったお陰で一応難を逃れた銀時（土方）とおそ松（零斗）は階段で眩いた。

銀時（土方）「まさか、この身体に救われるとはな」

おそ松（零斗）「ここはアイツの言う通り、しばらくはこのままでいた方がいいかもしれね……………」

ドカアアアアアン!!

2人が階段を降りている途中の、突然何者かが投げ込んだ手榴弾が爆発し、銀時（土方）とおそ松（零斗）は爆風で吹き飛ばされ、屋上に続く扉に突き刺さった。

沖田「あつ、すみません土方さん、零斗」

下から、バズーカを持った沖田が何故か笑顔で階段を昇りながら銀時（土方）とおそ松（零斗）に平謝りした。沖田は土方を暗殺すべく手榴弾を階段に投げ込んだのだ。

沖田「何やらコソコソとこのビルに入っていくのが見えたんでねエ、テロリストでも見つけたのかと思って突入したら、いやゝすみません」

「でもいつもの2人ならかわしてたのに、今日は調子悪そうですね」

銀時（土方）・おそ松（零斗）「……………、そう?」

銀時（土方）とおそ松（零斗）は頭から血を流し、ガラスが突き刺さったまま沖田に返しながら、こう思った。

銀時（土方）・おそ松（零斗）「（あっちもこっちも変わんねエエエエ!!）」

こうして、4人の男は中身が入れ替わつてしまい、何事にもだらない真選組副長と、何事にも厳しい2ーZ担任、クソニートな2ーZ生徒、真面目な6つ子の長男が誕生した。果たして4人は元に戻るのか？Z組と真選組、そして松野兄弟はどうなってしまうのか？とりあえず続く。

俺がV字で、あいつが天パで、アイツがクズで、コイツが主人公

交通事故に遭い、五体は無傷ながらも魂が身体から分離してしまった銀時、土方、零斗、おそ松は中身だけが入れ替わってしまう。

元に戻る方法を見つかるまではとりあえずそれぞれの身体の持ち主として生きる事になった4人は一体どうなってしまうのか？



『・・・・・・・・・・・・・・・・』

土曜の朝10時、禍終素学園第二生徒会室にて零斗を除いた第二生徒会メンバーが集まって黙々と作業を行っていたが、全員何時もならいるはずの人物がいないことに戸惑っていた。

「ねえ知弦、零斗から連絡はまだ来ないの？」

「まだよ。おかしいわね何時もなら集合時間の15分前に来るはずなのに・・・」

「それに零斗先輩は遅れるとしても連絡位はしますしね」

何時もなら誰よりも早く来て仕事に取り掛かっているはずの零斗が生徒会室に来て

いないことにくりむ、知弦、真冬は動揺していた。

「電話した方がいいよな？これって……」

「そうだな。もしかしたら病気とかで来れないのかもしれないしな」

深夏が鍵に電話することを提案すると鍵も同じ意見なのかスマホを取り出して零斗に電話をかける。

——所変わって松野家の食卓におそ松を除いた5人の兄弟が円状に座っていた。

「あれ、おそ松兄さんは？」

「ブラザーの事だ、マミーから金を借りてギャンブルに行つたんじゃないか？」

「それもそうだね」

起きて食卓に来たチヨロ松が昨日しばいたおそ松の姿が見当たらないことに疑問を抱くが、反省という言葉をドブに捨てたようなおそ松のことだからまたギャンブルに行つたと考えるカラ松の言葉に納得すると、何時ものちやぶ台の定位置に座つた。

「ねえ朝ごはんまだなの？」

「そう言えば何も用意されてないね」

「僕もわっかんない！」

何時もなら起きた時に母の松代が作った朝食がちやぶ台に用意されているはずなの

だが、何故か今日はちやぶ台の上に何も置かれていなかった。その事を一松が聞くが、トド松と十四松もまた知らない。何も言えなかった。

「ちよつと台所に行つて確認してくるよ」

チヨロ松はそう言うとその場から立つて松代がいるであろう台所に行つて朝食のことについて聞こうと扉に向かつてゆつくりと歩いていき――

――またまた同時刻、新撰組屯所にて新撰組が集まっているのだが、全員何時もと違ふことに戸惑つていた。

「なあ土方さん来ないな……」

「いつもは30分前に会議の席に着いているはずなのにまだ来てないなんて」

「マズインじゃねーか？ 局中法度『理由の如何に拘らず集合に遅れる者は士道覚悟で切腹』。それを決めたのは誰でもない、副長だぜ？」

何時もなら誰よりも早く来ているはずの土方が未だ屯所に来ていないことに隊士や武偵たちは動揺していた。まさか土方自身が厳しく定めた局中法度を土方本人が破るとは誰も思いもしなかったのだから。

「……オイ鉄、トシの様子見てこい」

「は、はい！」

土方の様子が気になった近藤は土方の部下である佐々木鉄之助に様子を見てくるよう指示を出すと、鉄之助は土方の部屋へと向かっていった――

――そしてしつこいようだが同時刻、最低限の荷物を持った新八が万事屋に到着していた。

「おはようございます!!つつつてもあの人らがこんな早く起きているワケないか……」

基本、休日の朝からこの万事屋に来ることなどないので家主である銀時と居候の神楽と定春は新八が来るまで惰眠を貪っているので新八が声をかけても反応しないのはいつも通りだった。

「仕方ない、いつもの始めるか」

新八は慣れているのか真っ直ぐ神楽と定春がいつも寝ている押入れに歩いていきその前まで行くと襖を勢いよく開けた。

「ハイおはよう神楽ちゃん!!定春!!起きて!!朝だよ!!つてアレ、いない?」

いつも通り起こそうと大きな声を出しながら襖を開けた新八だが、押入れの中には誰もいなかった。

「どういう事？あのだらしない連中が・・・」

普段なら絶対に新八が来る前に起きることなどありえない神楽たちが起きていることに新八が首を傾げなら、銀時を起こしに行つた。

「銀さん、ちよつと・・・」

銀時に呼び掛けながら新八が引き戸を開けると――

そして同じ頃零斗に電話を掛けていた鍵はしばらく待っているとようやく零斗が電話にでた。

「もしもし零斗か？お前何時になつたら来るんだよ？」

零斗が電話に出たことに少し安心しながらまだ生徒会室に来ていないことを尋ね――

「母さん？僕達の朝食がないんだけ――」

チヨロ松が台所の引き戸を開けて中に入ったとき――

「副長、マズイです!!もう朝の会議がつ・・・」

そして鉄之助が土方の部屋に入った時だった。

ドゴシヤアアアアアアア

新撰組屯所、松野家、万事屋で大きな音がした。

『『テメー』』

「今何時だと思つてんだ？」

鍵がかけた電話と新撰組からはマヌケな声が、松野家の台所と万事屋からは殺気を感じる声が聞こえてきた。

『まだ朝の10時。おねむの時間だろーが』

竜ヶ崎家の方でまだ寝ていたのか布団の中に蹲りながら電話でおそ松（零斗）が、新撰組屯所の方では未だマヨネーズのパジャマを着た銀時（土方）が枕を右脇に抱きながらそんなことをほざいていた。

「もう10時、社会人は立派に仕事をしている時間だろーが!!」

「10時5分30秒、戦いは既に始まつてんだろーが!!」

松野家では料理していたのかエプロンを服の上に来て右手に包丁を握りながら零斗（おそ松）が、万事屋では神楽と定春を正座させた土方（銀時）が怒鳴っていた。

「全員そこに正座しろ、その腐りきった性根叩き治してやる」

包丁の切っ先を向けながら零斗（おそ松）は他の松野兄弟を睨みつけながらそう宣言し

し『つーわけで二度寝するわ』

竜ヶ崎家ではおそ松（零斗）が二度寝することを鍵に一方的に伝えると返事も聞かずに電話を切り

く先程まで台所にいた両親である松野松造と松野松代がチヨロ松たちと向かい合う位置に座っており、零斗（おそ松）は両親の間の隙間に座った。

「さてニートたち。今日はあなた達に大切なお話があります」

「大切な話？」

松代が真面目な顔で言ってきたことから冗談や悪ふざけなどではないと感じ取り、チヨロ松たちは真面目に聴き始めた。

「もしかして野球！みんなで野球するの!？」

「違うわ」

「ええー!?!違うの!?!」

——訂正、1人だけ違った。もしかしたら真面目に考えてその考えに至ったのかも
しれないが真相は誰にもわからない。

「じゃあ話ってなんなのさ?」

「ゴホン、まあよく聞きなさい」

何を言われるのか全く予想できないのかトド松が松造にいったい何を言いたいのか聞くと、松造は一度咳払いしてから話し始めた。

「父さんと母さん。そしておそ松との話し合いの結果、今日から働かないものは養わな
いことにした」

「そういうことよ。分かったニートたち?」

「つまり働けつてことだ穀潰し共」

松造、松代、零斗（おそ松）はわかりやすいように言う。5人は何を言われたのか理解出来ず一瞬間固まってしまったが、すぐに正気に戻った。

「「「いやいやいやいやいや!!」」」

「え、ちよつと待つてよ父さんたち!?!いきなりなんで!?!」

チヨロ松たちは突然のことすぎて理解できてないよう。何とか考え直して貰おうとするがそれより先に零斗（おそ松）が話し始めた。

「父さんたちがいつまでもお前らクズ共を養えると思うな。今からでもお前らニートは変わらなきゃいけないんだよ」

「いやおそ松兄さんだけにはそんなこと言われたくないんだけど」

「一番のクズはテメーだろうが」

「黙れカス松と闇松。昨日までのゴミクズクソニートな俺は死んだ。これからは普通の社会人として生きていくんだ」

兄弟の中で最もクズなおそ松に正論を言われたことにトド松と一松が反論をする。今のおそ松は中身が零斗なため多少クズい所があってもちゃんとした常識は持っている。るので正論で2人の反論を言い返す。

「え、なんかおそ松兄さんが真面目なこと言ってるんだけど」

「ヤバいね」

「頭でも打ったのか？」

中身が入れ替わっていることを知る由もないチョロ松たちにとって今のおそ松は気味の悪いものだった。しかし零斗にとつてとどうか普通の人にとつて当たり前のことを言ってるだけなので本来ならば特に驚くことでもない。

「いいか、今の俺達の社会的地位はテロリストや犯罪者より立場は上でも一般人から見たら圧倒的底辺の存在だ」

「「「「ゲボオオオオオオオオつ!」「」」」」

零斗（おそ松）の言葉の刃が鋭すぎて、チョロ松たちの心臓を抉りながら切り裂いて血反吐を吐いて倒れてしまった。松代と松造は零斗（おそ松）の言葉にうんうんと頷いていた。

「しかし人間っていうのはその気になれば〇空術を習得することも、か〇はめ波を撃つことも界〇拳を習得することだって出来るんだ」

「つまり！ニートだろうとマダオだろうと諦めなければ夢は叶う!!」

「「「「お、お~~~~~~~~!!」「」」」」

「うう、まさかおそ松からこんな立派な言葉が聞けるだなんて（泣）」

「いつまで経ってもニートなお前達には失望していたが、まさか6人の中で最もクズなおそ松からこんな言葉が聞けるとは（泣）」

何時もは口だけで何かを実行する気を感じられないおそ松だが、今のおそ松の目に光を感じるチョコロ松たちは自分たちも頑張れる気がし始め、両親はやつと真面目になった息子たちに涙を流すのだった。尚、何度も言うようだが中身は零斗なので考えが変わっているのは当たり前である。

「よし」

「じゃあ早速」

「やってみるか……」

「僕達の本気！」

「見せてあげるよ!!」

「「「「「——明日から!!」」」」」

「今からに決まってるんだろうがクソ松どもがアアアアアアアアア!!」

ドゴーン!! (零斗がバズーカをチョロ松たちに放った音)

こうして、元の身体に戻るまでの間零斗はおそ松として生活することになったが幸先は不安である。



零斗がおそ松として生活している一方、禍終素学園近くにあるゲームセンターに鍵と深夏が生徒会の書類仕事を終わらせて遊びにきていた。

「結局零斗の奴来なかったな」

「珍しいことだけど何か理由があったんじゃないか？」

深夏と鍵はそんなことを話しながら両替機の前に移動していると奥の方にあるパチンコ台の前に座っているおそ松（零斗）の姿を偶然見つけてしまった。

「んだよチクシヨ〜！全然当たらねえじゃねえかよ!? ふざけんな!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

声が聞こえてきた方を見るとそこには長時間やってたのかおそ松（零斗）の座っている周りには袋が空いているおツマミや空になっている酒缶などが積まれていた。

「何やってんだお前ええええ!!」

「まそつぷ!?!」

おそ松（零斗）の姿を冷めきった目で見ながら鍵と深夏はおそ松（零斗）の側まで近づくとそのまま勢いよくアツパーカットを放ち、おそ松（零斗）は天井まで殴り飛ばされ頭が突き刺さったのだった。

「おい、何仕事サボってこんな所でパチンコなんてやってんだお前」

「じゃ、邪魔すんじゃないやねえよ。俺は今パチンコという貯金箱に無利子で金を貸してるところなんだ」

「それちよつとかつこいい感じに言おうとしてるけど有り金全部パチンコでスったって

ことだよなそれ!」

アツパーカットによつて天井に頭が突き刺さつたままおそ松（零斗）がパチンコして
いた言い訳をするがそんな言葉で流されるような2人では無い。なお、おそ松がパチン
コで使つていた金は零斗自身がバイトなどで稼いだ金であり、それを遊びで使い切つた
のだからこのことを知られればただじゃすまないのは分かりきつてはいるはずなのだが、
おそ松はその事に気づいていないのだった。

「そんなことより金貸してくんね?」

「貸さねえよ!?!なんでギャンブルやつて有り金無くなつた奴に貸さなきゃいけねえんだ
よ!?!」

「一万だけ!一万貸してくれたら倍にして返すから!!」

「負けてる奴が言つても説得力皆無だからな」

まだパチンコを続ける気なのか鍵に金を借りようとするおそ松（零斗）だが、当然は
い、そうですか。と納得出来る訳もなく2人は明らかに何時もと違う零斗に内心疑問が
尽きないがそれ以上に今の零斗に何を話しても意味は無いと考えその場から離れるの
だった。

「つてかそろそろ下ろしてくんない?俺の力だけじゃ抜けられないんだけど。ねえ聞いて
いる?」

天井に突き刺さっている状態のおそ松（零斗）が助けを求めるが既に2人はゲームセクターを出ているため、その声は聞こえておらずしばらくの間そのまま放置されていたのだ。こっちはこっちで零斗が元に戻った後のことが不安になるものだった。



そして同時刻、新撰組屯所にて近藤と沖田が土方をこっそりと尾行していた。

今の土方はタバコの代わりにロリポップをタバコのように啜っている上、締まりのない顔をしていた。

「オイ総悟。アイツ、何か悪いもんでも食ったのか」

「頭の悪いマヨネーズもんなら毎日食ってましたがねエ」

引きつった笑みを浮かべながら聞いてくる近藤に沖田は適当に返した。

「アイツが局中法度を破るだなんて。隊士達はうまくごまかしたが、どうにも様子が……」

近藤は土方の様子が急に変わってしまった事が気になっていた。

「確かに掟に厳し過ぎるくらいはあったが、己も厳しく律し、隊士達の模範となっていたのが、鬼の副長・土方十四郎ではないか」

「ただの寝坊でしょ」

土方を心配する近藤に対し、沖田はあまり興味ないのか適当に答える。

「しかし、アイツあんなに締まりのねエ顔してたか」

近藤が土方（中身銀時）のだらしなくなった顔を見たときだった。

「あつ副長!!おはようございませす!!」

山崎を始めとした真選組の隊士たちはいつも通り大きな声で挨拶した。だが――。

「うるせーな、朝からデツケー声出すんじゃねーよ。百木アニメーション学院声優科かためーら」

既にだらしなさ全開の銀時（土方）がめんどくさそうに山崎に返した。

「五番隊六番隊七番隊、準備整いました!!」

「準備って何?ラジオ体操の?ゴメン俺ハンコ持つてないよ」

「いえ、そうじゃなくて!」

銀時（土方）には隊士達の言っている準備の意味が解らなかつたようで、山崎は銀時

（土方）にいつもやっている事を言った。

「出撃の準備が、今日は我々が市中見廻当番なので、いつものお願いしますよ土方さん」

しかし、土方と中身が入れ替わってしまった銀時にはその『いつもの』が解らない。

「いつものって何だ。今日の土方さんはいつもと一味違うんだよ。ちゃんと見え」

「いや・・・、だから局中法度を読み上げて隊士達の引き締めを」

「あー、ハイハイ」

そして、銀時（土方）は真選組の鉄の掟を読み上げる、という真選組が出撃前に行ういつもの作業を行う。

「てめーら、俺達真選組の鉄の掟忘れてはねーだろうな。局中法度第一条——」
だが——。

「えーと、あの……アレ」

現在は中身が銀時の土方には局中法度が解らなかった。それもそのはず、銀時は真選組の鉄の掟など知らなかったのだ。

途方にくれた土方（中身銀時）はこんな事を言い出した。

「局中法度を忘れた奴をとがめる奴は、土道不覚悟で切腹!!」

「いや、忘れたのお前だろ!!」

近藤は声にならないツツコミを入れた。

「あのすみません副長……、第一条そんなでしたっけ」

六番隊に所属している蓮太郎が銀時（土方）にツツコミを入れるが銀時（土方）は

「ハイお前切腹!!」

と蓮太郎を指差しながら言った。それを聞いた六番隊隊長のエリアが銀時（土方）にツツコミ

「ちよっ……、ちよつと待ちなさいよ！そんな法度聞いた事ないわよ!!」

「あゴメン。これ434条だったな」

「いや法度434条もないです」

「適当な事を言つてごまかそうとする銀時（土方）に金次がツツコんだ。だが銀時（土方）は

「第一条！434条もないって言つた奴切腹!!」

と無理矢理ごり押ししようとする。

「いや、何で第一条から434条に触れてんですか!!」

山崎は銀時（土方）にツツコんだ。屯所の中から近藤が土方たちを見ていたが、土方のあまりの変貌ぶりに近藤はドン引きしていた。

「黙れ、局中法度は変わったんだ。昨日から」

「いや、聞いてないですけど!?!どーいう事ですかそれっ……」

山崎が銀時（土方）にそう言いかけた、そのとき。

「局中法度第二条、細かい事をグチャグチャ気にする奴は、切腹!!」

なんと、銀時（土方）はギロリと隊士達を睨み付けながらそう言った。

銀時（土方）の鋭い眼光にビビったのか、隊士達はズーンと沈黙してしまった。

「（黙らせたアアア!!強引な技でねじ伏せたアアア!!）」

強引な方法で隊士達をねじ伏せた銀時（土方）を見た近藤は声にならない叫びを出し

た。

「てめーら、いつまでこの土方さんに甘えれば気が済むんだ」

突然、銀時（土方）が隊士達にこんな事を言い始めた。

「局中法度なんて知るわけ・・・、言わなくてもてめーらの身体に染み込んでんだろ。武士らしくあるための鉄の掟？そんなもん人に訊く暇があんなら、てめーの胸に訊け。各々がてめーの局中法度を掲げ勝手にやれよ。イチイチ土方さんの手を煩わすな」

「ふっ・・・、副長」

まさかの発言に驚き、ぎこちない表情をする山崎や蓮太郎たちを含む隊士たち全員が銀時（土方）の言葉を訊いた。

「ま・・・、まさか、局中法度を廃止すると・・・」

動揺しながらも山崎が聞いてくることに対し、銀時（土方）はこう言いながら屯所の方に歩き出した。

「好きに受け取れよ。とりあえず俺は俺の局中法度に従って」

そして、銀時（土方）は

「三度寝します」

と気の抜けた声で隊士達にそう言って屯所の中に消えていった。

その様子を沖田と共に見ていた近藤は、ついに叫んだ。

新八含むクラスメイトたちは思わず声を上げた。

「今回は特例で見逃してやったが、次からはこれを違反すれば即切腹だ」

土方（銀時）は乙組の面々にそう言った。

乙組法度にはこう書かれていた。

一、遅刻した者、士道不覚悟で切腹

二、寮費を滞納した者、士道不覚悟で切腹

三、会費を横領する者、士道不覚悟で切腹

四、会費を集めたにも関わらず博打等に遣った者、切腹

五、つーか天パ切腹

他にも色々な項目があったが、ここでは省略する。

「つーかそれ、ほぼ銀さんの事じゃん、コレ」

明久が土方（銀時）にツツコミを入れた。

「誰だ銀さんて、先生と呼べ」

土方（銀時）は明久にそう言い返すところ続けた。

「昨日までの俺は猫のケツの穴に吸い込まれて死んだ。俺がここに来た以上今までのよ

うな自堕落な生活を遅れると思うなガキども」

「いや、一番自堕落だったのはアンタだろ」

アラタも土方（銀時）にツッコんだ。

と、そのとき、土方（銀時）は指差し棒で黒板に新たに張り出したプリントにクラスメイトを注目させた。

「とりあえず不本意だが、コレを見る」

プリントには『ボウリング大会 今日18時30分より開催！ 遅刻する者は切

腹』と書かれており、前日銀時（中身銀時）の競馬によつて中止になってしまったボウリング大会をやる事を示していた。

「昨日、俺の不手際で開催できなかったレクリエーションだ。活躍に応じて報酬は更に上乘せしてやる。だから、身を粉にして勉強や奉仕をしろ。俺の言う通りに動けば間違いない」

乙組のクラスメイト達は感動して目を見開いてしまっていた。

「あとコレ、家賃とかどこに払えば……」

土方（銀時）がクラスメイトにそう訊いた、次の瞬間――。

『この人でなしがアアアアア!!』

乙組の面々が土方（銀時）の腹に蹴りを入れた！

「どこで手に入れたのよ!!」

「銀行かコンビニか学園資金か!!」

美波とゼノヴィアがおいおいと泣いて腹を蹴られてむせ込む土方（銀時）に怒鳴った。

「俺たちは先生をレクを開催する人でなしになって育てた覚えなんてねえよ!!」

一誠もおいおいと泣きながら土方（銀時）に言った。

「あのすみません、レク開催した方が人でなし扱ってどこまで人でなし!」

土方（銀時）はむせ込みながら、怒りを押さえつつ一誠に返した。

と、そのとき。

「大変です織斑先生!!」

乙組の副担任のリリスが職員室に駆け込み、高等部1年生の主任教師である織斑千冬に大声でこう伝えていた。

「坂田先生が……、坂田先生がレクと家賃を!!」

「何だと!!」

驚いた千冬が声を上げ、山田真耶が音楽室からシンバルとバチを借りてきて千冬がこれを受け取って鳴らすと二人にこう言った。

「早く学園中に報告しろ!!隕石が降ってくるぞ!!」

「マジ出ていきてエこの身体!!」

あまりの禍終素学園の生徒達と教師達の変貌ぶりに銀時の中に入ってしまった土方は思わずそう叫び、大急ぎで銀行に走っていった。

それから数十分後。

「見ろ」

銀行から戻ってきた土方（銀時）はぶちギレる寸前になりながら乙組のクラスメイトに自身の預金通帳を見せた。

「間違いない俺の通帳だろ。目ん玉ひんむいてよオク見ろ!!」

そのときだった。

「御意!!先生の仰せのままに」

なんと、乙組のクラスメイトは席を立ち、土方（銀時）の前に膝をついて忠誠を誓いだした!

「どんだけ豹変してんだ!!人でなしはてめーらだろ!!」

あまりの乙組のクラスメイトの豹変ぶりに土方（銀時）は怒鳴るが、続けて「今度俺を疑ったら切腹だぞてめーら」

と乙組のクラスメイトに約束させた。乙組のクラスメイトは土方（銀時）に「はっ!!」

と返事をした。

そんな彼らに土方（銀時）はこう言った。

「いいかてめーら、大事を成してもっと成績を上げたかったら、バラバラの学園の足並み

を揃えなきゃならねエ。その為の御旗がこのZ組法度だ。組織の為に自らを厳しく律する。個を殺し、組織を活かす。その覚悟をもって初めて組織は一つにまとまり、その力を遺憾なく発揮できるんだ。その為にはまずだな……」

「やれやれ……」

廊下から、Z組のクラスメイト相手に説法する土方（銀時）を見た千冬と真耶が少し呆れ気味に見守っていた。

その時、その背後でノートを持っていたたまは振り向いて土方（銀時）を見ていた。



4人の身体が入れ替わってから数日が経ったある日の夕方。4人は学園から離れた川に架かる橋の上にて夕日を見つめながら黄昏ていて。

「どうだ……、そっちの調子は？」

「進展なしだな。部下を使って、方法を訊き回っちゃいるが、魂を元に戻す以前に魂が入れ替わった事例なんざねーからよ」

「こつちも知り合いに片っ端から声を掛けてますけど何の情報もありません」

「俺も同じだ」

パイプ式のタバコをふかした土方（銀時）がロリポップを口にくわえた銀時（土方）に訊いた。それに同意するように肉まんを食べている零斗（おそ松）とスルメを齧っている

るおそ松（零斗）が答えた。

「ヒヤツハアアアアアアアアアア!!」

その時、世紀末アクションに出てきそうな悪党の集団がバイクに乗りながら姿を現した!

「トシいい何やってんだ!!早く攘夷志士血祭りにいこうぜ!!」

完全に世紀末の悪党になってしまった近藤が銀時（土方）に言った。

「奴等『カフェノーウェア』で集会やってるらしいぜ!!」

「おうゴリラ、今いく。・・・で、お前の方は」

銀時（土方）は右手を上げて近藤に返し土方（銀時）に訊いた。

「こつちも部下を使って調べてみたが、結果は……、似たようなもんだ」

そのとき、土方（銀時）のいる橋の方からザツ、という音がした。

「アンタたち、天下の公道で何をやっているっすか」

「先生、この賊共を片付けてよろしいですか」

何故か侍の着物を着た目がキリツとしたレヴィとアラタが土方（銀時）にそう訊いてきていた。

「禍終素学園 七番隊副隊長風間レヴィ」

「同じく禍終素学園 七番隊隊長春日アラタ」

「悪・即・斬!!遂行いたす!!」

「待て忍者と魔王。ソイツらは見逃してやれ。悪い奴じゃねえ」

日本刀を抜いたレヴィとアラタが野盜集団と化した真選組に挑みかかろうとしたが土方（銀時）は左手を上げてレヴィとアラタにこう言つて制止させる。土方（銀時）に制止させられたレヴィとアラタだが、それでも二人は真選組を睨み付ける。

「おいクソ松、余計なことはしてねえだろうな」

「そういうてめえこそ勝手なことはしてねえだろうな?」

そんなことを言いながら2人が後ろを見るとそこにはチヨロ松、一松、紫音がいるのだがどこか普段と様子がおかしかった。

「一松、面接どうだった?僕は何とか受かつて明日から仕事に入れたよ」

「何とかやれたと思う・・・」

普段は絶対に着ないであろうリクルートスーツを着ながら面接の結果について話すチヨロ松と一松

「いやー、酒はうまいしツマミも最高で言うことないわマジで!零斗の野郎にはマジで感謝だわ!!」

胡座をかいてスルメを齧りながらカップ酒を飲みまくっているブレイズ。その後ろには大量の酒の空き缶やツマミの空き袋が転がっていた。

「そうか」

「何もなかったのか」

「困りましたね」

「だな」

『『『ハハハハハハハハハハっ!!』』』』』

ガシツ（銀時と土方、零斗とおそ松が互いに胸ぐらを掴み合う）

「『『じゃ、ねえだろうがアアアア!!』』』」

「進展どころかとんでもねえ後退の仕方してんだろーがアアア!!」

最初は空を見て笑いあった4人だがすぐに互いの胸ぐらを掴み合った。

「何アレエエエエエ!?どこの野盗集団だ!!」

まさかの世紀末覇者が率いるような野盗集団と化している新撰組に土方（銀時）が叫んだ。

「どう見ても取り締まる側じゃねーだろ!!ぶち込まれる側だろ!!何やってんだ、あのゴリラ!!留守の間に人の実家に何してくれてんだてめエ!!」

土方（銀時）は近藤を指さしながらツッコんだ後、銀時（土方）に怒鳴った。

「つまらん規則にがんじ絡めにされたからちよつと緩めてやっただけだろ!!オメーの方こそ、人んちに何盗品持ち込んでんだアア!!悪・即・斬って何だ!!早く止めてこい!!牙

突撃つ前に止めてこい!!」

と銀時（土方）が言い訳しながら土方（銀時）に新撰組のような侍と化している生徒たちを指さしながら怒鳴り返した。

「アホか!!鳥合の衆を少しはまとめてやったんだ、感謝しやがれ!!」

「てめーこそ組織に自由を取り戻した副長に感謝しろ!!」

銀時（土方）と土方（銀時）の喧嘩がヒートアップするように零斗（おそ松）とおそ松（零斗）の言い争いもまたヒートアップしていた。

「テメーブレイズに何しやがった!?!酒なんて成人するまで飲まねえとか真面目ワロス笑笑だったアイツがなんで酒飲んでんだよ!!」

「何もしてねえよ!!俺は普段通りチビ太んとこやら色んなところで酒飲んでそれにたまにたまいたアイツを誘って最初は無理やり飲ましただけでこれといったことはしてねえよ!!」

「テメエの私生活なんて真似したら。わああなるのは当たり前だろうが!!」

「お前こそ俺の兄弟に何しやがった!!アイツらがあんな真面目に就職活動なんてするわけがないだろうが!!」

「社会のクズ共に労働の大切さを教えてやったんだ!!感謝はされても文句を言われる筋合いはねえんだよ!!」

互いに怒鳴り合いながら言い争ってそれがヒートアップしすぎて4人がそれぞれ殴り合いに発展しそうになったその時、

「そこまでだ。トシさんに手エ出したら、ただじゃ済まねーぜ、旦那」

「何で手懷けられてんだ沖田でめーはアアアアア!!」

土方（銀時）の後頭部に日本刀の切っ先を突きつける沖田に土方（銀時）は、何故か手懷けられた沖田にツッコんだ。

「俺には全く懷かなかつたのにどーいう事だ!どんな手使つたアア!!」

「それはこっちの台詞だ」

土方（銀時）が銀時（土方）にそう返している時だった。

「少しでもその刀動かしてみろ」

「トシ・即・斬だよ」

「オイいいいい!!牙突はやめろオオオオオ!!零式はやめろオオオオオ!!」

銀時（土方）の後頭部に日本刀の切っ先を突きつける一誠、春虎、明久に銀時（土方）が叫ぶが三人は聞いていない。

「テヤンデイバーローチクシヨール!!三日前のツケ!!今日こそ払ってもらうぜバーローチクシヨール!!」

「ま、待てよチビ太!ツケは今度払うからもうちよつとだけ待ってくれ!!」

そして矢先にカラシ味噌を塗りたくった棒をおそ松（零斗）の口に入れようとしてくるチビ太をおそ松（零斗）は必死になって止めようとするがあまり効果はなさそうだ。「おいおい、何俺のベストフレンドに何絡んでんだよクズ？潰すぞ？」
「ベストフレンドってなんだアアア!? テメエと友情作るくらいならミジンコと友情作るわ!!」

零斗（おそ松）の背後に立って顔を赤くしたブレイズが赤黒い剣を零斗（おそ松）の首に突き付けてきた。

そのときだった。

「面白エ、てめエらの牙突オキノ式と俺のクズ龍閃、どっちが速エか勝負するか」

「望むところだ」

「やれるものならやってみろ！」

「返り討ちにしてあげるよ!!」

世紀末の悪党と化した沖田が、何故か侍のような格好になった一誠と春虎、明久に挑発し、一誠と春虎、明久は挑発に乗ってしまった。

「ならオイラもおでんとカラシの二刀流でいかせてもらえバーロー!!」

「丁度いい、この間向こうの世界の遺跡で見つけたこの剣の試し斬りができる」

チビ太はカラシ味噌を塗りたくった棒に加え、熱々のおでんを発射するバズーカを取

り出し、ブレイズは握っている赤黒い剣に魔力を込め始めた。

「誰も望まねーよ!!本物の新撰組に怒られるだけだよ!!」

「それ色んな意味でシャレにならねーから!!まじでやめろ!!」

銀時（土方）、土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）は彼らを制止しようとするのが最早止められない。

「待って待て!!やめろ、落ち着けエエエ!!ああああああああ!!」

カッと閃光が出た瞬間、橋が崩落し、哀れ4人は川に落下した。

果たして4人の運命は!?とりあえず次回に続く!!

俺とアイツが右の玉で、あいつとコイツが左の玉

吹き飛ばされた4人が落ちた川の下流にある河原。

「……………殿ー」

何者かはわからないが、誰かが声をかけてきた。

「……………斗殿ー」

その声の主は。

「生きてるでござるかー、零斗殿ー」

長い黒髪をポニーテールにまとめ首に長いマフラーを巻いている遠山金次の戦妹の風魔陽菜だった。

「しつかりするでござるよ零斗殿」

その声が聞こえたおそ松いや、零斗が目を覚ました。

「君は確かライカや志乃と同じクラスの……………。ハハッ、何だか久しぶりにその名前で呼ばれた気が……………」

しかしその直後、零斗は違和感を覚えた。

「って、風魔!!お前なんで……………!!」

零斗は驚いた。風魔は何故かおそ松の中身が零斗である事を知っていたのだった。そこに高等部2ーZの生徒であり平賀源外の助手であるたまがやってきた。

「安心してください。身体の方も既に回収済みです」

零斗がたまの背後の鉄橋の下の方に目をやると、そこには銀時（土方）、土方（銀時）、おそ松（零斗）が鉄橋の橋脚に背をもたれ掛かるようにして気を失っていた。

「お前ら、まさか……」

「もう大丈夫です」

たまは零斗にこう伝えた。

「皆さんの身体、元に戻りますよ」



場所は移動して町外れにある平賀源外の工場。源外は昔からこの場所で暮らしており昔から色んな機械（カラクリ）を作っていた。

そこには禍終素学園科学教師平賀源外と、リアスたちの所属するオカルト研究会顧問にして堕天使の長アザゼルがいた。

「つーことは何か？こつちが銀の字で、そつちが鬼の副長」

「それでそつちが松野家長男で、こつちが龍ヶ崎家長男か」

「たまげたねえ。本当に魂が入れ替わっちゃうなんざ」

源外が銀時と土方を、アザゼルがおそ松と零斗を指さしながら言い、源外は身体と中身が入れ替わっているという事実には驚いているのだった。

「まあ何にしてもだ。貴重なサンプルの回収ご苦労だお前たち」

「いえ、皆さん外見は変わっても中身は変わらずアホなままでしたので、簡単に発見できました」

アザゼルがたまたちに銀時たちを見つけてくれたことを感謝するが、特に大したことではないとたまは言った。

「おい、アホヅラって誰のことを言ってる？俺じゃないよな？このバカ3人の事だよな？」

「いやどう考えても銀さんとクズの2人のことに決まってるじゃないですか」

銀時（土方）が青筋を浮かべながらアザゼルに聞くが、同じ扱いをされたくないのか零斗（おそ松）はアホヅラなのは銀時とおそ松だけだと言った。

「ってか、サンプルってなんの事だよ」

土方（銀時）はアザゼルの言ったサンプルという言葉の意味が分からずその意味をアザゼルたちに聞いた。

「おめえら、まさか自分たちに起こった出来事が偶然だとも思ってるのか？」

「[[[[[?]]]]」

源外の一言に零斗たちは驚きを隠せなかった。まさか今起きている出来事が偶然起きたことではないとは思ってもよらなかったのだから。

「いや、実際は偶然なんだ。お前たちがよりにもよってあのトラックと事故ってしまったことは……。でも、その後起こったことは全て、トラックの積み荷が引き起こした事なんだ」

「ど、どういうことだよ!？」

アザゼルの言っていることが分からずおそ松（零斗）はその言葉の意味を聞き返した。それについて源外たちが話し始めたので銀時たちは真面目にその話を聞く体勢をとった。

「お前さんたちが事故ったトラックには極秘裏に開発された、ある機械（カラクリ）が運ばれていたんだ。それは人間（ひと）の尊厳、宇宙の因果律まで変えかねん恐ろしき機械（かいぶつ）を……」

「恐らくだがその機械（カラクリ）が事故時の衝突のショックにより誤作動を起こした。お前たちを襲った悲劇はそれによるもの……」

源外、アザゼルは話をしながら部屋の奥にある布を被せた装置の前にまで歩くと2人はその布を勢いよく剥がした。

「そう、この全自動卵かけご飯製造機によるもの!!」

「いや、ただのゴミクズじゃねーかアア!!」

銀時（土方）と零斗（おそ松）は源外とアザゼルが説明した装置に思わずツッコんだ。「全自動卵かけご飯製造機って何だアア!!」

銀時（土方）は源外とアザゼルにその装置について聞くと源外が装置について説明を始めた。

「見るやつが見ればわかる。科学と魔術の粋を集めついに完成した俺たちの研究の結晶だ」

「つーかあんたらが作ったのかよ!!」

零斗は（おそ松）源外たちにツッコんだ。そしてアザゼルはその『全自動卵かけご飯製造機』の使い方を説明し始める。

「まずこっちの転移装置に卵を置く。すると自動的に白身部分を取り除いた卵が抽出される。次にもう一方の転移装置に醤油を置く。すると絶妙な加減の醤油が抽出される」説明しながらもアザゼルは装置を作動させていく。

「そしてそれらをこの真ん中のホカホカご飯に転移させることで、誰もが気軽に完璧な卵かけご飯を作れる夢の機械（カラクリ）だ」

「全然気軽じゃねーよ!!卵かけご飯作るのにどんだけ大がかりな装置作ってんだアア!!」

銀時（土方）はアザゼルにツッコんだ。装置の中央部に置かれているホカホカご飯には卵と醬油が絶妙に抽出されており、見事な卵かけご飯が完成していた。

「しかし、世紀の発明を学会に提出しようとしたのにためーらのせいでケチがついちまったよ」

「いや、こっちの方が世紀の発明!!どんな誤作動を起こしたら卵かけご飯製造機で人の魂を入れ替るんだアア!!」

額に手を当てながらそんなことをボヤク源外に零斗（おそ松）はツッコんだ。それに対してアザゼルが答えた。

「話は簡単だ。事故のせいで外に転がり落ちた転移装置が誤作動し、卵をより分ける代わりにお前さんらの魂をより分けちまった。そしてホカホカご飯ではなくカピカピの身体に転移させちまった」

「つまり、卵かけご飯ならぬ、魂かけ誤判しちまったワケだ」

と、源外が冗談のつもりで言った。しかしそれによって銀時、土方、零斗、おそ松の怒りが頂点に達した。

「上手くねーんだよクソジジイイイ!!」

「卵と魂間違えるってどんだけ危険な装置作ってんだアア!!返せエエエ!!俺たちの身体

（ごはん）を返せエエエエ!!」

おそ松（零斗）と土方（銀時）がツッコんだのと同時に銀時（土方）と土方（銀時）は言外の頭を、零斗（おそ松）とおそ松（零斗）はアザゼルの頭をそれぞれ鷲掴みして壁に叩きつけた。しかし

「心配ないでござる皆さん」

「ぐほっ！」

風魔はアザゼルを掴んでいる零斗（おそ松）の手を外させ、零斗（おそ松）を転移装置に無理やり押し込んだ。

「修理されたこの装置を使えば全て元通りになるでござる」

そして同じようにおそ松（零斗）もまたアザゼルによって転移装置の中へ押し込まれていた。

「その通りだ。次こそは間違いなく完璧な卵かけご飯ができる!!」

「卵かけご飯はもういいつつてんだろ!!」

おそ松（零斗）は転移装置に押し込められながらアザゼルにツツコミを入れた。

「要はもう一度卵でも醤油でもなくお前さんらの魂を抽出して転移させればいいんだよ」

「オイイイイ！大丈夫なのか!? ホントに大丈夫なのか!」

「源外様、準備は整いました!!」

「よしいくぞ!!零の字、クズの字!!歯あ食いしばれ!!」

源外の話に零斗（おそ松）がツツコんでいる内にたまたちの準備が完了し、源外が装置のレバーを下げて転移装置を起動させた次の瞬間、

そして――。

「ああああああ!!」

転移装置が青く光り輝くのと同時に零斗（おそ松）とおそ松（零斗）の悲鳴が辺りに響き、その悲鳴を聞いている銀時（土方）と土方（銀時）は顔を引き攣らせていた。

それから暫くして転移装置の光が収まり始めた。

「ど、どうなったんだ?」

土方（銀時）がたまたちに零斗（おそ松）とおそ松（零斗）がどうなったのか尋ねてきた。

「両装置から転移反応確認取れました」

「マジか!?!」

たまの言葉に銀時（土方）は思わず声を上げてしまった。

「零斗殿、おそ松殿やったでござるよ。これがお2人の抽出された魂から出来た、チキン南蛮でも鶏の唐揚げでもない」

風魔が転移装置の中心から取り出したのは・・・

「名付けて鶏のMIX揚げ丼でござる!!」

ドスツ!! (風魔の頭に零斗とおそ松がチョップした音)

「ただチキン南蛮と唐揚げをのせただけじゃねえかアア!!」

チキン南蛮と鶏の唐揚げが半々に盛られた丼を取り出した風魔に零斗(おそ松)とおそ松(零斗)は勢いよくチョップをくらわせた。

「誰が人の魂、ホカホカご飯にかけて丼もの作れつて言ったんだよ!!」

「まさしく、卵かけご飯でござるよ零斗殿」

「上手くねーよ!!」

おそ松(零斗)と零斗(おそ松)が言い訳する風魔にツツコミを入れる。

「しかしおかしいな」

「よし、今度は銀の字と鬼の字を入れて試してみるか」

アザゼルは上手くいかなかったことに顎に手を当てながら不思議がるが、源外は次こそは上手くいくと考え、今度は銀時(土方)と土方(銀時)を転移装置の中へと押し込んだ。

「頼むぞオイ、転移させんのは胃袋の中身じゃねーぞ、俺たち自身だ!」

「わかつてるさ。んじゃいくぞ」

転移装置に押し込まれた銀時(土方)はアザゼルにそう言うのとアザゼルは適当に相槌

を打ちながら転移装置のレバーを下げた。そして先程と同じように暫くの間転移装置が青く光り輝き、その光が収まると・・・

「今度こそ成功しました。男性（アナタたち）自身を抽出した。キ〇タマかけご飯です」
「『どの袋から抽出させたアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』」

銀時（土方）と土方（銀時）はモザイクがかかったものをのせたご飯を出しながら説明するたまにツツコミを入れた。しかもタチが悪いことに抽出された物体はどれが銀時のか、どれが土方のか全くわからなくなっていた。

「何してくれてんのお前らアアア!!俺の俺がアアアアアアアアアアアアアア!!」

「どれが俺のだ、これか?これなのか!」

「ちよつと待て、それは俺のしろ!」

「いや、今のお前は俺だから!お前のは俺のじゃねーだろ!アレ?こんがらがってきた」
最早判別不能になっているのか、銀時（土方）と土方（銀時）は互いにモザイクがかかった物体を手にとって確認しながらそんなことを叫んでいた。

「オイボーしてくれんだてめーら!!超難解なパズルになっちまったぞオ!!」

銀時（土方）はこんな結果を出した源外達に怒号を上げた。

「心配は無用だ、もう一度やれば全て元に戻る」

「本当だろうなオイ!!もう袋間違えんじゃねーぞ!!あつちとこつちの袋も間違えんじゃ

ねーぞ!!」

ぶちギレる寸前の銀時（土方）は源外達に釘を刺す。そして、アザゼルがスイッチを押した。だが――。

「今度こそ成功したぞ」

アザゼルが転移装置の中央部に置かれたものを見ながら銀時達に言った。

「マジでゴミだな」

「どこの袋に入れてんだアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

銀時（土方）と土方（銀時）はアザゼルに怒号を上げた。銀時（土方）と土方（銀時）から抽出された物体は転移装置に入れた結果、ゴミ袋に入れられてしまったのだ。

「これはおかしいな」

源外は何か機械の様子がおかしいに事に気づいた。銀時（土方）と土方（銀時）はまたしても先程と同じ超難解なパズルに挑むはめになってしまい、それをおそ松（零斗）はバカにするように腹を抱えながら笑い転げるが零斗（おそ松）はなんとも言えない感じの顔をしながらその様子を見るしかなかった。

「どういう事だ、何で上手くいかねんだ?」

うーん、と声を漏らし始めるアザゼル。本当ならこのような実験失敗が起こることなく、4人がそれぞれ元の身体に戻ってめでたしめでたしになるはずだったのに、その結

果がこれなのだから疑問に思っても仕方ないだろう。

「源外様、アザゼル様。三度の転移記録を見る限り、三度とも転移装置Aの方にエラーが出てます。どうやら対象物に重大な欠損が……。それで抽出に失敗しまくってるようですねー！」

「対象物の欠損?!」

風魔が源外とアザゼルに言ったことの内容に驚いた零斗（おそ松）が思わず声を上げた。

「まさか俺の事か?!キ〇タマの事か?!」

「いえ、違います」

たまは銀時（土方）にツッコむと、こう言った

「坂田先生とクズ松さん、どうやら貴方たちの何かが足りなくなってるようですよ」

「足りねえって何の事だよ!?覚えがねーぞ!」

たまの話におそ松（零斗）は慌て出す。銀時（土方）も同じように身に覚えがないのか頭を抱えていた。

「落ち着けよ銀さんとクズ、とりあえずこのバファ〇ンを持ってもう一度挑戦してみましようよ」

「優しさ!?優しさが半分足りなかった!」

「アホか!!それで解決するワケねーだろ!!もう40個もってけ」

土方（銀時）は零斗（おそ松）に言われて余計取り乱す銀時（土方）にツツコミを入れた。

「オイもう、バファオン転送させた方が早くね!？」

銀時（土方）が取り乱して土方（銀時）にそう返したときだった。

「坂田先生、おそ松さん。このままじゃ装置は作動できません。つまり、元に戻れません」

たまが銀時（土方）とおそ松（零斗）に言った。銀時（土方）とおそ松（零斗）は思わず声を上げそうになったが、次のたまの言葉で声を上げるのを止めた。

「本当に覚えが無いのですか?何か事故の時に貴方の身に起こったりしませんでしたか?」

たまは銀時（土方）とおそ松（零斗）にそう訊いてきた。

「事故の時・・・」

銀時（土方）はたまのその一言から入れ替わった日に土方（銀時）の言っていたある言葉を思い出した。

『——夢を見た。トラックにはねられた俺達の身体が下に見えた。俺と隣にいた玉は急いでそれぞれの身体に戻ろうとした。背後から妙な毛玉と薄汚れた玉が飛んできて俺

たちとぶつかった。毛玉と薄汚れた玉はそれぞれ衝撃で真つ二つに割れ、一方は土方（オレ）と零斗（アイツ）の身体に吸い込まれ、もう一方は……」

（猫のケツの穴アアアアアアアアアアアア!!）

そして、土方（銀時）の言葉を全て思い出した銀時（土方）は全力で外に走り出した。その様子を見た土方（銀時）たちも銀時（土方）を追いかけるように走り出す。

「頑張つて取り戻してくるでござるよー!」

「じゃないと装置は使えないからなー!」

走り去る銀時（土方）たちに、風魔とアザゼルが源外とたまと共に4人を見送りながら声をかけていた。

「オイ待てエエエ、どういふ事だアア!!」

突然全力で走り始めた銀時（土方）を追いかける土方（銀時）は、何故走っているのかを尋ねる。

「つまりあの時、俺とおそ松の魂がお前と零斗の魂とぶつかり合つて割れた毛玉と薄汚れた玉、猫の死骸のケツの穴に吸い込まれていった。その2つの片割れは」

「そうか!俺たちの魂の半身は猫の死骸のケツの穴に入ったまんまだからあの装置が使えなかったのか!!」

銀時（土方）の仮説の話を聞いたおそ松（零斗）は何故銀時（土方）が走っているの

か、そして何故転移装置が上手く使えなかったのかその理由がよくわかった。

「つまり土方（オレ）と零斗の身体に入っているお前らも半身しかねーってことか」

「知るかあ!!とにかく、あの猫見つけなきゃ俺らの身体は一生このままだってことだ!!」

4人は走っている内にトラックと事故を起こして入れ替わった場所まで来た。

「冗談じゃねーぞ、あんな猫の死骸とつくに片付けられてんだろ!!やっぱ見当たらねーぞ!!」

土方（銀時）は辺りを探し回るが、既に猫の死骸なんてどこにも見当たらなかつた。

「土方さん、問題はそこじゃありませんよ」

顔を引きつらせている零斗（おそ松）が銀時（土方）の仮説からある可能性に気づき、それを話し始めた。

「もしその猫の死骸が、2人の魂を得ることで生き返ったとしたら・・・」

零斗（おそ松）の仮説を聞いた3人はもし本当に猫が生き返った場合を考え、ゾクツと恐怖した。

「てめーらはあつちを探せエエエ!!俺たちはこつちを当たる!!」

土方（銀時）は銀時（土方）とおそ松（零斗）を十字路の右側を捜させ、土方（銀時）と零斗（おそ松）は十字路の左側を探しに行った。



「ああ、とんでもねえことになっちゃった! どうする、どうすればいい!」

銀時（土方）は猫の死骸を探すために走り回るが、一向に見つからないでいた。

「落ち着け! ここは一旦タイムマシンを探してだな・・・」

「んなことしてる場合じゃねえだろうが!!」

とうとう現実逃避し始めたおそ松（零斗）が近くの自販機に頭を突つ込むのを銀時（土方）はドロップキックをすることで止めた。

「お前たち、そこで何をしているんだ!!」

馬鹿なことをしている銀時（土方）とおそ松（零斗）の前に何者かが現れた。その人物は――

「確か、真選組鬼の副長土方十四郎と禍終素学園の竜ヶ崎零斗じゃないか」

青色の痛スーツを着、スタイリッシュ立ちをしている松野家次男のカラ松であった。

「カ、カラ松!? なんぞこんな所に・・・」

おそ松（零斗）はチョロ松や一松と違い、いつも通りの痛い格好をしているカラ松に少し安堵するが、何故こんな所にいるのか気になって尋ねた。

「フツ、面接の準備のためにデカパンの所へ寄った帰りだったんだが、まさかお前たちと会うとはな」

（面接の準備!? その格好で面接を受ける気なのコイツ!?）

痛スーツで面接を受けるつもりのカラ松に内心驚く銀時（土方）。どう考えても一発退場ものなのに自信満々なカラ松を見て、銀時（土方）は呆れるのだった。その時——「おやおや、真選組副隊長がこんなところで呑気に散歩とはいいご身分だなあおい？」鉄パイプを携えたチンピラたちを引き連れてテロリストグループ『ワイルドハント』メンバーが1人、エンシンが帝具『月光麗舞シヤムシール』の切っ先を銀時（土方）に向けてきた。

（さ、最悪だアアアアアアア!!こんな姿の時にまさかテロリストと出くわしちまったアアアアア!!）

銀時（土方）は声にならない叫びを上げるが、すぐにエンシンにこう言い返す。その間に銀時（土方）たちの背後にある一団が迫っていた。

「わ、悪いが今テメーらに構つてる暇はねえ。そこどけ。今回だけは見逃してやるぜ、エ……強姦魔」

「おい、なんで名前を言い換えた」

銀時（土方）はエンシンにそう言い返すと、額に青筋を浮かべたエンシンはすぐにも斬りかかれるような体勢を取り始めた。

「前からテメエにはムカついてたんだ。ついでに何度も俺らのアジトを破壊してくるぞこの野郎もぶっ殺してやるよ」

「俺も!？」

エンジンが言った言葉におそ松（零斗）が驚く。以前からシユラ一行を見つけてはぶちのめしてくる零斗には殺意を常に抱いているのであった。

「殺つちまえテメエら!!」

『ヒヤツハー!!』

「チイっ!!こちとらテメエらなんか構つてる暇はねえんだよ!!」

エンジンが合図するとチンピラたちが一齐に釘バットや鉄パイプなどの武器を振り回しながら迫ってくる。猫の死骸を一刻も早く回収したい銀時たちはまともに相手をする気はなく何とかして撒こうと考えていたその時だった。

ドドシヤアアアアア!!（エンジン及びチンピラ共が仰向けに倒される音）

銀時たちの背後に迫っていた一団の先頭にいた1人の男性が銀時たちの前に躍り出るとそのままエンジンたちに刀一閃すると、エンジンたちは一齐に仰向けに倒れ伏した。銀時（土方）は目の前の男の顔を見て驚いていた。

「お、お前は見廻組の……」

銀時（土方）の目の前にいる男は、真選組と同じこの嵐獄島の警察組織である『見廻組』の局長である、佐々木異三郎だった。

「真選組副長として情けないですよ土方さん」

異三郎は銀時（土方）にそう言いながら見廻組の白い制服を脱ぎ捨てるとその服の下からアラタたちが着ていたのと同じような侍の着物を着ていた。

「禍終素学園十番隊長、佐々木異三郎。この嵐獄島の平和を脅かす犯罪者たちは悪・即・斬!! Z組法度の誓いの元に成敗させてもらいます」

「（何してんだお前えええええ!!）」

そう言いながら牙突の構えをとる異三郎に銀時（土方）とおそ松（零斗）は声にならない叫びでツツコミをするのだった。

「なんでテメエーまでZ組入ってんだアアア!!なんでテメエーまで牙突だアアア!!」

「申し訳ありませんが土方さん。私は以前までの私ではありません。生まれ変わり、己を律する精神を持った坂田さんと共に歩む道を選ぶことにしたのです」

銀時（土方）が異三郎にツツコむと、異三郎は眼鏡を指でクイツと上げながら話してくれた。

「いや、お前の隣の銀さん、昨日まで牙突撃ち合ってた奴うう!!」

おそ松（零斗）は異三郎に声にならないツツコミを入れた。性格など色々クセの強いものが多い真選組とエリートが多い見廻組では衝突することも多く、特に真選組副長の土方と見廻組局長の佐々木異三郎は現場で出会う度に刀で斬り合いをするほど仲が悪いくことで有名である。

「それにしても土方さん、犯罪者を前にして敵前逃亡とはそれでも真選組副長ですか」
異三郎はそう言うのと銀時（土方）の喉元に日本刀の切っ先を突き付けてきた。

「そこに直りなさい。例えば真選組だろうと私たちの悪即斬の掟から逃れる術はありません」

その時だった。

「待て」

銀時（土方）の右側にある建物の上から声がした。

「そんな小物に構ってる暇はねえ」

銀時（土方）は声の聞こえてきた建物の上に目を少し動かした。

「密偵から連絡が入った。四丁目のパチンコ店の前で事件が起こったからすぐに駆けつけろだよ」

建物の上にいたのは、なんと空条承太郎だった！承太郎は何故か『禍終素学園五番隊長』と書かれた法被をいつもの服（ジョジョの奇妙な冒険 ダイヤモンドは砕けないで着ていた服）の上から羽織っていた。

「（もつとヤバイ奴まで傘下に入ってるうううう!!）」

銀時（土方）は承太郎を見て思わず叫びそうになった。しかし、それだけではなかった。

「気をつけなよみんな」

おそ松（零斗）の背後の建物からも声がした。

「アレは相当強いよ。先行した八番隊がやられたらしいよ。僕達も支援に行く」

背後の建物の上にはいたのはトド松だった！トド松もまた『禍終素学園十三番隊副隊長』と書かれた法被を着ていた。後ろにはおそ松とカラ松の松野兄弟とイヤミやダヨン、そしてホームレスの人間たちもまた同じような法被を着て立っていた。更に――
「眉唾もんよ」

銀時（土方）の左側にある建物の上から何者がか姿を現した。

「なんでも八番隊の隊員は喋る化け猫が出たって言ってるそうよ。人心を惑わす悪い噂よ」

その人物は銀時のストーカー、猿飛あやめだった！彼女もまた『禍終素学園四番隊隊長』の法被を着ていた。

「忍者部隊を先行させたわ。もう片付いていることでしょう」

彼らを見た銀時（土方）とおそ松（零斗）は思わずこう叫びそうになった。

「（どんだけ大勢力になってんだアアアアア!!）」

そのときだった。

「喋る猫、物の怪の類ですかね」

異三郎があやめの化け猫という言葉に反応していた。

「捨てては置けませんね。乙組法度の元に成敗しなくては、行きますよ十番隊」

そして異三郎たちは銀時（土方）とおそ松（零斗）の近くにいたカラ松も合流して四丁目のパチンコ店に向かっていった。

その場を去っていくバカどもを銀時（土方）とおそ松（零斗）は呆然と見つめていた。

「ん・・・？」

「喋る猫？」

銀時（土方）とおそ松（零斗）は先程の話から喋る猫が心に引つかかり、そしてあることに気づくとバカどもを追いかけ始めた。

「ちよつと待てエエエエエエ!! それ、牙突撃つちやダメエエエエエエ!!」

果たして銀時とおそ松は無事、魂の半身を取り戻し、元に戻ることができるのか？と
りあえず次回に続く。

俺とアイツはリーダー失格で俺とコイツは何も出来ない

「ぶぎげやがって!!」

土方（銀時）と零斗（おそ松）は路地裏にいる猫を片っ端から虱潰しに探していた。

「猫に魂半分持つていかれただ？まさしく猫のエサだぜ、安い魂だ!!」

「それはそうでしょ、あの2人の魂なんてその程度の価値しかないのは当然ですよ」

土方（銀時）と零斗（おそ松）はそんなことを話しながら猫を探すが、銀時とおそ松の魂の半分が入った猫の死骸は見つからないでいた。

「この広い島の中から猫一匹どうやって探し出せつていうんだ!!クソツ、こんな時に真選組の情報網が使えれば・・・」

土方（銀時）は中々見つからない猫の死骸にイラついてそうボヤキ始めた。そして零斗（おそ松）はある手段を実行することを決めた。

「奥の手！全令呪を持って命じる!!来い、俺のサーヴァントたち!!」

先程の卵かけご飯製造機を出てから右手の甲に違和感を感じていた零斗（おそ松）は右手の甲を見ると歪な形だが三画の令呪が浮かび上がっていた。それを使って数日間サーヴァント健康診断に参加していた零斗が契約しているサーヴァントを呼び出した

のだった。しかし——

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「なんか、違くね?」

「うん普通におかしい」

呼び出されたサーヴァントたち（ノツブ、沖田さん、ネロ、メイヴ、スカサハ）は某経○値先生のイラスト風になっていた。土方（銀時）は零斗（おそ松）に確認すると零斗（おそ松）は苦笑いをしながら頷いた。

「なんじゃコレ!? 気づいたらぐだくだになつとるか意味不明なんじゃが!」

「沖田さんも意味不明なんですが——ゴフアツ!」

「余の姿がちんまくなっているのだが!」

「メイヴちゃんのキュートな姿がアアア!!」

ノツブ、沖田さん、ネロ、メイヴは突然変わった自分の姿に驚き慌てふためいていた。まあ身体が変化してしまっただからこれは至極当然の反応だろう。しかしただ一人、スカサハだけは特になんの反応もなく冷静に自分たちの現状を分析していた。

「コレはアレだな。今の零斗は身体がおそ松になつているから我々に送られてくる魔力が零斗とおそ松ので混ざったことで我々はぐだくだ化してしまっただけということか」

「師匠、ぐだくだになつても冷静ですな」

冷静なスカサハに零斗（おそ松）は流石だなと呆れていた。

「とにかく見た目の変化なんて大した問題じゃねえ。人数が増えたなら人海戦術で探すぞ」

土方（銀時）は零斗（おそ松）たちにそう言うのと再び猫の死骸を探そうとしたその時だった。

「随分とお急ぎのようだな」

突然、バイクが零斗たちの前に現れた。

「デートにでも遅れそうなのか？」

零斗たちは思わず固唾を飲んだ。

「なんならお巡りさんがパトカーに乗っけてつれて行ってやろうか。地獄のランデヴーによオオオオ!!」

そのバイクに乗った野盗集団のような格好をしている男達は真選組だった。野盗集団兼世紀末集団と化した真選組を率いていたのは紛れもなく、真選組局長の近藤だった。

「（近藤さん!!）」

零斗たちは思わずフリーズしてしまった。

「え、なんじゃアレ？いつの間に人斬り弱小サークルから世紀末集団に転換したんじゃ

「？」

「そんな訳ないじゃないですか!? こんなの土方さんが見たら切腹ものですよ!」

ノツブは初めて世紀末真選組を見たので思わず沖田に聞くが沖田自身も自分の知っている真選組と違いすぎて動揺していた。ちなみに言わなくとも分かるだろうが一応説明しておく、彼女の言っている土方さんはF G Oのたくあん中毒の土方歳三であり、決してマヨ中毒の土方十四郎ではない。

その間に真選組の隊士達が土方たちを取り囲み始めた。

「(最悪だ!! こんな時に面倒な連中に……!!)」

土方(銀時)は予想外の展開に内心悪態をつく。しかし、土方たちには真選組に構っている暇は無い。

「悪いが、てめーらの助けはいらねーよ。お巡りにはお巡りの仕事があんだろ。さっさと公務に戻れ」

土方(銀時)はひとまず銀時のフリをして真選組をまこうとした。だが――。

「立派な仕事だよ。俺達や怪しい浪人に職務質問してるだけだ」

なんと、近藤が土方に絡んできた!

「ノースリーブの怪しいポリスマンに言われたかねーよ!!」

零斗(おそ松)は近藤にツツコミを入れ、一方土方(銀時)はそんな真選組に対して

怒りが込み上げてきた。

「随分緩くなつたもんだな、真選組の局中法度も。本来ならてめーら職務怠慢で全員切腹だろうよ」

土方（銀時）は野盜集団と化した真選組にそう言い返した。しかし。

「聞いたか山崎、局中法度だつてよ」

近藤は側にいた山崎に話を振った。山崎は

「何百年昔の話をしてんだ!!んなもんもう古いんだよ!!」

と釘バットを取り出して土方にガンをつけてきた。

「俺達はもう、何者にも縛られねエ!!自由警察になつたんだ!!他人（ひと）の決めた掟

（ルール）ではなく己の掟（ルール）で生きていく事をトシさんに誓つたんだ!!」

「いや、お前らのルール、どんなルール!？」

零斗（おそ松）はめちやくちやな理論を翳す山崎にツツコミを入れた。土方（銀時）は怒りを露にしながら真選組にこう返した。

「んな掟（ルール）、ただテメーらに都合のいいだけの掟（ルール）だろうが!!あんなだらけた副長のいいなりになってたら、テメーら腑抜けになつちまうぞ!!」

しかし、土方（銀時）の怒りは真選組の連中には届かなかつた。

「黙れ!!トシは俺達に自由の尊さを教えてくれた!!堅苦しい束縛から俺達を解放し、

ノースリーブにしてくれた!!」

「堅苦しいって、そつち!?!お前ら解放されたの肩だけじゃねーか!!」

近藤の言葉を聞いた零斗（おそ松）は思わず真選組の面々にツツコミを入れた。

そのときだった。

「副長を侮辱したなんて堅エ事言うつもりはねエ。だがためエらは俺達の仲間（ダチ）侮辱した」

隊士の一人の武藤剛気がそう言いながら土方（銀時）と零斗（おそ松）めがけて輪になったロープを投げ付けてきた。

「仲間（ダチ）侮辱罪で逮捕だ!!」

土方（銀時）は輪になったロープをかわしきれず、首にロープを引っかけられたが、零斗（おそ松）はいち早く気づいた沖田さんによってロープを斬られた。

しかし土方（銀時）はそのままバイクで引き摺られてしまう。

「市中引き回しの上、打首だぜエい!!」

「ヒヤッハアアア!!」

「ぐおおおおお!!」

「ひ、土方アアアアア?!!」

バイクで引き摺られる中、土方（銀時）は首に掛けられたロープを何とか外そうとす

る。零斗（おそ松）は土方（銀時）を助けようとノツブたちと一緒に真選組のバイクを追いかけた。

と、そのとき、

「ゴリさん、んな雑魚にかまつてる場合じゃねーぜ。魔獣騒ぎはどうなった」

沖田が近藤にある事件の事を確認していた。

「四丁目のパチンコ店から通報があつた猫型のモンスターの話か。デマだろう。一通り見廻つたがそれらしいもんは見当たらなかつたぞ」

土方たちは近藤と沖田の会話に驚いた。

「まっ……、待て。猫型のモンスターって」

土方（銀時）がその猫型モンスターのことについて詳しく聞こうとしたそのときだった。

突然、日本刀がロープめがけて飛んできて、土方（銀時）を引き摺っていたロープを切断した。

「ぐほオ!!」

土方（銀時）は近くの喫茶店『カフェノーウエア』に突っ込んで悲鳴を上げた。

その様子を見た隊士達が驚き、戸惑つたその時だった。

「デメエら」

隊士達の後ろに二人組の男女が現れた。

「僕たちの先生に何してやがる!!」

「警察といえども世を乱す蛮行はわたし達が許さないアルよ!!」

土方（銀時）を庇うようにして立った二人組は、新八と神楽だった。土方（銀時）を傷つけられたせいかな新八とかぐらは怒りに燃えていた。

「て……、てめーら」

「つーか、世を乱してんのお前ら」

土方（銀時）はカフエノーウェアに突っ込んだせいで出血してる頭を押さえていた。そして何とか土方たちに追いついた零斗（おそ松）は二人にツツコんだ。

と、そのとき、バイクが新八と神楽の前に停止し、

「おやおや、ガキがたつた二人こんな所に何を?」

と背中にも日本刀を回した近藤が隊士達を率いて新八と神楽に因縁をつけてきた。

「警察ごっこは他でやりな!!」

そう言うのと近藤は、火炎放射器を装備した戦車を新八と神楽にけしかけてきた!

「野郎共オオ!!そこにいる汚物どもを消毒してやれエエエ!!」

近藤がけしかけた火炎放射戦車は火炎放射器の発射口の狙いを新八と神楽にしつかりと定めていく。しかし。

「警察ごっこはアンタ達だ」

新八は、一歩も退こうとせず冷たい声で真選組に返した。

「貴方達が頼りないから、私達がこの島に秩序をしいているアルよ」

神楽も新八に同調して真選組にそう返した。だが。

「ほぎきやがれてめーら。嵐獄島は自由の島だ。これ以上俺達の島(シマ)で勝手なマネは許さねーぜ。消毒される前に食糧だけ置いてとつとと失せな」

近藤率いる真選組も全く退く様子はなかった。

「そうか。どうしても悪行を改めるつもりはない、と」

新八は冷たい声で真選組にそう言うのと、腰に差した刀を抜こうとする。

「ならば私達が成敗して差し上げるアルよ!」

新八に続き、神楽も刀を抜こうとする。

「なんだてめーらア?やる気かア、あん?」

近藤は背中に戻っていた日本刀を新八と神楽の前に翳し出す。

そして、近藤は隊士達にこう言った。

「野郎共オオ!!生意気なガキどもなぞ畳んじまえエエ!!」

「ヒヤツハアアアアア!!」

真選組は、世紀末の雄叫びと共に一斉に新八と神楽をめがけて斬りかかってきた!

「ちつ。奴等、やはりここから退く気はないようだ。二番隊に救援要請！」

新八は右手に持った日本刀で真選組の隊士達の攻撃を受け流しつつ、左手で無線機を取り出して他の隊に連絡を取り始めた。だが。

「ほう、おめエ俺達に敵わんと見て仲間でも呼ぶ気かア？」

近藤は無線を使う新八に斬りかかる。新八は左手で近藤の一撃を受け止めようとするが受け止めきれず新八はバランスを崩し、その場に尻餅をついてしまう。

「ガキどもに街を護れる程世の中甘くねーんだよ！おつ死んじまいなアアア!!」

近藤が転倒した新八を袈裟斬りにしようとした、そのときだった――。

「貴様ら、何をやっている！」

新八や神楽と同じような法被を着ていた、明久と妹紅が近藤の刃を打ち返した。近藤は一旦新八から離れ、隊士達もそれに続いて新八と神楽から離れる。

明久は野盗集団と化した真選組にこう言い放ち、それに続いて2年Z組や見廻組、松野兄弟などと他の面々も真選組と睨みあつた。

「我等の仲間は何をやっている!!警察とて世を乱す蛮行はこの禍終素学園が許さぬぞ!!これ以上邪魔立てするならZ組法度の元に、その下品な顔に牙突オギノ式を見舞う事になるぞ」

明久が刀を構えながらそう言うが、近藤はこう言い返して一步も退こうとはしない。

「そつちこそ水と食糧だけ置いてこの島から消えな!!ここはてめーらに護れる程甘くねーんだよ!」

近藤にそう言われても、明久達は一步も退こうとはせず、日本刀を抜いて切っ先を真選組に向ける。

「そうですか、どちらも引く気はないというワケですか」

「そうみてエだな。なら・・・」

そして、明久達乙組連合と真選組は一斉に飛び掛かった。まるで全面戦争をしようと言わんばかりに。

「この剣でカタをつけるだけだアアア!!」

そのときだった。

「「「待てエエエエエエエエエエ!!」」」

新八と明久、近藤、沖田の目の前に刀が突き付けられた。

「「どちらもその剣」」

「「鞘におさめな」」

新八に木刀を、明久に黒剣を、沖田にひのきのぼうを、近藤に真剣を突き付けた、人物達は――。

「副長（先生／長男／会長補佐の）命令だ」

銀時（土方）、土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）の4人であった。「トシいいいい!!」「先生!!」「クソ松!!」「零斗!!」

近藤と新八、明久、沖田は動きを止め、思わず銀時（土方）と土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）に声を上げた。

「いい加減にしやがれ。悪即斬とは言つたが、お前らでめーの敵さえその目で見定めらんねーのか」

「自由にも程があんだよ。今はあんな連中相手にしてる時じゃねーだろ。少しは秩序つてもんを覚えて利口に立ち回れ、ウンコたれども」

「これ以上好き勝手暴れんじゃねえよ。テメエら全員社会の常識を一から学び直してこいや」

「俺のだらけきつた生活のためにこれ以上めんどくせえことはゴメンなんだよ」

土方（銀時）と銀時（土方）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）はそれぞれの組織に釘を刺し、全面戦争を止めさせようとする。

「あつちもこつちも猫探してんだろ。目的は同じだろーが。なあ、銀さん」

「だったら今回はその剣をおさめて、互いに協力すべきだろ。なあ土方さん」

「効率つてもんを考えるべきだ。なあ零斗」

「こんだけの人数がいるんだからそうした方がいいに決まってるだろ。なあおそ松」

銀時（土方）と土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）が互いに冷や汗を流しながらそれぞれの組織にそう論そうとしたのだが――。

「オイオイトシよお、どーかしたのか。らしくねーじゃねーか」

「折角面白エ事になったのに、何今さらクソマジメな事言ってますか。またその命狙われねーんですかトシさん」

「普段の貴方なら話を聞いてあげるけど」

「ギャンブルに未成年での飲酒、それにいろんな店で借金している今のお前の言葉は素直に聞けねえな」

なんと、近藤と沖田が銀時（土方）に、木更と蓮太郎がおそ松（零斗）に文句を言うてきた。

それは土方（銀時）と零斗（おそ松）も同じであった。

「先生。お言葉ですが悪即斬を提唱したのは先生です」

「僕達はそれに従っただけですよ」

「先生は自ら定めた乙組法度に背くって言うんですか？」

「真面目に仕事しろって言ったのはおそ松兄さんでしょ？」

「それなのに仕事を邪魔するようなヤツらと協力しろだなんて冗談じゃないよ」

「こちらはこちらで新八、明久、明久達と共に増援にやって来た妹紅が土方（銀時）に、

チヨロ松とトド松が零斗（おそ松）に抗議してきていた。

そして、二つの組織は雄叫びを上げて戦闘態勢に入り、こう言つて全面戦争に入つてしまつた。

「俺達から自由を奪う事は何人にもできねエ!!たとえ副長にもなア!!」

「我々が忠誠を誓うのは坂田先生ではなく、乙組法度と学園生活だけだ!!」

「僕達の望むものは給料のみ!それを邪魔するなら長男だろうとなぎ倒すのみ!!」

「俺たちは俺たちの我を通すだけだ!!」

銀時（土方）と土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）は二つの組織の全面戦争に巻き込まれ、さつそくアスファルトの上に伏してしまつた。

「二二（全然リーダーの言う事聞かぬエエエ!!）二二」

アスファルトの上に伏した銀時（土方）と土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）はそう思うが、怒りを露にした土方（銀時）は銀時（土方）に、零斗（おそ松）はおそ松（零斗）にこう詰め寄つた。

「オイ、どーなつてんだコイツら!!一体どんな教育したんだ!全然手綱とれねーぞ!」

「てめーが余計な事吹き込むからだろが!」

「おい、借金つてどういふことだ? テメエ俺の金勝手に使つて借金したことかア
”ア?”」

「仕方ねーだろ！ギャンブルと酒は俺にとつて呼吸するのと同じくらい日常的なものなんだからよ!!」

ブチギレた銀時（土方）が土方（銀時）に、逆ギレしたおそ松（零斗）が零斗（おそ松）に返してこう聞き返した。

「てめーの方こそ、このバカどもどうにかしやがれ!」

「知るかア!!元々手綱とれなかつた連中を悪化させたのはてめーだろ!!」

「つーかお前だつてウチの兄弟に労働の大切さ学ばせたつて言つてるけど結局は金が欲しいだけじゃねえかよ!!」

「お前らにんなもん期待出来るわけねえだろうが!!金目当てだろうが働いているんだから別にいいだろうが!!」

土方（銀時）と零斗（おそ松）は怒鳴りながら銀時（土方）とおそ松（零斗）にそう返した。その近くではキリト、桂、春虎がそれぞれの武器を使い、野盗と化したアリアや木更、三葉の真選組に所属している隊士と格闘していた。

銀時（土方）が立ち上がった次の瞬間――。

ガキイン!!（刀と刀がぶつかり合う音）

銀時（土方）は最早見境なく刀を振り回す近藤の一撃を慌てて受け止めた。

「おっ・・・落ち着け!!てめーら何も仲良くしろつて言つてんじゃねーんだ!!今回だけ!!」

今回だけ立場忘れて共通の目的を果たそうと言つてんの!!」

銀時（土方）はしどろもどろに近藤にそう言うが、近藤は

「目的つて何を」

と大声で銀時に返す。

「だーから猫を……」

半ギレ状態になった銀時（土方）は近藤に言い返す。

「猫をなんだ」

「迷子の猫を一緒につかまえ……」

銀時が近藤に言い返した、そのときだった。

ウイーン（パチンコ店の自動ドアが開く音）

突然、パチンコ屋の自動ドアが開き、右目が飛び出し、口元に血のようなシミが残った猫のような顔をした、筋骨隆々で股間にモザイクがかかった謎の生物が出てきた。

「チツ……しけてやがる。これじゃあキャットフードの一つも買えやしねエ」

謎の生物は100円玉を手の上で跳ねさせながらそう呟き、

「あー腹減った」

とぼやきながらその場を立ち去つていこうとした。銀時（土方）と土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）そして二つの組織の面々はその様子を呆然と見つめていた。

「……なる程」

銀時たちの背後から見ていたと明久、新八が謎の生物を見て呟いた。

「確かにこんな事をしている場合ではなかったようだね」

「近藤さん、一旦勝負は預けます」

新八と明久は近藤にそう言うと、近藤は

「ああ。お前らの言う通りだな」

と返した。

「者共協力してあの凶暴なモンスターを討つぞオオオ!!」

「化物から嵐獄始末犬を護れエエエ!!今こそ力を合わせる時だアア!!」

二つの組織の構成員達は、一斉に謎の生物に飛び掛かった。

「……(そーじゃなくてエエエエ!!)」

二つの組織の構成員達が謎の生物に飛び掛かる様子を見た銀時たちは顔をひきつらせた。

「違う違う!!それ退治しちゃダメエエエ!!」

「やべエエエ!!一致団結してお前の半身殺りにいつちまったぞ!!」

銀時（土方）と土方（銀時）が慌てる。その時、謎の生物は二つの組織が攻撃してきた事に気づいたのか、ぬつと振り向いた。

と、そのとき、

ドシヤア!! (謎の生物の腕の一振りが銀時たちに当たった音)

銀時たちも謎の生物の腕の一振りに巻き込まれておそ松(零斗)の前に吹き飛ばされてきた。

「てめーの半身にやられてちや世話ねーぞ! どういうこつた、本当にアレお前らの半身が入ってんのか!」

零斗(おそ松)はおそ松(零斗)に謎の生物に銀時とおそ松の魂の半分が入っているのかを確信出来ないでいた。

「こなくそオオオオ!!」

今度は長谷川、カズマ、ルクス、理樹が掃除用具を使って謎の生物に攻撃を仕掛ける。
だが。

「!?!」

謎の生物は凄まじいスピードですぐに四人の背後に回り込んだ。

「てめーら、もしかして俺を知ってんのか」

謎の生物は四人の頭をむんずと掴む。

「この野郎オオ!!」

「てめエそいつらを離しやがれエエ!!」

真人と謙吾が四人を救出すべく謎の生物に飛び掛かる。しかし——。
「教えてくれ」

謎の生物は四人を、こう叫びながら真人と謙吾に向けて投げ飛ばして直撃させた！
「俺は一体、何者なんだアアアア!!」

謎の生物は際限無く暴れまくった。異常発達した筋肉質な腕を目にも止まらぬスピードで振り回して恭介、青髪ピアス、元春、シン、結弦、一夏を殴り倒し、更に回し蹴りで棗鈴、セシリア、箒、ゆり、唯、かなでを吹き飛ばす。

「何も思い出せねえ!!」

更に謎の生物は腕の一振りを放って美波と瑞希、そして小鷹と夜空、星奈を、山崎を始めとした真選組の隊士達を一撃で吹き飛ばし、辺りを屍の山に変えていく。

「血で血を洗う戦いと、玉で玉を洗う戦いしか記憶にねエエエ!!」

「!!」

零斗たちは謎の生物の言葉に驚きを隠せなかった。

そのとき、傷ついた銀時（土方）が零斗（おそ松）の左肩に手を当てながら立ち上がり、

「なんてこった。奴あ俺の半身と言っても、俺たちの負の魂の塊……。戦とパチンコ……。血塗られた戦いの記憶のみでできた、哀しき戦闘マシーンだ」

「いや、それただのダメ人間！つーか、ただのお前ら!!」

銀時（土方）の漏らした言葉に土方（銀時）と零斗（おそ松）は銀時（土方）にツッコんだ。しかし零斗たちが話しているその間にも被害が拡大していった。

それもそのはずである。何せこの猫のような謎の生物に入っている銀時とおそ松の魂の半分、つまり負の部分はおそ松と銀時によるパチンコの記憶を除けばかつて攘夷戦争で白夜叉と敵から恐れられその名を呼ばれた頃の銀時そのものなだから。

「のわああああ!!」

宝具『三千世界』展開したノツブも無数の火縄銃を放とうとしたがそれよりも早く白夜叉の記憶を持った怪物の餌食になった。ノツブは怪物の腕の一撃を受けて吹き飛ばされ、ピンボールのように沖田さんとメイヴに直撃してごろんと伸びてしまった。

「先生!!指示を!!うああああ!!」

アラタが土方にそう言うが、すぐに怪物の目にも止まらぬ一撃を受けて異三郎、信女、承太郎、花京院、ポルナレフと共にその場に倒れ込んだ。

それは真選組も同じだった。

「てめーら何やってんだ!それぞれで何とかしろオ!!」

「それぞれってどーやって!」

金次が周りの仲間たちにそう言うがどうすればいいのか分からないのか武藤は金次

に叫んでいた。元々近藤や沖田といった幹部の指示や土方の定めた掟に従って行動していた隊士や武偵達には各自の判断での行動はあまり得意では無かった。

その結果――。

「ぐああ!!」「ぐふああ!!」

彼らもまた、白夜叉の記憶を持った怪物の拳の餌食になってしまった。

「ヒヤツハアア、ひるむんじゃねエエ!!」

「化生めエエエ!!悪即斬だアアア!!」

「これ以上みんなをやらせるかアアア!!」

「倒れるオオオオオ!!」

近藤と新八、明久、チヨロ松が指示を出す、4人とも白夜叉の記憶を持った怪物のあまりの強さを前に、怯んでしまっていた。

そのとき。

「これ以上仲間をやらせるかアアア!!」

「テメエの思い通りにはさせねえよ!!」

無謀にも一誠とブレイズが白夜叉の記憶を持った怪物に挑みかかった。だが。

「なんだてめーら」

やはりと言うか、怪物は凄まじいスピードで二人の背後に回り込んでしまう。

「もしかして俺が誰だが解るのか」

怪物はそう言いながら一誠とブレイズの頭をむんずと掴み、二人を持ち上げる。

「こなくそオオオ!!」

神楽と沖田が怪物に飛び掛かった。だが――。

「教えてくれ、俺は一体誰なんだアアアアアア!!」

怪物の叫び声と共に一誠とブレイズはそれぞれ神楽と沖田に向けて投げ飛ばされ、直撃してその場に倒れ込んでしまった。

その後も二つの組織の構成員達は怪物によって一方的にやられ、ついには近藤と新八、明久、チョロ松を残して全員力尽きてしまった。

零斗たちが気づいたときには既に遅かった。

怪物はとんでもない跳躍力で建物の屋根を軽々と飛び移り、

「あっちから新台の匂いがする!!」

と言いながらどこかに姿を消してしまった。

「待てエエエ!!」

「しまったアア、逃げられたぞ!!」

「まだそう遠くには言っていないはずです!!」

「追うぞ!」

怪物に逃げられた銀時（土方）と土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）が怪物を追おうとした。だが――。

「ぐっ……、クソ、あんな奴に遅れをとるとは……。どうして」

「トシ!!俺達はお前の言う通りにやってきた。なのに何故……」

「僕は、こんなにも弱かったのか……」

「……………」

新八と近藤、明久、チョロ松は無力感に苛まれていた。

銀時（土方）と土方（銀時）は互いに顔を合わせる。その後ろでは零斗（おそ松）とおそ松（零斗）も何も言わないが銀時たちと同じく自分達の不甲斐なさを痛感していた。

そして銀時（土方）が、傷つき立ち上がるのがやつとな二つの組織の構成員達にこう言い残して全ての決着をつける為、土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）と共に怪物を追って走っていった。

「俺達や、お前らのリーダーじゃねーからさ。すまねエ、不甲斐無エリーダーで」

銀時（土方）の言葉を聞いた新八達は走り去っていく4人を呆然と見つめていた。

そのときだった。

「どうやら、らしくねエのはアイツらだけじゃねーようだな」

何者かが新八達の後ろからそう呟いた。

「どいつもこいつもリーダーがちよつと替わった位でどうした。秩序正しい禍終素学園、自由奔放な真選組。結構な事だよ」

新八達の後ろからそう言っていた、その人物は平賀源外とアザゼルだった。銀時たちのことが気になって様子を見に来たらご覧の有様なのだった。

「だが、てめーらには、てめーらしいやり方があるつてもんがあんじゃねーの。リーダーの色で組織の色が変わるなら、組織の色でリーダーの色が変わる事もあらあ。奴等にやお前らの力が必要なんだ。だが今のお前らじや奴等の力にはなれねエ」

アザゼルの言葉を聞いた新八達は源外の方に向きを変える。

「まだ気づかぬエのか。いや・・無理もねーか。俄には信じ難い話だからな」

そして源外は新八達にこう言った。

「だったら、俺が教えてやろう。おーい、たま」

源外は手を上げて合図を出した。

ゴオオオオ——

近くから、何かが迫る音が聞こえてくる。

音に聞いた新八達が音がする方に向きを変えたときだった。

なんと、たまが運転しているトラックが既に避けられない所まで迫っていた。

アザゼルは、顔をひきつらせた新八達にこう言った。

「お前達のその、身体そのものに。取り戻してこい。お前達のリーダーを。お前達の本
当の色を」

僕がメガネで僕がスマホで俺がグラサンで僕がメガネ2号

元の身体に戻るために、銀時とおそ松の魂の半分が入って新八たちをコテンパンにぶちのめした猫の怪物を追いかけている零斗たちだが、一瞬のうちにして姿を見失ってしまい一向に捕まえることが出来ず、辺りはすっかり暗くなり始めていた。

「どこ行きやがった、あの化け猫」

「完全に見失っちゃいましたね・・・」

「この辺に逃げ込んだのは間違いないねえ」

「じゃあこの辺りを探せば見つかるか・・・」

銀時（土方）、零斗（おそ松）、土方（銀時）、おそ松（零斗）は辺りを見渡すが、化け物の姿は影も形も見つからないでいた。

「・・・解つてんだらうな、テメエら」

「ええ、わかってますよ」

「こいつは俺たちのまいた種だ。これ以上誰も巻き込みやしねえ」

「テメエのケツはテメエで拭ってやんよ」

銀時（土方）が3人に確認を取ると零斗（おそ松）、土方（銀時）、おそ松（零斗）は銀時（土方）に返した。

「てめでカタつける」

「リーダーの最後の意地にかけて」

「化け猫にやられたみんなのために」

「長男の意地にかけて」

そして満月が4人を照らす中、4人は意地でも捕まえる覚悟を決めた。その時、満月に何かの影が映りこんだ。

「「いたアアア!!」」

満月に映りこんだものを見た零斗たちは思わず叫んでしまった。

それは銀時とおそ松の魂の半分が入っている猫の化け物だった。猫の化け物は家と家の屋根の上を軽々と飛び移って移動している最中だった。

「まさか奴から姿を現すとは!」

「テメエら!!ほかの連中に被害が出る前にとっとと捕まえるぞ!!」

土方（銀時）が猫の化け物の姿を見て驚いていると、先に走り出した銀時（土方）が零斗たちに猫の化け物を追いかけることを言うと、3人も銀時（土方）の後に続いて猫の化け物を追いかけた。

しばらく猫の化け物を追いかけていると屋根の上を移動していた猫の化け物は、一瞬足を止めたかと思うと目の前にある大きな屋敷の敷地に入ってしまった。

「マズイぞ銀さん！あの野郎屋敷の中に入りやがった!!」

「危険だ！あの戦闘マシーンと民間人が接触したら・・・!!」

「何としても被害が拡大する前に止めるぞ!!」

「言われなくてもわかってますよ!!」

おそ松（零斗）、銀時（土方）、土方（銀時）、零斗（おそ松）は屋敷の塀を乗り越えて化け物が民間人に接触する前に阻止しようとする。

「つて、アレ?」

だが、ただ一人零斗（おそ松）は化け物が侵入した屋敷に見覚えがあるのか首を傾げていた。その間に銀時たちは屋敷の塀の上から飛び降りる。

「ちよつと待ってください。ここって確か——」

零斗（おそ松）が何かを思い出したのかその事を伝えようと銀時たちに続いて屋敷の塀を乗り越えようとした時だった。

「いたっ!!あそこだ!!」

屋敷の庭園の方を見た土方（銀時）が叫んだ。化け物は既に庭園にいる女性の前に立っていたのだった。

「あぶねエエエ!!そいつから離れっ・・・」

銀時（土方）が女性にそう叫んだ、次の瞬間。

「お帰りなさい」

なんと、女性は化け物の頭に向けて手を伸ばし、撫で始めた。

「随分帰りが遅かったわね」

女性は化け物に優しく声をかけ、化け物の頭を撫で続ける。

「今日はどこで遊んできたのかしら、どぎえもんさん」

女性は化け物にそう言つて撫で続けた。心なしか化け物はゴロゴロと鳴き声を上げ、

嬉しそうな顔をしていた。

「（（かつ・・・かつ・・・、飼われてたアアアアアアアアアアアア!!）（））」

草むらに隠れ、その一部始終を見た銀時（土方）、土方（銀時）、零斗（おそ松）、おそ松（零斗）は衝撃のあまり顔をひきつらせ、心の中でそう叫んだ。なんと化け物は女性に飼われていたようであった。

そして、その化け物を飼っている女性は藤丸立香の契約しているサーヴァント、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァであった。

「（飯もうできてるわよ）」

アナスタシアがどぎえもんさんという化け物にそう言うと、どぎえもんさんはアナスタシアについて行き、アナスタシアと共にアナスタシアの屋敷の庭園にあるお茶会用の場所へと移動していった。

「（あの化け物を飼ってる、英霊がいたアアアアア!!）」

4人はどぎえもんさんがアナスタシアに飼われてるといふ事実改めて衝撃を受けていた。

「オイ、いいいい、ドーいう事だ!!あの女・・・、なんであんなモンスターと一緒にいるんだ!」

土方（銀時）はあまりの訳の分からなさに叫びながら銀時（土方）に聞くと、銀時（土方）はこう推測した。

「まさか、猫の死骸に俺とおそ松の魂が入ったものの、記憶を失いさまよってた奴を捨て猫と勘違いして拾ってきた!」

「あれが猫に見えてんの!?!モザイクがかかるような奴が愛玩動物に見えてんの!?!」

おそ松（零斗）は銀時の推測にツッコんだ。全裸だったせいか、どぎえもんさんの股間にはモザイクがかかっていたのだった。

「どぎえもんさん」

銀時たちが草むらの中で隠れながらそんなことを話しているとき、アナスタシアがど

「ざえもんさんに優しく声をかけた。

「すっかり元気になったみたいで安心したわ」

「いや、目ん玉飛び出してっけど!!それ、どぎえもんっていうか、本当に死体だけど!」

零斗（おそ松）は驚きながらアナスタシアにツッコんだ。どぎえもんさんの頭の上にはハエがブーンと羽音を立てて飛んでいたが、それに気づいていないのかアナスタシアは構わずどぎえもんさんに優しく語りかけていた。

「最初に貴方と会った時は本当にびっくりしたわ」

「ここでアナスタシアはどぎえもんさんとの出会いを振り返り始める。

「血まみれで道路に突っ伏したまま動かなくて、もう死んでいるのかと思ったら」

アナスタシアとどぎえもんさんとの出会いはこうだった。

「どうやら、道端に突っ伏していたどぎえもんさんが

『あつコレ、血じゃなくてこういう柄ツス』

と振り向いてアナスタシアに言ってきたのが始まりだったようであった。

「あんな毛色の猫がいただなんて」

「ここでアナスタシアはどぎえもんさんとの出会いを振り返り終わる。

「いや、ビックリする所、そこじゃなくね!」

おそ松（零斗）が感覚のずれているアナスタシアにツッコミを入れた時だった。

「姐さんの介抱のお陰で救われやした。何と礼を言ったらいいか」

どぎえもんさんはアナスタシアに感謝していた。

「つーか、しゃべれるの!?!普通に会話してんの!?!」

どぎえもんさんがアナスタシアと会話しているという事実には、零斗（おそ松）は驚いて叫んでしまった。

「オイあの女、一体アレが何だと思つて飼つてんだ!!」

土方（銀時）が色々と感じがずれているアナスタシアにまたツツコミを入れた時だった。

「遠慮しなくていいのよ」

アナスタシアはどぎえもんさんをもてなし始めていた。

「最近じゃマスターも学級活動が忙しくて私に会つてくれないし、雷帝も基本寝たきりだから一人でいることが多くて困つてたんだから」

「しかし、これ以上姐さんに迷惑をかけるワケには。そろそろ旅立とうかと・・・」

「え?」

どぎえもんさんの話には、アナスタシアは思わず声を漏らした。

「もう・・・、行つてしまうのね」

アナスタシアはどぎえもんさんが旅立ってしまう事を寂しく感じているようであつ

た。

「傷も大方治りやしたし、それに・・・その・・・嫁入り前の若い娘さんが、どこぞの野良猫を家に連れ込んでるなんて知れたら、世間になんて言われるか」

「何の心配!?! 化け物を家に連れ込んでる方を心配すれば!?!」

零斗（おそ松）はどぎえもんさんにツツコミを入れた。どぎえもんさんはアナスタシアに旅立とうとしている理由を述べていた。

「俺のような過去に何があつたかもわからねエヤクザ者が側にいたら、姐さんの名に傷がついちまいやす。そんな恩を仇で返すようなマネ、腐つても俺にはできやせん」

「もう腐つてるだろ!! 何コイツ!! こんなに男気のある奴だつたの!?!」

土方（銀時）はどぎえもんさんにツツコんだ。肉体の腐敗が原因なのかどぎえもんさんの頭上には先程から執拗にハエがブーンと羽音を立てて飛んでいた。

そのときだった。

「そんな事・・・、気にしなくていいのよ」

アナスタシアが恥ずかしそうにどぎえもんさんに語りかけていた。

「私と・・・その、噂になるのがそんなに・・・、嫌?..」

アナスタシアの言葉にどぎえもんさんは顔を赤くして慌て始める。

「いっ・・・いや、そういうワケじゃ・・・」

「だったら、余計な事気にしないで」

アナスタシアがどぎさえもんさんをそう言っただけで落ち着かせ、続けてこう言った。

「記憶を失った人をそのままほっぽり出す方がロシア皇帝の娘として恥よ。記憶が戻るまでは、いえ、たとえ戻らなくても、ここで新しい思い出や大切な記憶が出来るまでゆっくりしていけばいいじゃない。貴方はもう、ウチのペットなんだから」

アナスタシアの言葉を聞いたどぎさえもんさんは異常に発達した筋肉質な腕を畳に着け、妙にこう感謝した。

「姐さん……、恩に着やす」

「何コレエエエ!!」

アナスタシアとどぎさえもんさんのやり取りの一部始終を見た土方（銀時）と零斗（おそ松）が叫んだ。

「なんでアイツら○倉健と倍○千○子みたいになっただけ?! いい感じに絆が生まれちゃってるよ!! 何やってんのあの女?! 何やってんのお前らの分身!!」

土方（銀時）はアナスタシアとどぎさえもんさんにツッコむ。しかし、銀時（土方）とおそ松（零斗）は

「よかったな、俺の分身」

「幸せに生きろよ、俺の分身」

と何故か泣いていた。

「なんで泣いてんだアンタら!？」

零斗（おそ松）は銀時にツッコんだ。

「ドーすんだアレ!! どうやってアイツから魂取り戻すんだ!! 絶対だまってねーぞ千〇子」

既にいい感じになっているアナスタシアとどぎえもんさんを見た土方（銀時）が叫ぶ。
と、そのとき、

「さっ今日も腕によりをかけてご飯を作ったから食べて」

とアナスタシアが皿の上でグツグツと煮えたぎっている麻婆豆腐をどぎえもんさんに手渡した。

「いただきやす」

どぎえもんさんは何も警戒する事無く麻婆豆腐をレンゲで掬い、口にした。

だが――。

ドサア!!

「!!」

アナスタシアの作った麻婆豆腐を口にした瞬間、どぎえもんさんは仰向けになってその場に倒れ込んでしまった。

「どぎえもんさん!!どうしたの!？」

アナスタシアは慌ててどぎえもんさんに駆け寄った。実はアナスタシアが作った麻婆豆腐は言峰綺礼から教わったレシピから作ったためにその辛さはサーヴァントすら倒せるほどの辛さでありどぎえもんさんはそのあまりの辛さにあたり、ガクガクと震えるどぎえもんさんはこう言った後、気絶した。

「オ・・・俺は一体、誰だ?」

「それで記憶無くなつてたんかいイイイ!!」

どぎえもんさんに記憶が無い原因を知った土方（銀時）は思わず叫んだ。

「どぎえもんさん、しつかりして!!」

アナスタシアはどぎえもんさんに必死で呼び掛けるがどぎえもんさんは気絶したまま動かない。

「ああなんて事・・・、どうしてまたこんな事に」

「てめーの作った劇物のせいだろうが!!」

土方（銀時）は草むらの影から、どぎえもんさんの前に慟哭するアナスタシアにツツコんだ。

「土方さん、劇物という言葉は見逃せませんね。あの麻婆豆腐は普通に美味しいじゃないですか」

「黙れ味覚バカ!! あんなモン笑顔で食うてめえと一緒にすんな!!」

土方（銀時）が麻婆豆腐を劇物扱いしたので零斗（おそ松）がその事に文句を言うが、土方（銀時）はそんな文句を一蹴する。

「オイ!! あのままじゃお前らの半身は一生飼い殺しだぞ!!」

土方（銀時）はどぎえもんさんがアナスタシアに飼い殺しにされかねない事を危惧して銀時（土方）とおそ松（零斗）に叫んだ。

とそのとき、

「おい、おそ松・・・何とかあの女を説得してこい」

「ええ!!」

突然の銀時（土方）の提案に驚いたおそ松（零斗）は声を上げた。銀時（土方）はおそ松（零斗）にその理由をこう説明した。

「仕方ねエだろ、この中であの女とマトモに話したことがあるの零斗だけだ。だが、今の零斗はおそ松（お前）だ。いきなり接触したら不審がられる。お前が零斗として接触する方が自然だ。なんとか零斗らしく振る舞って零斗らしく発言してこい」

銀時の指示に話を聞いていた零斗は怒りを覚え、すぐにこう言い返した。

「じよ・・・、冗談じゃないですよ!! 何でこんなクズがそんなことを・・・」

「じゃあ、お前。このままの身体がいいんだな」

文句を言おうとした零斗（おそ松）だが、銀時（土方）の言葉を聞いた零斗（おそ松）は怒りを堪え、とりあえずおそ松（零斗）が零斗のフリをしてアナスタシアに接触をはかるのを見守ることにした。

「よ……よう」

草むらから出てきたおそ松（零斗）はアナスタシアに声をかけた。アナスタシアはおそ松（零斗）に振り向いた。

「ア、アナスタシア、邪魔するぜ」

「あら零斗、何か用かしら？」

「いや、パチンコ帰りにちよつくら寄った」

おそ松（零斗）は何故かよだれと鼻水を垂らしながらアナスタシアと接触をはかっていた。

「オイ、なんでよだれたらしてんだよアイツ。つーか、んな顔して女と接触する気かよ、あのバカは」

土方（銀時）は馬鹿面をしているおそ松（零斗）にツッコんだ。

「あら珍しいわね」

アナスタシアはおそ松（零斗）に声をかけた。草むらの中では零斗（おそ松）が「なんで穴という穴から水たらしてんだ！俺がそんな顔した事があつたか!!」

と額に青筋を浮かばせながら怒鳴っていた。

「え？珍しいの？い．．．いや、あのアレ」

とんでもないアホな表情をしたおそ松（零斗）がしどろもどろになりながらアナスタシアにこう言った。

「き．．．急にお前の顔が見たくなっちまってよ」

それを草むらから聞いていた零斗（おそ松）はぶちギレる寸前になって、

「俺、そんな事言わねエエエエ!!」

と小声で叫んでいた。

流石のアナスタシアもおそ松（零斗）に疑問に思ったらしく、

「あの．．．、零斗。何言ってるの。何か悪い物でも食べたの？」

と少し口元に手を当てて引いていた。

「（マズった）」

おそ松（零斗）は零斗とアナスタシアとの距離がどのくらいか全然解っていないかった。

「（コイツらの距離感がよく解らねエぞ、もつと遠いのか）」

そしておそ松（零斗）は訳もわからず、こんな態度でアナスタシアにこう言った。

「か．．．勘違いしないでよね。顔が見たいと言っても、別にアンタの事が気になるわけじゃないんだから。そのマヌケツラ見に來ただけなんだから。本当に勘違いしないで

よね」

「どんなツンデレキャラ!?!」

土方（銀時） 思わず叫んだ。

「お前一体、俺がどんな風に見えてんの!?!」

零斗（おそ松） もおそ松（零斗） にツッコミを入れる。おそ松（零斗）の横ではアナスタシアが少々呆れ返っていた。

「あの……、何しに来たのかしら、零斗」

アナスタシアがおそ松（零斗）に何しに来たか訊いてきた時だった。

「風の噂で聞いたのさ」

なんと、おそ松（零斗）は急に優しい声でアナスタシアにそう言ったのだ。

「アナスタシア、お前、家に何か連れ込んでるらしいな」

「え?」

「単刀直入に言う」

おそ松（零斗）は急に優しくアナスタシアの左手を掴んだ。

「あんな男（やつ）とは別れて、俺と付き合っちゃいなよ」

が、ドン引きしてるアナスタシアにナンパ師のように優しく語りかけた、次の瞬間――

ゴスツ!!

零斗（おそ松）が、おそ松（零斗）の頭を地面に叩きつけた。

「何してんだこの腐れゴミクスがアア!!」

零斗（おそ松）はおそ松（零斗）に怒号を浴びせながらそうツツコんだ。それに続くように銀時（土方）と土方（銀時）も歩いてやってきた。

「あつ・・・あの、あなたたち。どうしてここに」

突然入ってきた零斗（おそ松）たちにアナスタシアが、少々驚きながら訊いた。それに対しなんと応えようか迷っている銀時（土方）と零斗（おそ松）の代わりに土方（銀時）が答えた。

「悪いな。このバカの言った事は忘れてくれ。それより、聞いたぜ。アンタ化け猫飼っちゃまつてるみてーだな。単刀直入に言う。あの猫を譲ってくれないか？」

土方（銀時）は直接、どぎえもんさんを引き渡すようアナスタシアに言った。

だが、土方（銀時）の思惑通りにはいかなかった。

「ダメよ銀時先生。そんな事できないわ。どぎえもんさんは私の大事なペットなんですから」

「そこを何とか・・・」

土方（銀時）は再三アナスタシアに頼み込む。だが、アナスタシアは

「私をもらうつもりなら、どぎやもんさんごともらうつもりで来てもらわないと」

「いや、そうじゃなくて」

土方（銀時）はアナスタシアにツッコむが、アナスタシアは

「これだから銀時先生は。もう、一点減点」

と勝手に土方（銀時）の何らかの点数を下げたのだった。

「いや、そうじゃなくて、あの猫が危険——」

土方（銀時）がしどろもどろになりながらもアナスタシアを説得しようとした、その時だった。

「それより、聞いたぜ」

今度は銀時（土方）が白眼を向き、顎をしゃくらせながらアナスタシアに話しかけた。

「ひでーじゃねーか。アンタにはぐだ男・・・藤丸兄という人がありながら。真選組

副長として黙って見過ごせねーな。単刀直入に言わせてもらう」

「オイ、なんで白眼向いてんだ。なんでしゃくれてんだ」

白眼を向きながら話している銀時（土方）に土方（銀時）が怒りを露にしていた。

そんな土方（銀時）の思いを無視して銀時（土方）はアナスタシアを壁際に押し付けるとロリポップを取り出してこう言った。

「腐った猫も腐ったガチャ中毒者も忘れて、この鬼とレッツパーリーナイトしないかい」

「オメーも同じだろーがアア!!」

アホみたいなナンパをした銀時（土方）にぶちギレた土方（銀時）と零斗（おそ松）、おそ松（零斗）は銀時（土方）の顔面に蹴りを入れた。銀時（土方）は壁にめり込み、アナスタシアは間一髪でしゃがんで蹴りをかわした。

「テメーと同じようにフォロワーしてやってんだろーが。感謝しろよフォロワー」

銀時（土方）は土方（銀時）に懲りる事無くこう返す。

「誰がフォロワだ！っーかどういふ思考回路ならナンパするのがフォロワーになるんだよ!!」

土方（銀時）が銀時（土方）に対して怒号を浴びせた時だった。

「やめて、3人とも。私を取り合ってケンカするのは」

「オイいいいい、何かややこしい事になってんぞ!!」

アナスタシアが頬を紅潮させながらそんなことを言い始めたため、零斗（おそ松）は思わず声を上げた。

「3人がそんな事思ってたなんて私・・・、知らなかった」

「いやいや違う!!銀さんは違うから!銀さんはもつと尻の軽い女が好きだから!」

「土方さんこそ違うわ!土方さんは前髪V字の女しか受け付けねーから!」

「俺だつて違うから!俺はトト子ちゃんしか異性に目がいつてないから!!」

銀時（土方）と土方（銀時）、おそ松（零斗）は慌てて勘違いしているアナスタシアにツッコんだ。

「マスターは、この事・・・、知ってるのかしら」

「ああ、これで俺たちマスター友達ですね、って喜んでくれたよ」

「適当な事言ってるじゃねーよ!!」

零斗（おそ松）は何かをやり遂げたような顔でアナスタシアに適当な事を言う銀時（土方）にツッコんだ。

「ストーカードックも、この事・・・、知ってるのかしら」

「ああ、俺達でアナスタシアの穴兄弟になろうって喜びながら言ってたよ」

「どこに喜ぶ要素があんだよ!!」

とんでもないことをほざいているおそ松（零斗）に土方（銀時）もツッコんだ。しかし、アナスタシアは変な決意をしていた。

「もう戻れない所まで来てしまったのね。解りました。銀時先生か土方さんか零斗か、年収及びその他諸々をふまえて一週間考えてみます!」

「「「そうじゃなくてエエエ!!あの化け物と別れろって言ってるの!!」」」

最早勘違いしまくりのアナスタシアに銀時、土方、零斗、おそ松は声を揃えてツッコミを入れたそのときだった。

「いい加減にしてください!!」

庭園の奥から、藤丸立香が怒号を上げながら姿を現した。

「僕のいない間に、勝手にぞろぞろ男を連れ込んで。銀さんにも土方さんにも、そしてどぎえもんさんにもアナスタシアは渡したりしませんよ」

銀時たちは冷や汗を流しながら立香に注目する。そんなことを気にせず立香は銀時達にこう叫んだ。

「アナスタシアは、この俺のもですよ!!」

「ふ……、藤丸兄!!」

「(元に戻ってる……。まさか……。!!)」

この間の騒動でおかしくなっていた1人である立香だが、今の立香は普段と同じ様子になっていて銀時(土方)と零斗(おそ松)はおどろいていた。

そして立香は親指を立て、誰かに合図を出した。

「もう心配はいらんどシ、話は全て聞いた。あとは、俺達に任せておけ」

銀時たちの背後から現れた近藤は土方(銀時)の肩に手を乗せてそう言った。

「(……。近藤さん!!)」

土方(銀時)も想定外なことに驚いてそう思った。そのとき、近藤は刀を抜き、未だ倒れたままのどぎえもんさんに切っ先を向ける。

「アナスタシアさん、早く藤丸くんと逃げるんだ！この化け物は危険だ！ある男たちの悪意から生まれた邪悪の権化！！ここは我々が引き受ける！！」

近藤がそう言うのと、新八はアナスタシアの肩に手を当てる。

「どげえもんさんに何をするつもり！！」

「いいから、アナスタシア早く！！」

突然の事態にアナスタシアは驚き、混乱したが、立香はアナスタシアの手を掴んで無理矢理引つ張る。

「離して！！」

アナスタシアがそう叫んだ瞬間、立香のスマホが庭園の地面の上に落ちた。

「よし！！アナスタシアと化け物は引き剥がした！トシ！！万事屋！！おそ松！！零斗！！早く外から荷車を！目を覚ます前にコイツを全自動卵かけご飯製造機の元に運ぶんだ！！」

近藤は銀時たちにそう指示を出しながら、近藤は4人にこう叫んだ。

「早く行けエ！！」

銀時たちはすぐに走り出した。

「（・・・めーら）」

近藤が用意したという荷車に向かおうとしながら4人はこう思った。

「（（てめーら、リーダー（俺たち）がいなくなつて、てめーらはできる子だつて信じて

たよ!!)」「」

銀時たちが道場の門から出た時だった。

「・・・、あれ？」

銀時たちは辺りを見回したが、荷車が何処にもない。

「何もねエ・・・」

銀時（土方）が声を上げた、そのときだった。

『何やってんですか4人とも』

どこからともなく、立香の声が聞こえてきた。銀時たちは思わず辺りを見回した。

『まんまとやられましたね』

「藤丸兄？どこにいるんだ」

「声だけか・・・、これは・・・」

「声の感じからして、そこまで遠いところにはいないと思うんだが・・・」

「見当たりませんか・・・」

銀時たちは立香がどこにいるのか探そうとキョロキョロと見回す。どこからともなく聞こえてくる立香の声は突然、4人にこう告げた。

『それでもリーダーですか。あの二人は・・・』

その頃、屋敷の外の通りにて――。

「アナスタシア急ぐんだ！もうこの島は危険だ！！二人で遠い国に高飛びでもしよう！！」

立香がそう言いながらアナスタシアを引っ張っていく。

そのとき、立香は突然振り向き、

「そう、アナスタシアと僕、二人だけの国（アイランド）へ！！」

と、どこかの目のくまが酷いクリプターが言いそうな台詞を言い出した。

一方、近藤は道場の敷地にいつの間にか運び込んだ荷車に、どぎえもんさんを乗せて引いていた。

「ようやく、二人きりになれたわね。ごめんなさい銀さん、貴方が本当の銀さんって気づいてあげられなくて」

近藤は急に口調が変わり出していった。

「でももう大丈夫、これからはずっと二人きり。見間違えたりしない。私とペットいや、貴方と私（ペット）だけの世界なんだから」

近藤はどこかのくノーストーカーが言い出しそうな事を言い出しながら荷車を猛スピードで引くのであった。

『あいつら、魂（なかみ）、立香（カドック）と近藤（さっちゃんさん）です』

庭園の近くにある花壇の上から立香の声がしたので銀時たちは花壇の上を見た。するとそこには立香のスマホが落ちていた。

そのとき、立香のスマホから立香の声がした。

『僕らも魂（なかみ）、入れ替わっちゃいました』

銀時たちは、思いもしなかった出来事に絶句した。

「立香お前、どうしたんだよ!? なんでスマホだけになっちゃってんだよ!!」

『源外さんたちから銀さんと土方さん、零斗とおそ松さんの身体が入れ替わったという話を聞いたままではよかつたんだけど、その信憑性を説くためにみんな魂と身体までバラバラにされて元に戻ろうとしたらスマホに魂が入っちゃったんだよ!』

どうやら源外とアザゼルによって立香を含めたあの場にいた連中の魂と身体が入れ替えられてしまったようだ。その事実を知った銀時たちが目の影を落としていると

「銀さん!? モタモタしてる場合じゃないですよ!? 僕ですよ僕!? 新八ですよ!!」

「副長!? 俺ですよ山崎ですよ!! みんな身体が入れ替わってパニックになっちゃってます!!」

「おそ松兄さん!? 僕だよチョコ松!! このままじゃみんな元に戻れ——」

新八のメガネをかけた1年の織斑一夏に魂が入れ替わったらしき志村新八、用務員の長谷川泰三と魂が入れ替わったらしき新撰組の山崎退、そして君月土方と魂が入れ替わったらしきチョコ松が走りながら話しかけると、

ドサア!!

「「グボオっ!?!」」

新八（二夏）、山崎（長谷川）、チョロ松（君月）は足を挫いて転んでしまい、新八のメガネと長谷川さんのグラサン、君月のメガネが地面に落ちたかと思えばそれぞれ銀時（土方）、土方（銀時）、おそ松（零斗）の前で綺麗に止まり、立香の魂が入ったスマホは零斗（おそ松）が拾っていた。

『銀さん早くして下さい!!手遅れになる前に!!』

『早くあの人たちを追いかけましょう!!』

『早く僕達を身につけて!!』

『急いでください!!』

新八のメガネから新八の声が、長谷川さんのグラサンから山崎の声が、君月のメガネからチョロ松の声が聞こえ、新八（新八メガネ）、山崎（グラサン）、チョロ松（君月メガネ）、立香（スマホ）の順で銀時たち4人に頼んだ瞬間、

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

グシャ!! ポイ

銀時（土方）、土方（銀時）、おそ松（零斗）は新八（新八メガネ）、山崎（グラサン）、チョロ松（君月メガネ）を踏み、零斗（おそ松）は立香（スマホ）を庭の池に投げ捨てるのだった。

魂と身体が入れ替わろうとバカはバカである

満月の光によって明るく照らされている夜道をアナスタシアの手を無理やり引つ張っているカドック（立香）。

「マ、マスター離しなさい!! 貴方本当にマスターなの!？」

「な、何を言っているんだアナスタシア!! 僕は君のマスターの藤丸立香だ!! (グフフフ!? このままこの身体を利用して、アナスタシアにあんなことやこんなことをして……)」

アナスタシアは無理やり手を引つ張っている人物が本当に自分のマスターなのか疑問に思い質問し、それにカドック（立香）は振り返りながら答えるが、内心スケベなことを考えているため気持ち悪い笑みを浮かべていた。そしてアナスタシアは走る途中で足を止めた。

「違う……貴方はやっぱりマスターじゃないわ!？」

「なあ!?! 何言ってるんだアナスタ——」

「つ!?! キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

アナスタシアが立香（カドック）を否定すると立香（カドック）はアナスタシアの肩を掴んできたので、アナスタシアは思わず空高く悲鳴を上げてしまった。



「どうやらしくじったようねあのストーカー。所詮は雷帝との戦闘の99%を他者の力だよりの甘ちゃん。でも私はしくじったりしないわ。銀さんの半身は私の物」

「(そう?! 私の脳内の99%は銀さんの股間のバナナでっ)」

アナスタシアの悲鳴を聞いてそんなことを言ったのはどぎえもんさんを荷車に乗せて運んでいる猿飛(近藤)である。猿飛(近藤)はそんなことを呟き考えながら欲にまみれた笑みを浮かべていると

ガシイ!?

「ぐふう!?!」

「・・・聞こえる、姐さんの声が・・・」

さっきの悲鳴で目を覚ましたどぎえもんさんは荷車から立ち上がり、猿飛(近藤)の頭を足蹴にすると近くの屋根に飛び上がりそのまま悲鳴の聞こえた方へと屋根伝いに走りながらアナスタシアの悲鳴が聞こえた方へと走っていた。

「ああ!! 銀さーりーん!!」

出遅れた猿飛(近藤)は手を伸ばすが、どぎえもんさんに届くわけもなくその手は間に合わずにただ叫ぶだけになってしまったのだった。

一方その頃、零斗たちというと

「なんでお前らも魂入れ替わってんだよ!!」

何故かメガネやグラサン、スマホに魂が入ってしまった新八、チヨロ松、山崎、立香に零斗は怒りをぶつけていた。銀時（土方）は新八（新八メガネ）を、土方（銀時）は山崎（グラサン）を、おそ松（零斗）はチヨロ松（君月メガネ）を、ゴージャールのようにかげ、零斗（おそ松）は立香（スマホ）を胸ポケットにしまつて猿飛（近藤）を探していた。

「しかも身体の方に至ってはなんだ、グラサンとメガネをとつたらただの死体になつちまつたじゃねーか!!」

『文句があるなら源外さんたちに言つてくさいよ』

新八（新八メガネ）に文句を言う銀時（土方）だが、新八（新八メガネ）を含めた魂と身体が入れ替わってしまった皆もまた源外とアザゼルに文句を言いたいものだから

『とにかく問題は最早、おそ松兄さん達だけのものじゃないんだよ。僕達も身体を取り戻さないと!!』

チヨロ松（君月メガネ）は零斗たちに自体の深刻さを伝えた。

「余計な仕事増やしやがって。ほかの連中は?」

『ストーカーの二人を除いてほかの皆さんは自分の身体を探してますよ』

ブチギレる寸前になっている土方（銀時）が山崎（グラサン）が説明した。

『例え、魂と身体がバラバラになっても、みんなの力を合わせれば……』

チヨロ松（君月メガネ）がそう言いながら銀時たちと共に十字路に差し掛かった時、チヨロ松の身体が姿を現した。

『ぼ、僕の身体だ!!』

自分の身体をようやく見つけたチヨロ松（君月メガネ）は声を上げた。

『ようやく見つけたよ!! 一体誰が僕の身体に入ってるんだ!?!』

チヨロ松（君月メガネ）はメガネを揺らしながら言った。

チヨロ松の身体は零斗たちに気づくと

「貴方たちの中に、首領（ドン）・ヴァレンティノーはいらっしゃいますか？」

そう言いながらイタリアのマフィア、ヴァレンティノー・ファミリーのボスであるヤギの首領・ヴァレンティノーの写真を見せてきた。

「おめーかよロレンツォ!!」

「ぐほおっ!?!」

零斗（おそ松）はチヨロ松の中の人物がヴァレンティノー・ファミリーの幹部にして首領・ヴァレンティノーの右腕であるロレンツォだと気づき、チヨロ松（ロレンツォ）の顔面に蹴りを入れた。

「何でマフィアのテメーまで入れ替わってやがんだよ!?!」

「実は貴方たちが争っていたパチンコ店の隣にある薬屋に我々はいたのです。用を終えた我々が店を出た時たまたま巻き込まれてしまったのです」

「なるほど、そんなことが」

零斗（おそ松）がロレンツォにツッコむとロレンツォは大したことでもないのかあつさりと答えてくれ、おそ松（零斗）はその言葉に納得した。

「つーか、ロレンツォが童貞チヨロシコスキーの身体に入つてんなら他の奴らの身体はどうなつてんだよ」

『おい、誰が童貞チヨロシコスキーだコラ？』

てつきりチヨロ松の身体には君月が入っていると思つていた銀時（土方）は完全に予想外の人物がチヨロ松の身体に入つていたため、他の連中の身体の中身も予想出来ないでいた。また、チヨロ松（君月メガネ）が童貞チヨロシコスキーという言葉に反応した。みんなスルーしていると、前の方から立香、新八、山崎がこちらへとやってきた。

『あ、今度は僕達の身体がやつて来ました!!』

『よかった、無事だったんだ・・・』

『これで少しだけ安心——』

自分の身体が無事であることに安堵する新八、山崎、立香。だが——

『なにジロジロ見てんだよ。殺すぞ？』

「圧政!!」

「デユフフ!!」

顔がわかる距離まで来るとプラカードで会話するエリザベスになった新八、スパルタクスのように筋骨隆々になった山崎、黒髭がよくやる気持ち悪い笑顔を浮かべた立香がやって来た。

『『『コレエエエエ!?』』』』

予想外の人物が入っていたことに新八（新八メガネ）、山崎（グラサン）、立香（スマホ）は表情が分からないはずなのに驚いていることは誰にでも分かるものだった。

『何であの場になかった黒ひーやスパさんまで入れ替わってんのさ!』

「いやー、どうやらマスター氏とパスが繋がっている拙者たち一部のサーヴァントも身体が入れ替わってしまったようですよ?」

『訳がわからないよ!』

立香（スマホ）は黒髭にツッコむと黒髭（立香）は気持ち悪い笑顔を浮かべながら立香（スマホ）に応えると立香（スマホ）は黒髭（立香）にツッコんだ。

「まあとりあえず立香たちの身体の所有者が誰かわかったんだからよしとするか」

『なにも良くねえよ!!とんでもねえ奴らが僕達の身体にいることしか分かってねえんだから!!』

零斗（おそ松）がそんなことを言うのと納得がいつていない新八（新八メガネ）がツツコミを入れる。

『つーか、俺たちよりもつとヤバい奴らいるからな』

「あん？てめえらよりやべえつて一体どんな……」

エリザベス（新八）がプラカードでそんな会話をすると銀時（土方）は怪訝そうな顔をしながらかエリザベス（新八）たちがやってきた方を見ると……

「これがハジメの聖剣……」

「ほうほう……」

「これは中々……」

「ちよつと女子ー？そういうのやめてくれるー？」

ユエ（ハジメ）がシア（ラフタリア）、香織（リンゼ）、ティア（ダクネス）、八重樫（綺凜）がハジメさんの股にぶら下がっているものを見ているのをハジメ（ユエ）が注意してたり

「ヤレヤレ、まさか俺達がこんな目に合うとはな……」

「グレートですよ、コイツは……」

「驚きじやのうこれは……」

「そうですね……」

「私たちの身体でジョジョ立ちするのやめてくれないかしら!」

承太郎(邪ンヌ)、仗助(ジャック)、ジョセフ(新宿のアーチャー(以降新茶))、ジョルノ(ホームズ)がそれぞれジョジョ立ちしているのを邪ンヌ(承太郎)がツツコミを入れる。その近くではジャック(仗助)、新茶(ジョセフ)、ホームズ(ジョルノ)がその様子を見ていたり

「俺の身体から早く出ていきやがれこのヤギ!!」

「先に吾輩の身体から出ていくのは貴様であるー狼!!」

「俺、最強の肉体を手に入れちゃったぜ!!」

「緒方、俺の身体ではしゃぐな。それ以上はしゃぐというなら貴様の息の根を止めるぞ」
洋(ヴァレンティーン)とヴァレンティーン(洋)が取っ組み合いをしてたり、その横で緒方(荻野)が蔓延の笑みを浮かべながらはしゃいでいるのを荻野(緒方)が目付きを鋭くしながら指を鳴らしていたり

「こ、これが持たざる者と持つものの景色の違いっ!」

「決めましたっ!!この先の人生、アスナさんとして生きていきます!!」

「やめてっ!」

めぐみん(ゆんゆん)、シリカ(アスナ)は以前の自分の身体では感じることのなかった重力に喜びを感じるとそのままこの身体で生きて行く決心を決めるのをゆんゆん(めぐみん)

ぐみん」とアスナ（シリカ）が止めたりなどと身体と魂が入れ替わって混乱してたりこの騒動を利用しようとしているものまで現れているのだった。

「誰一人として冷静な人がいませんね」

「あたりまえだ、こんな状態に冷静になってる奴がいるわけがないだろうが」

零斗（おそ松）は中身と魂が入れ替わってる連中を見ながらそう言うとう方（銀時）が答えたときだった。

『その人たちはまだマシですよ』

『僕達なんて……』

そんな声が地面の方から聞こえてきたので声の聞こえた方に零斗たちは視線を向けるとそこには剣やI.S、機攻殻剣（ソード・デバイス）、携帯などが転がっていた。

『どうも、固有霊装（デバイス）の陰鉄と入れ替わった黒鉄一輝です』

『I.S『白式』と入れ替わった織斑一夏です』

『機攻殻剣『バハムート』と入れ替わったルクス・アーカディアです』

『鏡花ちゃんの携帯と入れ替わった中島敦です』

一輝（陰鉄）、一夏（白式）、ルクス（バハムート）、敦（携帯）が声をかけてきた。その近くには一輝、新八、ルクス、敦の身体が魂の抜けた抜け殻のような状態で転がっていた。

「何でお前らまで無機物と入れ替わってんだよ!? 眼鏡が本体なのは新八だけで充分だろうが!!」

『誰の本体が眼鏡だゴラア?!』

銀時（土方）が頭を抱えながらそんなことを言うので新八（新八メガネ）はメガネを揺らしながら怒鳴った。

「しかしどうしますか土方さん。銀さんとクズを含めて入れ替わった連中は現状役に經つと思えませんよ」

「元から期待できるようなもんじゃなかっただろぅが」

入れ替わった人たちを見て零斗（おそ松）は土方（銀時）とそんなことを話していた時だった。

「お困りのようだね。君たち」

『その声はまさか芥川!?!』

聞こえてきた声に真つ先に反応した敦（携帯）が声をあげると、零斗（おそ松）たちの方へとボートマフィアの芥川龍之介がやって来た。

「そう! 武装探偵社の威信を背負いし男、太宰治に全て任せれば問題なしさ!!」

「帰れ自殺マニア」

普段の芥川なら絶対にしないでであろう笑顔になりながらそんなことをほざいている

のは敦の上司であり元ボートファイアである太宰治で、現在は芥川と魂と身体が入れ替わったようだ。そしてそんな太宰（芥川）に対して銀時（土方）は半眼になってそんなことを言った。

「おやおや、人が親切心で手助けをしようと言ってるのに酷いじゃないか銀時」
「てめえが関わったらさらにめんどくせえ状況になるに決まってるんだろが」

険悪な雰囲気のように思えるがこの2人はよく飲みに行くほど仲は良いのだが、太宰の自殺に巻き込まれることが多いのでこんな感じである。

「まあ落ち着いて私の話しを聞きたまえ。今の私は何故か私自身のと芥川くんの異能力が両方使えるようなんだ」

「マジですか」

「マジだよ。だからね」

太宰（芥川）の言葉に零斗（おそ松）が驚いて確認すると、太宰（芥川）はそれを認めながら零斗たちの後ろの方に指を向けた。零斗たちは太宰（芥川）が指を向けた方へと顔を向けるとそこにはアナスタシアを抱き抱えながら屋根伝いに走っているどぎえもんさんがいた。

「姐さんは誰にも傷つけませんぞオオ!!」

どぎえもんさんは零斗たちを見ながらそんなことを叫び、屋根の上を移動しながら海

の方へと走っていった。

『ア、アナスタシアアア!!』

立香（スマホ）はどぎえもんさんに抱えられたアナスタシアを見て叫んだ。

「クソ、馬鹿どものせいで化物がまた覚醒しちゃった!!」

銀時（土方）はカドックとさっちゃんのをいで覚醒したどぎえもんさんを見て歯噛みするが、すぐに土方達と共に民家の塀をよじ登り始めた。

「私の力での化物を捕まえようじゃないか。異能力『羅生門・顎』!!」

太宰（芥川）の着ている黒外套が黒獣の顎へと変貌しどぎえもんさんに襲いかかるが、どぎえもんさんは迫ってくる黒獣の顎を横殴りしてぶっ飛ばした。

『痛ったあ!?! ってあれ? なんか身体の調子がおかしいような?』

殴り飛ばされた黒獣? がどこぞの自殺マニアみたいな感じで喋っているのを零斗たちは半眼で見、そして芥川の身体の方を見ると黒外套が無くなり、白目を剥いて倒れていた。

「アイツ（太宰）が入ってたの芥川の身体じゃなくて芥川の異能力の方だったアアアア!?!」

銀時（土方）は予想外の展開にそう叫んでしまうのだった。

「銀さん! そんなこと言ってる場合じゃありませんよ!! あの化物との距離がどんどん離

されています!!」

どぎえもんさんを追いかけてながら太宰（黒獣）に叫んでいる銀時（土方）にツツコミを入れる零斗（おそ松）。どぎえもんさんは想像以上に足が早いようで零斗たちが必死に追いかけるが距離は一向に縮まらないでいた。

「追ええええ!!逃がすな!!」

土方（銀時）がそう叫ぶと、土方（銀時）の瞳にどぎえもんさん追いかけている2つの影が映った。

「あ、あいつらは!？」

銀時（土方）が驚いていると、2つの影はどぎえもんさんの頭上まで飛び上がっており、月明かりによってその正体が照らされて明らかになった。

「とらえた!!」

その正体は、万事屋の神楽と真選組切込隊長沖田総悟だった!!

「僕たちのコンビネーション、見せてあげようよ総くん!!」

「了解、グラさん!!」

「それじゃあいくよおおお!!」

「誰が総くんアルかアア!!」

「グラさんじゃない、バ神楽ちゃんだ」

神楽？と沖田？がそう叫びながらどぎえもんさんに攻撃しようとした瞬間、トド松？と十四松？が怒号を上げながら2人の背中を踏みつけた。零斗たちはあまりの出来事に驚いてしまい、啞然としながらその様子を見ていた。

そして背中を踏みつけられた神楽？と沖田？はそのままどぎえもんさんの上に落下し——

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!! (どぎえもんさんが倉庫の屋根を破壊しながら落ちた音)

知らぬ間にか海の港の倉庫まで来てしまったのかどぎえもんさんは多数ある倉庫の内一つの屋根の上に立っていたので、2人とぶつかりそのまま屋根を突き破って倉庫の中にそのまま落ちていった。

「仕留めたあああ!!」

零斗たちは急いで倉庫の中へと駆け込んで行った。

「神楽アアア!!」

「総悟オオオ!!」

銀時（土方）と土方（銀時）はそう叫びながら倉庫の中に入ると、倉庫の中は土煙が上がつっていた。そして中では神楽？、沖田？、トド松？、十四松？が倒れていた。

「誰だアアア!! どれが誰で誰がどれだアアア!!」

おそ松（零斗）は彼女たちの身体にはいつているのが誰の魂なのか分からなすぎて頭を抱えて叫んだ。

「総くんらん!! しっかりしてエエ!! 酷い、なんでこんな事を!!」

神楽? がまだ気絶している沖田? に懸命に声をかける。

「だからその身体でそいつとベタバタすんじやねーって言ってるアル!! ブツ殺されてーのかトツテイ!!」

トド松? は神楽の口調で神楽? に怒号をあげた。

「え!? アレってトド松なのかよ!」

おそ松（零斗）はまさか自分の兄弟の

一人が神楽と入れ替わっていることに驚いていた。そしてトド松の身体に入っているのがどうやら神楽のようだ。

「えー、別によくない?」

「そうそう、せっかく入れ替わったんだから楽しまないとねー」

「僕は万事屋の紅一点として、十四松兄さんは真選組一番隊隊長として。そして君たちはニートとしてそれぞれの生き方を全うしようよ」

トド松（神楽）と十四松（沖田）がそんなことを言うが、そんなことを許す神楽（トド松）ではない。

「ふざけんじやねえアル!! 銀ちゃんみたいなのクデナシのお前らとして生きていくなんて冗談じゃないアル!!」

「おい、何で俺がこんな奴らと同列に扱われなくちやいけねえんだよ」

「旦那ア、五十歩百歩つて言葉知つてますか?」

神楽（トド松）の言葉に銀時（土方）が額に青筋を浮かべるのを沖田（十四松）がフォローする。

そんなくだらないことを話している間に辺りに舞っていた土煙が少なくなり、2つの影が姿を現した。そこにはアナスタシアとまだまだ無傷のどぎえもんさんがいた。

「みんな……」

『アナスタシア!!』

哀しい目をするアナスタシアに新八が声を上げる。アナスタシアは銀時達にこう言った。

「これ以上、どぎえもんさんを追い詰めるのはやめて。私達は平和に暮らしたいだけなの。どうしてみんなこんな事を……!! それにみんな、なんだか様子が変よ。一体どうしてしまったの」

『アナスタシア、これは……』

立香（スマホ）がアナスタシアに理由を言おうとしたが、零斗（おそ松）がこう言っ

て遮った。

「しゃべんな立香。余計事態がややこしくなる」

「アナスタシア・・・、実は、どぎえもんさんはある人の飼い猫だ。そいつは覚えてねーかも知れねーが、飼い主の元に返さなきゃならねエんだ。お前からも説得してやってくんねーか」

銀時（土方）はアナスタシアにどぎえもんさんを返すように言った。しかし、アナスタシアは躊躇った。

「・・・。どぎえもんさんは渡せません。いつもなら信じられるけど、・・・やっぱりみんな今日はおかしいもの」

「な・・・、何がおかしいって言うんだよ」

銀時（土方）がアナスタシアに痛い所を突かれて少し狼狽えながら返したときだった。

「言いがかりはやめてくれないかしら、アナスタシアさん」

「みんな魂と身体が入れ替わっちゃってますけど、みんないつもと変わらないですよ」

いつの間にか銀時達と合流した百代と深夏がせっかく零斗（おそ松）が立香（スマホ）の言葉を遮ってまで隠そうとした事実をあっさり言ってしまった。

「オイ、いいいい、何とんでもねエ事実をあっさりカミングアウトしてんだあんたら!! つーかあんたら中身誰だ!!」

『零斗、その人達は紅葉さんと優太くんですよ』

零斗（おそ松）が百代？と深夏？に怒号をあげると、立香（スマホ）は零斗（おそ松）に百代？と深夏？の中身が誰であるかを伝えた。百代の身体に入っていたのは紅葉知弦、深夏の身体に入っていたのは佐々木優太だった。

「マジで!?!何でもいからお前ら黙ってるよ!!」

銀時（土方）は知弦（百代）と優太（深夏）に怒号をまたしても上げた。

「ホラ、やっぱりおかしいわよ。魂が入れ替わったただなんて言われても意味が解らないわ」

アナスタシアが銀時達に引きながらそう言った。

「な、何がおかしいんだ。俺達は魂が入れ替わったとしても、魂はいつもと変わってないんだ」

「そうよ」

突然、いつの間にかここにやって来ていた猿飛（近藤）が銀時（土方）に抱きついてきた！銀時（土方）はあまりの気持ち悪さに顔をひきつらせた。

「言いがかりはやめてくれないアナスタシアさん。他の奴は知らないけど、銀さ……トシはいつもの私のトシよ。ねエ〜、トシ」

「黙ってるよ、さっちゃんんんん!!」

銀時（土方）は猿飛（近藤）に殺意を露にしたが、すぐにこう続けてアナスタシアを
ごまかそうとした。

「な、何がおかしいんだ。俺と近藤さんが仲良いのは知ってるだろ。竹馬の友だからな」
「銀さん、乳首の友になっちゃってるけど大丈夫？」

猿飛（近藤）に乳首をコリコリと弄られ、気持ち悪さに鳥肌を立てる銀時に零斗（お
そ松）がツッコんだ。猿飛（近藤）は「浮気してゴメンね。やっぱり分身よりこつちだ
わ」と輪にかけて気持ち悪い台詞を言い出していた。

「お前が知らなかっただけで、いつもこんなカンジだから。ぶっちゃけて言うと、真選
組なんて全員ホモだからね。だから近藤さんもお妙にホレたワケだからね」

「誰がホモだアアア!!」

アナスタシアを何とか誤魔化そうとした銀時（土方）だが、その話を聞いてぶちギレ
たお妙（優太）は銀時（土方）の顔を平手打ちにして銀時（土方）を吹き飛ばした。そ
のとき、新八（新八メガネ）も外れてしまう。

「おっ、落ち着け、アナスタシア」

今度はおそ松（零斗）が慌ててアナスタシアを静止し、そう続けて言った。

「アイツらがおかしいのはいつもの事だろう」

「輪をかけておかしい！」

アナスタシアはおそ松（零斗）に先程から思っていた事を大声で言った。
「アナスタシア、いい加減にしたらどうか？」

おそ松（零斗）の前に、立香の身体に入っていたカドックが現れた。

「マスターとサーヴァントで風呂に入ったり一緒に寝たりするのが何がいけないんだ！
ねエ、おそ……零斗」

おそ松（零斗）は話を振るカドック（立香）から目を反らした。

「そ……、そうだよ。立香がお前に欲情してるなんていつもの事だろうが。男同士ではいつも話してるよ。マスターとかサーヴァントなんて関係ねーの。コイツは見境なく年中ムラムラしてるの」

おそ松（零斗）は苦し紛れにそう言って妙の目をごまかそうとした。

「大体新八の家だつて男同士で風呂に入ってるから問題なんてな……」

「誰が男だアアアア!!」

またしてもぶちギレたお妙（優太）は、おそ松（零斗）の顔を平手打ちにしておそ松（零斗）を吹き飛ばした。このとき、チョロ松（君月メガネ）も外れてしまう。

そのときだった。

「汚らしい連中め、姐さんから離れろ!!俺の飼い主は姐さんだけだ!!俺はどこにもい
かねえ!!」

どぎえもんさんはいつの間にか右手に持っている紫色のキノコを齧りながら、アナスタシアの前に立ち塞がり、そう叫んだ。どぎえもんさんの持っているキノコに気づいたロレンツォ（チョロ松）は驚愕した。

「あ、アレは!?!赤い帽子を被った配管工の人から貰ったスーオーキノコをノアが品種改良したMAXキノコ!?!」

「なに!?!まさか配管工のおじさんは実在していたのか!?!」

「食いつくとこそそこ!?!いや確かに驚きですけど!?!」

ロレンツォ（チョロ松）の言葉に反応した桂（カラ松）に対して圭（楯無）がツツコミを入れる。

「グオオオオオオ!!」

キノコを食べたどぎえもんさんは身体を震わせながら雄叫びを上げると、どぎえもんさんの身体が大きくなっていった。

「おい!?!気のせいとかあの化物でかくなってきてねえか?」

「そりやそうや。あのキノコは荻野先生を倒すために身体のありとあらゆるものを限界を超えたものに強化するよう作ったもんやで、まあその副作用で個人差はあるけど身体が大きくなるねん」

銀時（土方）がそう言うのとノア（圭）が冷静にMAXキノコの説明をした。そして説

明が終わる頃にはどぎえもんさんの身体は全長50mを優に超えていた。

「よし、アイツを倒して俺達の身体を取り戻すぞ!!」

『『『勝てるかアアアア!?!』『』『』』』』

銀時（土方）が目泳がせながらそんなことを言うが、零斗たちはそんな銀時（土方）に顔を引き攣らせながらそう叫ぶのだった。

果たして、零斗たちは巨大化したどぎえもんさんを倒し、無事に元の身体に戻ることができるのか!?次回へ続く!!

やっぱりみんな実家（自分の身体）が1番なんだよね!!

前回までのあらずじ。身体と魂が入れ替わってしまった零斗たち。とうとう逃げたどぎえもんさんに追いついたが、どぎえもんさんはヴァレンティノ・ファミリーのノアが改良生産したMAXキノコを食べ、スーパーロボット並に巨大化してしまうのだった!! 果たして零斗たちはどぎえもんさんを倒して全員が元通りになれるのか!!



『ウオオオオオオオ!! 姐さんは誰にも渡さねええええ!!』

「きやあ!」

『アナスタシア!』

どぎえもんさんはそう雄叫びのように叫びながら右手にアナスタシアを掴んだ。アナスタシアは突然のことに驚き悲鳴を上げ、立香（スマホ）も叫んでしまうのだった。

「いくぞテメエらアア!!」

「おぉー!!」

銀時（土方）が腰に指している刀を抜きながらどぎえもんさんに攻撃していくのにそれぞれの武器を構えて零斗たちもそれに続いていく。がしかし

『邪魔だアアア!!』

『『『『へぶうつ?!』』』』』

どぎえもんさんが迫ってくる銀時たちに対して右足で勢いよく蹴ると、倉庫にいた全員がその巨大な足に当たり倉庫を破壊しながら隣の倉庫の壁にぶち当たった。

「き、巨大化つて普通一回やられてからなるもんですよね?」

「ば、馬鹿野郎。んな戦隊モノみたいに都合のいいことがあるわけねえだろうが……」
ピラミッドの壁画のように壁にめり込みながら零斗（おそ松）と銀時（土方）はそんなことを言うのだった。他に同じように壁にめり込んでいる連中を明久（巴）と鍵（アルトリアオルタ）が救出している間にどぎえもんさんは遠くに行こうとしていた。

「チツ、不味いなこれは。このままあの化け物の好き勝手させたら、間違いなく被害が出るな」

土方（銀時）は舌打ちをしながら、どぎえもんさんが向かっている方に視線を向けるとそこは港町だった。

「なあオイ、もし港町に被害が出ちまつたら俺たちの責任になつちまうんじゃないか?」
「まあそうですね。その時は銀さんと馬鹿六つ子の首を差し出せば俺たちの身の安全は保障されるんじゃないですかね」

「……何で僕（俺）たちまで巻き込まれてんの?」

銀時（土方）のぼやきに零斗（おそ松）が頷きながらさりげなく責任を押し付けて、自分たちは助かろうとしていた。それに対してチヨロ松（君月メガネ）、カラ松（高杉）、一松（辰馬）、十四松（沖田）、トド松（神楽）がツッコんだ。まあ今暴れているのは銀時とおそ松のそれぞれの半分の魂によって生まれた生き物なのだから六つ子も連帯責任として責任を取らせようと考えているのだろう。

『皆さんアレ見てください!!?』

「「アレ」」

全員が壁から救出されてどぎえもんさんを追いかけようとした時、何かに気づいたらしき立香（スマホ）の声に反応して全員がどぎえもんさんの方に顔を向けると、どぎえもんさんにリ・ブラスタT、ジェニオン、マジンガーZや真ゲッター、ソーラーアクエリオン、ダブルオークアンタ、ガンダムDX、ユニコーンガンダム、ウイングガンダムゼロ、デステイニーガンダム、デュランダル、キングゲイナー、月虹影、スコープドッグなどのスーパーロボットやMS、K M Fなどのロボット部隊『ゾディアック』が完全武装で待機していた。

「俺と姐さんの邪魔をするんじゃないやねええええ!!?」

どぎえもんさんは一度アナスタシアを近くのビルの上上に置くと目の前にいるソーラーアクエリオンに拳を振り下ろした。

『オープン、ゲット!!?』

『チエエエエエンジ、アクエリオンマーズ!!?』

どぎえもんさんの攻撃が当たると瞬間、ソーラーアクエリオンは三機のベクターマシンに分離して攻撃をかわし、空中でアクエリオンマーズに合体した。

『ロングレンジセイバー!!?』

アクエリオンマーズは落下しながら聖空剣を伸ばして連続で刺突を決め、最後には横切りを決める。そして再びアクエリオンマーズから三機のベクターマシンに分離すると今度はアクエリオンルナに合体した。

『チエンジ、アクエリオンルナ!!?・ムーンサルト・アタック!!?』

アクエリオンルナは弓を構えると矢を天に向けて放ち、その矢は無数の矢となつてどぎえもんさんに降り注いだ。どぎえもんさんはそれを頭上に腕を構えることでふせぐ。その間にアクエリオンルナはまた三機のベクターマシンに分離し、再びソーラーアクエリオンへと合体した。

『チエンジ、ソーラーアクエリオン!!?・無限拳!!?』

ソーラーアクエリオンの右腕が伸びると右拳がどぎえもんさんの腹部に当たり、倉庫や漁船などを破壊しながら海へと落とした。

『見たか化け猫野郎が!!?・例え機体と身体が違おうとも、俺たちゲッターチームにかか

ればザッとこんなもんよ!!?」

『油断するなよ竜馬』

『アイツは腐つてもあの銀時の魂の半分が入ってるんだ。こんなもんじゃ終わらんぞ』

ベクターソルのコックピットの中で竜馬（アポロ）が、海に落ちたどぎえもんさんに向けてそう言ったのを隼人（シリウス）と弁慶（シルヴィア）が忠告すると、海に落ちたどぎえもんさんが起き上がってきた。

「俺の邪魔をするんじゃないやねえええええ!!?」

どぎえもんさんはそう叫びながら足元にある半壊した漁船や倉庫などの残骸などを拾い、デタラメに投げ始めた。

『そんな攻撃くらうかよ!!?』

『邪魔』

投げられた残骸などをシン（刹那）のダブルオークアンタのGNソードビットで斬り裂き、三日月（シン）はデステイニーガンダムのアロンダイトで破壊する。同じように宗介（ヒビキ）のジェニオン、一夏（バナージ）のユニコーンガンダム、ヒイロ（ガロード）のガンダムDX、キリコ（ヒイロ）のウイングガンダムゼロ、ヒビキ（宗介）のレーバティン、ヒイロ（キリコ）のスコープドッグなどがそれぞれの武器で破壊し街への被害を抑えた。

『いつもと勝手は違うが、このボス様にかかればどうってことねえよ!!?』

陸に戻ったどぎえもんさんに対して、マジンガーZに乗っているボス（甲児）がそう叫びながらどぎえもんさんと取っ組み合いを始めた。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!?」

『オリヤアアアアアアアアア!!?』

どぎえもんさんとマジンガーZの力は拮抗しているのか互いに一歩も動くことができず、それぞれの足場がヒビ割れていた。

『今だ!一斉攻撃で倒すぞ!!?』

どぎえもんさんが動けない状態の隙を突いてルルーシュ（ゲイナー）がそう指示を出す、それぞれの機体の最大火力を放とうとした。

「舐めるなあアアアアアアアア!!?」

「なにいつ!!?」

どぎえもんさんはそう叫ぶと更に腕に力を込め、マジンガーZを持ち上げるとマジンガーZを振り回して攻撃しようとしている機体にぶつけて破壊して最後には海へと投げ飛ばした。

「誰にも邪魔させねえつ、俺と姐さんの邪魔はさせねえ!!?」

肩で息をするほど疲労とダメージが溜まっているようだが、どぎえもんさんの目の闘

志の光は尽きるどころか更に燃え上がっていた。

「なめんじやねーよ、この化け猫野郎が!!?」

「ぬおっ!!?」

マジンガーZたちロボットを倒して気が抜けていたのか、それとも身体の大きさが異なるからなのか、顔の近くまで近づいていた銀時（土方）と零斗（おそ松）に気づくことができず二人の木刀と黒剣を叩きつけた。突然の攻撃に対応できなかったどぎえもんさんはその攻撃に耐えられず仰け反ってしまった。

「スター・プラチナ!!?」

「クレイジー・ダイヤモンド!!?」

「ゴールド・エクスペリエンス!!?」

「ぬおりやああああ!!?」

仰け反っている隙について承太郎（邪ンヌ）、仗助（ジャック）、ジオルノ（ホームズ）たちスタンド使いがゆるキャラ感溢れた姿になったそれぞれのスタンドの拳のラッシュを、神楽（トド松）、レオーネ（桜花）、タツミ（ウエイブ）、ウエイブ（タツミ）などの力に自信があるものたちがそれぞれの得意な攻撃でどぎえもんさんの腹部に集中攻撃した。

「もう二度と惑わされたりしない。例えこの身体がガチャ欲に染まりきった身体になる

うと!!」

『お前みたいなストーカーよりは数万倍マシだよ!!』

カドック（立香）がそう言いながらどぎえもんさんの足に魔術で攻撃しているのを、同じようにどぎえもんさんの足にガンドを撃っている立花（リアス）がツツコンだり

「例えこの身体が醜い変態ゴリラストーカーに落ちよう!!」

『いやあんた元から醜いストーカー!!』

どぎえもんさんの足にクナイを投げ続けながらそんなことをいう猿飛（近藤）に新八（新八メガネ）がツツコンだり

「例えこの身体が、嫁と娘にデレデレな鬼警部になろうと!!」

「犬ならなんでもいいお前よりはマシだ!!」

緒方（荻野）がどぎえもんさんの足に蹴りを何度も決めながら言った言葉に荻野（緒方）が、額に青筋を浮かべさせながら同じように足に特殊警棒で攻撃を続けながらツツコンだりしていた。

「俺たちはもう何があろうと何者にも染まらない」

「だから銀時、おそ松、零斗、土方」

「今度は俺達がお前たちを、俺たちの色で染めあげ取り戻す番だ」

「だから」

「早く元の身体に戻って俺たちの前で惨めな姿を晒しやがれ!!」

「「テメーらが惨めな姿を晒して惨めにくたばりやがれ!!」」

上から中也（太宰）、イヤミ（デカパン）、ブレイズ（弥太郎）、沖田（神楽）が零斗たちに戻って来るようにいい感じの言葉で言ってくるが、最後の言葉で台無しになって零斗たちはそれに対して言い返した。そしてどぎえもんさんを抑えようとするもの、どぎえもんさんに攻撃するものと身体が入れ替わったもの達が協力してどぎえもんさんを倒そうとしているのをアナスタシアはビルの屋上からただ見ていることしか出来なかった。

「どうして．．．どうしてみんなどぎえもんさんと戦ってるの．．．」

「アナスタシアよ、コレを．．．」

アナスタシアは何故みんなが戦っているのか分からず、悲しそうにただその戦いを見ているだけしかできなかった。そんなアナスタシアにいつの間にかやって来ていたイヴァン雷帝が声をかけながら、この屋上に来る前に零斗（おそ松）に渡された立香（スマホ）をアナスタシアに見せた。

「コレは．．．」

「アナスタシアよ、コレを使い彼らの姿を見よ」

アナスタシアはイヴァン雷帝の言われるままに立香（スマホ）のカメラモードでみん

なの姿を見ると、それぞれの身体の中に入ってるそれぞれの魂の姿が見えた。

『アナスタシア。確かに僕たちは身体(み)も魂(こころ)もバラバラになってしまった。でもだからこそ目に見えるものだけに囚われることなく見つけることが出来た』

『僕たちの本当のリーダーたちを、僕たちの本当の姿(いろ)を』

「マスター」

手に持つているスマホからマスターである立香の声が聞こえ、スマホを見るとスマホに立香に姿が見えたことで何故みんなの様子がおかしかったのかをアナスタシアはこの時、ようやく気がついた。

「ガアアアアアアアアアアア!!」

一方、零斗たち身体と魂が入れ替わったもの達の攻撃によってダメージを受け続けていたどぎえもんさんは攻撃にイラついたことによるものか、或いはダメージが蓄積された痛みによる叫びのどちらかは分からないが、どぎえもんさんが叫ぶのと同時に身体が赤くなり身体中から湯気が発生した。

「ウオオオリヤアアアアア!!」

「「「「うわああああああああつ!」」」」

さつきまで均衡を保っていたのだが、どぎえもんさんによる火事場の馬鹿力によって無理矢理鎖が絡まっている腕を振り回して、鎖を持つていた政宗たちを投げ飛ばしなが

らどぎえもんさんに攻撃していた零斗たちに鎖をぶつけて吹き飛ばした。

「く、クソツタレが。」

「まだこんなに力が残っていやがるのかよ。」

倉庫に叩きつけられた銀時（土方）と零斗（おそ松）は悪態をつきながら瓦礫をどかして立ち上がろうとしているのを、どぎえもんさんは見逃さないのか2人を踏み潰そうと2人の頭上から足で踏み潰そうとしてきた。

「つ!?!銀時先生、零斗!?!」

アナスタシアは思わず叫ぶも何も出来ずにただどぎえもんさんの足が零斗（おそ松）と銀時（土方）に迫っているのをただ見ていたその時、高速で動く何かがどぎえもんさんの足を弾き飛ばした。

『油断するんじゃねえよ』

高速で動いてたそれはIS『白式』と神装機竜『バハムート』が半々になったものを装備した定春で、その背後には頭に虎耳が付いている鏡花の異能力『夜叉白雪』、右手には百夜優一郎の鬼呪装備『阿朱羅丸』を左手にはバールのような何かをそれぞれ握っていた。

「いや、誰ええええ!?!」

「マジで誰、つーか何!?!」

明久（巴）と鍵（アルトリオルタ）は突然現れた武装した定春？に驚いて思わずツツコむのだった。

「あはは！アイツらは長谷川さんと百夜くんとニヤル子ちゃんの魂が入っちよるんじやよ!!」

「何で犬とか無機物と魂が入れ替わってんだよ!?馬鹿なの!？」

辰馬（一松）が高笑いしながら定春に長谷川さん、阿朱羅丸に優一郎、ボールのようにな何かにニヤル子の魂がそれぞれ入れ替わっていることを教えてくれたが

人間ですらないものに魂が入っていることに土方（銀時）はツツコむのだった。

『んううううう……ぬああああああああああああああ!!』

『陣形を乱すな!!今の身体で、今自分に出来る事を、自分の頭で考えろ!』

『しかも滅茶苦茶強ええええええええええ!!』

起き上がったどぎえもんさんが長谷川（定春）たちに攻撃を仕掛けるが、長谷川（定春）は優一郎（阿朱羅丸）とニヤル子（ボールのようなか）で攻撃を何度も防ぎながら話していた。それを見た殆どがツツコむ中、長谷川（定春）たちは話を続けた。

『今までの事を思い出せ!!そう……俺達はどのような事があつても、力を合わせて立ち向かい、そして乗り越えて来た!!』

優一郎（阿朱羅丸）は迫り来るどぎえもんさんの拳を刀となったその身体で受け流し

ながら話し

『組織の違い？身体の違い？力の違い？そんなの関係ない!!』

鏡花の異能力『夜叉白雪』と融合した敦（夜叉白雪）は一部虎化した腕でどぎえもんさんに殴り掛かりながら話し

『私達はどんなに性格も能力も何もかもが違ってても、私達は……今一番大切な物の為に、力を合わせて来ました!!』

ニヤル子（ボールのような何か）は迫り来るどぎえもんさんの拳を破壊する気でパールのような何かを叩きつけながら話し

『だから今回も俺（僕）達の力を一つにし、大切な物を取り戻せえええ!!』

一夏（白式）とルクス（バハムート）は機体の推進力を使って一気にどぎえもんさんに接近しながら叫び

『帰って来い!! バカ野郎でもおおおおおおおおおおお!!』

長谷川（定春）は2人の推進力を活かしてその勢いに乗って拳をどぎえもんさんの腹部に叩き込んだ。

「……皆、」

「……………」

長谷川（定春）たちがどぎえもんさんを抑えながら話している内に、この場にいた禍

終素学園の面々かがどぎえもんさんの動きを封じるべく身体中の至る所を縄で縛り上げ、その光景と長谷川（定春）たちの言葉を聞いて言葉を失うぐらい驚く銀時（土方）と零斗（おそ松）達。

『姐さああああああああああああああああん?!』

「……どぎえもんさん、どうやらあなたの居場所は、ここじゃなかったみたいね……どぎえもんさん、いいえ、」

「馬鹿野郎達。」

助けを求めながらアナスタシアを見たどぎえもんさんだったが、涙を堪えながら話すアナスタシアの目には銀時とおそ松との魂の片割れが見えていた。

「……帰りなさい。あなた達を待つ仲間の所へ。」

そしてアナスタシアはそう泣き笑いしながらどぎえもんさんに優しく諭すように言った。

そして、それぞれの武器を持った銀時（土方）、零斗（おそ松）、土方（銀時）、おそ松（零斗）は破壊された残骸を利用しながら上へ上へと駆け登り、とうとうどぎえもんさんの頭上にまで飛んだ。

——さようなら、俺達の最高（最悪）の仲間……そして、——

愛刀である木刀『洞爺湖』を持った銀時（土方）、黒剣を持った零斗（おそ松）、日本

なっちまってたが今はそんな心配はねえよ」

「そつちだつてうちの連中を第2の真選組みたいなのにしてたじやないですか。まあ今はそんな頭でつかちな真面目集団とは真反対な奴らに戻つてますけどね」

土方のふとした質問に零斗が答え、それを聞いて話す零斗だが結局互いの組織は元の鞘に戻つたことを話しているだけだった。

「まあ今回の出来事は土方さんと銀さんにとつてはいい経験だったんじゃないんですか？」

「んなわけあるか、アイツと入れ替わつたせいで最悪な目にしかあつてねえつうの」

零斗の皮肉に否定する土方だがその顔はどこか笑っているように見えた。話が終わると同時にそれぞれ食べていたものを食べ終え、その場から立つてまた作業をしにそれぞれの作業現場へと向かおうとしていた。

「ちやんと・みんなにお礼言つといた方がいいですよ。俺たちが元に戻れたのもみんなが協力してくれたからなんですから」

「その言葉そのままそっくり返してやんよ。テメエもその頭下げて連中に感謝の言葉言つてやれよ」

そんなことを言いながら2人は顔も合わせないままそれぞれの作業現場へと歩いていくのだった。

一度取つた皿は戻さない

禍終素学園 寿司屋バイト

嵐獄島の西側の港町にある寿司屋にて

「いや、ここまで長かったよ。親方の所に弟子入りしてから、ずっと包丁も握らせてもらえない下働きの生活」

そこに存在する回転寿司屋では、一人の男が誰かにそう言っていた。

「毎日、寿司を握る親方の手元を盗み見てはシャリの握り方を練習しよう、ようやくこの支店を預からせてもらえるようになった」

ようやく一人前になつたらしい、この男は――。

「今度こそ、やるよ、俺ア」

かつては本土にて政府の高官を務めていたが現在は禍終素学園の用務員である長谷川泰三であつた。

「よつ、長谷川店長！」

回転寿司の流れるベルトコンベアの前にいる零斗が長谷川をおだてる。長谷川も「よせやい、テレるべ!!」と顔を横に向けて零斗に答える。

「この前見つけた仕事も、やっとここまで出来るようになったみたいだな」
零斗の左隣に座る銀時が長谷川を褒める。

「これで、逃げたお嫁さんも帰ってくるんじゃないですか？」

「ここまで頑張ったじゃないですか」

銀時の左隣と零斗の右隣にやって来た、明久と鍵が長谷川に言った。

「今日は応援してくれたみんなに俺の握った寿司最初に食べてほしくてよ」

そして、長谷川が零斗達にこう言った。

「全部、俺のおごりだ!!好きなかだけ食べていってくれ!!」

長谷川の言葉を聞いた零斗達は、期待に心を踊らせる。

「おおーう!!握りたての寿司なんて滅多に食べられないものじゃないですか!!何食べよっかな〜」

零斗は嬉しそうな顔をしながら両手を上げる。

「あつ、流れてきたよ」

明久がベルトコンベアから流れてくる寿司を見て、声を上げる。最初に流れてきたのは、カツパ巻きだった。

「おいしそうなカツパ巻きだね」

「響、一緒に食べましょう!」

駆逐艦の響は姉妹艦である暁と共に、カップパ巻きの乗った皿を手を取った。

「わっ！またカップパ巻きなのです！」

今度もカップパ巻きが流れてきて、響の姉妹艦である電が思わず声を上げて、カップパ巻きの乗った皿を手を取った。

「……またカップパ巻きとかいう奴？」

雷の前にもカップパ巻きが流れてきた。

「最初はそれで慣らすのもいいもんだぞ」

銀時はそう言って、ベルトコンベアの上を確認した。

「」

「なんと、ベルトコンベアの上にはカップパ巻きが延々と続いていたのだ。」

「『沙悟浄かアアアアア、俺たちはアア!』」

零斗、銀時、明久、鍵の四人はカウンターを乗り越えて長谷川に蹴りを入れた。四人に蹴飛ばされた長谷川はその場に仰向けで倒れ込む。

「なんでカップパ巻きしか流さねーんだコラアアア!! カップパ巻きがガンダーラまで続いてんだろーが!!」

「何ケチってんだコラアアア!! トロ出せ!! ウニ出せ!! 何のためにアンタに会いに来たと

長谷川は持つてきた動かなくなった寿司マシンの事で、途方に暮れていたのだ。「とりあえず、その機械を直さないといけませんよね」

明久は長谷川の持つてきた動かなくなった寿司マシーンに目を向けながらそう言った。

「つつても誰に頼むよ」

「とりあえずこういう機械に詳しい連中に連絡入れたから誰かは直せるだろう」

■ 鍵は修理を頼むのだとしたら誰にすべきかと言った。それに対して銀時は既に知り合いの機械に詳しい人達に連絡したことを伝えた。そしてしばらくの間待っている

■ 「修理ならこの天才のダ・ヴィンチちゃんに任せなさい!!」

■ 「直流ならこの私に任せるが良い!!このすつとんきようとは比べ物にならない物を造つてみせよう!!」

■ 「交流こそが至高!!この凡骨に任せたらろくなモノが出来んぞ!!」

■ 『蒸気機関に全てを任せるが良い』

■ やつて来たのは美術担当のレオナルド・ダ・ヴィンチことダ・ヴィンチちゃん、化学担当の直流バカことトーマス・エジソン、同じく化学担当の交流バカのニコラ・テスラ、整備科の蒸気王ことチャールズ・バベッジ。いずれも天才にして頭のネジが数本抜けて

いるような連中である。

「この人たちで大丈夫なのかよ銀さん？」

「心配するな長谷川さん。確かにアイツらは頭のネジが数本抜けているが腐つても天才だ。何とかしてくれるだろう」

「銀さんそれフラグにしかな聞こえないんですけど」

長谷川はダ・ヴィンチちゃんたちが本当に直せるのか不安になって銀時に尋ねるが、銀時は頭を掻きながら適当に答えた。そんな銀時とダ・ヴィンチちゃんたちに零斗は不安しか感じられなかった。

「それじゃあ、早速改ぞ——修理を始めるからこの機械を一旦外に移動させるね」

「今改造って言いかけたよね？」

「言っていない言っていない。それじゃあチャチャツと直してあげようじゃないか」

ダ・ヴィンチちゃんたちが改造と言いかけていることに明久が問いかけるもダ・ヴィンチちゃんはそれを無かったことにして修理するためにいそいそと寿司マシーンを店の奥の方へと運ぶのだった。

そして寿司マシーンを外に運び終わるとやって来た天才たちは店の奥へと向かい早速修理に取り掛かるのだった。

カーンカーンカーン!!

バリバリバリツシュ!!

モエルーワ!!

イ

ワアアアアーク!! ドガガガガガ!! キュイイイイイイン!!

ボオオオオオオオ!! モウヤメルンダ!! アンタツテヒトハアアア!! 人類

神話・雷電降臨(システム・ケラウノス)!! W・F・D(ワールド・フェイス・ド

ミネイション)!! 万能の人(ウオモ・ウニヴェルサーレ)!! 絢爛なりし灰

燼世界(デイメンジョン・オブ・スチーム)!!

ダ・ヴィンチちゃんたちは事前に用意していた工具で寿司マシンの修理?を始めていた。

「なあ本当に大丈夫なのかよ。さっきから修理しているとは思えない音がしてるんだけど」

長谷川さんは店の奥から聞こえてくるどう聞いても修理している時に聞こえないような音に訝しむ。

そして――

プシユウウウウウ――(全壊している寿司マシーンから煙が上がっている音)

「手を尽くしたけどダメだったよ」

「今完全に壊したよね!?明らかにアンタたちがトドメさしたよね!」

テハツと舌を出しながら笑顔を浮かべるダ・ヴィンチちゃんに暁がツツコミを入れた。ダ・ヴィンチちゃんたちは寿司マシンを完璧に壊してしまったのだった。

てください」

寿司屋の制服を着た零斗が申し訳なさそうに言った長谷川に対して気にしないように言った。

「しかし、俺以上に素人のお前らに寿司なんて握れるわけねーよ」

「誰も回転寿司にそこまで完成度求めてねーよ。上にネタが乗つてて形さえ取り繕つてりゃなんとかがごまかせるはずだ」

長谷川は零斗たちがまともな寿司を握れるかどうか怪しいと言うが、銀時は形さえ何とかすればいいと言った。

「長谷川さん。とりあえず最低限だけでもシャリの握り方教えてもらえますか？ かつぱ巻きしか作れないと言っても形だけは親方さんの見て知ってるんだから」

明久は長谷川から寿司の握り方を形だけでも教えてもらおうとそう言った。

「わかった……。見よう見まねだが、よく見ててくれ」

長谷川は明久の頼みに答え、結桶に入った米を掴んで説明を始める。

「まずシャリを取る。この時あまり取りすぎないように気を付けてくれ。強過ぎず弱過ぎない加減で片手で空気を含むように握るんだ」

そう説明しながら、長谷川はシャリを握る。

「わさびを付け、ネタを乗せる」

シヤリにわさびを付け、その上にネタのマグロを乗せる。

「ひと握り」

仕上げとして、長谷川はマグロ寿司を少し握る。

「完成だ」

だが、出来上がったのは――。

「なんでよ!?!」

なぜかカツパ巻きだった!

「なんであそこからカツパ巻きが完成するのよ!?! たった数行の間に何があったっていうのよ!?!」

邪ンヌは長谷川に突っ込みを入れた。

「ダメだ、俺やつぱりカツパ巻きしか作れねエ」

「今、惜しい所までいったわよね! マグロ乗せてたわよね! なんてきゆうりに変わったのよ!?!」

邪ンヌに突っ込まれた長谷川は頭を抱えながら落ち込んでその場にしゃがみこんでしまう。

「先祖がカツパ殺したりとかして呪われてんじやろ、多分」

「これはダメだな。長谷川さんはカツパ巻き用員にするしかないな」

ノツブと鍵が呆れ返った表情で長谷川を見ながら、そう言っていた。と、そのとき。「でも、雰囲気だけはしつかり伝わったわね。形だけならなんとかできそうな気がしてきたわ」

「そうですねー。握るだけなら会長でも大丈夫ですよ、きつと」

結桶の中のシャリを手に取るくりむに、零斗が言った。

「空気を含むように握り、わさびを付ける。ネタを乗せてひと握り」

くりむは念じたことを漏らしながら、寿司を握る。

「やっと出来たわー!」

しかし、完成したのは――。

「ちよつと會長ううううう!?!」

鍵の叫びが厨房内にこだました。なぜかくりむの手にはうさマロがあったのだった。

「ちよつと待つて!?!なんで米とマグロからマシユマロが出来るんですか!?!何したんですか今!!」

「おかしいわ杉崎。わたくしはちゃんと長谷川さんの説明した通りに握っただけなの
に」

「我が生徒会の長ながら末恐ろしいよこの人!!まさかお米握っただけでマシユマロ作っ
ちやうなんて!!」

鍵にそう言われるなか、くりむも長谷川の隣で頭を抱えながら落ち込んでその場じやがみこんでしまう。

「ダメだこりゃ」

「このレベルじゃ長谷川さん以上に使い物にならないな」

零斗とエミヤはくりむに呆れ果ててため息をついていた。

「なら次は俺が試しに握ってみよう」

次に動いたのは桂だった。桂は結桶の中のシヤリを手に取り、握りだす。

「空気を含むように握るとか何とかがってゴチャゴチャ考えてつから失敗するんだ。そんなの職人でさえ何年もかけて身につける技だ。俺達は、不味くても形さえ繕えばいいくらいだ」

桂は零斗達にそう言いながら、寿司を形作る。そして――

「完成だ」

「形を守れエエエ!!」

零斗の叫びが厨房内にこだまする。桂は確かに寿司を握っていたはずなのに完成したのは何故か蕎麦だった。しかも何故か湯気がたっていた。

「コレもう寿司ですら無くなつてんじやねーか!! あんたやる気ねーだろ。完全にサイドメニュー狙いに言つてんじやねえか!!」

「文句を言う前にまず食べてみる。同じ口が聞けるかな?」

「食べねーよ!!何一丁前な口聞いてんだよ!!」

寿司ではなく蕎麦を作った桂に零斗がツツコミを入れると桂は蕎麦を食べるように言ってくるので、零斗は額に青筋を浮かべながらツツコんだ。

「そうだぞツラ。真面目に作りやがれ」

「ワシらだつて今回はふざけずに真面目に作つとるんじやからな」

そう言う銀時とノツブだが、2人が作っているのは寿司ではなくパフェと金平糖だった。

「何でアンタらも寿司とは関係の無いものを作つてんだよ!？」

「寿司屋にはサイドメニューがあるだろ?俺たちはそれ担当として作つたんだよ」

「サイドメニューの前にまず寿司を作れ!!」

鍵がパフェと金平糖を作った銀時とノツブに文句を言うと銀時がそう言うのでエミヤが至極真つ当なツツコミをする。

と、その時だった——

「玉子と海老が入ったわ!!」

カウンターにて客の対応をしていた暁が零斗たちに寿司の注文が入ったことを伝えた。

「どうするんですか!? 今できてるのはかっぱ巻きとうさマロ、蕎麦、パフェ、金平糖しかなくてまともな寿司なんて出来てませんよ!」

鍵は頭を抱えながら長谷川に訊いた。このままでは先程と同じようなかっぱ巻きがガンダーラまで続くようになってしまう。そんな最悪な展開を想像していたそのときだった。

「仕方ない。ここは私に任せてもらおうか『体は酢飯で出来ている。心はワサビで

血潮はネタ 幾度の調理場を超えて不敗 ただの一度の失敗も無く

ただの一度の批評もなし 握り手はここに独り 調理場で包丁を鍛つ な

らば我が生涯に意味は不要す この体は無限の寿司で出来ている アンリ

ミテツド・スシ・ワークス!!』

エミヤは目を閉じながら詠唱を唱え始めながらシャリを握っていると、エミヤの周囲に大量の寿司ネタが浮かび、カツ!!と目を見開くのと同時に握り終えたシャリたちの上に次々と寿司ネタが乗っていき、大量の寿司が次々と出来てきた。

「何それえええええ!!? そんな裏技あるんなら最初から使えよ!!」

銀時はエミヤの思わぬ行動に全員が思ったことを代弁してツツコミをしてくれた。

「フツ、緊急事態だから仕方なくだ。時間に余裕があれば皆に完璧な握り方を教えるつもりだったのだがね」

「ドヤ顔かましてんじやないわよこの見せかけ筋肉!!」

「おっと、心は硝子だぞ?」

ドヤ顔しながら言うエミヤに邪ンヌがツツコミを入れるとエミヤが苦笑しながら対応した。

「とりあえず味はエミヤが作ったものだから問題はないし出来たやつから流しますね」

零斗はエミヤが作った寿司からまず玉子と海老を皿に乗せてベルトコンベアに次々と流していった。

そしてエミヤが握った玉子と海老はベルトコンベアに乗って店のカウンターに流れてきた。

「先輩!お寿司が流れてきましたよ!!」

「そうだね。最初は一緒に食べよっか」

ベルトコンベアに乗って流れてくる寿司を見てテンションが上がっているのか、目を輝かせながら立香に声をかけるマッシュを心の中で『クツソ、カツワイイイイイイイ!!』と叫びながらもそんな様子を顔に出さずに冷静に対応しながら、立香は海老と玉子の乗った皿を取った。

「お、美味しい!!美味しいです先輩!!」

「うん!今まで食べてきたどの寿司よりも美味しいね!!」

寿司を食べたマシユと立香は美味しそうな顔をしながらついそう言った。

「それじゃあ私もサーモンといくらを頼もうかな」

「じゃあ僕はホタテとマグロにしようかな」

2人の美味しそうな顔で立花とロマニもまた寿司を注文した。そしてそれをしているのは立香たちだけではなかった。

「中々いけるわねコレ」

「うまつ!!こんなうまい寿司なら幾らでも食べるじゃん!」

「ほんとですの!なんですのこのウマさは!!」

「まるで寿司の革命だ!!」

朱鷺原紗雪、紗倉ひびき、邪神ちゃん、カズマも寿司を頼み美味しそうに食べていた。そして気づけば注文は殺到していた。

「……奇跡だ」

長谷川が零斗、明久、鍵と共に、厨房の中から店内の様子を確認してそう呟いた。

「奇跡が起こった」

そう呟くと長谷川は厨房内に戻り、エミヤ達にこう言った。

「作れエエエ!!ドンドンエミヤの宝具で寿司を作りまくれエエエ!!店の中にある食材を全て使えええ!!」

長谷川の叫びに答えるように、エミヤは宝具を利用して寿司を作り、長谷川さんから教えてもらった作り方で零斗、鍵、明久は同じように寿司を作った。そして完成した寿司を銀時、邪ンヌ、くりむ、ノツブがベルトコンベアに乗せていった。

「スゴイのです！飛ぶように皿がさばけていくのです」

客達が寿司を次々と注文するせいか、雷、電、暁、響が店中をてんでこ舞いになりながら次々と皿を回収し――

「店の前も長蛇の列になってるよ！」

ダ・ヴィンチちゃんの言うとおりに、店の前にもたくさんのお客が並び、店は大いにぎわっていた。

「キタアアアア!!これキタアアア!!」

成功を確信した長谷川がそう叫んだときだった。

「長谷川さん！あまりの客足に材料が尽きかけてるわ！」

「何イイ!!」

くりむが冷蔵庫の中を確認して長谷川に言った。凄まじい客足の前に、材料の在庫が尽きそうになっていたのだ。

長谷川はガツンと厨房の壁を叩きながら、悔しそうにこう言った。

「立身出世のこの絶好のチャンスに、俺って奴は……。どこまで俺はマダオなんだ!!」

そのときだった。

「行けよ」

長谷川に背を向けて次々と寿司をベルトコンベアに乗せている銀時がそう呟いてから、長谷川にこんな事を言い出した。

「長谷川さんはなんとしても材料をかき集めてこい。それまで俺達が、この場をもたせてみせる」

長谷川は銀時の言葉を聞いて、呆然とする。

「早く行けエエ!!」

そんな長谷川を、銀時は叱責する。長谷川は、グズツと涙を浮かべる。そして。

「頼んだぜ!!」

長谷川はそう言いながら、厨房どころか、店を出て行った。



それからしばらく経った店内。先程の勢いは収まり、あるテーブルでは二人の男が注文した寿司を待っていた。

「トシ、なんだこっちは」

黒髪の鋭い目をした男にそう言った、精悍なゴリラみたいなのこの男は、真選組局長・近藤勲だ。近藤は土方と共にこの回転寿司屋に客として来ていたのだ。

「回転寿司と聞いて来てみれば、回転しているのはカツパ巻きばかりではないか」

近藤がそう言った頃には、あらかた材料が尽きてしまい、長谷川が量産したカツパ巻きばかりがベルトコンベアを流れるようになっていた。

「隊士どもの話じゃ安くて、うまいと評判だったんだが、ガセだったかね」

と、土方はタバコを吸い始める。

「なんだあの店員は。なんで睨み合ってたんだよ。つーかどっかで見たことがある気がするんだが」

客数が大分減って、店の中で堂々と掴み合いをしているエジソンとニコラ・テスラを土方が呆れた目で見ていた。

と、そのとき。

「なんだ、あのドロドロに溶けたパフェ。なんで回転させてんだよ。冷やしとけよ」

土方と近藤の前を、ドロドロに溶けたパフェが横切り、土方は突っ込みを入れた。

「オイ、トシ、今度は蕎麦が流れてきたぞ」

今度は二人のしている側で桂が作った蕎麦が『300円』と書いた紙と共に流れてくる。

「なんで蕎麦がカツパ巻きと一緒に回転してんだよ。しかも今度は温そうだし」

「300円だぞオイ、どーする？ 買っとくかトシ」

なぜか流れてくる温くなった蕎麦に突っ込みを入れる土方に、近藤は買うかどうか訊いていた。

「蕎麦なんかより、俺が頼んだカレイのエンガワはいつ来るんだよ」

土方がそう不満を漏らしたときだった。

カツパ巻きに紛れて、木製の縁側に乗ったカレイがベルトコンベアの上を流れてきた。カレイの前には『縁側のカレイ』と書いた紙が貼ってあった。

近藤と土方がそれを呆然と見てるうちに、ベルトコンベアに流されて二人の前から離れていった。

「……なんだ今の」

近藤が思わず声を漏らす。

「なんで寿司屋にカレイが回ってんだ」

と、土方がベルトコンベアに流されていた物に突っ込んだ。

「なんか、『縁側のカレイ』って書いてなかった？……トシ、アレひよつとしてお前が頼んだ？」

近藤は土方にさっきの縁側に乗ったカレイが土方が注文した物じゃないかと思つて土方に訊いた。

「いや違うだろ。俺が頼んだのはカレイの縁側だ。魚のひれの基部の肉の事だ」

と、土方が近藤に返す。

「いや、そうなんだが」

近藤が土方にそう言ったとき――。

またしても例の縁側に乗せられたカレーが流れてきた。今度は張り紙が『カレーが縁側に』に変わって。

「……トシ、一周回るたびに書き直されて微妙に近寄ってきてるんだが……」

「いや、違う違う。俺のはカレイの縁側だからね」

今度も土方は縁側に乗ったカレーを手に取らないでそのままにした。縁側に乗ったカレーはそのまま一周して――『カレーの縁側』と張り紙がそう変えられて、またまた二人の前に姿を現した。

「オイ、無理矢理カレーの縁側におさまっちゃったぞ。コレ完全にお前のだよ」

「カレーじゃねエ、カレイだつってんだろ」

近藤の読み通り縁側に乗ったカレーは土方に向けて出された物だった。言うまでもなく、カレーではなくカレイの縁側を食べたい土方は手に取らない。そして、そのまま縁側に乗ったカレーはまた厨房に吸い込まれていく。

『カレー早くとれマヨネーズ野郎』

「誰がマヨネーズ野郎だコノヤロオオー!!」

張り紙に書かれていた暴言を見た土方は怒号を上げる。

「オイ、もう完全にメツセージになってるよ」

と、近藤。

「誰がとるか。なんで寿司屋でカレー食わなきゃいけないんだ」

完全に機嫌を損ねた土方がそう呟いた。

「それより、俺の鯖はまだか。一向に見えんのだが」

近藤が土方にそう返したときだった。

サー〇ルと女の子が合体したような謎の人物が、ベルトコンベアの上を流れてきた。その人物は大きな目で近藤と土方を見つめる。近藤は思わず半目になった。誰も回収しないまま、その謎の人物は、そのまま厨房に吸い込まれていく。

「……オイ、アレサーバ〇ちゃんじゃねーのか。ひよつとして近藤さんの?」

「違う、俺が頼んだのは鯖だ。サー〇ルちゃんじゃねエ」

土方の推測を聞いた近藤だが、近藤はベルトコンベアから目をそむけながら土方に答える。

「いや……、でもメチャクチャこっち見てんだけど」

「違う、目エ合わせんな」

近藤はそう言いながら、しつこく見てくるサー〇ルちゃんから視線をそらす。

と、そのとき。

ガガガガガ

「あつ！はさまった、サー○ルちゃんはさまった！」

「はさまったけどまだこつち見てる!!サー○ルちゃんこつち見てる!!」

厨房に続くトンネルの入り口に、サー○ルちゃんが詰まる。しかし、それでもサーバ○ちゃんは二人を凝視する。そして、サー○ルちゃんはズボツとトンネルの中に吸い込まれ、辺りにカッパ巻きを散乱させる。

「何なんだ、この店」

「オイ、もう帰ろうぜ。気持ちワリーよ」

その様子に土方は不快感を示し、近藤は顔を真っ青にして引いていた。

「ワケわかんね……」

近藤と土方が席を立てて店から出ようとしたときだった。なんと、今度はサーバ○ちゃんが両手に、カレーをふたつ持ちながらベルトコンベアを流れてきた！

「オイ、いいいいいい！サーバ○ちゃんカレー持ってきた!!」

「両方、無理矢理受け取らせるつもりだア!!」

近藤と土方は慌てて逃げ出そうとした。しかし。

「ぎゃあああ!!」

イカ娘は二人を目掛けてカレーを投げつける。が、そのカレーは客としてやって来たアリス・マーガトロイドと霧雨魔理沙にかかってしまう。

「ちよつと！いきなり何するのよ!!」

「何するんだよ!!熱いじゃねえかよ!!」

「なんで怒りを俺達に向けんのオオ!!理不尽にも程があるだろーが!!」

「違う!!誤解だキミたち!!ぐああああ!!」

店内のカウンターの前で、大規模な乱闘が勃発し、客同士がバトルし合うわけのわからない展開になってしまった。

「乱闘が始まってしまいましたけど、どうしますか?」

零斗は、明久、鍵、邪ンヌ、ノツブ、くりむ、エミヤ、桂はいつの間にか合流した電、雷、暁、響、ダ・ヴィンチちゃんと共に厨房から乱闘の様子を見ながら銀時に訊いた。

「そうだなー」

銀時は少し悩んでからこう言った。

「よし、帰るぞ!!」

銀時の言葉を聞いた零斗達は、ハチマキを脱ぎ捨てて俺知らないと言わんばかりに、乱闘を続ける近藤達を残してそのまま帰ってしまった。

一方、食材をかき集めに行った長谷川はというと――

「うおおお!!」

荒れ狂う海の中、長谷川はラギアクルスと格闘していた。

「(待っていろみんな!!今すぐに行く!!)」

収拾不能に陥った銀時達が既に店から出て行った事を知らずに。

その後、近藤達の乱闘のせいで店内はメチャクチャになり、長谷川はクビになってしまったという。

海って行っても自由に泳げる気がしない

禍終素学園の日常 海回

ミ〜ン、ミ〜ン、ミ〜ン（セミの鳴き声）

「金が欲しい」

セミが鳴く暑い日々が続く中、禍終素学園から離れた場所にある公園のベンチにて零斗、明久、鍵はアイスを食べっていると零斗がいきなりそんなことを言い出した。

「いきなりどうしたの零斗？」

「この間のおそ松のせいで金がなくなっちゃまったからな。それでバイト日数を増やしているんだがあまり稼げなくてな……」

ガリ〇リ君を食べている明久がチュー〇ツトを食べている零斗に訊くと零斗は、前回の入れ替わり騒動で来月の給料と所持金がなくなったので稼いでいるのだが、あまり稼げていないことを言った。

「あれ？でも確かその金はおそ松たちに文字通り身体で払わせてるんじゃないか？」

かき氷を食べていた鍵は以前零斗が、金を返させるためにおそ松たちを無理やり東の

森にて魔獣狩りをさせていると聞いていたが

「結局のところロクな魔獣を狩れなかったから今は強制地下労働させてるけど、金が入るのはまだ先だからな……」

「なるほど、それで金が欲しいって言ったのか」

零斗の言ったことを理解したのか鍵はそう頷いた。

「なんかねえかな、大金ゲットできるような美味しい話とかさ……」

「あつたら僕たちも知りたいよ……」

「だよな……」

「「ハア……」」

三人がため息をついているときだった。

「ねえキリトくん。来週の日曜日にみんなで海に行かない？この間新しい水着買ったからキリトくんに見て欲しいんだ♪」

原作でも他所様のクロスオーバー作品でもイチャイチャしているキリトこと桐ヶ谷和人とアスナこと結城明日奈の話し声が聞こえてきた。零斗たちはひとまず茂みの中に隠れて話をこっそりと聞いていた。聞いている話によるとどうやら新しい水着を買ったアスナがキリトに海に行くことを誘っているようだが、キリトはそのことに対して難色を示していた。

「海に行くのはやめたほうがいいぞ。何でも最近海に謎の怪物が現れたそう。今は遊泳禁止になってるらしいんだ」

「そうなの？」

「ああ、それでその海を管理しているお偉いさんがその化物に懸賞金をかけているから討伐されるまでは海で遊べないんだよ」

「そうなんだ。物騒だね」

キリトの言葉にアスナがそう返したときだった。零斗たちは茂みの中から立ち上がり、二人を驚かせた。

「今年の夏は」

「化物一本釣りに」

「決定だね！」

「……えっ、いきなりどうした？」

零斗、鍵、明久がいきなり叫びながら現れたことにキリトは驚きながら、その声をかけるのだった。



嵐獄島の西側にあるリゾートビーチ。何時もなら遊泳客などで賑わっているはずのビーチだが、今は海に化物が出現しているために、今は海の家があるだけで他には何も

なかった。そんな場所に懸賞金を目当てに零斗、鍵、明久、藤丸兄妹、そして彼らが契約しているサーヴァントたちと彼らに思いを寄せる少女たちが来ていた。彼らは情報収集のために海の家を尋ねるのだが……

「え？化物退治？え？ホントに来たの？ああそう、アハハ！いやあく助かるよお！」

零斗たちは海の家で焼きそばを焼いているアロハシャツを着たおじさんに話を聞いていた。

「あの、ひよつとして」

「その例の化物に懸賞金を掛けたのって」

おじさんの話を聞いた明久と鍵が聞くと、

「ああ、おじさんだよおじさん！やあく！でも本当に来てくれるとは思わなかったよお。おじさんもさあ、酒の席でふざけ半分で発言した事だけに、まあさか本当に来てくれるとは」

と、焼きそばを焼きながらおじさんが言い続けていると、

ジュウウウウウウ！（おじさんの顔が鉄板に押し付けられて焼ける音）

「ぐぼげええええええええええ!!」

零斗はおじさんの顔を鉄板に押し付けた。

「酒の席でふざけ半分？おっさん、こっちは生活が懸かっているから真剣なんだよ。男は

冗談いう時も命懸け。自分の言葉に責任を持つてもらわねえと!」

少し怒りながら言った零斗に、頷く明久、鍵、藤丸兄妹、そしてサーヴァントたち。「待ってえ! 落ち着いて! 大丈夫金ならちゃんと払うから!?! ちゃんと用意してるから!?!」

と、鉄板に顔を押し付けられ、真っ赤になった顔で言うオジサンだったが、

「モグモグ、嘘つくんでない! こんなモツサリとした焼きそばしか作れない奴、金なんか持つてるわけないじやろうが!?! どおくせ貴様の人生もモツサリしてるんじゃない? ほら言ってみるんじゃないモツサリと!?!」

「つて!?! 何売り物勝手に食べてるんですかノツブ!?!」

焼きそばを勝手に食べながら言うノツブにツッコむ沖田さん。それを見たおじさんは、

「ちよつとお! 本当に何してるのお!?! おじさんだつてこう見えても、海の男だぞ! 金は確かに無いが! それ相応の品を礼として出すつて!?!」

と、フライ返しを強く握りながら豪語するのだった。

「へえ、じゃあ見せてもらおうじゃねえか。怪物退治はその後だ」

『うん!』

それを聞き、零斗が言った事に頷く明久達だった。

「もしかしたらこの海にはもう来ないんじゃないのか？」

「それならそれでいいじゃないか。そしたら海貸し切りで遊び放題になるんだし」

「それはそれでありますね」

怪物がなかなか来ない事に、零斗、鍵、明久、立香はそう言った後、少し身体を楽にしながら周りを見ていると

「おいエミヤ、かき氷と焼きそば頼むわ」

「アキオ、カレー二人前お願いします」

「咲夜さんラーメンお願いします」

「華扇、ラムネ5本頂戴」

おじさんのいなくなった海の家を借りてブルーメランパンツのエミヤ、黒ビキニのアキオ、青いメイド風水着の咲夜、赤いビキニの華扇などの料理が得意な人たちが取り仕切って料理を提供していたり

「そうれ！」

「なんの！」

「ていや！」

「まだまだ！」

「さあ！スカサハ・美波チームと深夏・武蔵チーム。どちらが勝つか賭けをする人はい

らっしやいますか〜?」

砂場にてビーチバレーをしている紫色のビキニのスカサハ、黄色いスポーツタイプのセパレートの島田美波、ピンク色のビキニの椎名深夏、星条旗柄のビキニの宮本武蔵。そんな彼女たちの試合をエミヤたちから買った食べ物を食べながら見たり、シバの女王とイシユタルによる賭け事が始まっていたり

「わーい!砂のお城が出来たー!!」

「スゴいわスゴいわ!!私達だけで立派なお城が造れたわ!!」

「ロジカルです!」

「当然の結果ね!」

「やった・・・!」

スク水を着て砂場で砂の城を造っていたジャック、ナーサリー、邪ンタ、ラム、ロムがはしやいでいたり

「チエストオ!」

「なんのお!」

「相手の頭じゃなくてスイカを狙え!!」

目隠しをしながらスイカ割りではなく相手の頭をカチ割ろうと木刀を振り回している、黒いメイド風ビキニのアルトリアオルタと、黒を中心として刺し色に赤のあるビキ

二の邪ンヌにツッコむ薄ピンク色のピキニの刑部姫がいたり

「あ、暑い……」

「ガツデムホット……」

スカサハと同じ紫色の水着のスカディと白いワンピース型の水着のアナスタシアがビーチパラソルの下でぐったりとしていたり

「フハハハハハハ!!」

「うるせえ!海に来てるからかいつもの数倍テンション高くてうるせえ!!」

ブーメラランパンツを履いているギルガメッシュ、オジマンディアス、巖窟王が高笑いを上げているのにツッコむアロハシャツを着たクーフリーンがいたり、それぞれが思い思いに海を堪能していた。……当初の目的を忘れて。

「……まあいざとなつたらなんとかなるだろ」

「少なくとも怪物にやられそうな人はいないしね」

怪物退治のことを忘れているみんなに零斗は少し呆れるが、未だ怪物も現れておらず例え現れたとしてもなんとかなるだろうと樂觀視し、明久もその意見に同意していた。

「よし、怪物が出るかもわからないんだし現れるまでは遊ぶか!」

「……異議なし!!」

トランクスタイルの水着に着替えた零斗の言葉に同意した明久、鍵、立香は同じよう

にトランクスタイプの水着に着替えていたのでそのまま海へと入っていったのだった。



化物退治をしに海にやってきてから数時間が経った。零斗たちはすっかり怪物のこ
となど頭から抜けており海を満喫していた。

「出ないな、怪物……」

「もうこの辺りにいないんじゃないかしら」

海の家で買ったイカ焼きを食べながら海を眺めている零斗と同じようにイカ焼きを
食べているフリルのついた赤いビキニの霊夢がそんなことを言っていた。

「ちっ、せっかく大金をゲットできるチャンスだと思っ——」

エサになっている海の家のおじさんの様子を確認しようとしてつちを見てみると、おじ
さんの後ろに巨大な鮫の背ビレみたいなのが現れ、おじさんに迫っているのを見つけて
しまい、零斗は言葉に詰まってしまった。

「零斗!? あれって!」

「恐らくな! 明久! 鍵! おじさん回収していったん戻れ!? 奴が来てる!」

霊夢に聞かれた零斗は、大きな声で明久と鍵に言うが

「あれ? 零斗、何をそんなに騒いでるんだろ?」

「さあな、レア素材でも見つけたのか?」

と、あんまり聞こえなかったのか、完全に間違つた事を考える明久と鍵だったが、
「後ろお！二人とも後ろお!!」

『後ろ?』

スク水を着ているくりむの後ろと言う声が聞こえ、二人はふと後ろを振り返ると、

ザアバアアアアア!! (化物が海から飛び出してきた音)

「ギャアアアアアアアアアア!!」

巨大なサメのような姿をした化け物が、銀色に輝く歯でおじさんを縛つてた丸太を食わえながら飛び出してきた。そう、これこそが零斗達が待つていた化物だったのだ。

ザアバアアン!! (サメの化物が海に飛び込んだ音)

「うわあ!!おいおいこんなタイミングで出現かよ!!悪いのか良いのか分かりづれえよ!!」

「と、とにかく今は急いで海から退却しよう!!」

再び海に飛び込んだサメの化物を見ながら、鍵と明久は一旦沖に戻ろうとするが、
「ああ!!そういえばあのおじさん!!あの化物に食われそうだった!!」

「マジで!!は、早く助けに!!」

と、おじさんの事を思い出した明久と鍵は後ろを振り返りろうとすると

「テメエーら!!」

『!?!』

「今まで散々やつてくれたなあ!?! 海の男の恐ろしさを、思い知らせてやるう!?!」

「ギヤアアアアアア!?! 来たああああああ!?!」

「何か化物と合体しちゃってるううう!?!」

サメの化物に丸太を噛まれながら叫ぶおじさんの姿を見て、再び沖に目指して泳ぎだす鍵と明久だったが、もうサメの化物とおじさんはすぐ近くだった。

「このままじゃ二人がつ!?! ノツブ、頼むぞ!」

「任せよ!! 宝具展開『第六天魔王波旬く夏盛く』!!」

零斗は二人を助けるために赤いビキニを着たノツブに声をかけると、ノツブの背後に炎のようなオーラを纏った我謝髑髏が現れ、零斗はその我謝髑髏の右腕に乗ると

「いつけええええ!!」

ノツブの合図と同時に我謝髑髏は右腕に乗っている零斗をサメの化物の方へと投げ飛ばした。

「くたばれやオラアアアア!!」

零斗は愛用している魔剣をサメの化物に振りかぶり切り裂こうとしたが――

「へぶつ!?!」

――投げた角度が悪かったのか、零斗はサメの化物の頭上を超えるとその勢いの

まま背ビレに衝突し、気絶した零斗は海に落ちるのだった。その時、おじさんも巻き込んで落ちた上に運悪く明久と鍵の上に落ちるのだった。

「・・・・・・・・投げる角度、間違えちゃったんじゃないよ」

『・・・・・・・・』

啞然とした顔をしているノツブに後ろにいた立香たちは呆れるのだった。

「プハア、おい！みんな無事か!？」

しばらくし、何とか海上に上がった鍵は、零斗と明久を探すが見当たらず、右往左往していると、

「あ、」

目の前にサメの化物を見つけ、そのサメの化物も、鍵を見ていた。

「・・・・・・・・フン、食いたきや食えよ。こんな所でウロウロしても多分、生き恥を晒すだけだ」

と、サメの化物に言う鍵。だが、

「・・・・・・・・。。。」

サメの化物は鍵を食おうとせず、目を上に向けた。

「ん？」

それにタケルは上を見ると、モンスターの背中に、気を失ったおじさんと零斗、明久

が居たのだった。

「お前………」

その光景を見た鍵はある事に気づいたのだった。



ミーン、ミンミン、ミーン（セミの鳴き声）

「つて言うわけだ。ま、俺達の海に対する愛情が伝わったのかもな」

「理屈じゃねえのかもね男つて、自身にある魂で語るのが、男かもしれないね」

海に行つてから三日後、セミが鳴り続ける公園で、鍵と明久が話していた。

あの後、あのサメの化物は見た目とは裏腹に、凶暴性がないのとサメの化物のおかげでラギアクルスなどの凶暴な海の生物がやってこないため、八雲紫による承認によつて保護指定生物に認定されるだけだった。

なお、なんやかんやで解決した零斗たち全員はある程度の礼を渡されたこともあり、結果オーライと言う奴である。

「ああ、あんな姿だがあいつは悪い奴じゃねえ。あいつはきつとただ、俺達と遊びたかつただけなんだ。今なら分かる。海には良い奴しか生息してねえつて。海に浸かつている内に、皆アクが抜けつちまうのかもな」

「……そうかもね。ま、今回はそう言う事にしとこうか。良い夏の思い出、作れたし

ね」

と言いながら、公園を出る鍵と明久。それを、ベンチに座りながら見ていた零斗は、「アクねえ、何かもの凄くアクの強い奴が写ってんだが」

と、零斗が持っていた新聞には、あの海の家のおじさんが背中に子どもを乗せて遊んでるモンスターと共に載っており、記事には、「大人気！怪獣と遊べる海水浴場」と書いてあり、その記事を読んだ零斗は、

「……ま、良いか」

と言いながら、新聞をゴミ箱に捨て、どこかに歩き出すのだった。こうして、夏の思い出に新しいページが、作られたのだった。

坂田銀時、暁に死す！

とある夜、紅魔館の主であるレミリア・スカレットの部屋にてレミリアと紅魔館でレミリアと共に暮らしている十六夜咲夜、紅美鈴、小悪魔、パチュリー・ノーレッジが集まっており、館の主であるレミリアが神妙な顔をしていることからただ事ではないと悟った咲夜たちは真剣な表情をしていた。

「みんな・・・奴が動いたわ」

レミリアのその一言により真剣な表情をしていた咲夜たちはより一層その表情を引き締めた。

「お嬢様。それは本当の話ですか？」

「ええ。確かな情報よ」

咲夜にそう答えながらレミリアはグラスに注がれているトマトジュースを揺らしながら続ける。

「奴が動いたとあつては私も動かざるを得ないわ。・・・クラスのみんなが騒ぎ出すかもしれないけど構わないわ。命を捨てる覚悟はどうにできているもの」

レミリアは咲夜、美鈴、パチュリー、小悪魔の順に四人を見回すと力強く宣言した。

「決戦よ。奴も奴の思惑も、全てたたきつぶしてあげるわ」

レミリアのその言葉によりこの部屋にいる者たちはより一層緊迫し誰もが一瞬の間無言になるが、咲夜、美鈴、パチュリー、小悪魔はレミリアに言った。

「お嬢様。私の命はレミリアお嬢様とフランお嬢様のためのもの。お二人のためならばどんな事でもやります」

「そうですよ。私たちはお嬢様達のためにその力を振るうんですから」

「私だつてこの館の図書館に世話になつてるんだからその位はやるわよ」

「私も精一杯頑張らせてもらいます！」

咲夜たちの言葉を聞いたレミリアは嬉しそうに微笑むとグラスを置いてから咲夜たちちに話し始めた。

「ありがとうねみんな。それじゃあ詳しい話は明日現地で話すから最低限の準備をしておきなさい」

「承知致しました。それでは失礼致します」

レミリアにそう言われると咲夜を先頭にして美鈴たちはレミリアの部屋を出ていった。咲夜たちはレミリアの部屋から十分離れると咲夜が思い出したかのように美鈴たちに言った。

「みんな、1つ確認してもいいかしら？」

ら服装と髪型をチェックしていた。

「よう待たせたかフラン」

「あ、銀時！」

何時もと同じ着物姿の銀時が右手を上げながらやってくるのを見たフランは蔓延の笑みを浮かべながら銀時の近くへと近づいた。

「悪いな昨日長谷川さんたちと呑んで寝過ぎしちゃった」

「ううん、ちゃんと来てくれただけで嬉しいよ！」

「そうか、ありがとうよフラン」

「うん！」

銀時がすまなそうにフランに謝罪するもフランは銀時が来てくれたことが嬉しいのかフランは笑顔でそう言いながら銀時の手を握ると銀時を引つ張って受付へと向かい、2人は施設へと入っていくのだった。そんな2人を少し離れた茂みから監視している人物がいた。レミリアである。

「あの天パ、ふざけるんじゃないわよ。フランはね、あなたが来るまで30分も待ったのよ？私の可愛い大切な妹の30分間」

ガチャリとライフルの照準を銀時の頭に合わせる。

「貴方の命で利子分キツチリ償ってもらおうじゃない！ちよつと霊夢、悪いんだけど土

台になってくれないかしら?」

頼んでくるレミリアに、咲夜達と一緒に後に立つ咲夜に頼まれてやって来た霊夢が慌ててツツコミを入れる。また霊夢の後ろでは魔理沙と早苗がいた。

「待て待て待てーっ!?!いきなり『緊急事態だから協力してくれ』って頼まれて来てみたら、銀さんとフランのデートを邪魔するのが目的だっていうの!?!」

「デートじゃないわよ!?!あんなクソ天パ、姉である私は絶対に認めないわよ!!」

「私だって妹のデートを邪魔しようと考えているカリスマ（笑）とか認めないわよ!?!」
険しい顔を向けるレミリアに霊夢は怒鳴るようにツツコミを入れるのだった。

「はあ・・・悪いけど人の色恋を邪魔するなんて馬鹿らしいことする気なんてないから。私は帰らせてもらうわよ」

「待ちなさい、誰がそんなことを頼むって言ったのよ。私はあの天パをこの世から抹消したいだけよ」

「もつと出来るかあ!?!」

レミリアのシスコンぶりに呆れた霊夢は踵を返そうとしたが、スコープを覗きこみながらレミリアが霊夢に協力を求めてきたので霊夢は拒絶の言葉で返すがレミリアはそれを無視して話し続ける。

「考えてもみなさいよ。あんなプー太郎がフランを幸せに出来ると思う? もちろん私

だってフランの幸せが一番なんだからフランが選んだ相手なら認めなくちゃって思ってたわ。悩んで・・・色々考えたわ・・・それで・・・抹殺しかないっていう結論に・・・」

「色々考えすぎでしょ！マフィアかアンタは！」

「お嬢様なんてみんなマフィアみたいなものですよ」

「吸血鬼のお嬢様がとんでもないこと言いましたよ」

フランのことを大切に思っているからか思考が完全にバグっているレミリアに、霊夢と早苗は呆れる他ないのであった。

「咲夜このシスコンに何とか言ってみようかい」

霊夢はレミリアに何を言っても無駄と悟ったのか、レミリアに仕えている咲夜に何とかしてもらおうと声をかけた。しかし咲夜の姿を見た早苗は言葉を失ってしまった。

「誰が咲夜ですか？私の名前は・・・殺し屋メイド13（サーティーン）です」

いつものメイド服にスナイパーライフルを片手にサングラスをかけている咲夜の姿がそこにはあった。

「何やってるんですか咲夜さん・・・しかも13って何ですか」

「今年入って13回明久と出かけました」

「へえ、そうなんですかおめでとうございます」

早苗はジト目でスナイパーライフルを構える咲夜を見るが咲夜は気にしていなかった

た。

「そして同じく、カンフリー3（サーティーン）只今参上」

「右に同じく、引きこもり13（サーティーン）参上」

「右に同じく、デビル13（サーティーン）参上」

そしてそんな咲夜の隣には同じような格好をした美鈴、パチュリー、小悪魔がいた。

「アンタらもかい!」

「私たちは昔からフランお嬢様に仕えているんです。だからこそ生半可な相手じゃ釣り合いません」

咲夜たちはレミリアの隣に座るとライフルを構えた。

「やりましょうお嬢様!」

「フランお嬢様があんな天パと付き合ってしまったら間違いなく悪影響です!」

「あなたたち……」

主従以上に互いに信頼関係が築かれているからこそこんな他人から見たらアホみたいな事でも全力で取り組むのだった。そんな咲夜たちにレミリアは感激したのか涙を流しながらアイランド☆パークの方を見つめる。

「行くわよあなたたち!」

「「「オオー!!」」」

レミリアたちは銀時とフランの後を追いかける為に、アイランド☆パークへと向かうのだった。

「待ちなさいよ馬鹿どもおおお!?」

暴走しているレミリアたちに止まるよう呼び止める霊夢の声も虚しく、レミリアたちの姿はあつという間にアイランド☆パークの中へと消えていったのだった。

「はあ、どうしましょうか魔理沙さん?」

早苗は先程から何も言わない魔理沙に声をかけるが

「誰が魔理沙だ? 私は殺し屋キノコ3 (サーティーン) だ」

既に咲夜たちと同じ格好をしている魔理沙は固まっている早苗と霊夢の前を素通りするとレミリアたちの後を追いかけた。

「面白そうだからいつてくるぜ」

「アンタもかいいいいいっ!?!」

魔理沙が好奇心に駆られていつてしまい、霊夢と早苗の二人もレミリアたちを追いかけるのだった。



銀時とフランが最初に乗ったのはメリーゴーランド。そこでは銀時とフランが楽しそうに笑いながら白馬に乗っていた。

その後ろの方には黒馬に乗った殺し屋5人がスナイパーライフルを構えて乗っていた。

「やるわねアイツ、コレを選ぶだなんて」

「はいお嬢様。馬が上下に動いているから狙いが定まりません」

「すいませんメイド13（サーティーン）、なんか気持ち悪くなってきました」

「だらしねーぞカンフー13（サーティーン）。この程度の揺れで弱音を吐くんじゃ……」

オエエエ」

「あなたも十分だらしないわよキノコ13（サーティーン）」

「ところでコレって何時になったら追いつくんですか？銀さんたちとの距離が全く縮ま

らないんですけど」

「縮まるわけがないでしょうが!!これメリーゴーランドよ!!」

「この土台ごと回ってんですよ!永遠に回り続けて下さいよ!」

上下に動きながら銀時の頭部に狙いを定めている殺し屋6人組に、霊夢と早苗は白馬が引く馬車に隣同士で座りながらツツコミを入れた。

「私、遊園地なんて長い人生過ごしてきた中で1度も行つたことがないから勝手が分か

らないのよ」

「お嬢様同様私たちも遊園地に来たことはありません」

「私は友達と数回来たくらいだぜ」

「とういかなんでお2人はついて来てるんですか？もしかして『フランお嬢様守り隊』の仲間に入りたいんですか？」

「私も霊夢さんもあなたたちがおかしいことをしてかさないか来ただけです！」

そして血の雨が降るようなことも無くメリーゴーランドを無事乗り終えると次はコーヒーカップに乗った。

「私たちはあんた達みたいに外見だけで銀さんの人間性は否定しないわよ」

「でも霊夢、銀さんは内面も色々と問題ある方じゃね？」

「そこは一旦置いときなさい」

「だって天パよ！天パの人間なんてみんなあの髪の毛みたいに性根が曲がってる人間しかないわよ!!」

「全国の天パの人達に謝ってくださいレミリアさん」

「ああいう年頃の娘はですねえ、ちよいと悪そうなカブキ者にコロツといっちゃうものなんですよ。それでちよつとヤケドして大人になっていくんですよ」

「小悪魔、あんた歳幾つ？」

コーヒーカップを楽しそうに回している銀時とフランの様子を同じようにコーヒーカップを回しながら霊夢たちはそんなことを話す。

を通る。やるタイミングとしては絶好の機会だった。

「(終わりよ・・・フランお嬢様に近づいたことを呪いながら消えるがいい!!)」

ナイフを持った手を大きく振りかざし、銀時の頭目がけて振り落とそうとした瞬間、咲夜にとって予想外のことが起きた。ジェットコースターが急にスピードを上げたのだ。

「(なっ!?)」

バランスが崩れ身体をよろめかせながら、咲夜を乗せたジェットコースターは外に飛び出した。

「うお!!ここって初めっから超スピードで走るのかよ。滅茶苦茶だな!!」

「ふ、風圧が凄すぎるっ!」

「しかし、心地よい気持ちよさね」

「それよりも・・・どうなったんですかね?」

咲夜の様子を見ようと、突風がぶつかる中何とか目を開ける早苗。

すると早苗の視界に悲鳴を上げながらこちらに飛んでくる人影が映った。

「ああああああああつ!!」

「さ、咲夜さん!」

なんと、飛んできたのは暗殺をしようとしていた咲夜だった。情けない悲鳴を上げな

ジェットコースターは更にスピードアップした上に複雑な軌道を描きながら移動し始めたため咲夜を中々引つ張ることができなかった。

「あああああああああああつ!!?」

ジェットコースターに乗っている人達の悲鳴が轟く中で、霊夢、早苗、咲夜によるさらに大きな悲鳴がジェットコースターの最後尾の方から聞こえてきたのだった。



ジェットコースターを無事？ 乗り終えたレミリアたちは先程の騒動でダウンしている霊夢、早苗、咲夜を落ち着かせるためにフランと銀時の様子が見える範囲でベンチに座って一時休憩をしていた。

「それにしても楽しそうねフラン」

「そうですね。傍から見ると親子にしか見えませんですしね」

ベンチに座ってチェロスを食べながら銀時とフランを見ているパチュリーと小悪魔は楽しそうに遊園地をまわっている2人を微笑ましそうに見ていた。

「・・・ねえもう十分じゃないの？ 見る限り、二人はただ純粹に遊園地を楽しんでいるようにしか見えないわよ

「これ以上、何も進展はなさそうだし、フランちゃんの邪魔もしたくないでしょ？ 諦めて帰りましょう」

霊夢と早苗の説得にレミリアたちは押し黙る。疲れていることもあって、レミリアたちは初めの時よりも霊夢と早苗の言っていることが正しいと思う方向に意思が傾きつつあった。

特に楽しそうに遊んでいるフランの顔を見たレミリアには影響が強かったのか、フラン達を一瞥しながら答える。

「そうね……これ以上は、フランの楽しい時間を壊してしまう恐れがあるものね。霊夢たちの言う通り、何もなさそうだし帰るとする」「大変だぞレミリア!!二人が観覧車に向かっている!!」それがどうしたのよ。魔理沙?」

台詞を遮ってまで慌てている魔理沙に首を傾げながら訊ねると、彼女はよほど焦っているのか早口で説明する。

「知らねえのか!!観覧車といえ、告白すると成功すると言われている遊園地スポットの一つとされているのだぞ!!」

「「「な、なんだってーっ?!」「」」」

魔理沙が語ったその事実レミリア達は衝撃を隠せないでいた。

「えっ、観覧車って景色を楽しむものじゃなかったの!?!」

「観覧車つつつたらチューだろ。チューするために作られたんだよアレは」

「そうだったんですか!?!」

「そういえば前に恋愛ドラマでカップルたちが観覧車でイチャコラしてるの見たことがあります！」

「なんですって!?!知らなかった! フランが危ないわ! こうしちやいられない!! 四の五の考えるのは後よ!! いくわ!! 咲夜は例のものを大至急用意して!」

「かしこまりました!」

そう言つてレミリアたち殺し屋チーム5人は銀時とフランのチューを阻止すべく血相を変えて走り出していった。ベンチに残ったのは殺し屋連中を止めようとしていた霊夢と早苗だけだった。

「……どうする早苗? 私もうアイツらのことなんて放っておきたくなくてきたんだけど」

霊夢は疲れたのかレミリアたちの行動を止めるのをやめようとしているが、早苗は霊夢のその言葉に対して首を振った。

「ダメですよ霊夢さん。確かにレミリアさん達は間違っているけどフランさんのことを思つて行動してるんです。でも私たちはフランさんの気持ち分かるんですから」

霊夢と早苗がレミリアたちを止めようしているのも、フランが銀時に大して向けている感情が自分たちがある男性に向けている感情と同じものだからこそ、同じ恋する乙女として手助けしているのだ。

「……まあそうよね」

霊夢は照れくさそうに頬を掻きながら立ち上がると、フランたちが乗ろうとしている観覧車の方へと視線を向けた。

「じゃあ行こうかしら」

「そうですね」

霊夢と早苗は笑うとその場から動き始めた。

——少女の胸に抱いている想いを守るために



観覧車に乗った銀時とフランは向かい合いながら外の景色を見ていた。夕日に照らされたことで昼間とはまた違うパークの素晴らしい景色となっていた。しばらくの間外の景色を眺めていたフランは銀時にお礼を言った。

「銀時ありがとうね。私今日すごく楽しかった!」

「気にすんな。ガキはガキらしく楽しく遊んでりやいいんだからよ」

フランは笑顔で銀時にそう言うと言とうと自然と銀時も笑顔になる。笑い合う2人を乗せたゴンドラは最もいい景色が見れる一番上の位置までやってきた。

そこでふと窓の外の景色を見た銀時だが、一機の戦闘ヘリがゴンドラの外に襲来して

きた。

「え？」

銀時とフランは突如現れた戦闘ヘリに驚き声を上げた。そしてヘリの扉が開くとそこからグラサンをかけた殺し屋6人の姿があつた。

「「「殺し屋集団13（サーティーン）。お命頂戴する！」「」」

そう言いながらライフルを構えた6人は銀時の頭に照準を合わせるといつでも撃てるように引き金に指を合わせていた。

「オイイイイイイ!? アイツら何してんの!? なんで俺に対して殺意MAXなの!」

「お姉様たち・・・どうして・・・」

レミアアたちに狙われて焦る銀時と動揺しているフランがレミアアたちに何故こんなことをしたのか尋ねようとした時、隣のゴンドラの屋根の上に2人の人影があることに気づいた。

「あ、あれは!!」

「そんな、どうして!?!」

「あれ? コレってヤバくないですか?」

「なっ!?!」

その人影に気づいたパチュリー、小悪魔、美鈴、咲夜は驚きの声を上げ、魔理沙とレ

ミリアは大声でその人物の名を叫んだ。

「霊夢!!」

「早苗!!」

「霊夢? 早苗? 誰かしらそれは」

しかし、そんな2人の叫びを無視して2人は名乗りを上げた。

「私たちは愛の戦士——ハクレイ13 (サーティーン) と」

「同じくコチャ13 (サーティーン) です」

グラサンを装着した霊夢と早苗——否、ハクレイ13 (サーティーン) とコチャ13 (サーティーン) はスペルカードをそれぞれ構える。

「人の恋路を邪魔する馬鹿は……」

「馬に蹴られて……」

「消え去れ」

そう言い放つと同時に2人は弾幕を戦闘へりのプロペラに向けて放った。

「ああっ!? プロペラが……!!」

「……ああああああああ!!」

2人の放った弾幕は見事戦闘へりのプロペラに命中し、戦闘へりに乗っている6人の殺し屋ごと戦闘へりは観覧車の下にある池へと墜落していったのだった。

「これで邪魔者はいなくなつたわね．．．」

「あとはお2人で仲良く過ごしてくださいね」

仕事を終えた2人はそう言い残してその場から去っていったのだった。

——なお後日、レミリアたち紅魔館メンバー＋魔理沙はフランと地獄の鬼ごつこをし、フランと銀時が出かけていた日に同じ場所で零斗がアキオとデートしていたことを知り、ショックを受けるのはまた別の話である。